

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第44集

# 寺家前遺跡 IV

第二東名 No. 81 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市-8

弥生時代後期～古墳時代前期・総括編

2014

中日本高速道路株式会社東京支社  
静岡県埋蔵文化財センター



1. 弥生時代後期面遺豊（南西から）



2. E-2区整穴住居SB218（北から）

巻頭図版 2



1. E-3区壁穴住居S6309 (北から)



2. E-3区杭列SK10466 (西から)



1. E-1区群SK422 (東から)



2. E-1区群SK422 (東から)

卷頭図版 4



E-2区自然流路SR6400遺物出土状況 1



1. E-2区自然流路SR6400遺物出土状況 2



2. E-1区群SK422 (南東から)

卷頭図版 6



E-2区自然流路SR6400出土土器集合



1. ミニチュア土器集合



2. 装身具集合

卷頭図版 8



1. 背負板 1



2. 背負板 2



3. 槽



4. 臼

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第44集

# 寺 家 前 遺 跡 IV

第二東名 No. 81 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市-8

弥生時代後期～古墳時代前期・総括編

2014

中日本高速道路株式会社東京支社  
静岡県埋蔵文化財センター



## 序

静岡県内の第二東名高速道路建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は18年を経過しました。藤枝市域では助宗古窯群・寺島大谷遺跡・寺島大谷古墳や、衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群、寺家前遺跡、中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡、入野東古墳群・入野高岸古窯群などの調査が実施され、発掘調査報告書も順次刊行されました。寺家前遺跡では本報告が『寺家前遺跡Ⅰ』、『寺家前遺跡Ⅱ』、『寺家前遺跡Ⅲ』に続く4冊目の報告書となります。

寺家前遺跡は、すでに刊行してきた報告書で検討されているとおり、11世紀末から13世紀代にかけて築かれた葉梨荘領主層の屋敷地であったことが明らかとなりました。「花押」のある土器は屋敷地の主を表すものとして注目されました。また奈良・平安時代の条里制水田が当地にまで及んでいたことが解りました。これまでに実態がわかっていなかった藤枝市北東部の葉梨地区の歴史に、あらたな一石を投じる成果があったと言えるでしょう。今回はさらに時代を遡り、この地に初めて人による開発の手が入った弥生時代から古墳時代にかけての調査成果の報告です。弥生時代には堅穴住居や掘立柱建物などの居住域、稲作を行った生産域が発見されました。低地一帯に広がる水田と畔は米作りを中心に生活していたことを窺わせます。古墳時代に入ると周辺に集落が移り、古墳時代後期にはまた再びこの地へ戻り、山裾に堅穴住居や掘立柱建物、丘陵地に窯を築いて須恵器の生産を行っていました。そして丘陵上には古墳が築かれた墓域もありました。当時の人々が使っていた土器や石器、木製品、金属製品等の道具も数多く発見されました。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2014年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長  
勝 田 順 也

## 例言

しずおかけんしんごふごしなかのてらあざぢけまろ

- 1 本書は静岡県藤枝市中ノ合字寺家前に所在する寺家前遺跡（第二東名No.81地点）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社東京支社の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（旧静岡県教育委員会文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。
- 3 寺家前遺跡（第二東名No.81地点）の確認調査・本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。  
確認調査その1 平成12年6～9月 調査対象面積37,616㎡ 実掘面積1,006㎡  
確認調査その2 平成15年9月～平成16年3月 調査対象面積35,750㎡ 実掘面積1,665㎡  
本調査Ⅰ期 平成12年11月～平成13年3月 調査対象面積16,340㎡  
本調査Ⅱ・Ⅲ期 平成15年9月～平成19年3月 調査対象面積16,920㎡  
資料整理 平成19年4月～平成26年3月
- 4 調査体制は『寺家前遺跡Ⅰ』の第1章第1節-2及び『寺家前遺跡Ⅱ』の例言に記したとおりである。

平成25年度

所長 勝田順也 次長兼総務課長 南谷高久 調査課長 中鉢賢治

主幹兼事業係長 前田雅人 総務係長 大坪淳子

調査第一係長 及川 司 第二係長 溝口彰啓 主幹 富樫孝志 主査 中川律子

- 5 本書の執筆は富樫孝志・中川律子・平野吾郎が行った。
- 6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 地形・基準点・空中写真測量業務委託 株式会社フジヤマ、基準点測量業務委託 大鐘測量、掘削・発掘作業・注記業務委託 三愛工業、トイレ遺構分析業務委託 古環境研究所、プラント・オパール分析・井戸遺構花粉・珪藻化石分析業務委託 バレオ・ラボ、放射性炭素年代測定業務委託 隼加速器分析研究所、自然科学分析・出土土器の胎土分析 バリノ・サーヴェイ株式会社、出土銅剣・銅環・耳環成分分析 藤日鐵テクノリサーチ、出土鉄滓の分析・調査 JEFテクノリサーチ株式会社、木製品樹種同定業務委託 国立大学法人東北大学学術資源研究公開センター（鈴木三男）、整理作業・保存処理業務委託 株式会社バソナ、報告書印刷製本・発送業務委託 松本印刷株式会社
- 8 発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。  
伊藤延男 伊藤通玄 岩木智絵 菊池吉修  
黒坂貴裕 篠原和大 柴田 稔 渋谷昌彦  
鈴木三男 西尾太加二 長谷川 睦 平野  
吾郎 堀木真美子 向坂鋼二 山田昌久  
（五十音順・敬称略）



藤枝市の位置

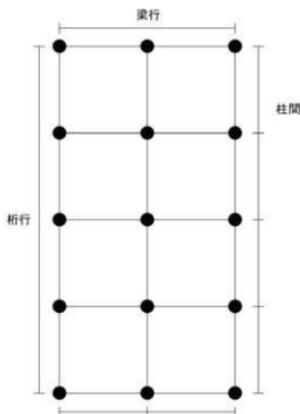
- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

# 凡例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。  
No.81 地点 (X=-121980, Y=-23160) = (891-5)
- 3 出土遺物は4桁の通し番号(=遺物番号)を付して取り上げた。報告書中の挿図番号とは同一でない。
- 4 遺構図、遺物実測図の縮尺は、遺構 1/50・1/80・1/500・1/1000・1/2000、土器 1/3 を原則とし、それぞれにスケールを付した。
- 5 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修 1992）を使用した。
- 6 土層名は第1章第4節の基本土層柱状図（図8）に表示した名称を用いる。
- 7 第1章第2節の周辺遺跡地図（図3・4）は国土地理院発行1:25,000地形図「向谷」、「焼津」、「伊久美」、「静岡西部」を複写し加工・加筆した。

## 〈掘立柱建物〉



※柱根が残存している場合には●で表した

## 〈遺物〉

木製品		漆（赤）
		漆（黒）
		圧痕・緊縛痕
		焦痕
		樟紐
石器		研磨痕・擦痕
		自然面

出土遺物の挿図番号は文中にゴシック体で示した。

( ) 内の数字は同一遺物の別図上での挿図番号である。

# 目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次・挿図目次・挿写真目次・挿表目次・写真図版目次

## 第1編 弥生時代集落の調査

### 第1章 調査の概要

第1節 弥生時代遺構の概要	1
第2節 検出された遺構	5
第3節 微地形と遺構の広がり	13

### 第2章 調査の成果

第1節 弥生時代集落の検出	17
第2節 遺構各節	19
1 竪穴住居跡	19
2 掘立柱建物	38
3 溝・流路・土坑	45
4 水田跡(水田区画・畔・水路)	56

### 第3章 出土遺物

第1節 遺物の概要と出土状態	101
1 遺物の出土状況	101
2 土器の分類	101
第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の土器	102
1 住居跡出土土器	102
2 流路出土土器	106
3 土坑出土土器	139
4 性格不明遺構出土土器	142
5 水田遺構出土土器	144
6 包含層出土土器	146
7 小結	179
第3節 石器・金属製品他	180

### 第4章 調査のまとめ

第1節 弥生時代集落の分析	181
第2節 志太平野北東部の弥生時代集落	182
第3節 弥生時代の水田遺構	184

第4節 弥生時代の木材使用について	186
第5節 「登呂型住居跡」について	190

## 第2編 寺家前遺跡調査の総括

第1節 寺家前遺跡の調査と資料整理体制	195
第2節 寺家前遺跡の報告書構成	197

参考文献	199
遺物観察表・遺構観察表	201

## 写真図版

## 抄録

# 挿図目次

第1図 グリッド配置図	2	第28図 SB313 実測図	30
第2図 遺跡全体図	3	第29図 SB314 実測図	31
第3図 遺構配置図	4	第30図 SB316 実測図	32
第4図 E-4区・E-5区①全体図	5	第31図 SB319 実測図	33
第5図 E-1区・E-2区北東部全体図	6	第32図 SB321 実測図	34
第6図 E-2区・E-5区②全体図	7	第33図 SB331 実測図	35
第7図 E-3区全体図	8	第34図 SB335 実測図	36
第8図 A-2区全体図1	9	第35図 SB324 実測図	37
第9図 A-2区全体図2	10	第36図 SH212 実測図	38
第10図 B区北全体図	10	第37図 SH213 実測図	39
第11図 A-1区全体図	11	第38図 SH218 実測図	40
第12図 A-2南区・B区南全体図	12	第39図 SH340 実測図	41
第13図 集落城地形図	14	第40図 SH341 実測図	42
第14図 低地部地形図	15	第41図 SH342 実測図	43
第15図 竪穴住居分類図	17	第42図 SH343 実測図	44
第16図 集落分類図	18	第43図 SR6400 実測図1	46
第17図 SB202 実測図	19	第44図 SR6400 実測図2	47
第18図 SB209 実測図	20	第45図 SR6400 実測図3	48
第19図 SB212 実測図	21	第46図 SR6400 実測図4	49
第20図 SB215 実測図	22	第47図 SR10204・SR10050 実測図	50
第21図 SB218 実測図	23	第48図 SR607・SR608 実測図	51
第22図 SB219 実測図	24	第49図 SR10470・SR10471 実測図	52
第23図 SB224 実測図	25	第50図 SX6572・SX6595・SE10455・SE10485 実測図	54
第24図 SB225 実測図	26		
第25図 SB309-a 実測図	27	第51図 SX610・SX6663 実測図	55
第26図 SB309-b 実測図	28	第52図 水田遺構配置図	58
第27図 SB310 実測図	29	第53図 水田城土層堆積状況図1	59

第54 図	水田域土層堆積状況図 2	60	第99 図	流路 SR6400 出土土器実測図 8	121
第55 図	SX423 実測図 1	61	第100 図	流路 SR6400 出土土器実測図 9	122
第56 図	SX423 実測図 2	62	第101 図	流路 SR6400 出土土器実測図 10	123
第57 図	SX423 実測図 3	63	第102 図	流路 SR6400 出土土器実測図 11	125
第58 図	SX423 実測図 4	64	第103 図	流路 SR6400 出土土器実測図 12	126
第59 図	SX423 実測図 5	65	第104 図	流路 SR6400 出土土器実測図 13	129
第60 図	SK422 実測図 1	66	第105 図	流路 SR6400 出土土器実測図 14	131
第61 図	SK422 実測図 2	67	第106 図	流路 SR6400 出土土器実測図 15	133
第62 図	SK422 実測図 3	68	第107 図	流路 SR6400 出土土器実測図 16	134
第63 図	SK422 実測図 4	69	第108 図	流路 SR10045 他出土土器実測図	136
第64 図	SK422 実測図 5	70	第109 図	流路 SR6494 他出土土器実測図	138
第65 図	SK422 実測図 6	71	第110 図	流路 SR10065 他出土土器実測図	140
第66 図	SK422 実測図 7	72	第111 図	土坑出土土器実測図	141
第67 図	SK422 実測図 8	73	第112 図	性格不明遺構 SX6663 出土土器実測図	143
第68 図	SX424 実測図	74	第113 図	水田遺構出土土器実測図 1	144
第69 図	SK5011・SK5012・SK5013 実測図	75	第114 図	水田遺構出土土器実測図 2	145
第70 図	SK6773・SK6774・SR6508 実測図	77	第115 図	包含層出土土器実測図 1	147
第71 図	E-5 区②杭列実測図 1	78	第116 図	包含層出土土器実測図 2	149
第72 図	E-5 区②杭列実測図 2	79	第117 図	包含層出土土器実測図 3	150
第73 図	SK 2・SK 3・SK 4・SK 5 実測図	80	第118 図	包含層出土土器実測図 4	153
第74 図	SK10455・SK10456 実測図 1	81	第119 図	包含層出土土器実測図 5	155
第75 図	SK10455・SK10456 実測図 2	82	第120 図	包含層出土土器実測図 6	157
第76 図	SK10455・SK10456 実測図 3	83	第121 図	包含層出土土器実測図 7	158
第77 図	SK10455・SK10456 実測図 4	84	第122 図	包含層出土土器実測図 8	160
第78 図	SK10463・SK10463 実測図	86	第123 図	包含層出土土器実測図 9	162
第79 図	SK600・SK601 実測図	87	第124 図	包含層出土土器実測図 10	163
第80 図	SK602 実測図	88	第125 図	包含層出土土器実測図 11	164
第81 図	SK603 実測図	89	第126 図	包含層出土土器実測図 12	166
第82 図	SK593・SK594 実測図	90	第127 図	包含層出土土器実測図 13	167
第83 図	SK596・SK597 実測図 1	92	第128 図	包含層出土土器実測図 14	169
第84 図	SK596・SK597 実測図 2	93	第129 図	包含層出土土器実測図 15	171
第85 図	SX598・SK599・SK606 実測図 1	94	第130 図	包含層出土土器実測図 16	172
第86 図	SX598・SK599・SK606 実測図 2	95	第131 図	包含層出土土器実測図 17	173
第87 図	SK614 実測図	97	第132 図	包含層出土土器実測図 18	175
第88 図	SK 8 実測図	99	第133 図	包含層出土土器実測図 19	177
第89 図	SK612 実測図	100	第134 図	包含層出土土器実測図 20	178
第90 図	住居跡出土土器実測図 1	103	第135 図	包含層出土土器実測図 21	179
第91 図	住居跡出土土器実測図 2	105	第136 図	寺家前遺跡出土弥生時代中期土器実測図	182
第92 図	流路 SR6400 出土土器実測図 1	107			
第93 図	流路 SR6400 出土土器実測図 2	109	第137 図	周辺遺跡変遷図	183
第94 図	流路 SR6400 出土土器実測図 3	110	第138 図	泥炭層の広がりで大畔位置関係図	184
第95 図	流路 SR6400 出土土器実測図 4	112	第139 図	扉模式図	188
第96 図	流路 SR6400 出土土器実測図 5	115	第140 図	葦呂型住居事例図	193
第97 図	流路 SR6400 出土土器実測図 6	117	第141 図	現地調査年次	196
第98 図	流路 SR6400 出土土器実測図 7	119			

# 挿表目次

第1表	妻壁計測表	189	第5表	出土ミニチュア土器観察表	219
第2表	寺家前遺跡調査体制一覧表	195	第6表	竪穴住居計測表	220
第3表	寺家前遺跡報告書構成一覧表	198	第7表	掘立柱建物計測表	221
第4表	出土土器観察表	201			

# 挿写真目次

写真1	中ノ合遺跡出土扉板1	187	写真2	中ノ合遺跡出土扉板2	187
-----	------------	-----	-----	------------	-----

# 写真図版目次

## 巻頭図版

巻頭図版1	1. 弥生時代後期面遠景(南西から)
	2. E-2区竪穴住居SB218(北から)
巻頭図版2	1. E-3区竪穴住居SB309(北から)
	2. E-3区杭列SK10466(西から)
巻頭図版3	1. E-1区畔SK422(東から)
	2. E-1区畔SK422(東から)
巻頭図版4	E-2区自然流路SR6400 遺物出土状況1
巻頭図版5	1. E-2区自然流路SR6400 遺物出土状況2
	2. E-1区畔SK422(南東から)
巻頭図版6	E-2区自然流路SR6400 出土土器集合
巻頭図版7	1. ミニチュア土器集合
	2. 装身具集合
巻頭図版8	1. 背負板1
	2. 背負板2
	3. 槽
	4. 臼

## 図版

図版1	弥生時代後期調査面全景
図版2	1. E-1区弥生時代後期面遠景(南西から)
	2. E-1区弥生時代後期面全景
図版3	1. E-2区弥生時代後期面遠景(東から)
	2. E-2区弥生時代後期面全景
図版4	1. E-3区弥生時代後期面遠景(北東から)
	2. E-3区弥生時代後期面全景
図版5	1. E-4区弥生時代後期面遠景(南西から)
	2. E-4区弥生時代後期面全景
図版6	1. E-5区①弥生時代後期面畔検出状況(南から)
	2. E-5区②弥生時代後期面全景(東から)
図版7	1. A-1区弥生時代後期面遠景(北東から)
	2. A-1区弥生時代後期面全景
図版8	1. A-2区弥生時代後期面遠景1(北から)
	2. A-2区弥生時代後期面全景1
図版9	1. A-2区弥生時代後期面遠景2(南西から)
	2. A-2区弥生時代後期面全景2
図版10	1. A-2南区弥生時代後期面遠景(南東から)
	2. A-2南区弥生時代後期面全景
図版11	1. B区北弥生時代後期面遠景(北東から)
	2. B区北弥生時代後期面全景
図版12	1. B区南弥生時代後期面遠景(南東から)
	2. B区南弥生時代後期面全景
図版13	1. E-2区竪穴住居SB202 全景(西から)
	2. E-2区竪穴住居SB202 完掘状況1
	3. E-2区竪穴住居SB202 完掘状況2(東から)
	4. E-2区竪穴住居SB202 完掘状況3(東から)
	5. E-2区竪穴住居SB202 土層堆積状況(南東から)
図版14	1. E-2区竪穴住居SB209 全景(南東から)
	2. E-2区竪穴住居SB209 完掘状況(南東から)
図版15	1. E-2区竪穴住居SB215 全景
	2. E-2区竪穴住居SB215 完掘状況(北西から)
	3. E-2区竪穴住居SB215 壁溝検出状況(南から)
	4. E-2区竪穴住居SB215 床面検出状況
	5. E-2区竪穴住居SB215 遺物出土状況
図版16	1. E-2区竪穴住居SB218 全景
	2. E-2区竪穴住居SB218 完掘状況(南東から)
図版17	1. E-2区竪穴住居SB219 全景
	2. E-2区竪穴住居SB219 遺物出土状況(南から)

3. E-2 区竪穴住居 SB219 土層堆積状況  
(北東から)
4. E-2 区竪穴住居 SB219 柱穴 SP6541
5. E-2 区竪穴住居 SB219 完掘状況 (東南から)
- 図版 18 1. E-3 区竪穴住居 SB309-a・b 全景 (北から)  
2. E-3 区竪穴住居 SB309-a・b 完掘状況 (西から)  
3. E-3 区竪穴住居 SB309-a 壁溝土層堆積状況  
(西から)  
4. E-3 区竪穴住居 SB309-a 壁溝完掘状況  
(北から)  
5. E-3 区竪穴住居 SB309-a 柱穴 SP10158
- 図版 19 1. E-3 区竪穴住居 SB309-a 柱穴 SP10148  
2. E-3 区竪穴住居 SB309-a 柱穴 SP10162  
3. E-3 区竪穴住居 SB309-a 柱穴 SP10172  
4. E-3 区竪穴住居 SB309-b 柱穴 SP10160  
5. E-3 区竪穴住居 SB309-b 柱穴 SP10190  
6. E-3 区竪穴住居 SB309-b 柱穴 SP10193  
7. E-3 区竪穴住居 SB309-b 柱穴 SP10192  
半載状況  
8. E-3 区竪穴住居 SB309-b 柱穴 SP10192  
完掘状況
- 図版 20 1. E-3 区竪穴住居跡 SB310・SB331・SB333 全景  
2. E-3 区竪穴住居 SB310 床面検出状況 (南から)  
3. E-3 区竪穴住居 SB310 完掘状況 (東から)  
4. E-3 区竪穴住居跡 SB331 完掘状況 (北西から)  
5. E-3 区竪穴住居跡 SB333 完掘状況 (東から)
- 図版 21 1. E-3 区竪穴住居 SB313 全景 (北西から)  
2. E-3 区竪穴住居 SB313 柱穴 SP10286  
3. E-3 区竪穴住居 SB313 柱穴 SP10288  
4. E-3 区竪穴住居 SB313 柱穴 SP10285  
5. E-3 区竪穴住居 SB313 柱穴 SP10290
- 図版 22 1. E-3 区竪穴住居 SB314 全景  
2. E-3 区竪穴住居 SB314 床面検出状況  
(南東から)  
3. E-3 区竪穴住居 SB314 完掘状況 (南東から)  
4. E-3 区竪穴住居 SB314 土層堆積状況 (西から)  
5. E-3 区竪穴住居 SB314 柱穴 SP10350
- 図版 23 1. E-3 区竪穴住居跡 SB316・SB335 全景  
2. E-3 区竪穴住居跡 SB316 完掘状況 (南東から)  
3. E-3 区竪穴住居跡 SB335 完掘状況 (北から)  
4. E-3 区竪穴住居跡 SB316 土層堆積状況  
(西から)  
5. E-3 区竪穴住居跡 SB316 柱穴 SP10240
- 図版 24 1. E-3 区竪穴住居跡 SB319 全景  
2. E-3 区竪穴住居跡 SB319 検出状況 (南東から)  
3. E-3 区竪穴住居跡 SB339 土層堆積状況  
(南から)  
4. E-3 区竪穴住居跡 SB319 柱穴 SP10056
5. E-3 区竪穴住居跡 SB319 柱穴 SP10059
- 図版 25 1. E-3 区竪穴住居跡 SB321 完掘状況 (東から)  
2. A-1 区竪穴住居跡 SB342・SB353・SB518  
全景
- 図版 26 1. A-1 区竪穴住居跡 SB342 全景 (東から)  
2. A-1 区竪穴住居跡 SB342 遺物出土状況  
3. A-1 区竪穴住居跡 SB342 焼土検出状況
- 図版 27 1. E-2 区掘立柱建物 SH212 全景 (南から)  
2. E-2 区掘立柱建物 SH212 柱穴 SP6412  
3. E-2 区掘立柱建物 SH212 柱穴 SP6566  
4. E-2 区掘立柱建物 SH212 柱穴 SP6569  
5. E-2 区掘立柱建物 SH212 柱穴 SP6577
- 図版 28 1. E-2 区掘立柱建物 SH213 全景  
2. E-2 区掘立柱建物 SH213 柱穴 SP6526  
3. E-2 区掘立柱建物 SH213 柱穴 SP6527  
4. E-2 区掘立柱建物 SH213 柱穴 SP6531  
5. E-2 区掘立柱建物 SH213 柱穴 SP6529
- 図版 29 1. E-2 区掘立柱建物 SH218 全景 1  
2. E-2 区掘立柱建物 SH218 全景 2 (南から)
- 図版 30 1. E-3 区掘立柱建物 SH340 全景 1  
2. E-3 区掘立柱建物 SH340 全景 2 (北西から)  
3. E-3 区掘立柱建物 SH340 柱穴 SP10383  
半載状況  
4. E-3 区掘立柱建物 SH340 柱穴 SP10384  
5. E-3 区掘立柱建物 SH340 柱穴 SP10383
- 図版 31 1. E-3 区掘立柱建物 SH341 全景  
2. E-3 区掘立柱建物 SH341 柱穴 SP10222  
3. E-3 区掘立柱建物 SH341 柱穴 SP10038  
4. E-3 区掘立柱建物 SH341 柱穴 SP10349  
5. E-3 区掘立柱建物 SH341 柱穴 SP10343
- 図版 32 1. E-3 区掘立柱建物 SH342 全景  
2. E-3 区掘立柱建物 SH342 検出状況 (北から)  
3. E-3 区掘立柱建物 SH342 柱穴 SP10364  
4. E-3 区掘立柱建物 SH342 柱穴 SP10370  
5. E-3 区掘立柱建物 SH342 柱穴 SP10386
- 図版 33 1. E-3 区掘立柱建物 SH343 全景  
2. E-3 区掘立柱建物 SH343 柱穴 SP10244  
3. E-3 区掘立柱建物 SH343 柱穴 SP10247  
4. E-3 区掘立柱建物 SH343 柱穴 SP10458  
5. E-3 区掘立柱建物 SH343 柱穴 SP10459
- 図版 34 1. A-1 区自然流路 SR607・SR608・畔 SK592  
全景 (北西から)  
2. A-1 区畔 SK592 遺物出土状況  
3. A-1 区自然流路 SR607 遺物出土状況 1  
4. A-1 区自然流路 SR607 遺物出土状況 2  
5. A-1 区自然流路 SR607 完掘状況
- 図版 35 1. E-2 区自然流路 SR600 全景 1

2. E-2 区自然流路 SR6400 全景 2 (北から)
3. E-2 区自然流路 SR6400 遺物出土状況
- 図版 36 1. E-2 区自然流路 SR6400 土層堆積状況 1 (北西から)
2. E-2 区自然流路 SR6400 土層堆積状況 2 (東から)
3. E-2 区自然流路 SR6400 土層堆積状況 3 (北から)
4. E-2 区自然流路 SR6400 土層堆積状況 4 (北から)
5. E-2 区自然流路 SR6400 完掘状況 1 (西北西から)
6. E-2 区自然流路 SR6400 完掘状況 2 (西から)
7. E-2 区自然流路 SR6400 銅未製品出土状況
8. E-2 区自然流路 SR6400 銅網出土状況
- 図版 37 1. E-3 区自然流路 SR6400 (SR10050・SR10204・SR10046) 全景 (西から)
2. E-3 区自然流路 SR6400 土層堆積状況 1 (東から)
3. E-3 区自然流路 SR6400 土層堆積状況 2 (北から)
4. E-3 区自然流路 SR6400 土層堆積状況 3 (北から)
5. E-3 区自然流路 SR6400 遺物出土状況
- 図版 38 1. E-3 区自然流路 SR10470・SR10471 全景 1
2. E-3 区自然流路 SR10470・SR10471 遠景 (北東から)
3. E-3 区自然流路 SR10471 内嚢状遺構 検出状況 (北東から)
4. E-3 区自然流路 SR10470・SR10471 全景 2 (北東から)
- 図版 39 1. E-1 区畔 SK422 全景 (北から)
2. E-1 区畔 SK422 盛土検出状況 1 (南から)
3. E-1 区畔 SK422 盛土検出状況 2 (南から)
4. E-1 区畔 SK422 解体状況 1 (東から)
5. E-1 区畔 SK422 解体状況 2 (南から)
- 図版 40 1. E-1 区畔 SK422 背負板出土状況
2. E-1 区畔 SK422 鋤出土状況
3. E-1 区畔 SK422 鼠返し出土状況 1
4. E-1 区畔 SK422 田下駄出土状況
5. E-1 区畔 SK422 鼠返し出土状況 2
6. E-1 区畔 SK422 全景 (東から)
7. E-5 区①畔 SK5011・SK5012 全景 (北東から)
- 図版 41 1. E-4 区木製品集中箇所 SX423 全景
2. E-4 区木製品集中箇所 SX423 近景 1 (南から)
- 図版 42 1. E-4 区木製品集中箇所 SX423 近景 2 (西から)
2. E-4 区木製品集中箇所 SX423 近景 3 (西から)
3. E-4 区木製品集中箇所 SX423 背負板出土状況
4. E-4 区木製品集中箇所 SX423 梯子出土状況
5. E-4 区木製品集中箇所 SX423 槽出土状況
- 図版 43 1. E-1 区集石遺構 SX424 全景 1 (南から)
2. E-1 区集石遺構 SX424 全景 2 (北東から)
3. E-1 区集石遺構 SX424 全景 3 (東から)
4. E-1 区集石遺構 SX424 近景 1 (北西から)
5. E-1 区集石遺構 SX424 近景 2 (南から)
- 図版 44 1. A-1 区畔 SK593・SK594 全景 (西から)
2. A-1 区畔 SK593・SK594 解体状況
3. A-1 区畔 SK593 断面状況 (西から)
4. A-1 区畔 SK594 解体状況 (西から)
5. A-1 区畔 SK595 全景 (北東から)
6. A-1 区畔 SK595 解体状況 (西から)
7. A-1 区畔 SK595 解体状況 2 (西から)
- 図版 45 1. A-2 区畔 SK596 全景 (東から)
2. A-2 区畔 SK596 近景 1 (西から)
3. A-2 区畔 SK596 断面状況 (西から)
4. A-2 区畔 SK596 近景 2 (南から)
5. A-3 区畔 SK10463・SK10464 全景 (西から)
6. A-3 区畔 SK10463 断面状況 (南から)
7. A-3 区畔 SK10464 断面状況 (西から)
- 図版 46 1. A-2 区畔 SK599・SK606 全景 (西から)
2. A-2 区畔 SK599・SK606 断面状況 (南東から)
3. A-2 区畔 SK606 断面状況 (南から)
4. A-2 区畔 SK600 断面状況 (北から)
5. A-2 区畔 SK599 近景 (南から)
6. A-2 区畔 SK599 断面状況
7. A-2 区畔 SK598 近景 (北から)
8. A-2 区畔 SK591 鼠返し出土状況
- 図版 47 1. A-2 区畔 SK602 近景 1 (東から)
2. A-2 区畔 SK602 断面状況 1 (南から)
3. A-2 区畔 SK602 断面状況 2 (南から)
4. A-2 区畔 SK602 田下駄出土状況
5. A-2 区畔 SK602 近景 2
- 図版 48 1. A-2 区畔 SK600・SK602・SK603 全景 (南から)
2. A-2 区畔 SK603 断面状況 1 (南から)
3. A-2 区畔 SK603 断面状況 2 (南から)
4. A-2 区畔 SK603 断面状況 3 (南から)
5. A-2 区畔 SK603 近景
- 図版 49 1. B 区北畔 SK2・SK3 全景 (南から)
2. B 区北畔 SK2・SK3 近景 (北から)
3. B 区北畔 SK3 断面状況 (東から)
4. B 区北畔 SK3・SK4 遺物出土状況
5. B 区北畔 SK4 近景 (西から)
6. B 区北畔 SK5 近景 (東から)
7. B 区北畔 SK5 断面状況 1 (東から)

8. B区北畔 SK5 断面状況 2 (北から)
- 図版 50 1. B区南畔 SK6・SK7・SK612 全景 (北西から)  
2. B区南畔 SK6 全景 (南東から)  
3. B区南畔 SK6 断面状況 (南東から)  
4. B区南畔性格不明遺構 SK610 全景 (西から)  
5. B区南畔性格不明遺構 SK610 遺物出土状況 (北から)
- 図版 51 1. A-2 南区畔 SK8・SK611 全景 (西から)  
2. A-2 南区畔 SK8 近景 1 (南東から)  
3. A-2 南区畔 SK8 断面状況 (南から)  
4. A-2 南区畔 SK8 近景 2 (南東から)  
5. A-2 南区畔 SK8 近景 3 (北東から)  
6. A-2 南区畔 SK614 近景 (東から)
- 図版 52 1. B区南畔 SK612・SK613 全景 (西から)  
2. B区南畔 SK612・SK613 近景 1 (南東から)  
3. B区南畔 SK612・SK613 近景 2 (南東から)  
4. B区南畔 SK612・SK613 断面状況 (東から)  
5. B区南畔 SK612 遺物出土状況
- 図版 53 1. E-3 区畔 SK10466・SK10465 全景 (西から)  
2. E-3 区畔 SK10466 断面状況 1 (東から)  
3. E-3 区畔 SK10466 断面状況 2 (西から)  
4. E-3 区畔 SK10466 近景 (南西から)  
5. E-3 区畔 SK10465 断面状況 1 (北東から)  
6. E-3 区畔 SK10465 断面状況 2 (東から)
- 図版 54 1. E-2 区不明遺構 SM6663 (南東から)  
2. E-2 区土坑 SP6572 (北西から)  
3. E-2 区土坑 SP6625 (南東から)  
4. E-2 区土坑 SP6625 土層堆積状況 (北西から)  
5. E-3 区土坑 SF10124 (北西から)  
6. E-3 区土坑 SF10126 (北西から)  
7. E-3 区井戸状遺構 SE10456 (南から)  
8. E-3 区井戸状遺構 SE10485 (東から)
- 図版 55 SR6400 出土土器 1  
図版 56 SR6400 出土土器 2  
図版 57 SR6400 出土土器 3  
図版 58 SR6400 出土土器 4  
図版 59 SR6400 出土土器 5  
図版 60 SR6400 出土土器 6  
図版 61 SM6663 出土土器  
図版 62 SM6663・SK596・SK593・SR6572・SR10065・SR6503・SR6625・SK612 出土土器  
図版 63 包含層出土弥生土器 1  
図版 64 包含層出土弥生土器 2  
図版 65 包含層出土弥生土器 3  
図版 66 包含層出土弥生土器 4  
図版 67 出土ミニチュア土器  
図版 68 出土古式土師器  
図版 69 出土弥生土器 (文様)  
図版 70 出土弥生土器 (文様・木葉痕)

# 第1編 弥生時代集落の調査

## 第1章 調査の概要

### 第1節 弥生時代遺構の概要

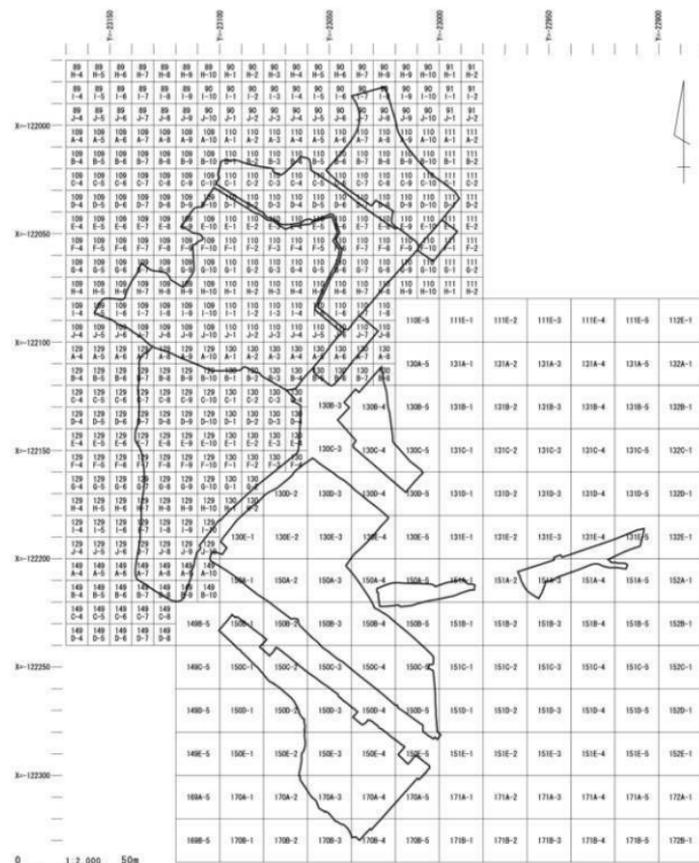
寺家前遺跡の本発掘調査については、既刊の『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』（以下、『寺家前Ⅰ』）の第1章総論の第1節に調査に至る経緯がまとめられている。遺跡の地理的環境や周辺の歴史的環境も同書の第1章第2節にある。遺跡全体に係わる調査経過は同じく第1章第3・4節に経緯を記した。また報告書刊行に至るまでの経過と刊行した報告書の構成については本書巻末の第2編にまとめ、これを以て最終的な総括とした。

本節では弥生時代遺構の調査概要を年度毎に解説する。藤枝市中ノ合では第二東名建設工事に伴い、平成12年度前半の確認調査その1と平成15年度後半の確認調査その2の結果を受けて、平成12年度から平成18年度（途中、平成14年度中断）までの期間、本発掘調査を実施してきた。この調査で得られた成果は大きく、藤枝市北東部地域に所在する弥生時代後期の遺跡としては集落の全容がわかる貴重な発見となった。また当地域で過去に調査された周辺遺跡との年代観や時期差などの関連性が明らかとなった。

まず弥生時代の遺構調査は、本調査Ⅰ期として平成12年度後半に調査対象地の南半部にあたるB区北から始まった。次いでA-2区南とB区南をほぼ同時併行で調査した（『寺家前Ⅰ』図6、表4参照）。B区北では調査区北側で杭列を伴う南北方向の大群を検出した。B区南では杭列を伴う大群のある水田跡が見ついている。東西方向の杭列が2箇所あることから二時期に分かれる可能性がある。南壁付近の窪地からは柄付き鉄製鎌が出土した（『寺家前遺跡Ⅱ』第129図861）。共存する土器から柄付き鉄製鎌は弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属する製品と見ている。翌13年度は前年度に水田遺構の広がりを見せたA-1区とA-2区、A-2区南（No.82地点E区を含む）を全面調査している。これらの低地部では、ほぼ全域で水田跡を検出した。水田跡では杭列を伴う大群と小群を検出し、杭・矢板等の木製品が数多く出土した（第52図）。A-1区西側の丘陵上では3軒の竪穴住居跡が見ついている（第35図、図版25・26）。このうち竪穴住居SB342内で出土した土器は弥生時代中期中葉に属する壺形土器である（第91図46、図版26）。土器の年代からみて竪穴住居SB342は寺家前遺跡や隣接する衣原遺跡のなかでも最も古い時期の遺構である。平成14年度は西側に隣接する衣原遺跡等の発掘調査のため、寺家前遺跡の本発掘調査は一時中断している。

本調査Ⅱ期として、平成15年度後半より確認調査その2と併行しながらE-1区の本調査を実施した。E-1区は寺家山の丘陵裾にあたり、上層では西側に狭い微高地があり、西から東方向に緩く傾斜した地形となっていた。本調査は平成16年度まで継続しており、下層の低湿地で弥生時代後期の水田遺構が確認された。水田遺構では杭列を伴う大群（SK422）を検出した（第60図）。また群SK422の周辺や北壁付近から夥しい数の木製品が出土している（第61～68図）。

本調査Ⅲ期は平成16～18年度にかけて、一部、本調査Ⅱ期と併行して行われたE-2区の調査とE-3区、E-4区、E-5区、F区の全工期終了まで実施した。E-2区とE-3区は丘陵裾に広がる微高地にあたり、弥生時代後期の集落遺構が確認された（第13図）。E-2区の東側はE-1区に続く低湿地になっており、



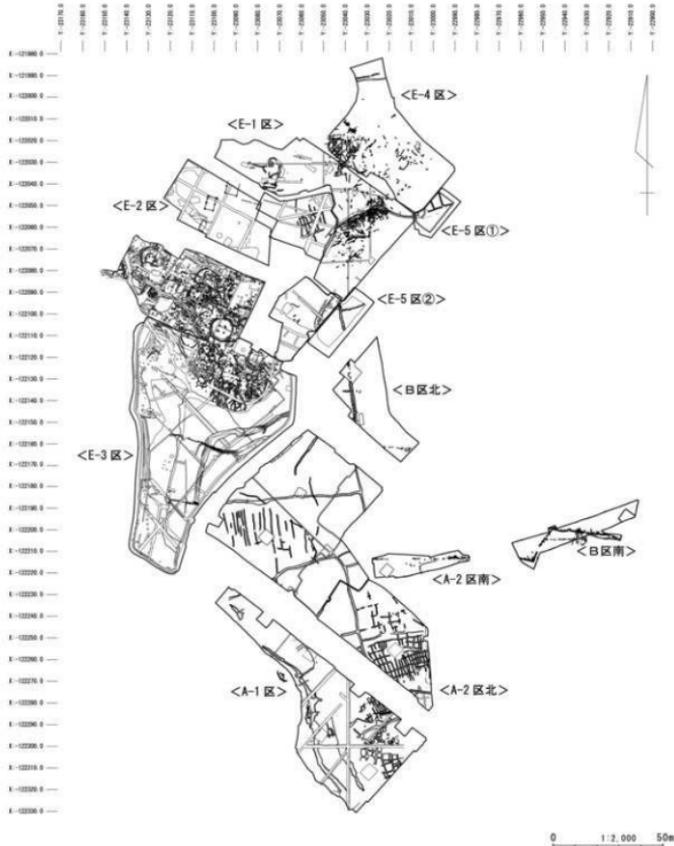
第1図 グリッド配置図

杭列を伴う群を検出している。E-3区でも東側は集落から一段下がった低湿地となっている。E-4区はE-1区の東端に位置する。杭列を伴う群などの水田遺構のほか、E-1区の北壁からE-4区北側にかけて、木製品が集中して出土した(第55図)。E-5区は現道であった部分の調査で、E-5区①とE-5区②がある。前者はE-2区南壁とE-1区の南東角と接する。後者はE-1区南西角とE-2区の南東角に接する。E-5区①ではE-1区で検出した大群SK422に続く群SK5011が見つかっている。E-5区②でも同じくE-2区の

畔 SK6773 に繋がる杭列畦畔を検出した。集落域から北側の丘陵上に設定したF区では弥生時代の遺構面は確認されなかった。

調査では発掘された遺構について、学識経験者からの所見を聞くなど調査指導を得た。調査指導はその後の調査の進行や発掘調査報告書の考察などに活かされている。

寺家前遺跡の本発掘調査にあたり、調査区のグリッド配置は第1図のように設定した。座標は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）基準として方眼設定している。



第2図 遺跡全体図

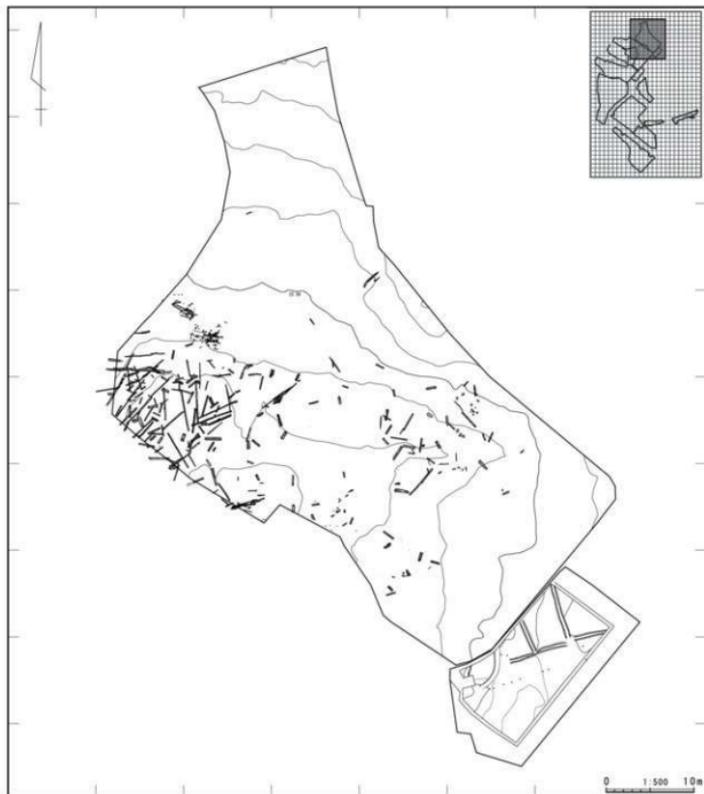


第3図 遺構配置図

## 第2節 検出された遺構

発掘調査で検出されたのは堅穴住居跡 21 軒、掘立柱建物跡 7 棟、井戸、土坑、溝跡、水田跡など、弥生時代後期に属する集落遺構群である（第3図）。集落内には背後にある寺家山を水源とする自然流路があり、住居跡や掘立柱建物跡の間を南東方向に流れている。自然流路内からは多量の弥生土器や木製品が出土している。

堅穴住居跡は平面形態が2種類ある。ひとつは周溝が小判形を呈するもの、もうひとつが円形の周溝をもつものである。主柱穴は4本で中央に炉跡が検出されている住居もある。住居は約20㎡前後の大



第4図 E-4区・E-5区①全体図



第5図 E-1区・E-2区北東部全体図

きさをもつが、SB218のように83.7㎡ほどの大型住居跡もある。

掘立柱建物跡は最も大きなもので4間×1間の長方形の建物が1棟、やや規模が小さくなるが3間×1間の長方形の建物が2棟、さらに小型の2間×1間の建物が3棟など、大ききの異なる建物がある。柱穴には柱根も残っており、穴底には礎板が敷かれていた。なかには柱が引き抜かれた後の痕跡がわかる柱穴もあり、梁・桁行の柱間が正確に計れる建物もあった。

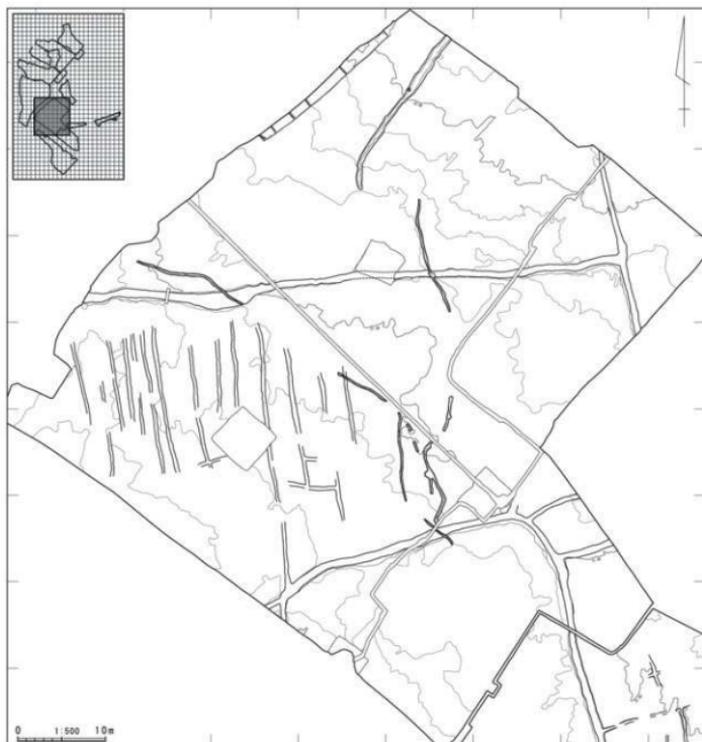
E-2区の自然流路SR6400は堅穴住居や掘立柱建物の建ち並ぶ集落のほぼ中央を北西から南東方向に流れる。背後の寺家山を水源として、水はこの自然流路SR6400を通り、集落の北東から南西面に広がる水田へと供給される。遺構名は自然流路としたが、完全な自然の状態ではなく、集落が築かれて以降、流路内の一部に幾度か人為的に手加えられている。流路内からは弥生時代後期の土器や農耕土木



第6図 E-2区・E-5区②全体図



第7図 E-3区全体図



第8図 A-2区全体図1

具や日常的な道具類などの木製品が数多く出土している。自然流路 SR6400 は上層の SR6139 や E-2 区の SR10045・SR10046・SR10048・SR10075 も含む。

E-3 区の北側では幾筋かの自然流路を検出している。前述したように SR10045・SR10046・SR10048・SR10075 は E-2 区の SR6400 の続きで同じ流路である。SR6400 とは異なる流路で、SR6400 の南側にある流路 SR10050 (SR10065 を含む) と SR10204 は同じ位置にある。これらは SR6400 とほぼ同じような方向の流れをもつ。もともと自然流路 SR10204 の流れのあった同じ場所に SR10050 が人為的に掘り直された可能性がある。そのほか集落の南縁辺部に沿って SR10470・10471 がある。SR10341 は竪穴住居 SB309 と SB310 との間に位置する自然流路である。弥生土器の壺 (第 126 図 436) が出土している。この流路も SR6400 と方向がよく似ていることから同じ流れのひとつと考えられる。

A-1 区では西側の丘陵地に沿って自然流路 SR607 を検出している。E-3 区の低地で検出した SR10470・



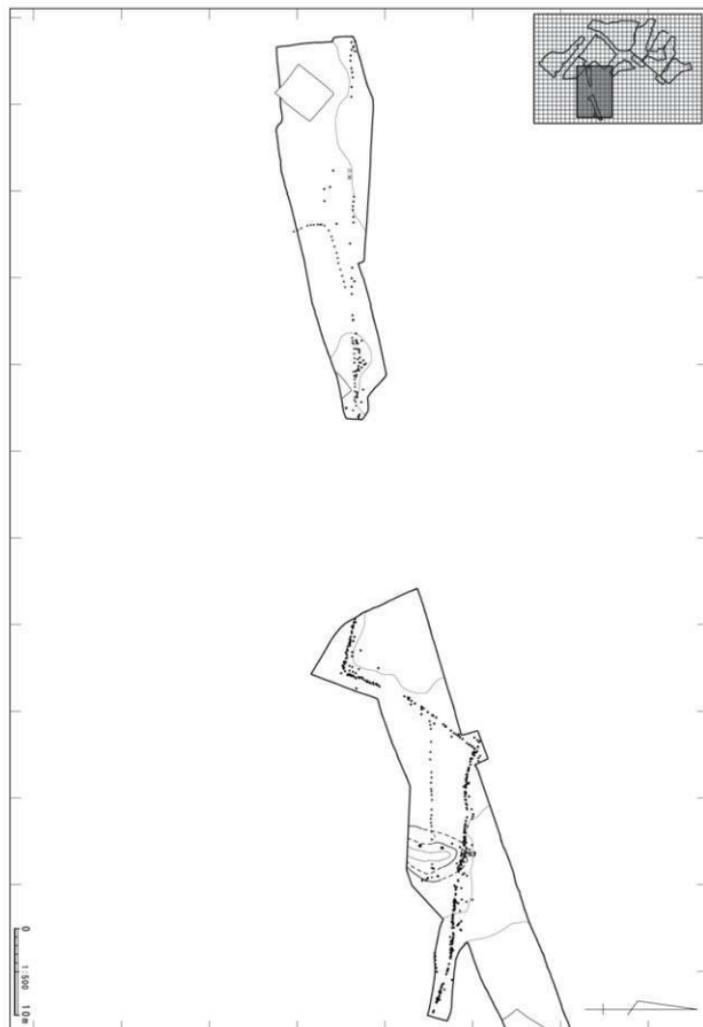
第9図 A-2区全体図2



第10図 B区北全体図



第11図 A-1区全体図



第12図 A-2南区・B区南全体図

10471も微高地の縁辺部に沿っていることから、現地調査の所見では同じ流路であった可能性が指摘されている。

井戸状遺構 SE10455 は E-3 区の東向きの縁辺部で検出した。SE10455 は縦板が打ち込まれた楕円形の土坑である。この位置は集落遺構のある範囲からは大きく外れた低地にあり、周囲に他の遺構は見つかっていない。

E-2 区では土坑状の遺構が 4 箇所見つかっている。SF6572 は E-2 区の南端で検出した不整形な土坑である。覆土より弥生時代後期の甕が出土している。SF6625 は堅穴住居 SB215 の北西側で検出された。覆土には弥生土器や炭化物層が含まれていた。SX6663 は掘立柱建物 SH212・SH213 の南側で検出した浅い不整形な遺構である。上層では弥生土器や竦、下層では焼土と炭化物を検出している。SX6595 は E-2 区北半部で検出した浅い不定形な遺構である。西面は後世の掘削で切られている。

E-3 区内の土坑は 2 箇所ある。SF10124・SF10126 はいずれも焼土坑である。不定形で炭化物を多く含む。出土遺物はない。

微高地に集落が営まれた一方で、南側に広がる低湿地では大規模な水田が築かれていた。水田は居住域に住んでいた人々が稲作をしていた耕作地（生産域）である。開田された時期は水田から出土した土器や農耕土木具などから見て、集落の年代と同様、弥生時代後期後半である。水田域での主な遺構は杭列や矢板列を伴った大畔と小畔、溝跡、自然流路、堰状遺構などがある（第 52 図）。そのほか、包含層より夥しい数の木製品が出土している。木製品は建築部材を中心としており、出土範囲は E-1 区から E-4 区（SX423）の低地部一帯に広がっている（第 55・60 図、図版 41・42）。また E-2 区の畔 SK599 脇でも木製品が集中して出土した SX598 がある（第 85 図、図版 46）。

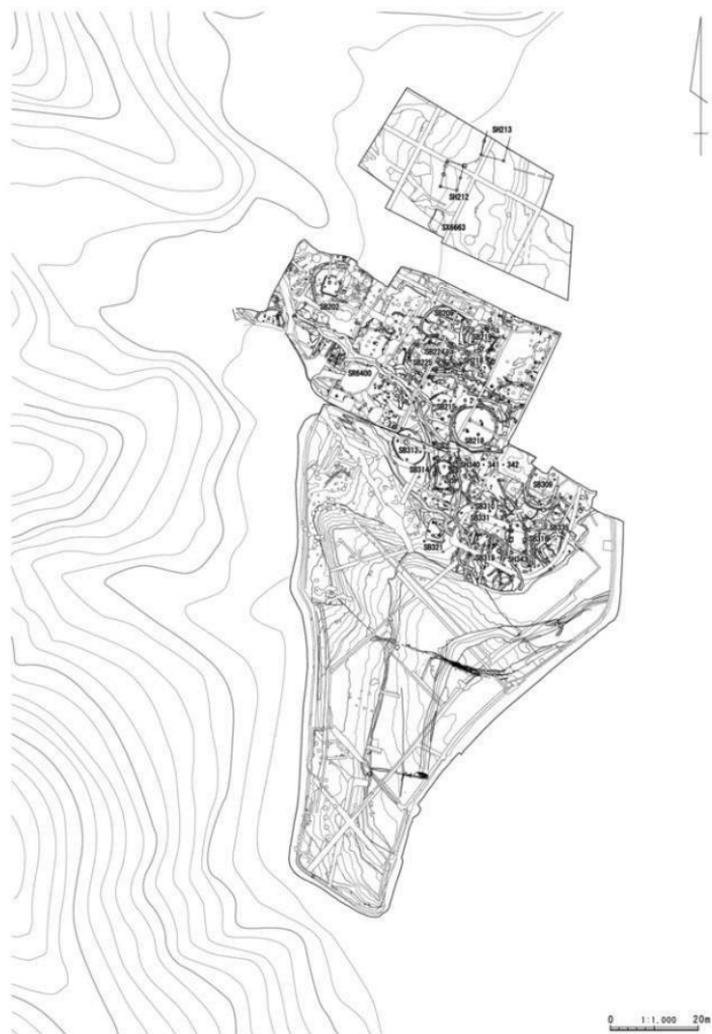
水田域で最も北側にある大畔は E-4 区で検出した畔 SK5002 である。西隣の E-1 区では大畔 SK422 がある。集石箇所 SX424 は SK422 に含まれる。また『寺家前 II』では SK422 の周囲の包含層より出土した木製品も関連するものとして SK422 に含めている。E-1 区や E-5 区①、E-2 区北側の調査区では SK422 に平行または直交する小畔も見つかっている。E-2 区南側から E-5 区②、B 区北、A-2 区の調査区まで繋がる南北方向の大畔 SK 2・3 がある。この線上から南側にかけて、東西方向や南北方向の大畔が繋がっている。大畔は E-3 区の SK10465・10466 や A-1 区の SK591～595、A-2 区の SK596・599～603・606・614、A-2 南区の SK 8・611、B 区南の SK 6・7・612・613 がある。大畔に囲まれた範囲には一部に小畔も見られる。各畔の位置関係については第 52 図に概念図を示した。

低地部にある流路内から見つけた堰状遺構は E-3 区 SR10470 内（第 49 図）と、A-1 区の SR607 内（第 48 図）にあり、杭列や横木を伴っている。E-3 区の畔 SK10463 西端近くで検出した SE10485 は井戸もしくは水溜めの施設と思われる（第 50 図、図版 54）。

### 第3節 微地形と遺構の広がり

弥生時代後期の遺構は遺跡の北から西側にある丘陵の裾部分にあたる狭い微高地と、そこから一段低くなった湿地にかけて広がっている。狭い微高地には集落遺構、低地には水田遺構を検出した。これらの遺構が立地する微高地は南北に細長く山裾に沿っており、西から東の低地へ向かって緩やかに傾斜している。低地も南東方向から東の葉梨川方面へと下がっていく。微高地は必ずしもなだらかな平坦地ではなく、低い細尾根が入り込んだり、山裾の谷筋から流れ出る自然流路があったりと、狭いながらも細かな起伏がある。

遺構はこのように狭く起伏のある地形を利用しており、微高地上では自然流路 SR6400 の周りに遺構



第13図 集落域地形図



第14図 低地部地形図

が集まっている。E-2 区の北西側は調査対象範囲から外れているため発掘調査をしていないが、遺構の広がりとすれば、もう少し北西側に遺構が広がっている可能性が高い。しかし今回の調査範囲のなかで集落の北東から南西方向までの縁辺部が見えていることから、居住域の建物跡はおおむね全体が検出されているととても良いだろう。

調査範囲の遺構は第 13・14 図に地形図、第 3 図に遺構配置図としてまとめた。竪穴住居跡や掘立柱建物跡は自然流路 SR10050 よりも北側の範囲に位置し、自然流路 SR6400 の周辺にまとまっている。E-2 区の中央には寺家山の細尾根が入り込み、住居群が一旦途切れるが、細尾根の北側の離れた位置にも掘立柱建物 SH212・SH213 や SX6663、SX6595 などの遺構がある。しかし建物跡もこれより北側にはなく、葉梨川方向へ地形が下がって行くことから、住居群の北端は E-2 区までである。居住域として当地は背後に丘陵があり、その懐にある微高地は南向きで日当たりの良い土地である。山裾を水源とした水脈にも恵まれており、生活水として、水田域に供給する水路として自然流路 SR6400 がここに集落を築く大きな要因となったことは間違いないであろう。ただし山裾の狭い微高地は必ずしも安定した土地ではなかったようで、SR6400 が埋没していくと住居域のなかにも支流が入り込んで来ている様子がうかがえる。自然流路 SR10204 ではこうした山からの水の流れを切り回すように、自然流路を掘削して新たな水の流れ (SR10050) を人為的に作り出している (第 47 図)。

ここに集落を築いたもうひとつの要因は、山裾から一段下がった低湿地が微高地を取り囲むように広がっていることであろう。当時の生業の中心は稲作であり、水田を営むことである。そのためには居住域のすぐ近くに水田耕作に適した湿地が必要である。葉梨川と山裾に挟まれた後背湿地は、まさしく稲作に適した土地だったのであろう。

微地形から見ると、水田域は畔 SK422 よりも北側の範囲と、畔 SK6773・6774 よりも南側の範囲に分けられる。畔は整然とした方形区画ではなく、地形の特徴を活かした区画を作っているが、ほぼ東西南北の方向に大畔を配置している (第 14 図)。要となる大畔には杭列や矢板列に横木を入れて補強している。大畔の区画のなかには小区画の畔が見つかる。畔の構築時期は集落と同じ弥生時代後期後半であるが、その後、部分的に補修・補強を行っている。また古墳時代前期以降に一旦集落が途絶え、古墳時代後期に再び集落が築かれると、大畔の方向をある程度踏襲しながら水田として使っていたようである。水田の南限は A-1 区や B 区南の南端で確認されている。

## 第2章 調査の成果

### 第1節 弥生時代集落の検出

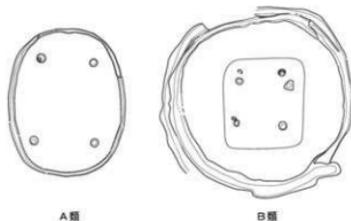
寺家前遺跡からは平地式を含む竪穴住居跡 21 棟、掘立柱建物 7 棟、溝、川跡などが発掘されており、竪穴住居跡は遺跡のほぼ中央部の全域に広がっている。検出された竪穴住居跡をその平面形態から A 類（平面長楕円形の住居跡）と B 類（円形あるいは隅丸方形の住居の周囲に溝を巡らせた住居跡）の 2 つに分けた（第 15 図）。

住居跡は後世の流路による擾乱あるいは耕作などの影響が大きく、明確な形で検出されたものがほとんどなく、推定の部分を多くして認定したものが多い。したがって、ある部分ではかなり不明確な部分を残している。A 類とした長楕円形の住居跡は竪穴住居跡の部分は明確ではなく、壁溝と床面あるいは柱穴の位置を確認することで住居跡と認めてきたし、B 類も竪穴住居跡と認められたのは SB209 と SB321 のみである。しかし、柱の間隔、想定する住居の範囲などを登呂遺跡・上ノ平遺跡など、他の遺跡で確認された住居の規模と比較すると、大きな齟齬がないことから、これらを住居跡と認めてきた。しかし住居部分が竪穴であるのか平地式であるのかは明確になっていない部分が残っている。

発掘区のほぼ中央部を北西から東南方向に SR6400 と呼んだ流路が流れており、これは低地に近い東南の部分ではさらにいくつかに枝分かれしている。その下流部分で流れに沿うようながら SR9526 に臨んだ区域に A 類の住居跡が比較的集中しており、これより北側の標高の比較的高い区域の外側に B 類の住居跡が広がっていることを認めることができる。

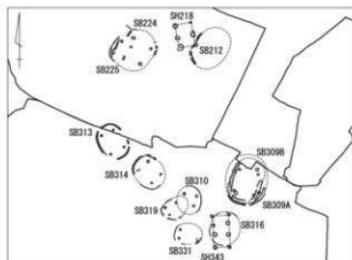
A 類の住居跡は、この地域では弥生中期後半から後期にかけて広く認められるもので、静岡市有東遺跡あるいは浜松市東平遺跡（井口 2007）などでも知られている。志太平野では近接する敷田遺跡に長楕円の小判形を呈した住居跡が発掘されている（鈴木他 1981）。長軸の柱間が広く、柱穴が住居跡の壁近くで検出されているものが多いが、寺家前遺跡では SB309 にみるように柱穴が壁近くにあるものと、SB310 でみるように主柱穴の距離が比較的狭く、竪穴の中央部分に集まっているものがあり、両者は細分できるものであろうが、今回は資料的な制約もあることから、分類していない。

B 類とした周囲に円形の溝（周溝）をもった住居は、居住部分は円形のものと同丸方形を呈するものがあるが、寺家前遺跡で検出されたものは後者であるらしい。B 類の住居跡は静岡平野の登呂遺跡で検出されたものが早くから知られている。ここでは円形の平地式の住居の外側に土境を巡らせ、その外側に溝を掘っている。こうした土境を造ることで、平地式の住居でも竪穴住居と同様な壁面の効果をもたらしていたことが知られており、菊川市赤谷遺跡では竪穴住居跡の外側に幅広く土境を巡らせ、その外側に溝をもった住居跡群が検出されている（篠原 2006）。同様な例は掛川市上の平遺跡（田村 2008）でも確認されている。赤谷遺跡・上の平遺跡では竪穴住居跡であり、登呂遺跡では平地式の住居跡であるか、こうした違いは、おそらく遺跡の立地の違いによるものであろう（註 1）。

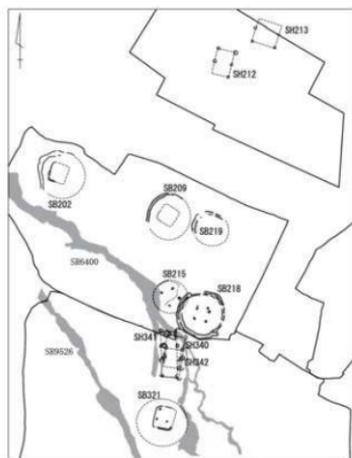


第 15 図 竪穴住居分類図

寺家前遺跡では全体が把握できるような形で、登呂遺跡あるいは赤谷遺跡と同じような住居跡は検出されていないが、SB209では径10mほどの円形の周溝の中に一辺およそ4.5mの隅丸方形の住居跡が検出されており、またSB218ではやはり、径10mほどの円形の溝の中に居住部分の区画は明白ではないが、柱間2.5mほどの間隔で4本の柱が検出されている。SB209の住居跡では周囲に高さは少ないけれど、低い壁面の立ち上がりが確認されており、その外側SD9264とした円形の溝との間に、高さはともかく土堤が巡らされていたものと考えられる。住居跡の床面から炉跡が確認されていることから、床面はほぼ現在の位置であり、壁の立ち上がりは極く低いものであったが、これは後世に削平されたことを考慮することとして、少なくとも現時点では堅穴住居跡であったものと考えている。SB218では壁溝および床面は確認できていないが、検出されている主柱穴から周溝までの距離が大きいため、ここでも住居部分の外側に土手が巡らされていた可能性が大きい。したがって寺家前遺跡でも円形の周溝の



I期



II期

第16図 集落分類図

の巡る住居跡は堅穴あるいは平地式の居住部分の外側に土手を巡らせた住居跡であったものと考えられる。ここでは、このような形態をした住居跡を最初に確認できた登呂遺跡の名を取って「登呂型住居跡」と呼ぶことにしたい。後でも触れる予定であるが、こうした住居跡のうち、東海地方で検出されているものは、弥生後期のものが多いが、居住部分が平地式のものは、登呂遺跡のように、地下水位の比較的高い低地あるいは平野部の遺跡で営まれたもので、赤谷遺跡あるいは上の平遺跡のように台地の上に営まれたものは居住部分が堅穴式になるものようである(註2)。

寺家前遺跡の弥生時代の住居跡を平面形からA類とB類に分けたが、こうした形態差は遺構の時期を示すもので、A類が古く、B類がより新しいものであろうと考えている。したがって、寺家前遺跡の弥生時代の遺構はA類の堅穴住居跡を中心にI期、B類の住居跡を中心にII期と、大きく2時期に大別することができよう。

もちろん、各類の住居跡の間で重複しているものが認められ、おのおのいくつかのグループ、あるいはいくつかの時期に細分されることが推定できるが、ここではそれを抽出できるデータは充分には得られなかった。したがって詳細な検討は難しいが、住居跡の配置からI期の住居群が低地に近い部分に、II期の集落がより高い区域に営まれていることは理解できよう。

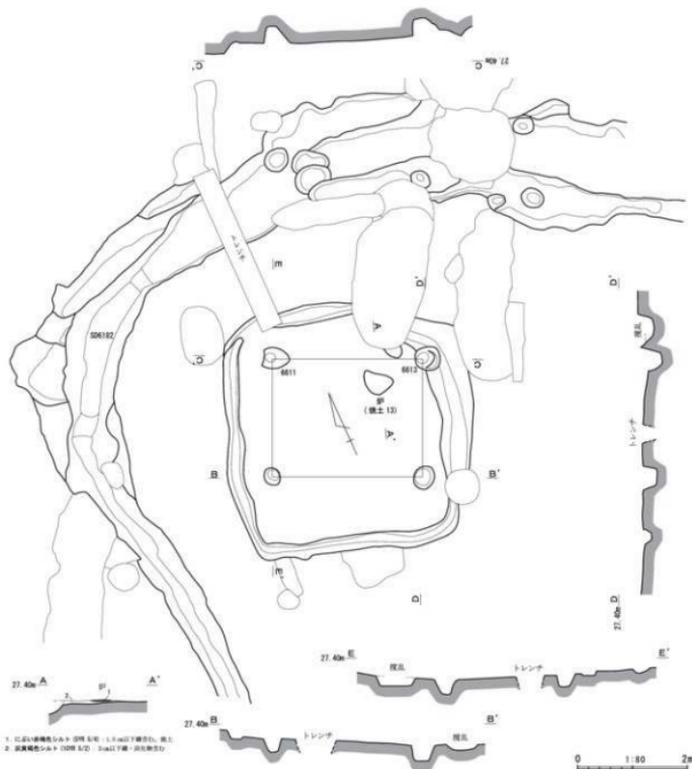
寺家前遺跡の西側に接続する丘陵の東側斜面の末端部、水田地帯に接続する部分で、SB342とした堅穴住居跡の一部が検出されている。丘陵側で壁溝と床面の一部分が確認されたのみであるが、

出土土器を見ると弥生中期の中葉に属するものだろうと思われる。これが住居跡であるとすると、静岡県内でも最も早い段階での堅穴住居跡ということになる。寺家前遺跡の形成・継続の時期を考える上で、興味のある資料なので、追加しておきたい。

## 第2節 遺構各節

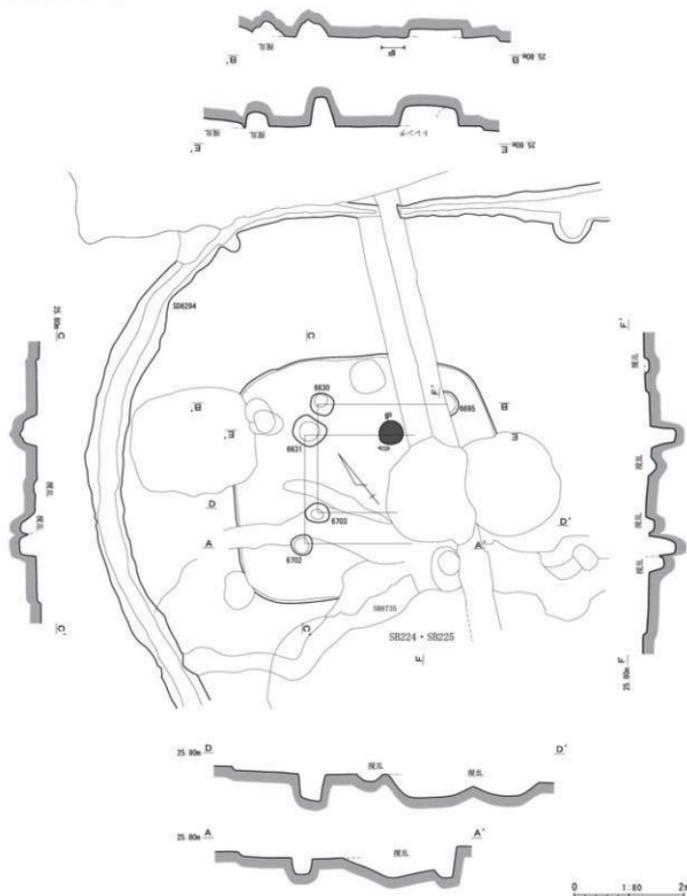
### 1 堅穴住居跡

SB202 (第17図) 調査区の西北隅で確認されたもので、平面形はB類の住居跡である。周溝(SD6182)と居住区域、炉跡、主柱穴が検出された。周溝は攪乱などによって、全周が確認されていないが、径およそ9mで、ほぼ円形を呈している。周溝の一部分が直線的に観察される部分もあるが、流路・溝な



第17図 SB202実測図

ど後世の擾乱が影響しているものであろう。したがって、周溝は北側の溝のカーブが示すように、ほぼ円形を呈していたものと考えている。居住区域は隅丸方形を呈するらしく、規模は南北が4.5mほどで、居住部分がきれいに検出された。SB209と良く似た広さをしている。主柱穴は4本が確認されており、西側では壁溝に重なっている。南北方向の柱間は2m、東西方向は2.8mほどである。ほぼ中央に炉跡が発見されている。



第18図 SB209実測図

**SB209** (第18図) 調査区の北側で検出された住居跡で、周溝(SD6294)と居住部分さらには炉跡が発見されている。SD6294は正円に近い弧を描いているが、南端では直線的に延びてSB225を切っており、さらに南側に延びている。また、東端でもほぼ直線的に延びて、SB219の周溝につながっているらしい。おそらく円形の周溝に、後世に自然の流路が流れ込んで、両者が一体化してしまったもので、調査時点では両者の識別が難しく、充分分離できなかったものであろう。したがって、竪穴の周囲に円形の周溝をめぐらせた、B類とした住居跡と考えることができる。

居住部分は東西4.5m×南北4.5mほどの隅丸方形の平面形をもっており、全体で20㎡ほどの広さである。柱穴は西側で4本分が検出されており、いくつかの組合せが考えられるが、いずれも壁までの距離、壁の方向などと整合させることが難しい。現地調査段階では柱穴の大きさからSP6631・SP6702とSP6630・SP6703・SP6695の2組の柱穴の組合せが想定できるかもしれないとしている。いずれにせよ、主柱穴の柱間は2m前後のほぼ方形をなすものであろう。中央部北寄りに炉跡が確認されている。

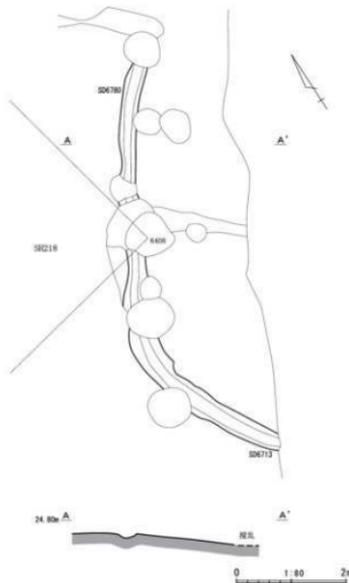
東側はSB219の溝(SD6536)に切られているらしく、明確にはならなかった。したがって、この住居跡はSB219よりは古いと考えることができる。また、南側も流路(SR6735)によって切られ、さらにSB224と重複していることから周溝部分の全体は明確にはならなかった。

周溝(SD6294)から破片ではあるが、複合口縁の大型壺、壺、台付甕の脚部(第90図3～6)が出土している。おそらく、この住居跡の時期の一端を示すものであろう。

SB224との前後関係は明らかではないが、SB224が長楕円形を呈した住居跡であることを考えると、SB209がより新しい可能性が高い。

**SB212** (第19図) 調査区の東北端で確認された住居跡で、壁溝(SD6713・6780)の東側半分程度が検出された。調査時には排水溝から東側はすでに削平が著しく、遺構の続きは確認できなかった。SD6713は幅0.5mほどで、長楕円形に繞っている。確認できた範囲で長径8mほどの大きさで、SB309あるいはSB313などと良く似た大きさをもっている。東側壁溝の中央部分をSH218の東南隅の柱穴で壊されている。壁溝の様子から、この住居はA類の住居跡であろう。炉跡、主柱穴は確認できなかった。

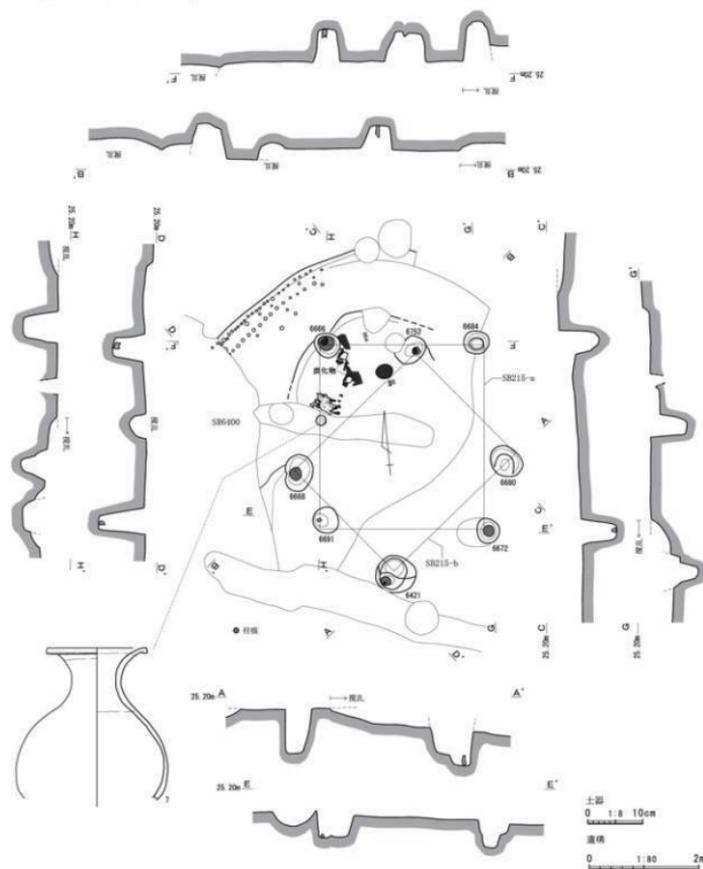
**SB215** (第20図) SB218に隣接して発見され、主柱穴4本と居住域の周囲に設けられた周溝を保護した杭列が検出されている。南側は半分以上SR6400で削り取られ、東側はSB218で削られている。SB215-aの主柱穴は第20図に示すように2組が考えられるが(SB215-a・SB215-b)、柱列との関係はSB215-aが整合する。柱間は2.6m×3mとほぼ正方形である。柱穴は複数の掘形が重複しており、この住居跡で建て替えがあったと考えられる。周溝の杭列は40cmの間隔で2列が確認されている。主柱穴との距離から土手の外側を保護する杭列だと推定できるが、2列検出され



第19図 SB212実測図

ていることから、これが建て替えによるものか、土手の幅を示すものかは明らかではなかったが、その位置関係、間隔からみて、おそらく建て替えに伴うものであろう。杭列の外側に溝は検出できていない。炉跡が検出されているが、位置からみてSB215に伴うものかは明らかではない。床面から壺がまともに出て出土している（第90図）。

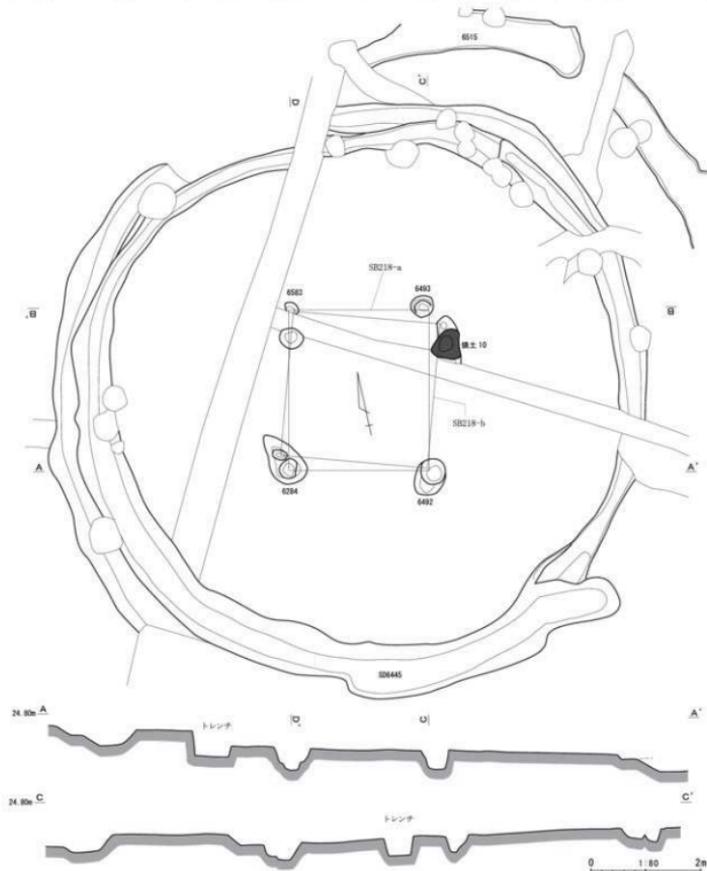
SB215-bは炉跡とこれに伴う4本の柱穴（SP6684・6672・6691・6666）から推定したが、外周の溝などは明らかにならなかった。



第20図 SB215実測図

SB218(第21図) 調査区のほぼ中央で検出されたものである。径10mほどの円形に溝が巡っている。溝は太いところで1mほど、細いところでは0.5mほどである。一部で2本の溝が重なっていると確認されており、建物の建て替えに伴う掘り直しではないかと考えられる。

内部に主柱穴4本が確認されている。南側の2本は重複しており、北側では柱間が少し延びた柱穴が確認されている。したがって、この建物はやはり、建て替えを受けていることが明らかである。柱穴の組み合わせを考慮すると、柱掘形の大きな建物と柱穴の小さな建物とに分けられる。前者をSB218-a、



第21図 SB218実測図

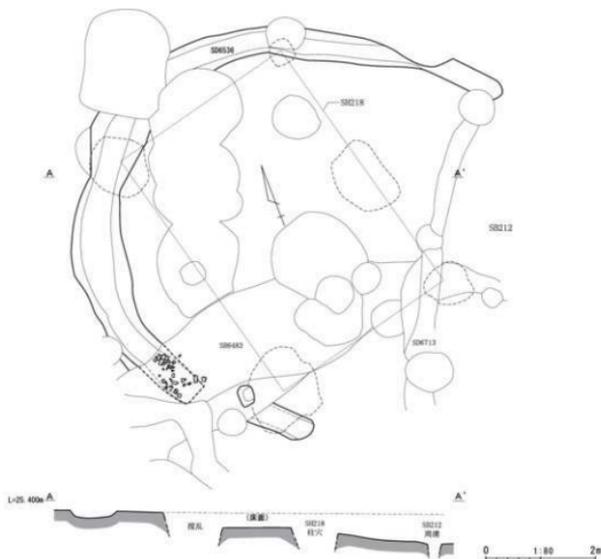
後者をSB218-bと呼ぶことにしたが、柱穴の重複から前者がより新しいものであることが理解できる。

柱間はSB218-aが東西2.5m×南北2.5mのほぼ方形であり、SB218-bは東西2.7m×南北3mとやや大きい。柱から周溝までの距離が3mほどと大きく、隣接するSB215の場合の2倍ほどの長さがある。また、居住分が確認できたSB209の場合では隅丸方形の居住部分の径は4.5～5mである。これらを考慮すると、現地調査ではすでに確認できなかったが、外周の溝に沿って、幅1m前後と比較的幅の広い周境が造られていたことが推定できる。焼土10とした炉跡が検出されているが、柱穴に近すぎる炉跡の位置から、この住居跡に伴うものとは考えられない。したがって、SB218は主柱穴4本と外周の溝だけが確認できた住居跡ということになる。他の住居跡の様子から見て居住部分は掘り込んでおらず、あるいは平地式の住居跡であったのかもしれない。

周溝(SD6445)から壺の胴部破片と底部の破片(第90図9・10)が出土しているが、無文である。また柱穴からも土器片が数多く検出されている。

焼土10がSB218に伴うものではないとすると、これとは別の建物の存在が推定される。全体図を詳細に観察すると、SB218の北側に、自然流路の跡とは異なり、SD6445と良く似た弧を描く溝(SD6515)を認めることができる。焼土10を中心に径10mほどの円を描くと、このSD6515の弧にほぼ一致する。あるいは外周の溝と炉跡が検出された住居跡を想定できるかもしれないが、それ以上の詳細は明らかにならなかった。

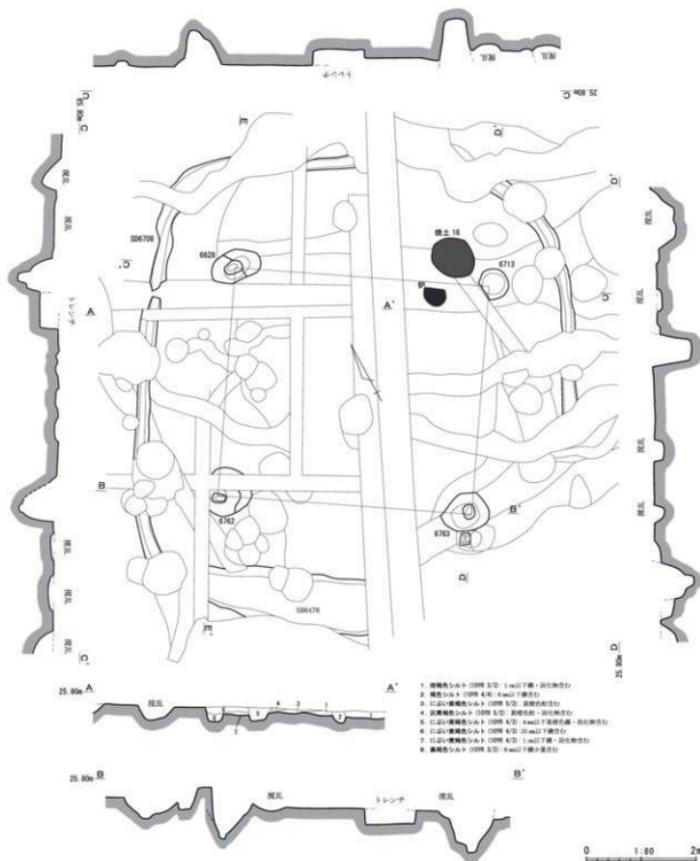
SB219(第22図) SB212の西側で、これに一部重複して検出されたもので、弧状に巡るSD6536在住居跡の周溝と認定したものである。SB212、SB209と重複しているだけでなく、SH218とも重複しており、



第22図 SB219実測図

住居跡の内部は大きな掘立柱の掘形あるいは溝などで攪乱され、細かくは観察できなかったが平面形からB類の住居跡であろう。北東隅と南西隅の柱跡が検出できているが、柱穴は比較的細い。柱間は2m前後と比較的狭く、SD6536の検出できた弧の部分から推定した周溝が径6~7mと比較的小さいことも一致している。

住居跡を切って流れた流路SR6483内から台付甕の口縁部と脚（第90図12~14）が出土している。SB219に確実に伴うものとはいえないが、位置的には比較的近い部分から出土しているので、図示して

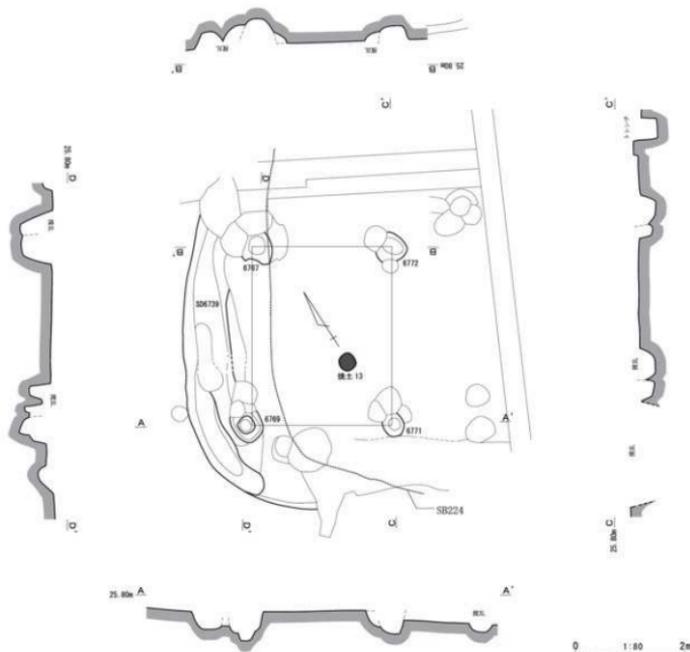


第23図 SB224実測図

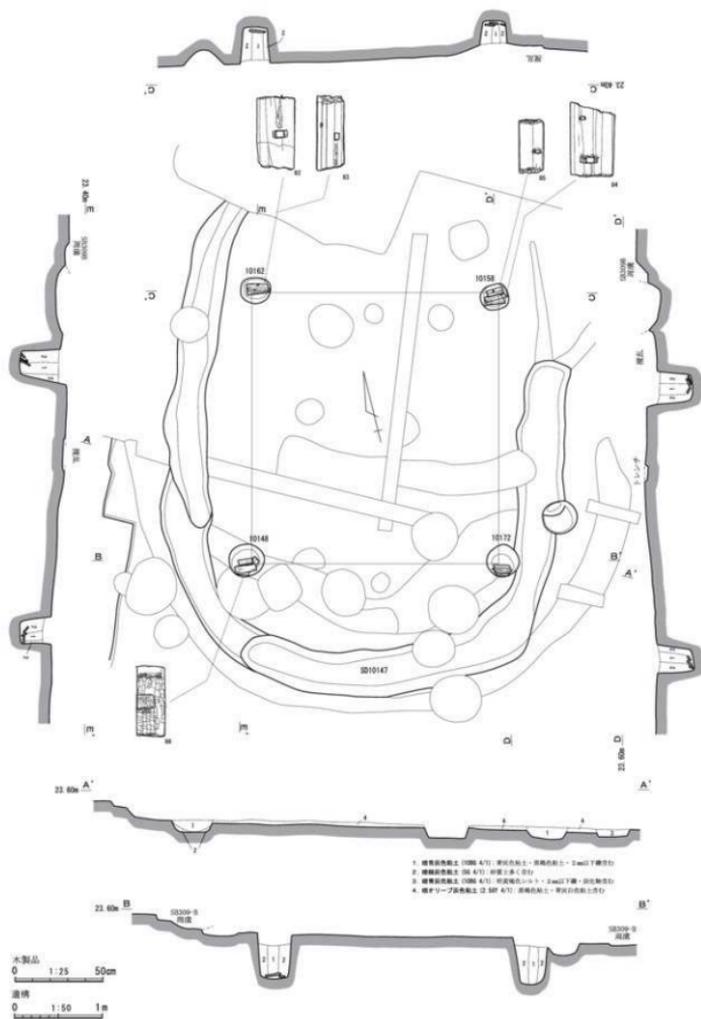
いる。

**SB224** (第23図) この区域では多くの柱穴と炉跡が検出されたが、どの柱穴が組み合わせになるのかよくわからなかった地域である。壁溝と推定される幅の細い溝が把握できたものを住居跡と認定した。溝が確認できたのは、北側から東側のかけての2/3ほどに当たる部分で、幅0.3mほどの溝が巡っている。南側は流路(SR6476)によって削られており、明らかではないが、全体の範囲を推定すると長径8.5m×短径7.5mほどの南北に長い楕円形の住居跡になる。したがってA類の住居跡ということになる。主柱穴は4本が推定されるが、東南隅の柱の位置がやや内側にずれている。柱穴に重複している部分があり、あるいは建て替えされたことを考慮する必要があるかもしれない。SP6763には礎板が残っていた。柱間は南北が4.8m、東西が4.5mほどで、全体に柱穴(SP6762)の位置が推定された壁の近くに位置している。焼土の位置は明らかにならなかった。東側はSB225と重複しているがその前後関係も明らかではない。

**SB225** (第24図) SB224の東側で検出された溝(SD6739)と近くで確認された主柱穴、炉跡(焼土13)をとらえて住居跡と認定したもので、詳細はよくわからない。壁溝(SD6739)は南側では流路と重なり、全体は明らかにならない。また、住居跡の大半はSB224と重複しており、平面形も判然としな



第24図 SB225 実測図



第25図 SB309-a実測図



しかし主柱穴は4本が推定され、柱間は南北方向が3.3m×東西2.5mと比較的狭くなっているが、長楕円形の平面形を想定している。主柱穴の間隔が比較的狭いことから、住居跡の平面形も多少狭かったものであろう。炉跡は焼土13を推定している。形状、規模などは不明である。

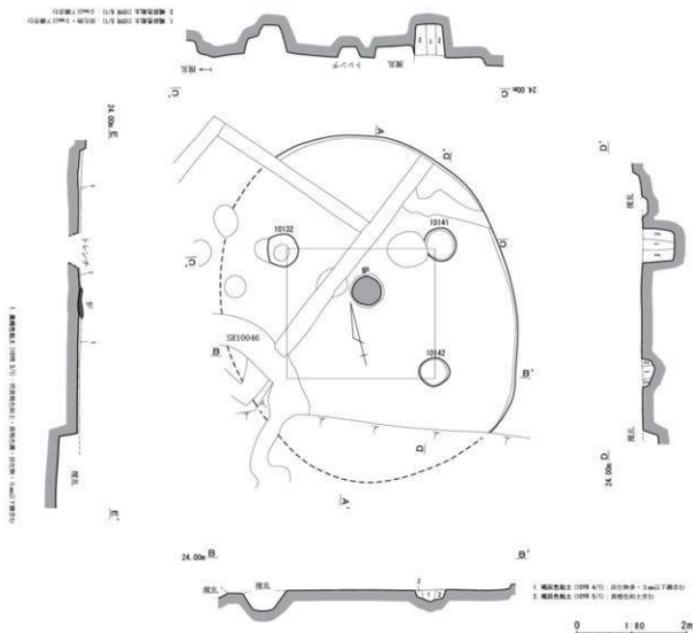
**SB309** 集落の東端近くで、平面が長楕円形を呈した住居跡が2軒重複して検出され、SB309-a・SB309-bと名付けた。両者とも長径10mほどと比較的規模の大きなもので、いずれもA類の住居跡である。

**SB309-a** (第25図) 北側は調査区外になり明確ではないが長径10mほどと推定でき、短径は7mで、南北方向に長軸をもった長楕円形の住居跡である。住居周囲に幅の広い壁溝が巡っており、堅穴住居跡であろうが床面は明確になっていない。主柱穴が4本確認されており、全てに礎板がおかれている。礎板は建築材の転用と考えられ、いずれもスギ材である。

柱間は長く、長軸では5m、短軸で4.5～5mである。柱穴は壁溝に比較的近いところに位置しており、東南側の柱では壁溝までの距離は長辺側で2m、短辺側で1mほどである。床面が確認されていないことから、炉跡は検出されていない。

柱穴 (SP10162) から口唇部に刻み目をもった甕の破片が出土している。

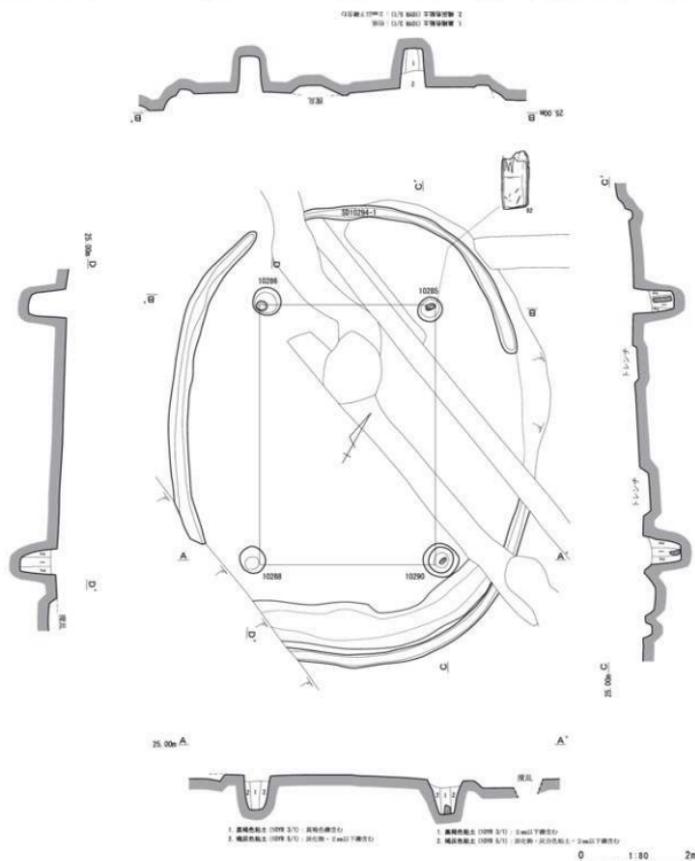
**SB309-b** (第26図) やはり小判形の住居跡であるが、SB309-aとほぼ重なっており、壁溝は南側半



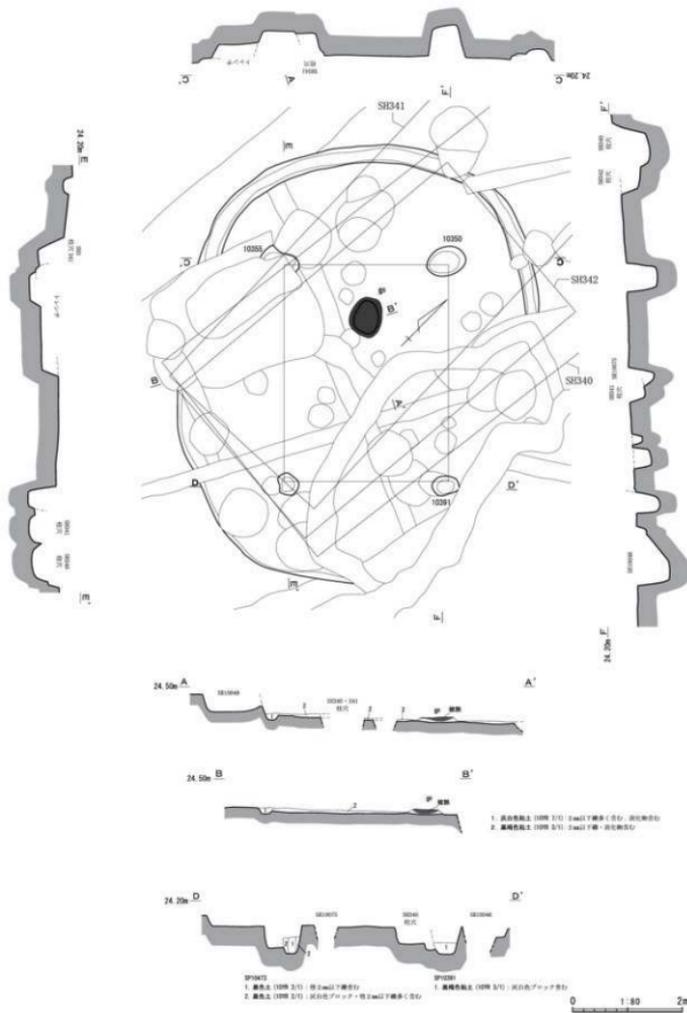
第27図 SB310実測図

分ほど確認されている。主柱穴4本が確認されており、やはり4本ともに礎板が残っている。柱間は5m～5.5mと広く、主柱穴で囲む区域はほぼ正方形である。柱の位置はやはり壁溝近くに設けられており、柱穴から壁溝までの距離は東南の隅では長辺側で2m、短辺側で1.5mほどである。炉跡は検出されていない。壁溝の切り合いからみるとSB309-bがSB309-aを切っており、SB309-bがより新しい。

SB310（第27図）E-3区のほぼ中央で検出された住居跡であるが、外周の半分と主柱穴3本および炉跡が確認されたのみである。東側ではSB331と重複しており、この部分では周溝、床面などは確認で



第28図 SB313実測図



第29図 SB314実測図



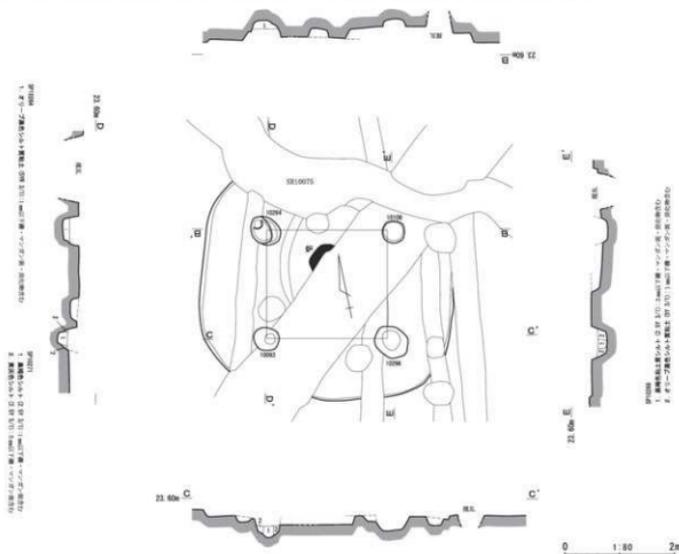
は壁溝に近く、軒の出は観察できていないが、あるいは住居の外側にかなり張り出していたのかもしれない。したがって、隣接するSB314との軒の位置関係に注意を要しよう。炉跡は検出されていない。

覆土から重屑・胴部破片および底部片（第91図24～26）が出土している。

**SB314**（第29図）長径8m、短径6mと隣接するSB313と良く似た規模の住居跡である。掘立柱建物跡SH340～SH342の3棟と重複している。東南側ではSR640の流れによって攪乱され、部分的には確認できていない箇所があるが、北側の半分では、幅30cmほどの壁溝が確認できた。主柱穴（SP10350・SP10391・SP10355）が確認されており、柱穴で囲まれた範囲は、長辺4m×短辺3mで、柱間は比較的大きい。柱穴から壁溝までの距離は長辺側が1.5m短辺側は1mほどで、SB313と良く似ている。住居跡のほぼ中央に炉跡が確認されている。

住居跡断面図（A-A'・B-B'）では炉跡が住居跡床面より高くなっているが、黒褐色土を張り床（床面の厚さ）と考えると、炉の下部に黒褐色土を張ったものと考えられよう。

**SB316**（第30図）集落の南端近く、SB309の南側に位置している。SH343と重なっており、住居跡の中に大きな掘立柱建物の掘形が掘られている。外周の南側および北側の部分と炉跡のみが検出されているだけで、住居跡の平面形はあまり明確になっていないが、柱位置の推定から、南北に長軸をもった長楕円形の住居跡（A類）と推定される。柱穴は4本が確認できており、柱間は南方向が3.2m、東西方向が2.8mと比較的短い。柱の位置は壁から離れ、内側になっている。北西の柱穴（SP10401）はSH343の西側の柱穴と重複しているが、SH343に伴う柱穴（SP10240）に礎板が残っていることから、SB316がSH343よりは古いものだと考えられる。炉跡は住居跡のほぼ中央に造られている。

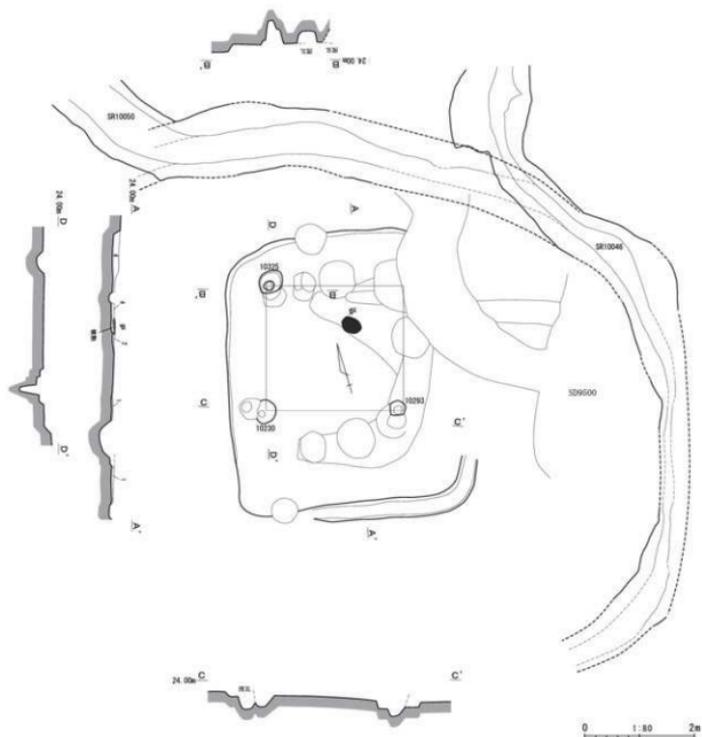


第31図 SB319実測図

覆土からではあるが、壺、甕が出土している。

**SB319** (第31図) SB331の南側で、集落城の南端近くに位置している。北側と東側をSR10075で大きく削られているが、西側の壁と炉跡さらには主柱穴 (SP10264・SP10271・SP10269・SP10108) が確認されたことから、住居跡と認定した。壁の残りと柱穴の位置から推定すると、住居跡は長軸を東西方向にもった長楕円形 (A類) のものと推定できる。柱穴の一部が重複していることから、この建物はあるいは建て替えが行われたのかもしれない。柱間は東西方向で2.2m、南北方向は2mと比較的小さい。壁と柱の間はほぼ1mであるが、主柱穴が全体に内側に集まった感がある。炉跡は大半を排水溝で切り取られてしまったが、住居跡中央部やや東側に設けられている。他に住居内に柱穴がいくつか検出されているが、建物としてまとまるものにはならなかった。

覆土から甕の小破片とともに小型の高坏が出土しているが、脚に小穴が穿たれてあり、この住居の時期を示すものではないだろう。また、東北側の柱穴SP10264から壺の胴部破片と台付甕の台部片が出



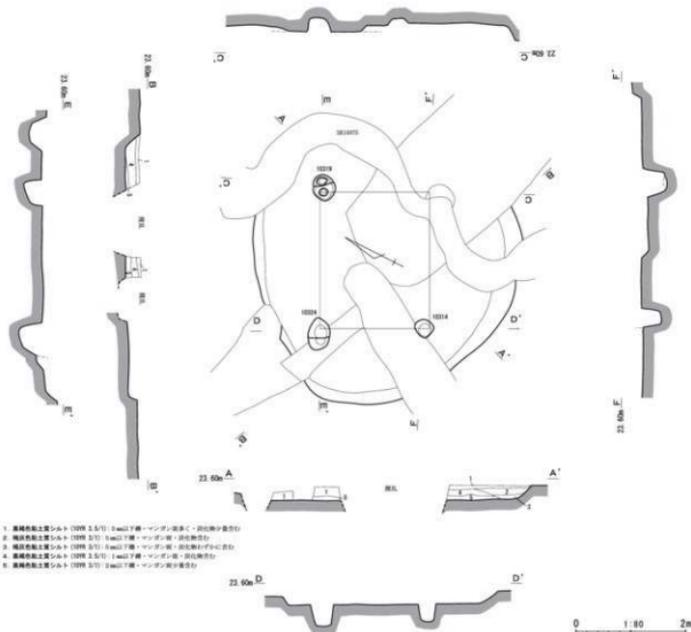
第32図 SB321実測図

土しており、この住居跡の年代を示すものであろう。

**SB321** (第32図) 集落の東南端で検出された住居跡で、住居部分の平面形はほぼ隅丸方形である。主柱穴3本が確認されているが、北東の柱穴は攪乱によって失われている。外周の溝は確認されていないが、SR10046とSR10050が住居跡の北側・東側で、ともに大きく弧を描いていることから、この住居跡の外側に径10m前後の周溝が回っていたことが推定できる。流路のカーブはこの周溝の影響を受けたものだろう。したがって、この住居跡は外側に周堤を巡らせたB類だと推定している。柱穴は3本とも複数が切り合っており、同一の位置で建て替えられた可能性が高い。柱間は2.5m×2.3mほどで、柱位置はほぼ方形であるが、壁溝の位置から見るとやや北側に寄った感がある。炬跡は中央部やや北側に設けられている。

覆土から壺口縁部および底部が出土している(第91図36～37)。

**SB331** (第33図) SB310に隣接して検出されたが、SR10075および隣接するSB310と重複しており、攪乱された部分が多く、明らかになった部分は少ない。住居跡の東・南側部分と主柱穴3本だけが確認された。柱穴に残った壁から推定すると、平面形は5m×5mほどの略楕円形を呈している。柱穴は3本が検出されており(SP10314・SP10324・SP10319)、西側の2本には複数の柱痕が確認できる。あるいは建て替えの痕跡か、あるいは副柱が設けられていたかもしれない。柱間は2.5mと2mと比較的小



第33図 SB331実測図

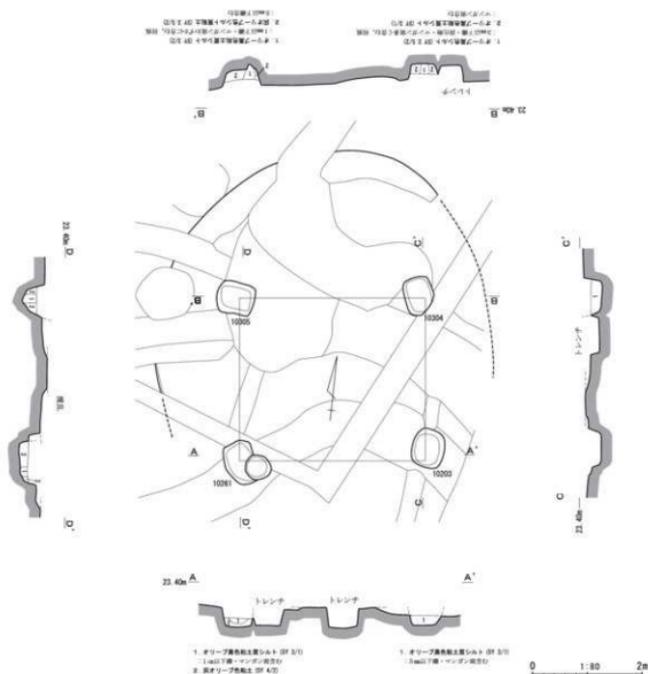
さく、平面形は略楕円形である。主柱穴の配置から推定すると、あるいは外側に周堤をもったA類の住居跡であったのかもしれないが、周溝の存在は明らかではない。

覆土から台付甕の口縁部が出土している（第91図35）。器壁の摩滅が激しいが、口唇部に刻み目を施している。覆土から壺、甕の小さな破片が出土している。

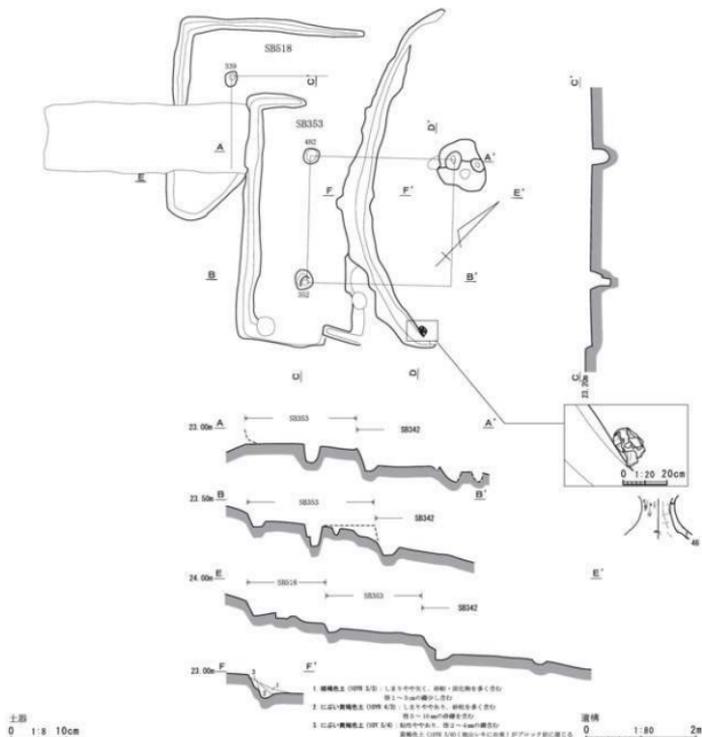
SB335（第34図）集落域の東端で検出されたもので、主柱穴と壁溝の一部が検出されたが、床面が明確にならなかったので、炉跡も明らかではない。主柱穴は4本（SP10305・10261・10203・10304）が認められ、柱間は東西3m、南北3mであるが、北側で認められた壁溝の一部と考え合わせると、平面形はおそらく長楕円形を呈するA類であろう。

住居跡内から第91図39の土器が出土している。おそらくこの住居跡に伴うものであろう。

SB342（第35図）A-1区の西端の丘陵斜面裾部で検出されたもので、ここは水田域の西側で隣接する衣原遺跡A区の東・北の斜面に当たる。住居跡は斜面の高い側で、壁溝と床面の一部が検出されただけであるが、壁溝の示すカーブから楕円形あるいは小判形の竪穴式住居であったと推定できる。壁溝の近くは床面が残っており、壺の大型破片が検出された（第91図46）。出土状態図を第35図に示してい



第34図 SB335 実測図



第35図 SB342実測図

る。壺は頸部から肩の部分の大型破片で頸部が比較的太く、肩が張った器形から、中期中葉に属するものであろう。衣原遺跡では10区とした丘陵の西側で検出された溝状遺構からやはり弥生中期中葉の壺が出土しており(『衣原遺跡』図158)、この段階の遺構がわずかながらでも存在していることが知られる。したがって、SB342もそれらと密接に関係をもつものであろう。中期中葉段階の住居跡は遠江以東では数は多くはない。

また、今回の寺家前遺跡でも少量ではあるが、中期前葉にさかのぼる土器が検出されており(第135図575・576)、細々ではあるが集落は続いていたものであろう。

SB342の西側に隣接して、方形の堅穴住居の一部と考えられる遺構が2軒分検出されている。遺物が出土していないので、時期を決定できないが、この調査区に隣接している衣原10区でも丘陵斜面に同じような住居跡の一部と思われる壁溝が見つかっており、SB1～SB7としている『衣原遺跡』図

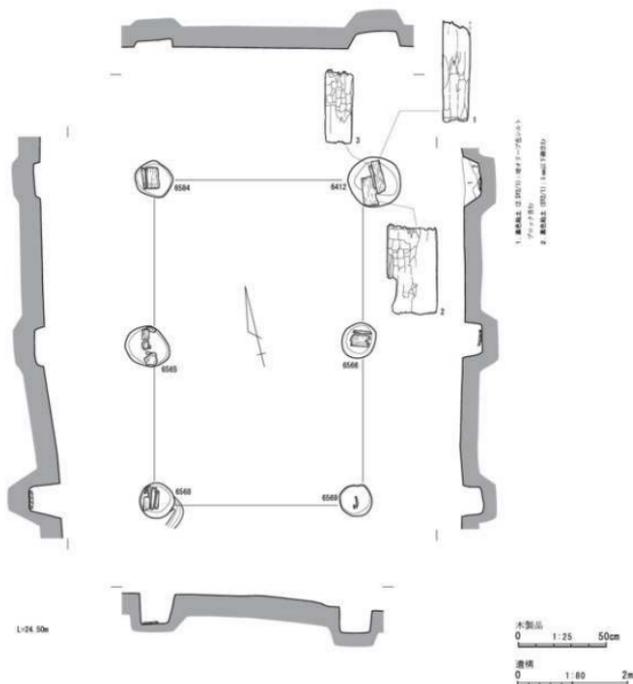
150)。これらの住居跡は出土した遺物から、奈良時代のもと考えられており、ここでも検出された住居跡を、それらに関わるものとしてSB353・SB518と呼んだ。報告書の他の部分で触れていないので、多少の説明をつける。

**SB353** (第35図) 西側の壁・壁溝と南北の壁の一部が検出されているが、おそらく方形の竪穴住居で、一辺4.4mであり、面積は19㎡前後であろう。住居跡の床面は西側では一部が検出できたが、SB342にかかっている部分ですでに失われていたらしい。主柱穴は3本が確認されている。竈の位置は不明である。

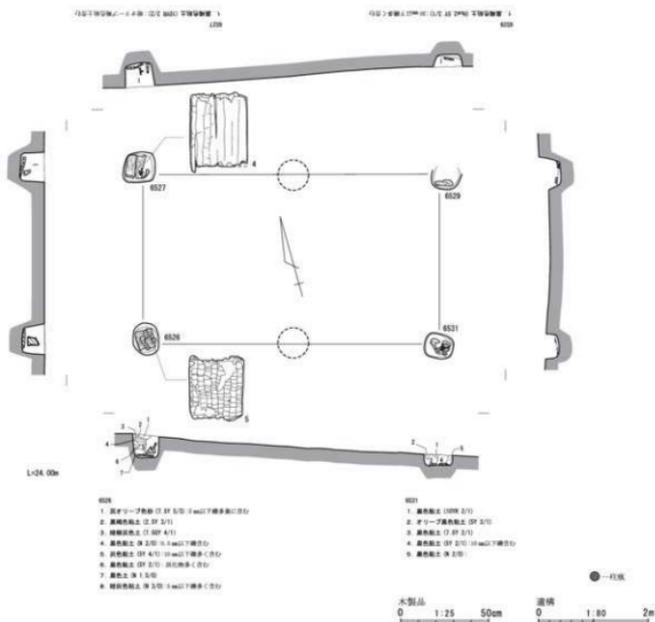
**SB518** (第35図) SB353の西側で、西および北側の壁溝が確認された。壁溝は3.2m前後が検出されている。主柱穴は西北隅が1本文確認されただけである。第35図に示した断面図では各住居跡の切り合い関係は示されていない。

## 2 掘立柱建物

**SH212** (第36図) 調査区の北端から検出されたもので1間×2間のほぼ南北棟の建物である。柱穴には6本とも礎板が残っていたし、また柱の抜き取り穴も観察できた部分がある。礎板はいずれもス



第36図 SH212実測図



第37図 SH213実測図

ギの板材が用いられている。そのほかに柱根の残欠が2箇所から検出されている。調査時には古墳時代のものと考えられていた。

桁行6mで柱間は3+3m、梁間は4.1mほどで、面積はおおよそ24.6㎡である。古墳時代の竪穴住居跡SB217と重複しており、竪穴住居跡の籠の袖が掘立建物の柱掘形(SP6568)を覆っていることから、掘立建物より竪穴住居跡が新しい例があると考えられてきたが、建物の梁間が1間であり、他の弥生時代の掘立建物と良く似た規模であること、さらにはスギの板材を礎板に用いている(寺家前遺跡では古墳時代の掘立建物で礎板を用いている例はない)ことなどから、今回、弥生時代の建物に含めることにした。

SH213(第37図) SH212に近接して検出された東西棟の建物で、4本の柱穴が検出されたが、おそらく1間×2間の建物であつたらう。桁行が1本ずつ検出されていない。桁行5.5m、梁間3.3mほどで、平面積は18㎡ほどの大きさである。各柱穴からは礎板が検出されており、いずれもスギ材であるが、建築材を再加工し転用したものが認められている。SP6527から出土した板材はおそらく扉材を転用したものであつたとされている。

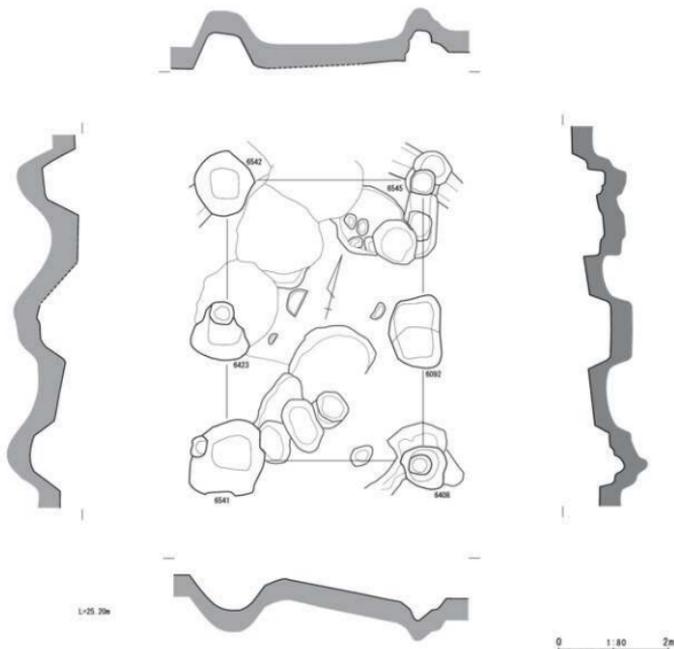
SH212とともに現地調査段階では古墳時代の掘立建物であろうとしていたが、今回弥生時代の掘立

柱建物と変更した。

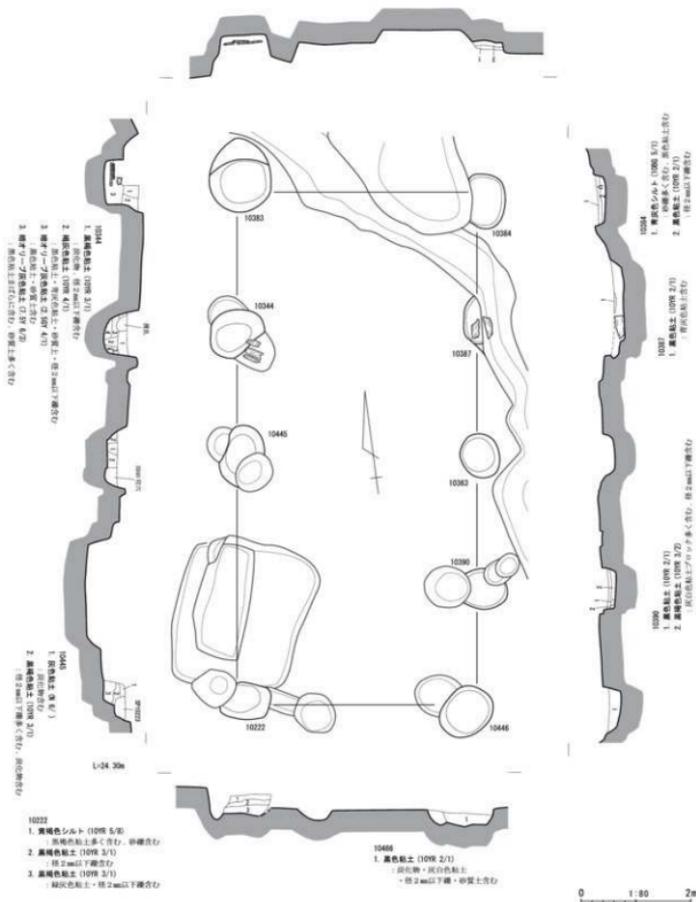
この東側にこの建物の柱列に良く似た方向をもった柱列が検出されているが、建物としてはまとまらなかった。

**SH218** (第38図) 調査区の北端で確認された1間×2間の掘立柱建物である。桁行方向は5.3m×梁間は3.5mほどで、平面積は17.5㎡の規模をもっている。柱間は桁行が2.3+2.9mで多少の差があるが、柱痕が中央の柱穴でしか検出されていないので、その数値は必ずしも確かではない。柱掘形は不正形であるが、その規模は大きく、径1～1.5mほどもある。竪穴住居跡の主柱穴の掘形よりも遙かに大きい。SB212およびSB219と切り合っており、掘立柱建物の柱掘形がSB212の壁溝およびSB219の周溝を切っており、掘立柱建物がいずれよりも新しいことが知られる。

**SH340** (第39図) 調査区の中央部分でSB314に重複して、3棟の掘立柱建物が確認された。SH340・SB341・SH342である。そのうち最も規模の大きなものがこの建物である。南北4間×東西1間で桁行9.7m、梁間4.4mで面積42.6㎡ほどの大きさをもっている。桁行きの柱間は北から2.7+2.4+2.4+2.2mと比較的良好揃っており、柱の通りも整っている。東北隅の柱SP10383には柱根と礎板が残っている。『寺家前遺跡II』で報告したように、柱根はイヌマキの芯持材であり、礎板はスギ材のネズミ返しを載



第38図 SH218実測図



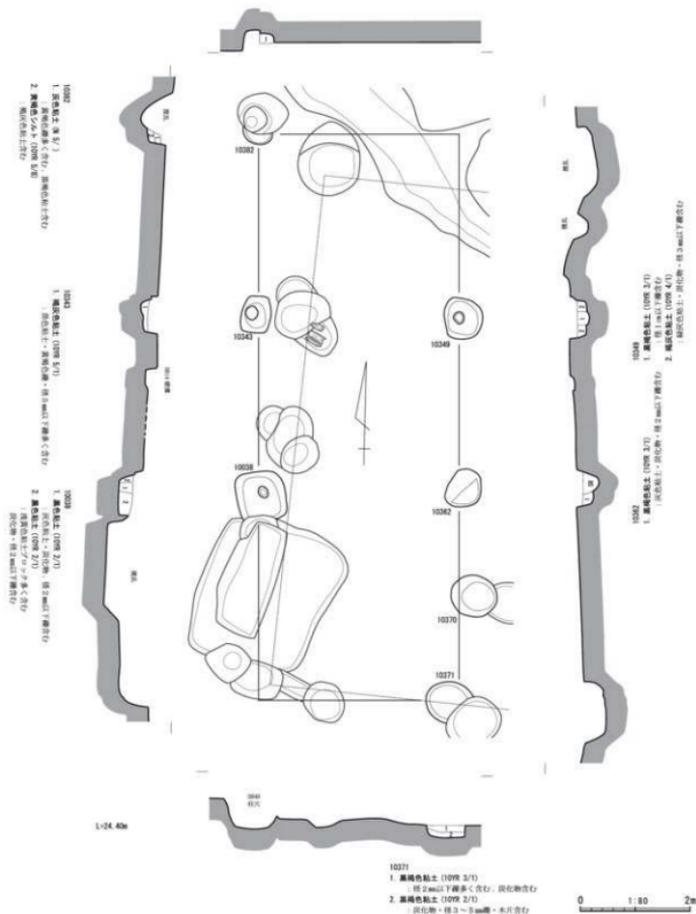
第 39 図 SH340 実測図

断して使っている。

SB314 と重複しているが、掘立柱建物の柱掘形が竪穴住居跡の壁を切っていることから掘立柱建物の方が新しいと考えている。同様のことは SH342 でも観察されており、この地点の掘立柱建物 3 棟はいづ

れもSB314より新しいと考えられている。

SH341 (第40図) SH340およびSH342と重複しているが、棟方向に多少の差があり、柱穴は重なっていない。南北2間×東西1間の建物と考えることもできるが、ここでは南北2間×東西1間の建物と考えた。桁行の柱間が比較的長く、多少のばらつきがある。東側の柱に柱痕が残っており、それによれば

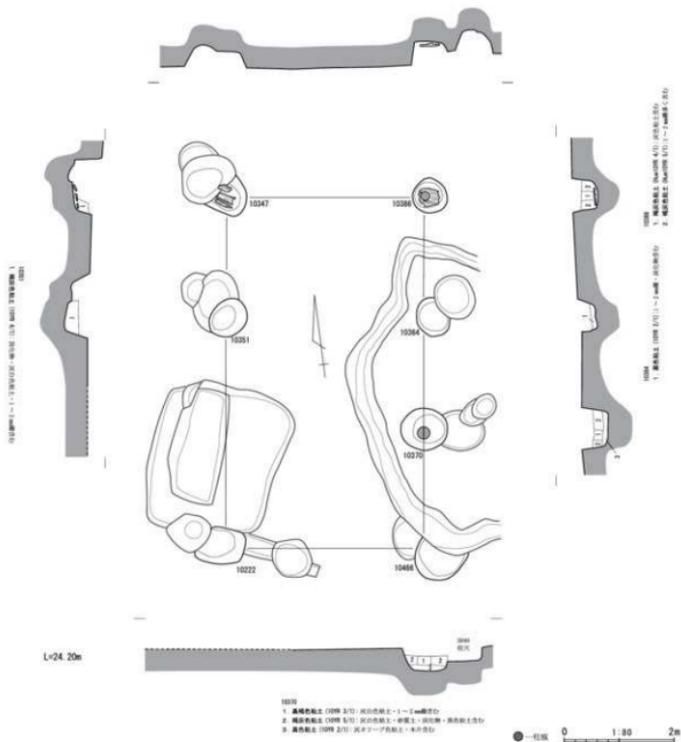


第40図 SH341実測図

桁行 10 m で柱間は 3.5 + 3.3 + 3.4 m を計る。梁間もやはり柱痕が残っているので、これで見ると 3.8 m である。したがって面積は 38 m<sup>2</sup>ほどである。

SH342 (第 41 図) SH340 の内側にほぼはまるような形で検出された建物で、棟方向も良く似ているが、1 間×3 間とやや規模が小さくなる。やはり南北棟であるが、北の側柱に礎板が残っている。北西隅の柱穴での切り合い (SP10347 と SP10344) からみると SH342 が SH340 の柱穴を切っていることがわかる。したがって SH342 は SH340 よりも新しいことが理解できる。桁行は 6.6 m で柱間は桁行 2.2 + 2.2 + 2.2 m、梁行は 3.6 m で、柱間も等しく、柱の通りも良く揃っている。面積は約 23.7 m<sup>2</sup>と、SH340 (約 42 m<sup>2</sup>) よりもだいぶ小さくはなるが、建物の位置からみて、これの建て替えによるものであろう。

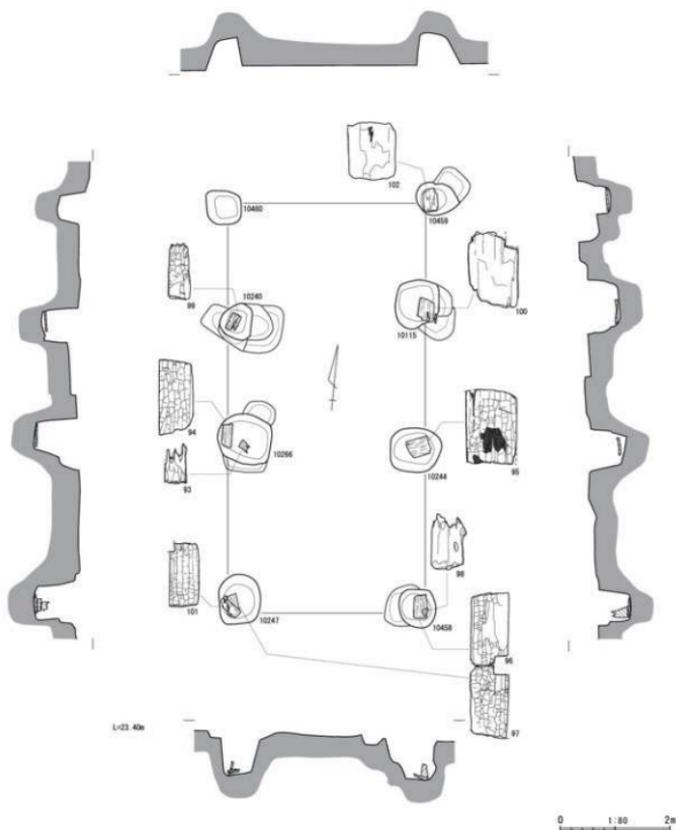
SH343 (第 42 図) SB316 に重複して建てられている 1 間×3 間の建物である。1 本を除いた他の柱穴からは杉の板材を用いた礎板が検出され、また、東南端の柱穴 (SP10458) にはクリ材の柱根が残っ



第 41 図 SH342 実測図

ていた。桁行の長さは7.5 m、梁間は3.5 mで建物面積は26.25 m<sup>2</sup>ほどの大きさであるが、柱間には多少のばらつきがあり、礎板の中央で計測して桁行は北側から1.7 + 2.5 + 2.8 mで南側の1間がやや長い。柱穴が重複していることから、同一の位置、同一の規模で2～3回の建て替えが行われたことが理解できる。

SB316と重複しているが、その前後関係は明確にはなっていない。



第42図 SH343 実測図

### 3 溝・流路・土坑

#### (1) 溝・流路

**SR6400** (第43図～第46図) SR6400はE-2区の自然流路である。調査区内では最も大きな流れであり、E-2区からE-3区にかけて全長、約87mを検出した。川幅は広いところで3m、狭いところでも0.4mほどある。上流部は比較的流路の底が深く、最も深いところでは1.54mある。流路の底は一定の角度で傾いている訳ではなく、上流部の所々に段差があり、深くなっているところがある。

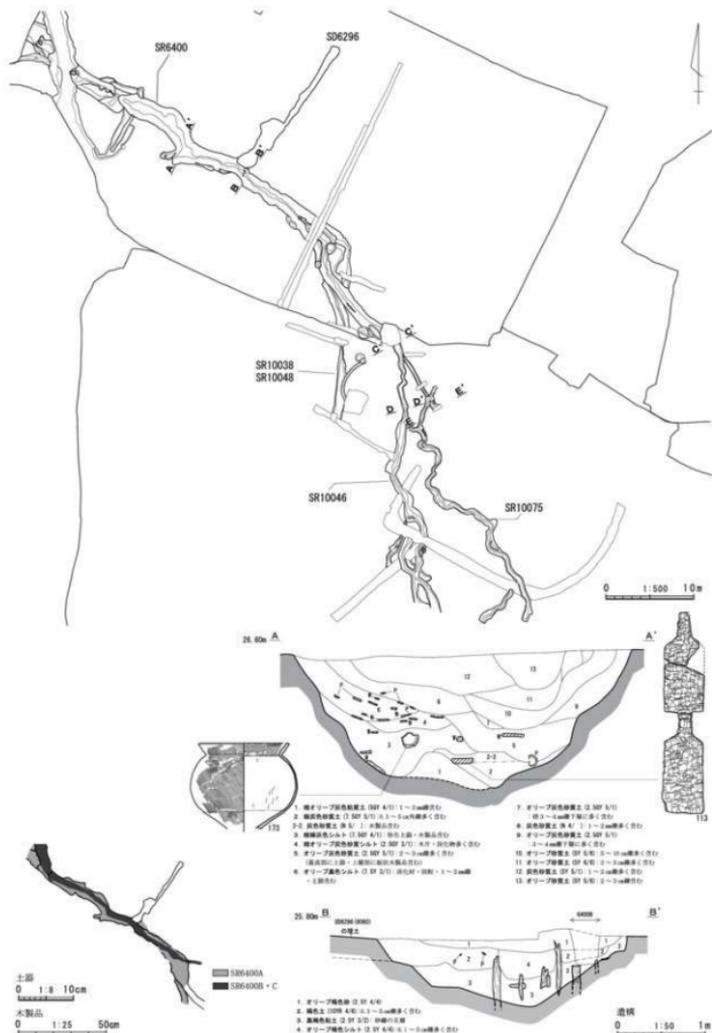
自然流路SR6400は背後の寺家山を水源として、北西から南東方向に流れ、堅穴住居や掘立柱建物の建ち並ぶ集落のほぼ中心部を通っている。細い谷筋に集まった雨水は、微高地内を蛇行する流路を通り、集落の北東から南西面に広がる水田へと供給されている。遺構名を自然流路としているが完全に自然のままの状態ではない。もともと自然の流路であったところ(SR6400 A)に集落が築かれて以降、流路内には幾度か人為的に手が加えられている。集落が形成されてから流路が次第に埋没していき、流れが滞ると改修している痕跡(SR6400 B・C)が土層断面で確認できる(第43図)。

堅穴住居が密集している付近では堰状の杭列がある(第43図、図版36-4)。杭列は流路に直交する方向に列をなし、6本ほど流路底に向かって打ち込まれただけの簡素なつくりである。土層断面観察の結果、SR6400が段階的に埋没した後、人為的に溝を掘り直しているようである。この付近はちょうど溝SD6296との合流地点にもあたる。溝SD6296は堅穴住居SB209・SB224・SB225の北西側にある人工的な溝である(第43図)。この溝は堅穴住居周辺の排水のために切り込まれた可能性があり、溝から本流であるSR6400側に流し込むようになっているのであろう。このちょうど合流する部分へ杭列を設けたと思われる。溝の堆積層は砂と粘土の互層であり、水の流れのある河道であったことを表している。この杭列を境にして流路底はやや浅くなり、下流域では遺構の肩から底までは27cmほどである。集落域の生活水として使うために、流路底を深くして不純物を沈殿させ、上水を利用していた可能性も考えられる。よって、自然流路SR6400の主な機能は、生活水を供給するところであり、稲作をしていた水田に水を供給する流れであったと言える。自然流路SR6400には上層のSR6139やE-3区のSR10045・SR10046・SR10048・SR10075もSR6400の支流として含まれる(第43図)。いずれの流路も微高地の縁辺部から低地側へ流れ込んでいる。下流域は川幅も狭く浅い。

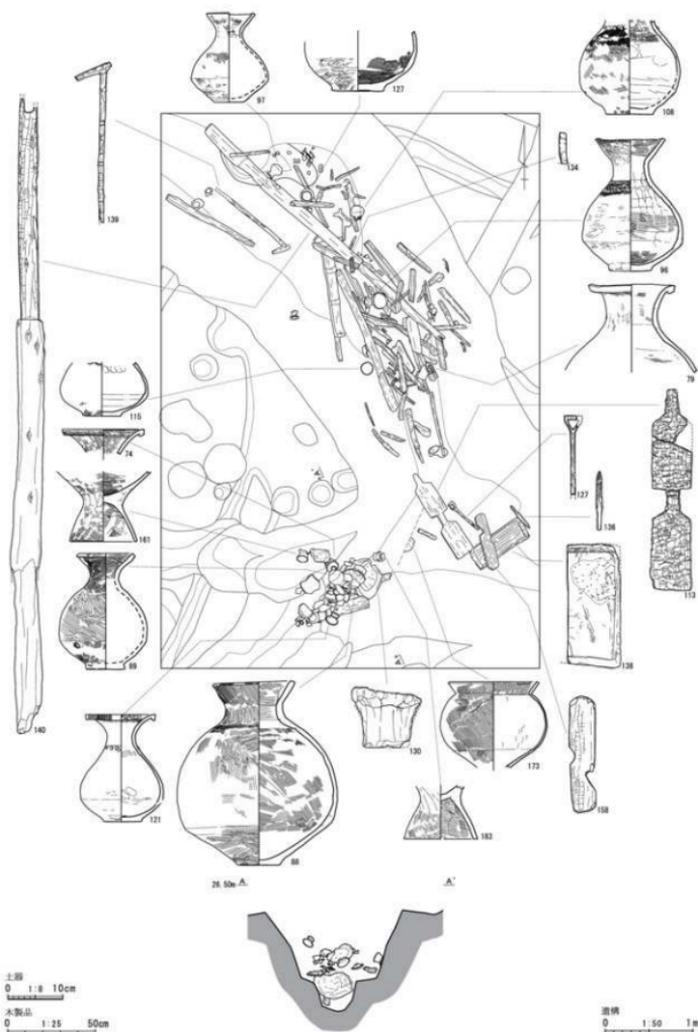
流路内から出土した土器群は弥生時代後期後半の一括資料である(第92～107図)。弥生土器の壺には胴部へ意図的に穿孔したものもある(第96図89)。覆土内出土の土器は集落の存続期間とほぼ一致しており、その他の時期の土器をほとんど含んでいない。木製品は非常に良好な状態で残っており、農耕土木具を始めとして日常的な道具類などが数多く出土している(『寺家前II』第21～24図)。農耕土木具は鋸類が複数見つかった。曲柄平鋸や直柄又鋸、曲柄鋸の未製品、掃い鎌、鉤の柄、横槌、臼などが出土した。道具類は容器、工具柄、紡織具、建築部材のほか、舟形や剣形などの祭祀具もある。覆土内より出土した掘立柱建物の柱(『寺家前II』第23図140)の下から梯子が見つかった(第44図)。現地調査の段階で原形を留めないほど崩壊し、取上げが不可能な状態であった。そのため出土状況平面図のみの記録保存となった。そのほか覆土からは完形の銅剣が出土している(『寺家前II』第129図857)。自然遺物では種子が数点出土している(『寺家前II』図版79)。

SR6400で出土した遺物は、ごく一般的な生活用具が主体である。祭祀色の強いものは、さほど多くはないが、胴部に穿孔した壺や舟形・剣形木製品、完形の銅剣など特徴的な出土品がある。

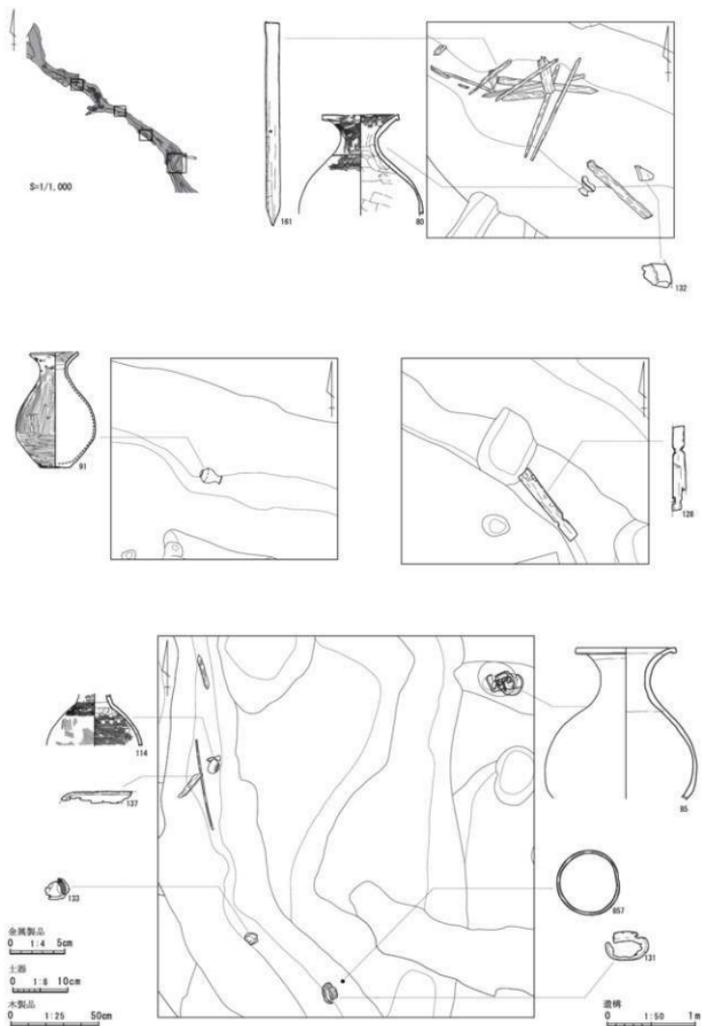
**SR10050・10204** (第47図) SR6400の南側にある流路SR10050(SR10065を含む)とSR10204は同じ位置に存在する。SR10204はSR10050よりも古い時期に流れていた河道であろう。河道の流れは129A-8グリッドから129C-10グリッドまで確認されている。自然流路SR6400とほぼ平行しており、背後にある寺家山裾の細い谷から出てくる雨水が流れていたであろう。調査区内で確認できる延長は



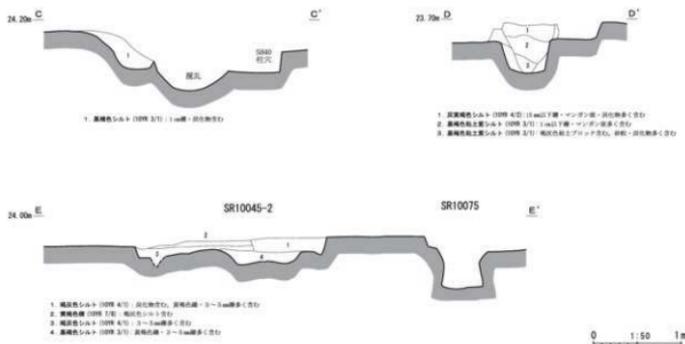
第43図 SR6400実測図1



第44圖 SR6400 実測図2



第45図 SR6400実測図3



第46図 SR6400実測図4

30m、河道幅は2.5～3mと広い。覆土からは弥生土器の壺(第109図221)が出土している。河道の年代は弥生時代後期後半である。一方の自然流路SR10050も自然流路SR6400とほぼ同じような方向の流れをもつ。源流は細谷からと思われるが、SR6400とは異なる流路であろう。もともと自然流路SR10204の流れがあった場所だが、SR10050は人為的に掘り直された河道の可能性がある(図版47、土層断面参照)。調査区内で確認された総延長は約50m、河道の幅は0.6～2.5m、下流域は河幅が狭くなり蛇行している。河口は微高地の縁辺部で消滅する。山裾の狭い微高地は必ずしも安定した土地ではなかったようで、SR6400が埋没していくと住居域のなかにも支流が入り込んで来ている様子が伺える。こうした背後の丘陵から流れ出てくる雨水を切り回すように、自然流路の一部を掘削して新たな水の流れ(SR10050)を人為的に作り出しているのであろう。覆土より出土した土器は弥生土器から古式土器器が含まれている(第109図216～219)。土器の年代はSR10204よりもやや新しい土器が混じっていることから、河道の時期は弥生時代後期後半～古墳時代初頭と想定される。なお、図版37-2の写真中に見える溝底の塩化ビニル管は調査時に水抜きのため入れたものである。

SR607(第48図) A-1区西面の丘陵裾に沿って自然流路SR607を検出した。この付近は丘陵地と低地の境界にあたり、雨水等の水道としてできた窪みと思われ、人為的に掘削された溝というよりは自然にできた流路であろう。現地調査の所見では、E-3区の低地で検出したSR10470・10471から150E・C-1グリッド内のSK592の窪地を通してSR607へ繋がる同じ流路という可能性が指摘されている。SR10470・10471は微高地の縁辺部に沿って南流しており、SK592も窪地になっていることから、自然流路SR607と続いていた流路ととらえることもできる。流路内には150E-3グリッドで杭と横木『寺家前Ⅱ』第20図111・112)を検出したが、堰というには、やや貧弱な造りである。しかしこうした構造物により水田へ導水されていたことも考えられる。150C-2グリッド内の西壁際から山裾に沿って南下し、170B-3グリッド付近で地形が下がり、流路の肩は不明瞭になっている。川幅の形状は10cmから38cmの幅をもち、深さは17cmほどと極く浅い流路である。覆土内には一部に山茶碗の小破片、弥生土器などを含んでいるが、9割以上は5世紀代の土器器である。須恵器をもたないことから、流路の年代はそれ以前と考えてもよい。その他に流路底より石匙『寺家前Ⅱ』第117図767)や小型の扁平片刃石斧『寺家前Ⅱ』第118図774・775)などが出土している。当地の開田当初から5世紀代まで長期間

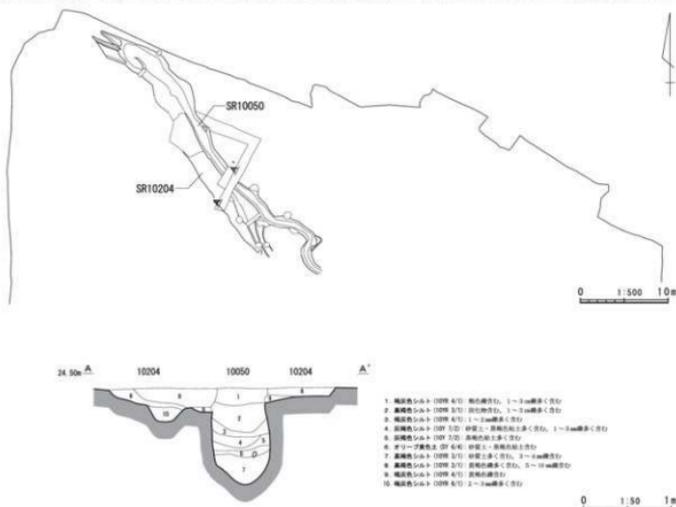
存続していた自然流路とも考えられる。

**SR608** (第48図) SR608は自然流路SR607の東側で検出した流路である。遺構の形状は150E-3グリッド以南では右岸側のみ、左岸側は170A-4グリッド以南で確認できる程度で不明瞭である。流路とはいえず、かなり浅い。SR607とほぼ平行した位置にあることから、流れがある時期に東側に変っていた可能性がある。覆土からは弥生土器が出土している。

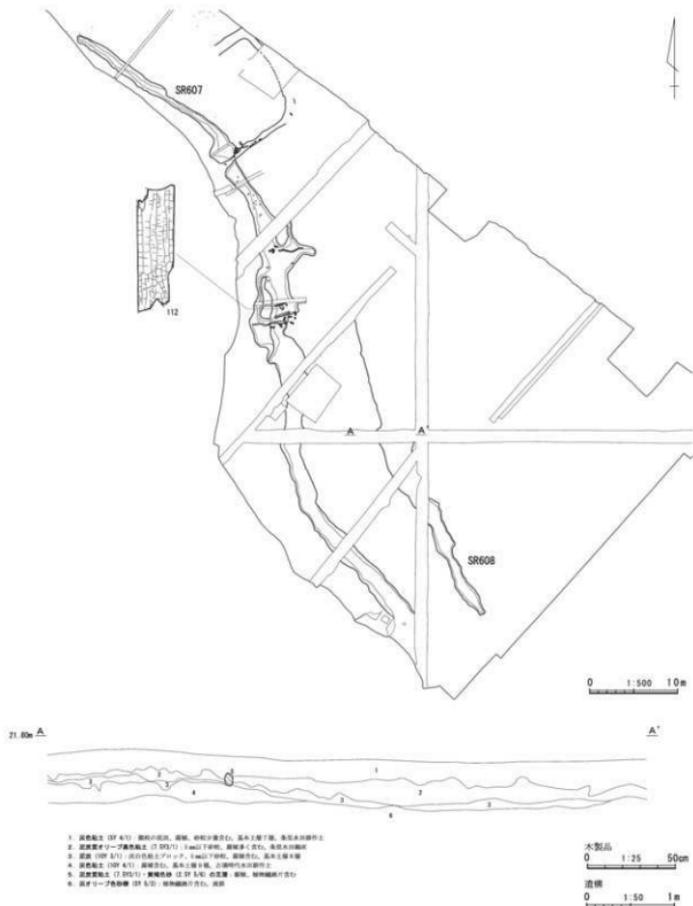
**SR10470・10471** (第49図) SR10470は微高地の南縁辺に沿った低地で検出した自然流路である(図版38)。E-3区北より南に蛇行しながら流れている。微高地からは8mほど南方向へ離れた位置にある。遺構群が見つかった標高23.8m前後から低地へ緩やかに傾斜し、比高差1.8~2m下に流路の縁がある。SR10470はE-3区内の総延長が約70m、流路幅は1.7~2.3mほどあり、深さは0.6~0.7mである。上流側である東端は調査区外のため、流路の源流部分はわかっていないが、丘陵裾の細い谷を通っているであろう。下流側は微高地の縁辺に沿ってA-2区のSK592からSR607へと繋がっていると思われる。

SR10470の覆土内から出土した遺物は極めて少ない。通常、集落内の流路や溝には廃棄された土器や木製品が多く出土するが、この流路の覆土からは土器小片と木製列物(『寺家前II』第19図109)や杭のみである。SR10471も同様で土器小片と直柄平鉢(同図108)だけである。覆土内に遺物等が少ないのは、水田への導水路として日常的に管理されていたことが考えられる。遺構内から出土した土器が少ないため年代の決め手に欠くが、弥生時代後期後半~古墳時代初頭と考えている。

SR10470は北側(130F-3グリッド)の下層でSR10471へ分岐する。この分岐地点にはSR10470側に堰が設けられている。SR10470の上流側からみると、左(南東)方向へ水を流すようSR10471に分岐した下流側に矢板や杭が打ち込まれている。杭列の幅は下層の川幅とほぼ同じ0.8mほどである。杭は樹皮が付いた丸木を使っている。E-3区東側の水田域に水を供給するためにSR10470の水流を堰き止めて



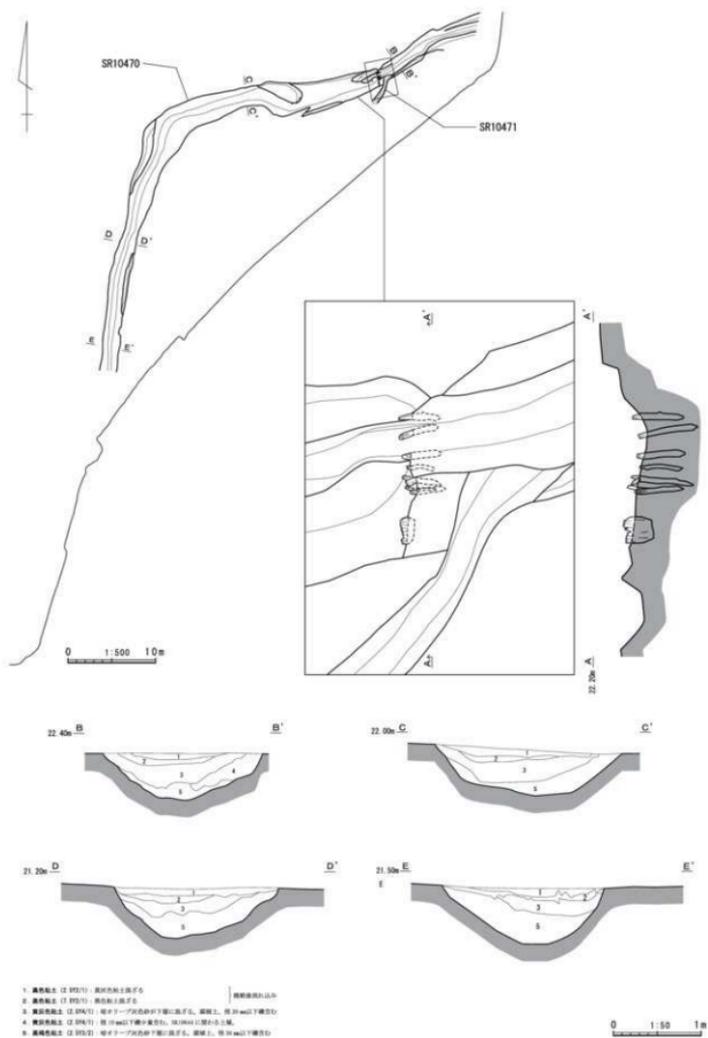
第47図 SR10204・SR10050



第48図 SR607・SR608 実測図

水の流れを変える仕組みであろう。延長は0.8mほどで、川幅は0.3mほどと細く、A-2区方向へ流れている。SR10471の年代もSR10470と同時期と考えている。

こうした人工的に堰が築かれ人々によって管理されていた自然流路SR10470は丘陵裾の谷を經由してきた雨水を集水し、南側の低地に広がる水田へ水を供給する導水路としての機能を持っていたといえ



第49図 SR10470・SR10471 実測図

る。

**SR10472** (第3図) E-3区の中央西壁付近の129F-8・9グリッドで検出した流路である。微高地から低地へ東西方向の流れがある。現地での記録は概略図のみで遺構の正確な計測値や詳細はわからない。出土品は古式土師器のS字甕片が覆土内で見つかっている(第134図572)。土器からみて遺構の年代は古墳時代初頭であろう。全体図をみると畔SK10466の線上に繋がる方へ向かっており、これと関連する遺構の可能性もある。微高地に見られた集落遺構群はSR10050・10204より南はほとんどみられなくなり、SR10472以南ではまったくなくなる。このことからSR10472が集落域の最南端の位置ととらえられる。SR10472と同じ延長線上には畔SK10466やB区北で検出した畔SK5もある。畔SK10466を含む主要な東西方向の大畔の一連となると、自然の流路であったというよりも人工的に作られた溝であることも考えられる。

**SR6345・6503** E-2区の110J-1・2、130A-1・2グリッドにかけて検出した自然流路の痕跡である(第3図全体図のみ)。堅穴住居群のなかの堅穴住居SB218の北側を東西方向に蛇行して流れている。SR6345が上流、SR6503が下流域を示す。さらに上流部は自然流路SR6400に近い場所まで遡ることから、SR6400の支流のひとつと考えられる。覆土からは弥生土器の甕や甕、高坏などが出土している(第109図212～214)。

**SR10341** (SR10429) SR10341はE-3区の130C-1・2グリッド内、堅穴住居SB309とSB310との間に位置する自然流路である(第3図)。現地調査では堅穴住居の周溝との見方もあったが、周辺状況から自然の流路とした。この流路も自然流路SR6400と方向がよく似ていることから同じ流れのひとつ(支流)と考えられる。覆土より弥生土器の甕(第126図436)が出土している。

**SD6296・6060** 溝SD6296はE-2区の堅穴住居SB209・SB224・SB225の北西側にある。SD6060も含み、総延長は17mほどある。比較的浅い溝で、覆土からは弥生土器の甕や鉢などが出土している(第108図207～209)。調査時の所見は、地形が傾斜する方向とは直交する流れであることと、ほぼ直線的事であることから、地割りなどの人工的な溝ではないかとしている。溝SD6296の南西端はSR6400に繋がっており、溝からSR6400側に合流している。この溝は堅穴住居周辺の排水溝として切り込まれた可能性も考えられる。遺構の年代もSR6400と同時期であろう。

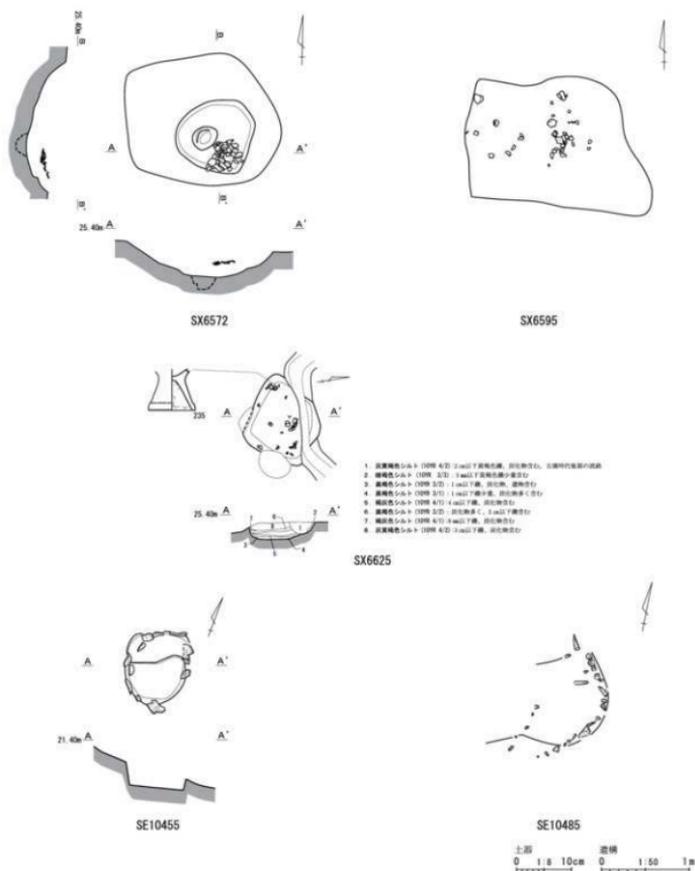
## (2) 土坑

E-2区では土坑状の遺構が4箇所見つかっている。

**SF6475** SF6475はE-2区109J-10グリッドで検出した土坑状の遺構である。詳細な記録はなく、図面は写真測量図のみである。遺構はSR6400の支流に切られている。覆土内より弥生土器の甕が出土している(第111図232)。

**SF6572** (第50図) 土坑SF6572はE-2区の南端で検出した不正形な土坑である。堅穴住居群のなかにあり、堅穴住居SB313の北西側、堅穴住居SB215の北西側に位置する。掘形上部は170cmほどの不定形で深さは30cmほどある。覆土上層より弥生時代後期の甕破片が固まって出土した(第111図233)。覆土には炭化物も多く含まれていた。出土遺物から弥生時代後期以降であることは間違いない。周辺の土坑も遺物の出土状態からみて後世のものではない。

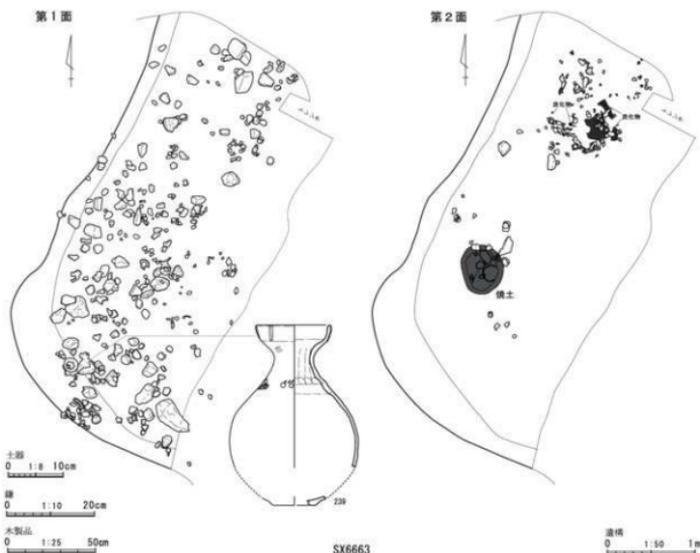
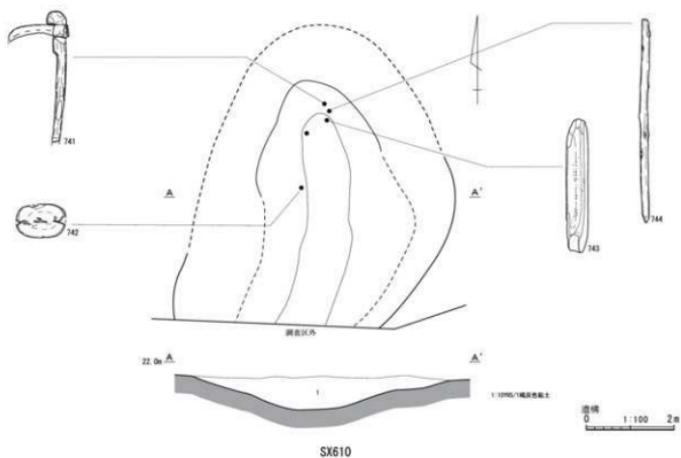
**SF6625** (第50図) 土坑SF6625は堅穴住居SB215の北西側で検出された。平面は正方形に近い形状で、一辺が最大で170cmほどある。北側の一部が自然流路SR6400の支流(SR6401)に切られている。土層断面観察では炭化物を多く含む層が2層確認されている(第50図4・6層)。また覆土には弥生土器が含まれていた。土器は甕口縁部と台付甕(第111図234・235)が出土している。出土土器の年代から弥生時代後期の遺構である。南東側に隣接する堅穴住居SB215では床面から炭化物が固まっていた範囲が出ている。SF6625はこれらの焼けた木材を片付けた廃棄坑とも考えられる。



第 50 図 SX6572・SX6595・SX6625・SE10455・SE10485 実測図

**SX6595** (第 50 図) SX6595 は E-2 区北半部で検出した浅い不正形な遺構である。西面は後世の掘削で切られている。覆土内から弥生土器が出土している。北側には掘立柱建物 SH212・SH213、西側には不明遺構 SX6663 がある。同時期に関連する遺構と思われる。

**SX6663** (第 51 図) SX6663 は E-2 区北側の 110F-1・110G-1 グリッド内、掘立柱建物 SH212・SH213 の南側で検出した浅い不正形な遺構である。遺構概略図と手描きの遺構平面図のみがあり、写真測量図



第51圖 SX610・SX6663実測図

面や遺構断面図等はない。また土器の取り上げ仮番号が台帳上には付いているが、取り上げ仮番号を記録した図面がない。写真は出土状況（部分）と掘削作業状況写真がある。遺構は南西角が隅丸方形状になっているが、その他の面は自然流路や後世の掘削により範囲が不明確になっている。覆土上層では拳大～人頭大礫のほかにも弥生時代後期の土器が散乱した状態で出土した。下層では西壁に近いところで焼土の範囲が確認されている。その北側には炭化物の範囲も出ている。弥生土器は壺（単純口縁や複合口縁、折り返し口縁など）・台付き甕など、弥生時代後期の土器が出土していることから、遺構の年代もこの時期である。遺構の性格は竪穴住居か廃棄土坑などが考えられる。

E-3区内の土坑は2箇所ある。

**SF10124・SF10126** いずれも焼土坑である。不定形で炭化物を多く含む。出土遺物はない。

SF10198 E-3区で検出したSF10198は竪穴住居SB321やSB331、SB319に囲まれた位置にある。不整形で底面も一定ではない。詳細な記録はない。覆土より弥生土器の壺や被熱した台石『寺家前Ⅱ』第126図840）などが出土している。土坑の年代は弥生時代後期である。

### (3) その他（井戸）

**SE10455**（第50図）井戸状遺構SE10455はE-3区の東向き縁辺部で検出した。SE10455は縦板が打ち込まれた楕円形の土坑である。長軸は85cm、短軸方向は70cmの楕円形で、深さは20～35cmほどの掘形をもつ。掘形の壁沿いに12枚の縦板を打ち込んでいるが、板はいずれも短く、打ち込む間隔も疎らで隙間がある。縦板の一枚は下層の粘土層にまで刺さっている状態であった。このうち何らかの製品から再加工したと見られる縦板を図化した『寺家前Ⅱ』第19図110）。土器も2片出土しているが小片のため年代が不明である。この遺構のある位置は集落遺構の範囲からは大きく外れた低地にあり、周囲に他の遺構は見つかっていない。また集落遺構のある範囲からは十数メートル南側に外れており低地に近い。調査時の所見では水溜め遺構か、井戸などの用途を考えている。あるいは泉のような役割をもっていたものであろうか。弥生時代後期の遺構面で調査しているが、古墳時代後期の遺構の可能性もある。

**SE10485**（第50図）井戸状遺構SE10485はE-3区1291-8と1291-9グリッドの境目で検出した杭列である（図版54）。遺構の位置は畔SK10463の西端から2mほど南にある。杭列は当初、数本検出されていた段階では畔に伴う杭と考えていたが、周囲を掘削した結果、杭列は円形に打ち込まれていることがわかった。また西側の丘陵上では流路も検出したことから、この遺構は丘陵から低地の水田へ水を引くための井戸もしくは、堰状の遺構と考えられる。年代は出土土器がなく明確に判断できないが弥生時代後期から古墳時代初頭であろう。

## 4 水田跡（水田区画・畔・水路）

集落の周辺に広がる低地帯には水田が形成されている。開田された時期は、集落と同様の弥生時代後期後半である。その後、集落が継続する古墳時代初頭まで水田として利用されている。集落が一度途絶えたあと、古墳時代後期に再び一部を水田として使っていたと考えられる。以下、調査区域の北側から順に、検出された畔とそれに関連する遺構を個別に解説していく。

**SX423**（第55～59図）E-4区南半部からE-1区東側の一部の範囲に板材を中心とした木製品が集中して出土した範囲をSX423としている。木製品はE-4区の南半部、東西に50m、南北40mの範囲に広がっており、9～10層までの包含層より出土している。特にE-1区との境に近い110C-6～7グリッドに木製品が集中している。この範囲から出土した木製品は197点あり、このうち95点を図化した『寺家前Ⅱ』第65～85図）。木製品の種類は鼠返しや柱、梯子等の建築部材を中心とした板材のほか、背負板、槽、片口等の日常的な生活用具もある。9～10層中にも弥生時代後期の土器小片を多く含んでいる。木製品は年代の決め手となる製品が少ないものの、四穴下駄や後述する大畔SK422周辺から出土

した製品と同じ種類であることから、弥生時代後期後半～古墳時代初期に属するものであろう。木製品集中範囲 SX423 について、現地調査では杭列畦畔から崩れて流されたものではないかという所見があった。しかし第 55 図に示したように、9・10 層より出土した木製品は標高 21.8 m 以下の範囲にほぼ収まっていることがわかる。この範囲は集落が形成された当時は最も土地が低いところであり、周りを微高地に囲まれているために水捌げが悪く、常に湿地であった様子が土層断面でもわかる（第 55 図 B-B'）。そうした場所に畔（SK422）を築くことによって水回りを管理していたと思われる。つまり畔が崩壊して横木などが流れ出したという状況ではなく、もともと集落に近い場所に保管または貯木されていた木材が雨水等により、微高地の縁辺から低い部分へ流れ溜まった状況ではないかと推測する。E-1 区の大畔 SK422 周辺で出土した多量の木製品もこれと同じ状況と考えられる。

SK5002（第 55 図） 畔 SK5002 は E-4 区 110B-6 グリッドに位置する。木製品集中範囲 SX423 の中にある。『寺家前Ⅱ』に掲載した木製品（第 67 図 394～396）が横一列に並んだ状態で出土している。木製品は東西方向で横木状に並んでいるが、杭や矢板を伴っておらず、周辺は木製品が散在している状況である。ちょうど標高 21.8 m の延長線上にあたることから、畔とするよりも SX423 の一部と考えたほうが良いだろう。

SK422（第 60～67 図） SK422 は集落域の北東側に広がる水田の南端境界に構築された東西方向の大畔である。畔は E-2 区で西端が検出されており、そこから北東方向へ延び、E-1 区の畔 SK422 へと繋がるものが解っている。畔は E-1 区の中で南西方向に屈曲して、さらに東側へと延び、E-5 区①の畔 SK5011 へと繋がっている（第 52 図）。

検出した畔の総延長は 70 m 以上になる。畔は高さ 35～40 cm ほどの高まりをもち、畔頂部の標高値は 21.65 m である。杭列は畔の北側と南側に 2 条あり、北側の杭はわずかに南へ傾き、南側の杭列は北側に傾いている。土層断面の観察により畔は何度か改修を行っていることがわかっている。また後述する SX424 は畔 SK422 の一部である。杭列は北側が疎らなのと比べて、屈曲した付近の南側杭列の密度は非常に高く、杭と杭との間に隙間が無いほどである。ちょうどこの辺りは標高も低く、杭列が一番沈み込んでいるところでもある。沈み込んだ畔を補強するために杭を多く打ち込み、礎石を敷き詰めて補強している（SX424）のではないだろうか。

横木は 2 条の杭列の間に埋め込まれている。横木が最も集中している場所は畔が屈曲している周辺と SX424 の位置するところである。畔のなかに敷き込まれた横木は、畔の周りで出土した木製品よりも細かい（第 65～67 図）。これは畔内の横木が貯木された建築部材よりも更に細かく割って密に埋め込まれたことを示している。この位置はもともと標高 21.3 m と最も低いところにあたる。言い換えれば、最も低いところに杭を密に打ち込み、横木を大量に投入して畔を強固にしているとも言える。

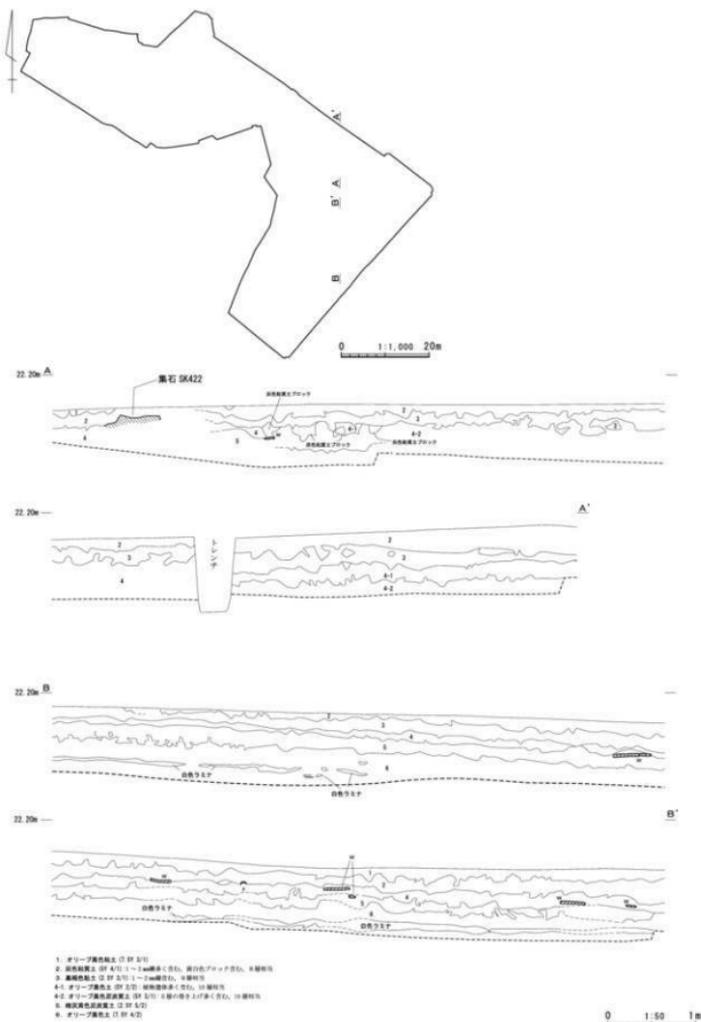
木製品集中範囲 SX423 の項でも解説したように、畔 SK422 の位置するところは標高 21.3 m の低い湿地帯であり、当初より土地条件の悪いところであったと思われる。水捌げが悪い場所ではあるが、水田をつくるために大畔を築き、水の流れ等を管理していたのであろう。SK422 のような弥生時代後期の畔は必ずしも直線ではなく、整然とした方形区画でもない。水回りを効率よくするために、地形の微妙な起伏に合わせて畔を構築している。E-1 区の東側で屈曲しているのは地形の起伏に沿った結果なのであろう。畔 SK422 を南端として、そこから E-4 区の北端で検出した 2 条の溝までが水田範囲であったと考えられる。小畔は E-2 区や E-4 区の一部で検出した。この小畔の方向も SK422 と併行する方向か、もしくはそれに直交する方向の畔である。小畔の区画は南北に細長い形をしている。水田域は集落の南側にも広がっている。

畔 SK422 より出土した土器は数少ないが第 113 図に示した。杭や横木は『寺家前Ⅱ』第 25～64 図に掲載している。同書では SK422 周辺の包含層より出土した木製品も SK422 のなかに含めている。なお、



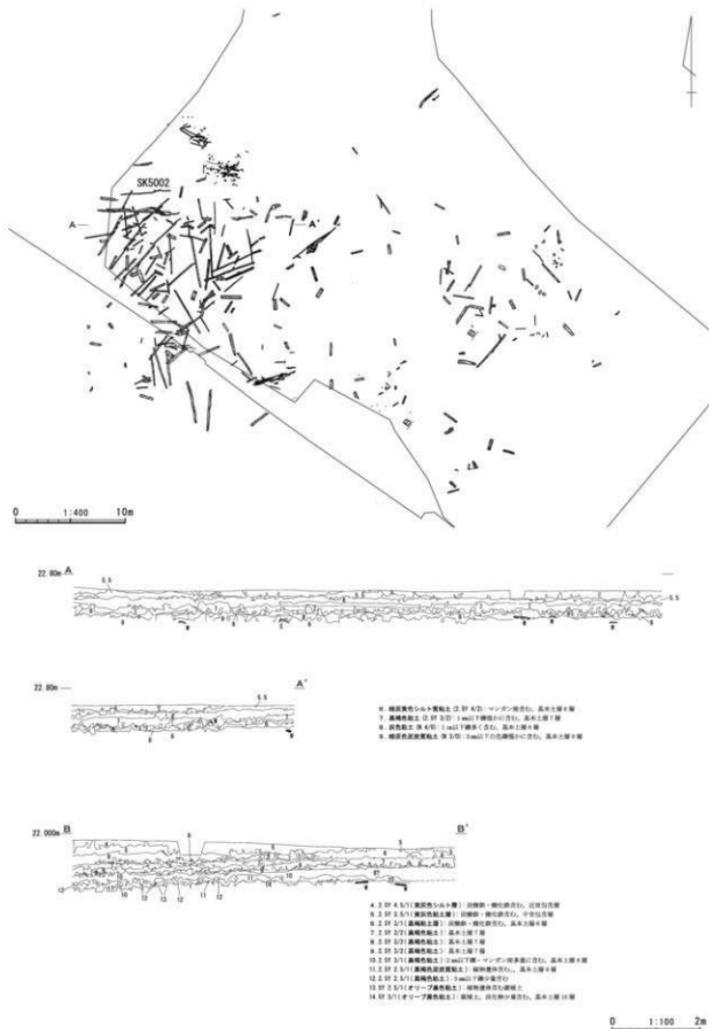
第52図 水田遺構配置図

第60～67図の畔の杭や矢板に付した番号は『寺家前Ⅱ』に掲載したときの通し番号である。杭の木材についてはSK422関連で出土した杭など688点中、330点の樹種同定をした結果、約19種の木材が確認された（『寺家前Ⅲ』第5章）。建築部材などから転用された杭や横木の大半はスギ材である。一方、自然の枝木も杭に使われており、その種類はコジイ、スダジイ、クリ、タイミンチバナ、ウバメガシ、ツツジ属、クスノキ科、ヤマボウシ、アカガシ亜属、ミズキ、クヌギ節、サカキ、ヌルデ、マメガキ、イヌマキ属、モミ属、キハダ、イチイガシなどがある。この樹種同定結果から、集落周辺の丘陵地で入手できる手近な雑木を杭に使っていた様相がうかがえる。この他に種子が1点出土している。出土土器の年代幅や木製品は集落域で見つかったものと同時期であることから、畔の存続した年代は弥生時代後期～古墳時代初頭であろう。

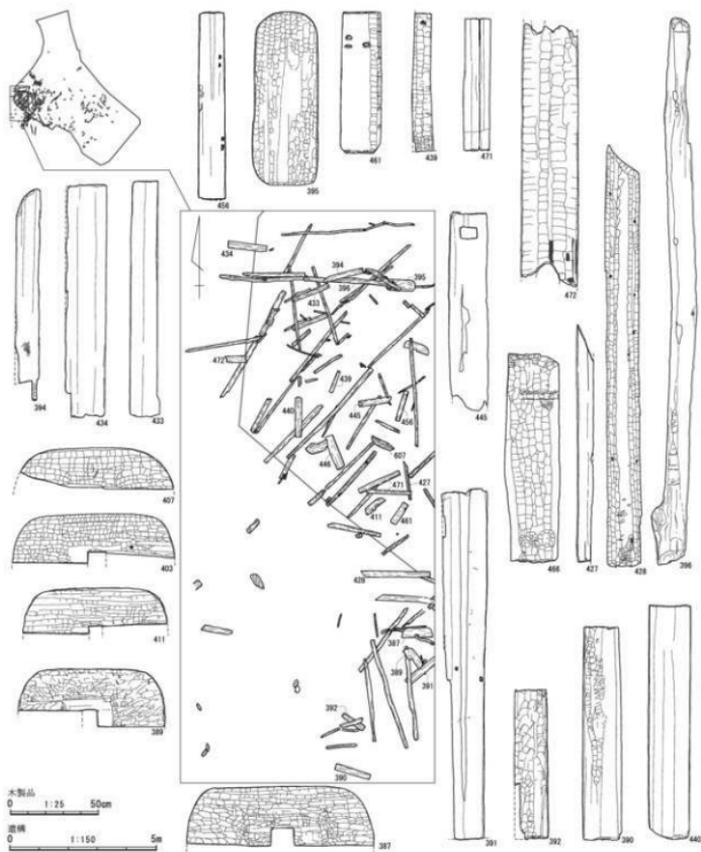


第53図 水田域土層堆積状況図1



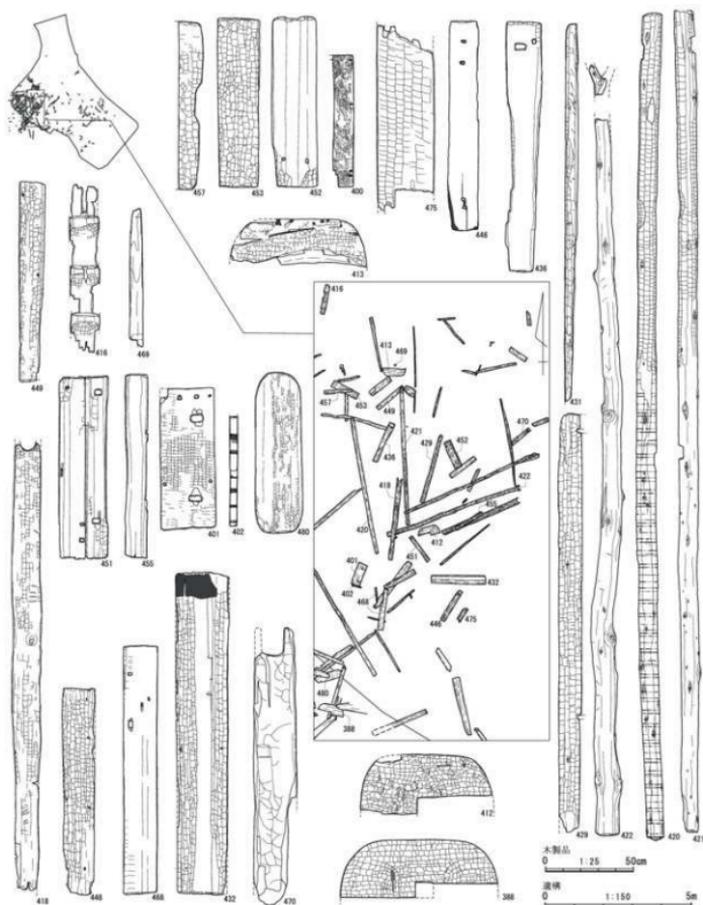


第55図 SK423実測図1



第56図 SX423実測図2

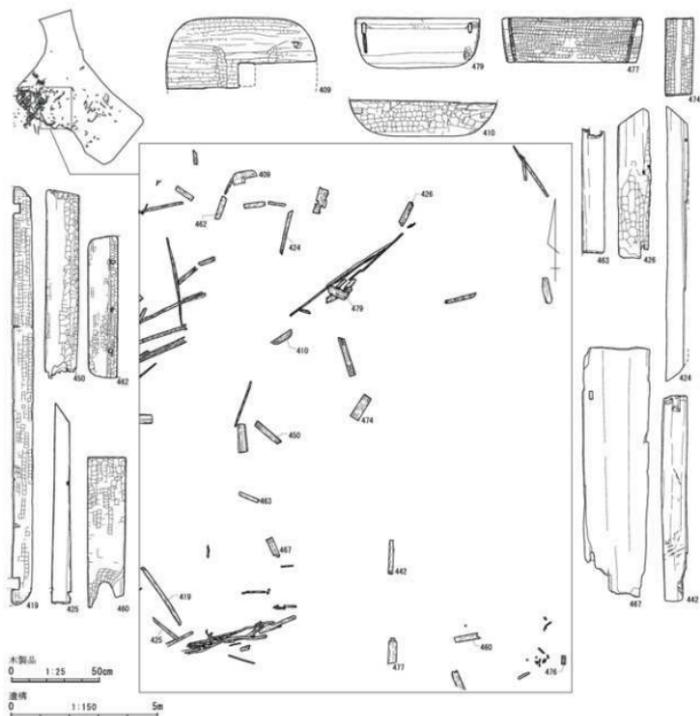
**SX424** (第68図) SX424はE-1区の南半部で検出した畔SK422のほぼ中央部に位置する集石遺構である。集石は畔SK422の南端に打たれた杭列脇に付くような位置にある。礫の範囲は東西の幅が約2m、奥行きは1m程で、一部畔の上にあるものの、畔脇のところに不定形に密集している(図版43)。礫は丸味を帯びた河原石ではなく、割れ口がはっきり残る風化した角礫である。遺構の周囲には覆土中にこのような角礫はなく、離れたところから持ち込まれた可能性が高い。礫の大きさは径3~18cmのものが多く、なかには20cmを超える人頭大の礫も数点ある。採石場所は定かではないが、背後の寺家山の



第57図 SX423実測図3

地山礫か、衣原古墳群のある西側の低丘陵上の地山礫（註3）などが考えられる。

礫の下には木製品が折り重なるように出土している。当初、現地調査では横木の上に礫が乗っていると見ているが、集石SX424が存在する場所はこのE-1区のなかで最も標高値が低い部分でもあり、木製品は人為的に敷かれたというよりも、低い場所に吹き溜まった様相である（第68図、図版39）。さ

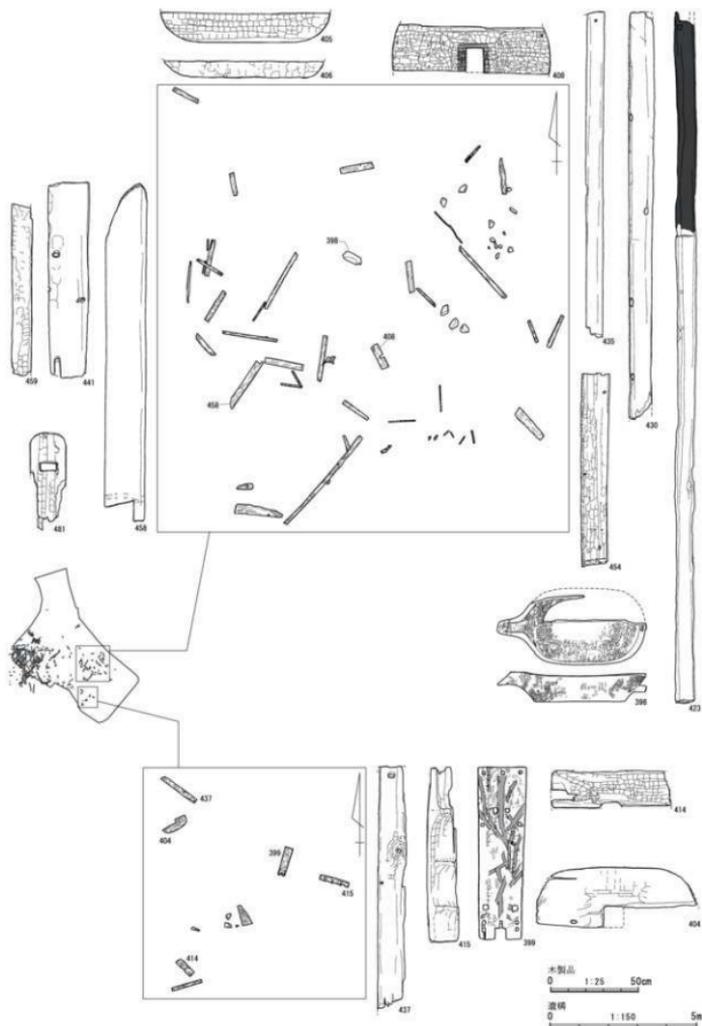


第58図 SX423 実測図4

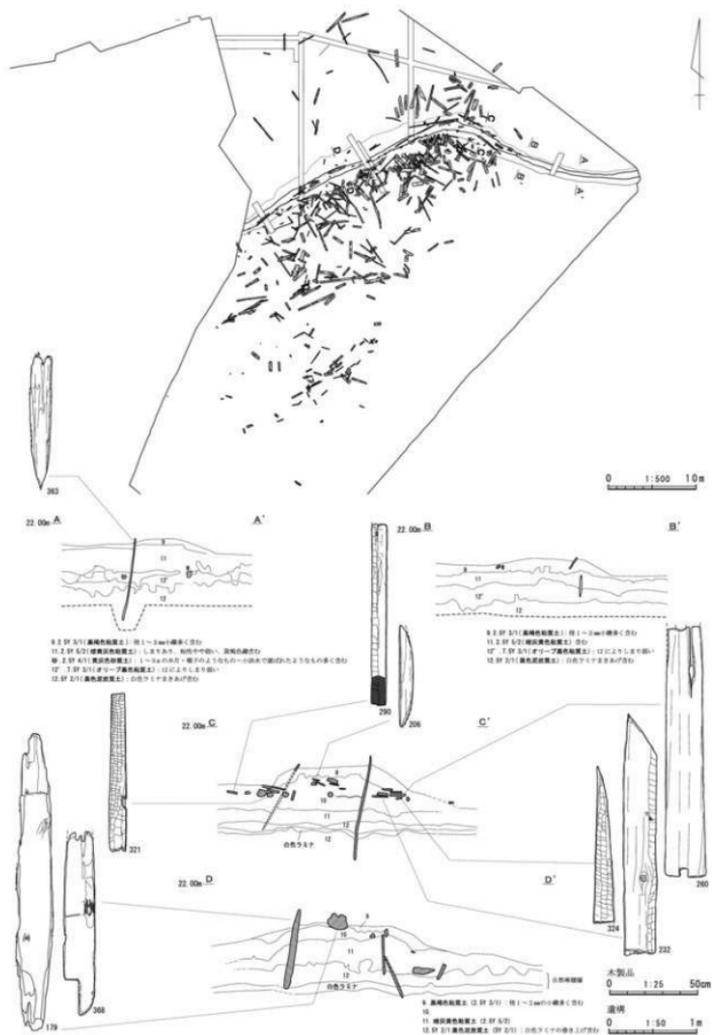
らに礎はこれらの木製品よりもやや浮いた位置にある（第68図）。以上の状況を鑑みると、畔SK422構築の後、低地に板状木製品が吹き溜まり、その後、土が堆積していく途中で集石SX424により修復されたと思われるのが妥当である。集石SX424は畔SK422同様、数回修復された痕跡が残っている。

出土遺物は下層にある木製品以外は出土していない。年代の決め手になる土器等はないが、遺構の年代は畔SK422と同じ弥生時代後期後半の時期ととらえている。

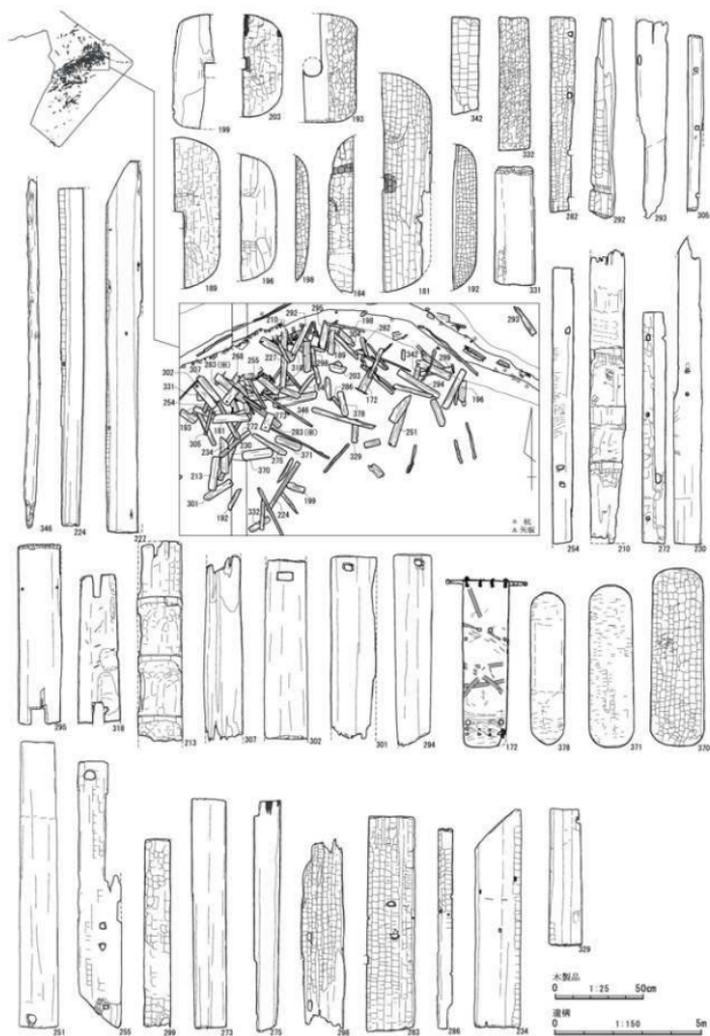
遺構の用途については、これまでのところ不明である。現地調査の段階では水口等の施設か、祭祀跡と見られていた。資料整理で検討した結果、畔SK422が水田城南側の境界の大畔であったことは間違いないと言える。当時の地形からみると集石SX424は標高値が最も低い21.3mにある。また集石SX424がある部分に近い畔SK422の杭列は他よりも密に打ち込まれている。集石SX424は規則的に積まれた状況ではなく散在しており、祭祀的な痕跡も出土品も見られない。以上のことから、集石は畔の最も低く弱い部分を補強するために畔脇に礎を敷き詰めて修復した痕跡である可能性が高い。



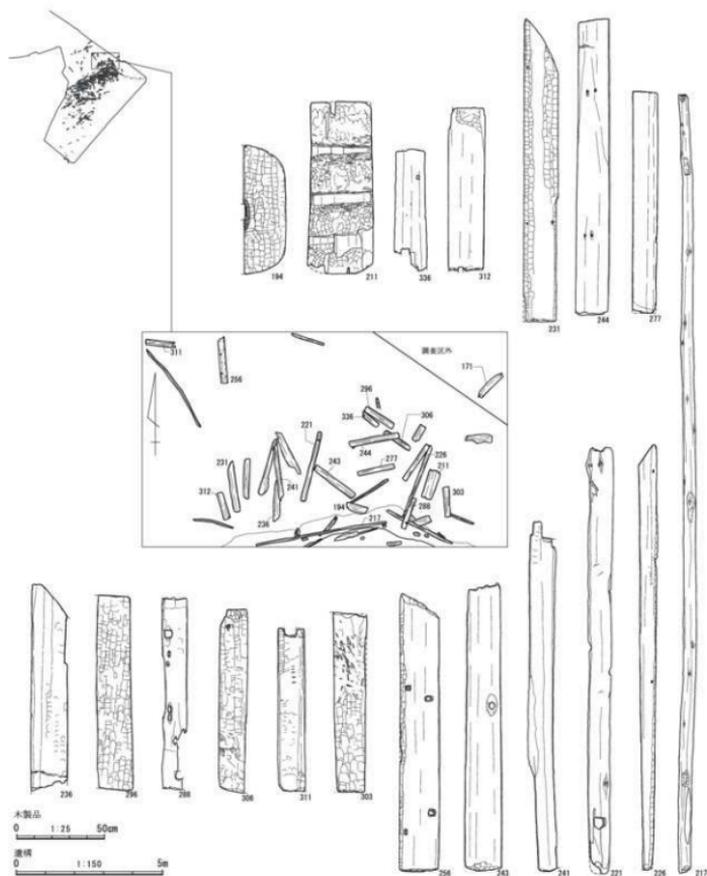
第59図 SX423 実測図5



第60図 SK422実測図1

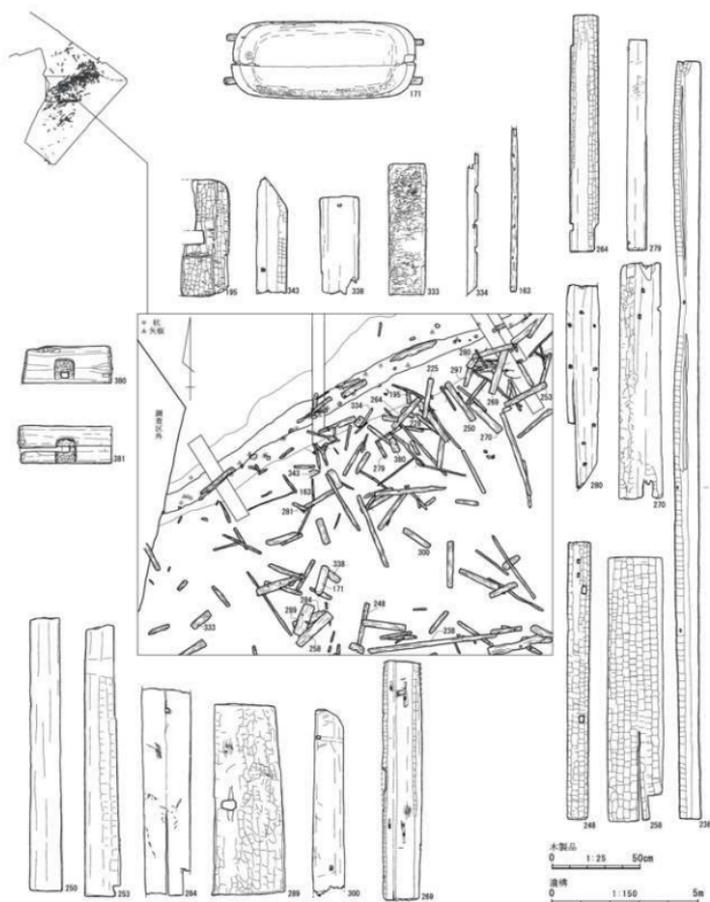


第61図 SK422実測図2



第62図 SK422実測図3

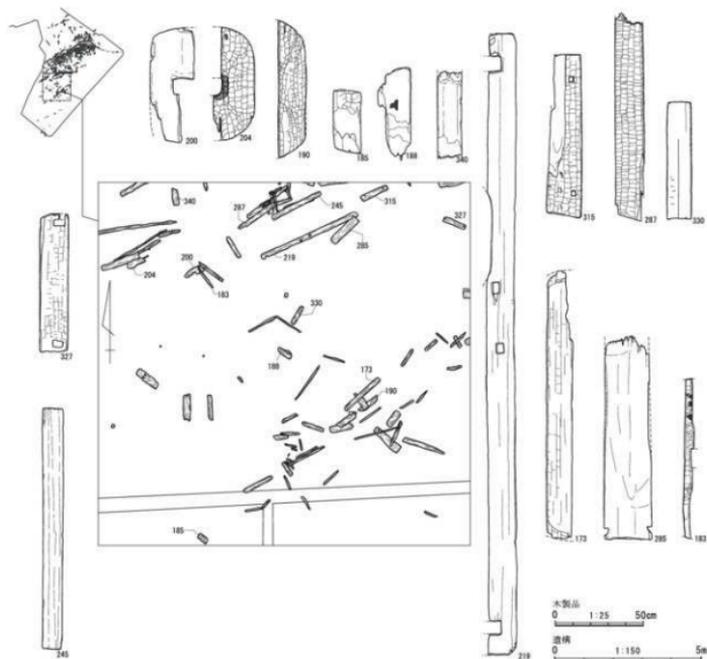
**SK5011** (第69図) SK5011はE-5区①の北半部、弥生時代後期の水田面で検出した群である。群は東西方向で11.5mほどの長さがある。E-1区の大群SK422から繋がっておりE-5区①の西角には群SK422の高まりの一部が見えている。しかし杭列・横木を伴う大群はここで終わっている。SK5011は杭列や横木は伴わず、小群程度の規模である。上層の古墳時代後期の水田で検出した群SK5010『寺家前Ⅲ』第70図)よりもやや北側に位置する。群SK5011から北側へ延びる南北方向の群が2本ある。こ



第 63 図 SK422 実測図 4

れも畔のみで杭や横木は伴わない。

**SK5012** (第 69 図) E-5 区① 110F-10 ~ 111F-1 グリッド内、弥生時代後期の水田面で検出した東西方向の杭列である。上層の畔 SK5010 とは位置が異なるが、同一層で検出した畔 SK5011 とは方向が同じである。杭は 8 本ほど疎らにある。

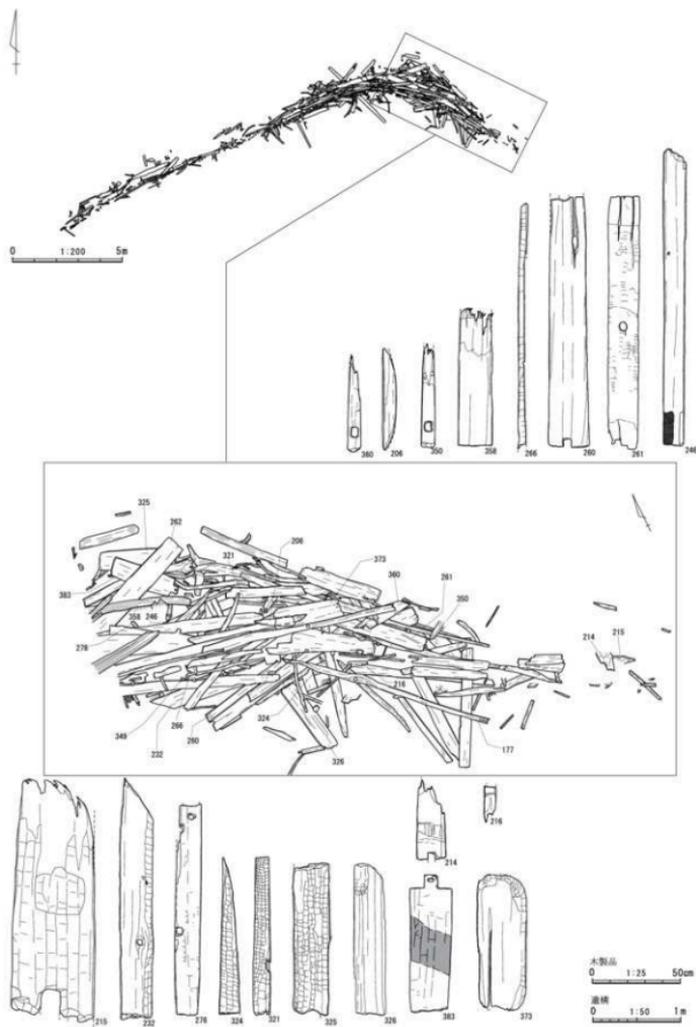


第64図 SK422実測図5

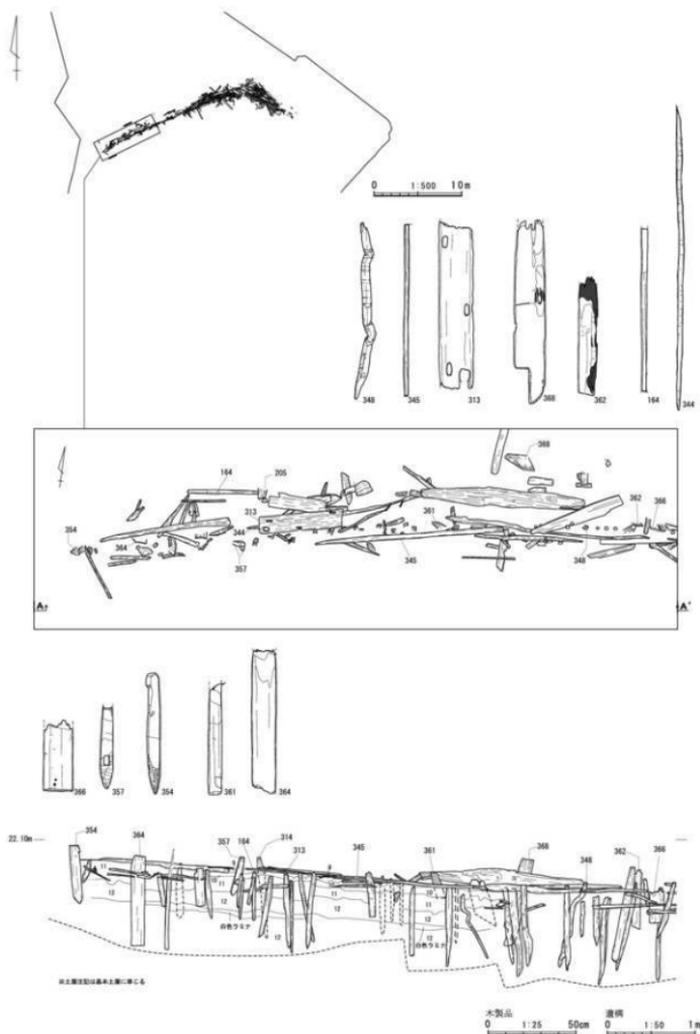
SK5013 (第69図) E-5区① 110F-10～111F-1 グリッド内、弥生時代後期の水田面で検出した東西方向の杭列である。畔SK5012よりも3mほど北側に位置する。小畔のSK5011に重なる部分もあるが、わずかに方向が異なる。杭は疎らに4本程度である。

SK6773 (第70図) SK6773はE-2区の南東壁面近くで検出した杭列を伴う畔である。杭列の北東端はSK6774と繋がり、さらにE-5区②へと繋がる大畔で、南西側はE-5区②の南端の杭列と繋がる。杭列は8層除去後に検出され、検出面(10層上面)の標高値は21.8～21.9mの低地部に位置している。杭は30～60cm間隔で打ち込まれており密集度は低い。杭の素材は割材が多く目立つが、なかには柄杓をもつものがあることから建築部材の廃材を利用しているのであろう。『寺家前Ⅱ』第110図723は梯子を分割して杭に転用している。樹種同定した杭9点のうち8点がスギ材であった。

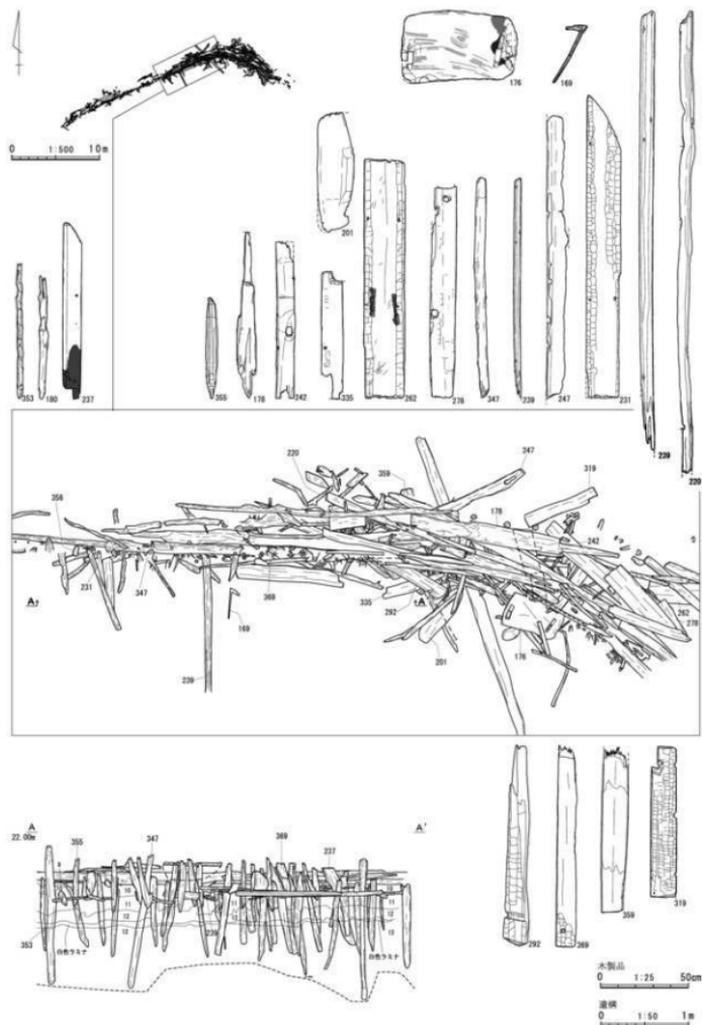
この杭列は自然流路の護岸施設であったか、あるいは流路の埋没後に作られたものかについては現地調査における検討でも判断としなかった。ただ、杭列北側にある自然流路SR6508は、かなり流れの強い流路であったことが土層観察でも指摘されていることから、杭列は流路の護岸施設と考えるほうが妥当であろう。杭列の南端から先は調査区外になるが、後述するSR6508と同様、E-3区のSK10466に繋



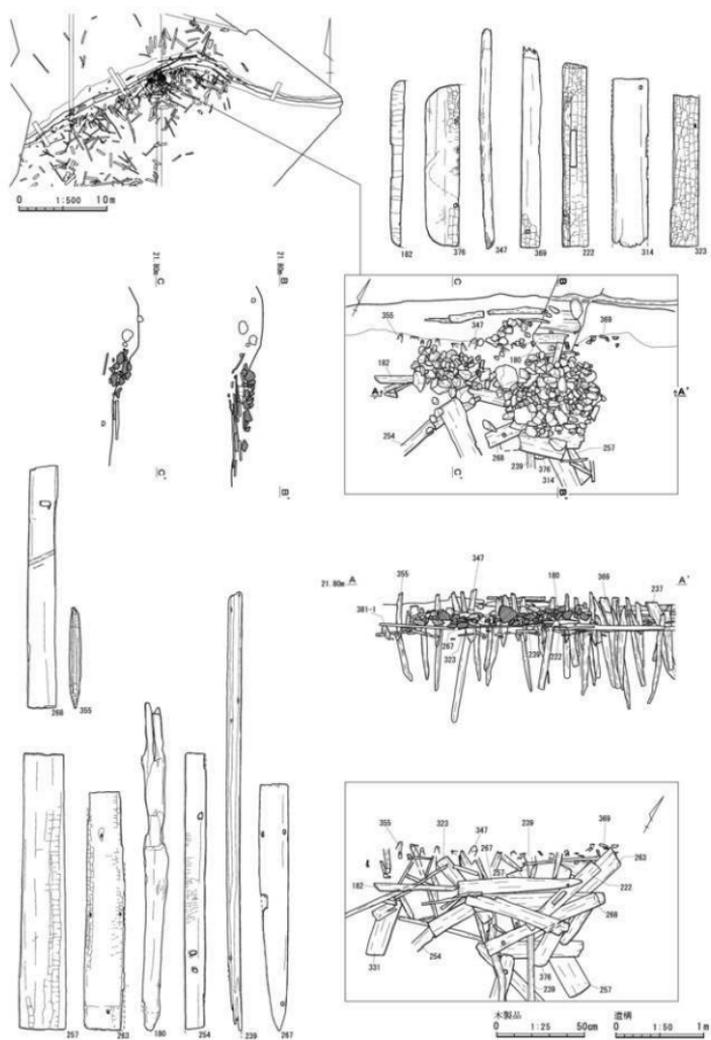
第 65 図 SK422 実測図 6



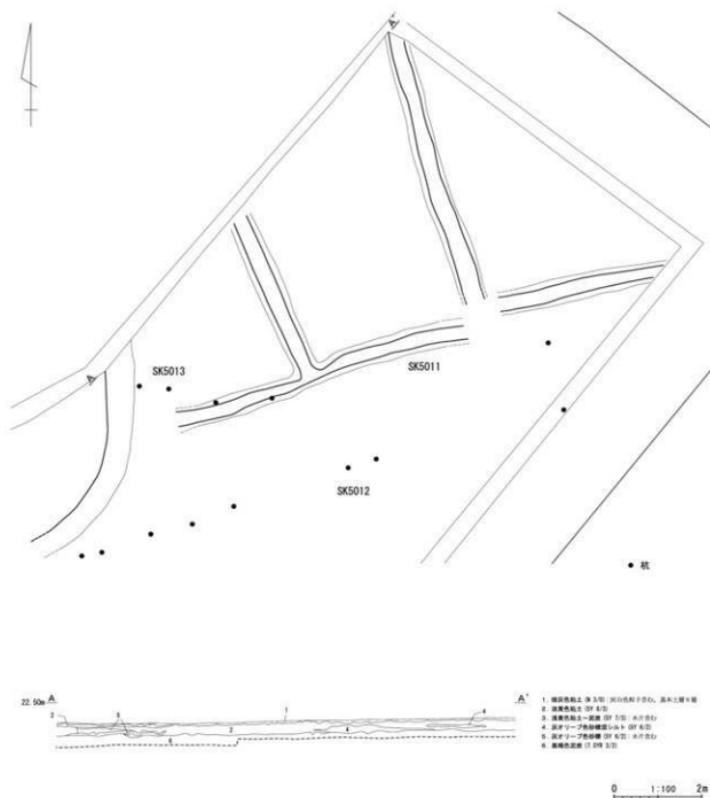
第66図 SK422実測図7



第 67 圖 SK422 実測図 B



第68図 SX424実測図



第 69 図 SK5011・SK5012・SK5013 実測図

がる可能性が高い。遺構の構築年代は開田時期とおなじ弥生時代後期であろう。

**SK6774** (第 70 図) SK6773 の北東端と繋がる畔で E-5 区②の南北方向の杭列から B 区北の SK 2・3 へと繋がる大畦畔である。SK6773 は北東方向に向かって伸びているが、北端部分 (SK6774) は微高地の縁に突き当たると大きく方向を変えて南下している。杭列は 10 層上面で検出しており、杭の間隔は SK6773 よりもかなり密度が高い。杭の素材は SK6773 と同様、スギ材が多く建築部材からの転用品である。この杭列も自然流路 SR6508 と密接に関係していると思われるが、微高地の縁辺で屈曲した形になっているのは、護岸施設の機能をもつとともに、細く入り込んだ谷から出る沸き水を効率的に水田へと取水するためではないかと思われる。

**E-5区②群** (第71・72図) E-2区のSK6774から繋がる群である。群はほぼ南北方向で南へ向かって延び、B区北のSK 2・3と繋がる南北方向の主要な大畦群の一部である。杭列は群の西側に多くみられ、東側には疎らにしかない。また西側の群の北半は杭の密度が高いが、南は0.1～0.5mの間隔が空いている。群は2.5mほど南下したところで東へ分岐している。分岐した群も杭列を伴う。杭はSK6773・6774と同様、スギ板材から分割された杭が使われている。建築部材からの転用が多く、『寺家前II』第111図734・735は鼠返しを杭に転用している。群の北東部分には二列の矢板列がある。矢板列の北面は東西方向の直線で0.8m、南面の矢板列は北面と平行し、東端で南側へ直角に1.1mほど延びている。この矢板列は杭列と違って板を継ぎ合わせたように打ち込まれていることから、北東側の低地(第14・52図参照)から流れてくる雨水を取り込む取水口の可能性が考えられる。

**SR6508** (第70図) SK6773の北側で検出された自然流路である。流路内の覆土は砂礫層で、ひどく摩滅した弥生土器片が3点出土している。したがって当時はかなり強い流れのある流路であったことがうかがえる。検出した位置が調査区境にあつてゐることから隣接するE-1区の遺構との繋がりが不明確だが、E-2区の中央にある埋没微高地脇やE-1区の低地から流れてくる雨水が集まって水の流れる路となっているのであろう。途中調査区外にあたるため、E-5区②から南は不明だが、SR6508はE-3区で検出したSK10466の下層にあるSR10470と繋がっていた可能性がある。つまり細い谷部からの雨水が集まり、集落のある微高地脇を蛇行しながら南へ流れていく自然の河川であったのではないだろうか。現地調査の所見では、自然流路が古い段階に存在し、流路が砂礫で埋没した後には自然堤防ができ、その脇へ杭列が打たれたという認識であった。ただ、杭列が流路の埋没前に作られた護岸施設か、あるいは埋没後に自然堤防か群などの脇に土留めとして打ち込まれたものなのかは現地調査でも判然としなかった。しかしSR6508は流れの強い流路であったことや南側にしか杭列が存在しないことなどから、杭列の機能は護岸であったと考えたほうが良いだろう。流路の年代も弥生時代後期の開田時期であろう。

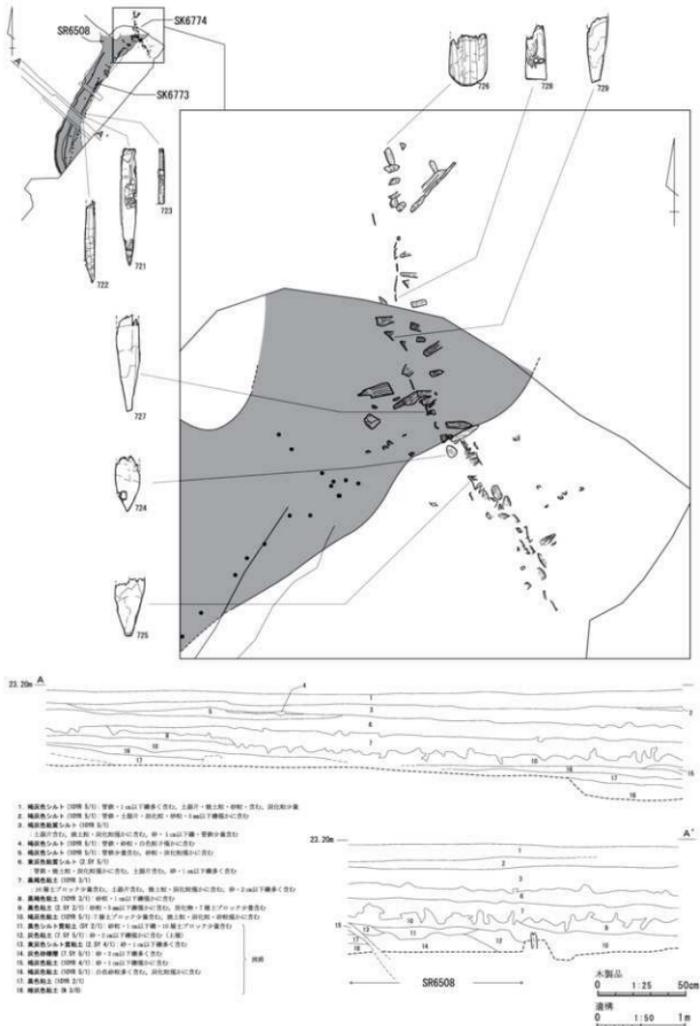
**SK 2・3** (第73図) B区北の北半部で検出した杭列を伴う群である。杭列は2列並行しており、土層断面では群の高まりも2箇所見える。杭の間隔は疎らで1m前後の距離がある。平成12年度の確認調査その1でも北側と南側の試掘坑で杭列の延長が見つかった。SK 2・3に関連する群は、北側ではE-2区のSK6774からE-5区②の群(第70図)、南側はA-2区北半部の東端で検出した南北方向の群SK597と繋がることが想定される。これらの総延長は100mを超える。第73図で見るとおり、SK 2・3は南北方向の主要な大畦群の一部といえる。この大畦群からは枝分かれする東西方向の群(SK 4・SK 5)が見つかった。

SK 2・3より出土した遺物は弥生土器片と柄孔のある木製品(『寺家前II』第103図642)、杭がある。木製品はスギ材、杭は針葉樹の割材を使っている。

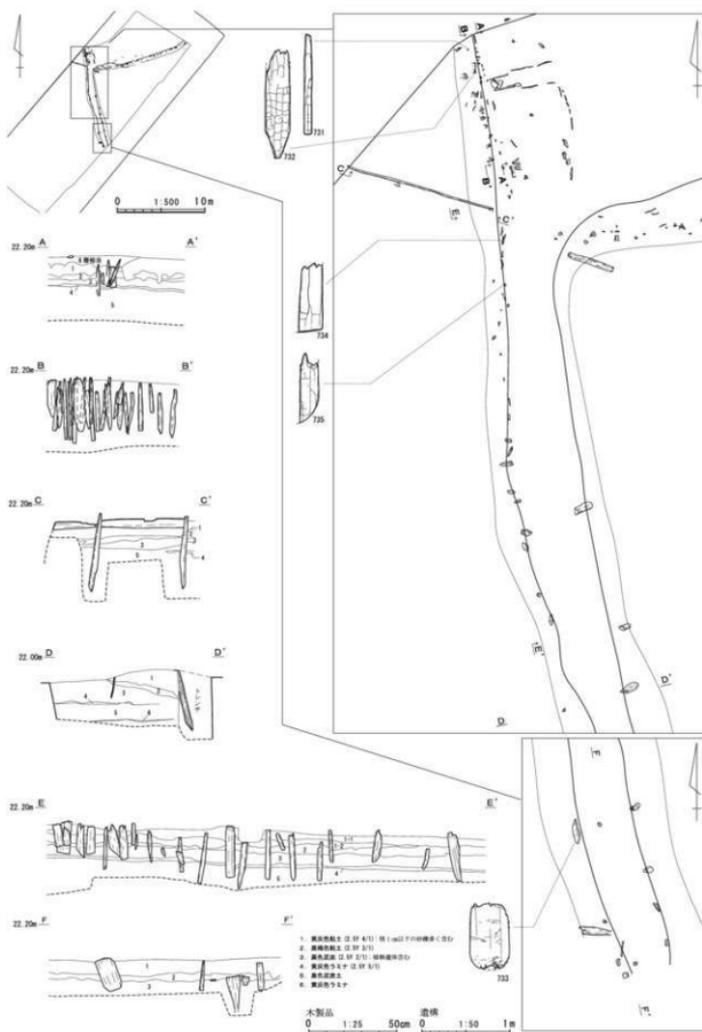
**SK 4** (第73図) B区北の北半部にあるSK 2・3と直交している東西方向の杭列である。杭列を伴った群であろう。SK 2・3から東西両側に延びているが、いずれも杭の数は少なく、途中で列が途絶えている。

**SK 5** (第73図) B区北の南端で検出した杭列である。杭列は東西方向で、西側は調査区外へと続いているが、おそらくSK 2・3からSK597の大群に繋がる群になると思われる。東側も調査区外へ続いている。杭列のほか、一部に横木も見つかった(図版49)。

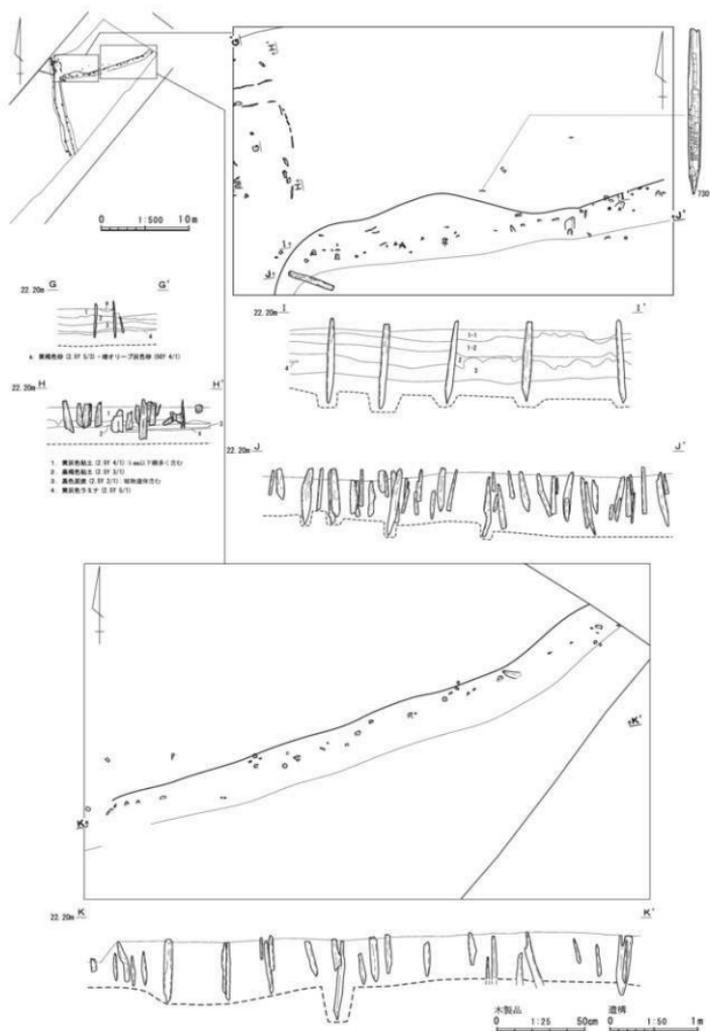
**SK10466・10465** (第74～77図) 群SK10466はE-3区中央付近の低地部分で検出した遺構で、杭列と矢板列、横木で構成されている。杭・矢板列はほぼ東西方向に連なっているが、直線的ではなく、微高地の縁辺に沿った形状を成しており、大きく弧を描くように湾曲している。杭列の総延長は27m程である。杭・矢板列の構造は最も木材が集積している付近がわかりやすく、第75図の模式図のようになっている。まず外側に太めの杭を配し、杭の内側に横木を渡し、その横木を挟むようにもう一列内側に杭



第70図 SK6773・SK6774・SR6508実測図



第71図 E-5区之柵列実測図1

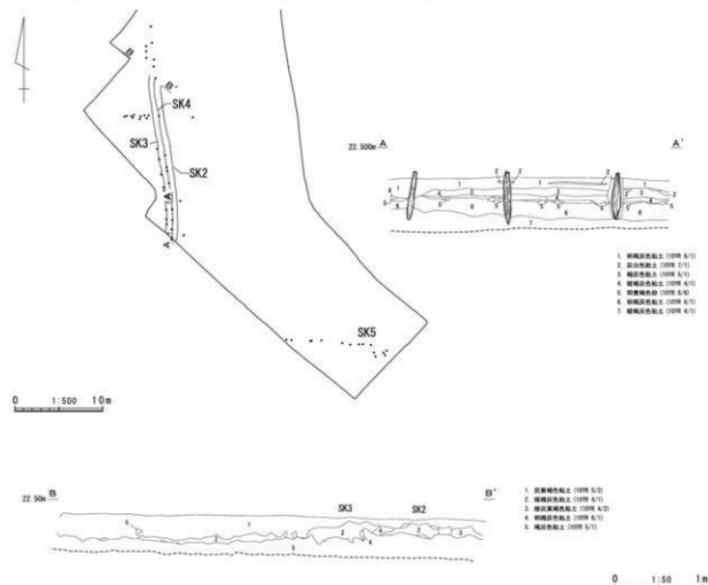


第72图 E-5区之杭列奥测图2

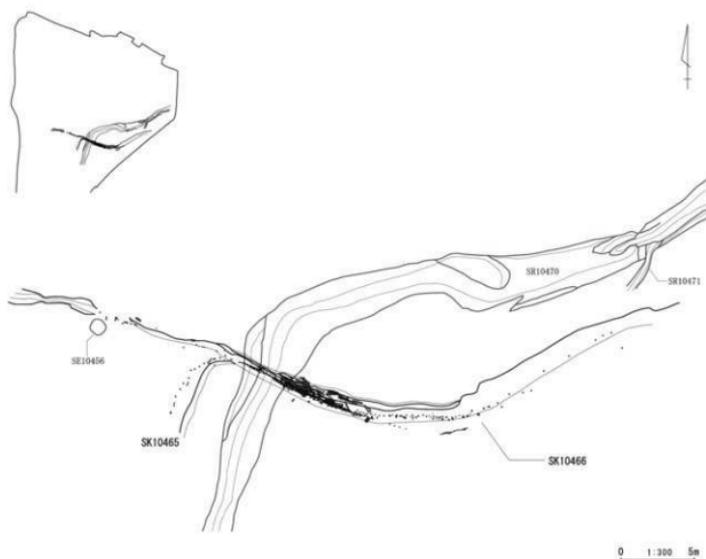
を斜めに打ち込んで固定している。そうした杭列が中央付近では二列になっており、杭列間には、さらに横木が入っている（図版 53-2）。調査時の所見では、この辺りは地盤が最も悪い場所であるため標高値が低くなっており、その原因は後世に沈下した可能性があることを指摘している。確かに矢板列が密集しているところは地盤が悪く、ほかよりも密に打ち込まれていると言える。さらに杭列の間に挟み込むように置かれた横木が大量に存在したのも、地盤の悪い場所に横木を多く敷き込むことによって補強材的な役割をもっていたと考えられる。杭列のみで構成されているところも太い杭を打ち込んだ後に、その杭を固定するため斜めにもう一本追加して打ち込んでいる様子も確認できた。

杭列の木製品は腐食が激しく、このうちの一部を取り上げてきたに過ぎない。杭は板からの割材が多く、丸木の杭は数少ない。取り上げた杭の樹種は大半がスギ材である。スギ材以外は横木として転用されていた掘立柱建物の柱（『寺家前Ⅱ』第 112 図 740）がイヌマキ属、そのほか杭のなかには一部くり材材も含まれていた。杭の表面には面調整の手斧痕や方形の柄孔が切り込まれた製品（同書第 112 図 738・739）もあり、建築廃材を再利用して杭に転用していることがわかる。

SK10466 はどのような用途で使われ、どんな機能をもっていたかについては、いくつかの可能性が考えられる。ひとつは SK10466 の西側微高地上に自然流路 SR10472 があり、東側では B 区北に東西方向の畔 SK 5 が見つかっている。これらは同じ延長線上に連なっていることから、東西方向の主要な大畔であった可能性が考えられる。また水田域にあるような畔とは異なり、護岸的な役割をもつ杭・矢板列であった可能性もある。この杭・矢板列のすぐ南側には水田域が見つかっていることから、居住域と水



第 73 図 SK 2・SK 3・SK 4・SK 5 実測図

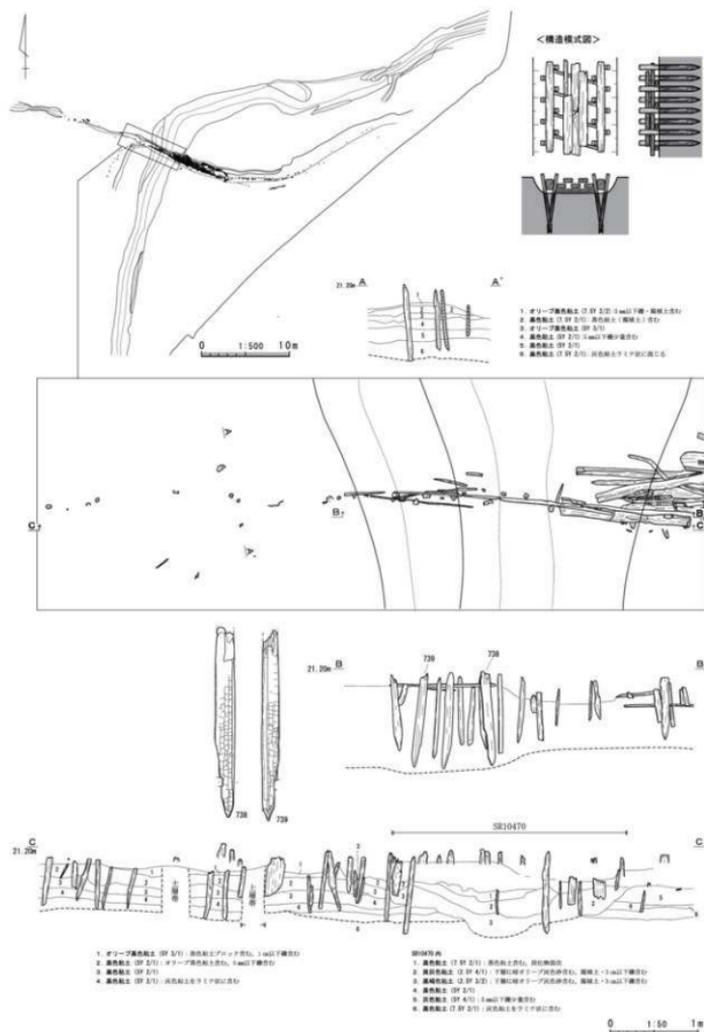


第74図 SK10465・SK10466実測図1

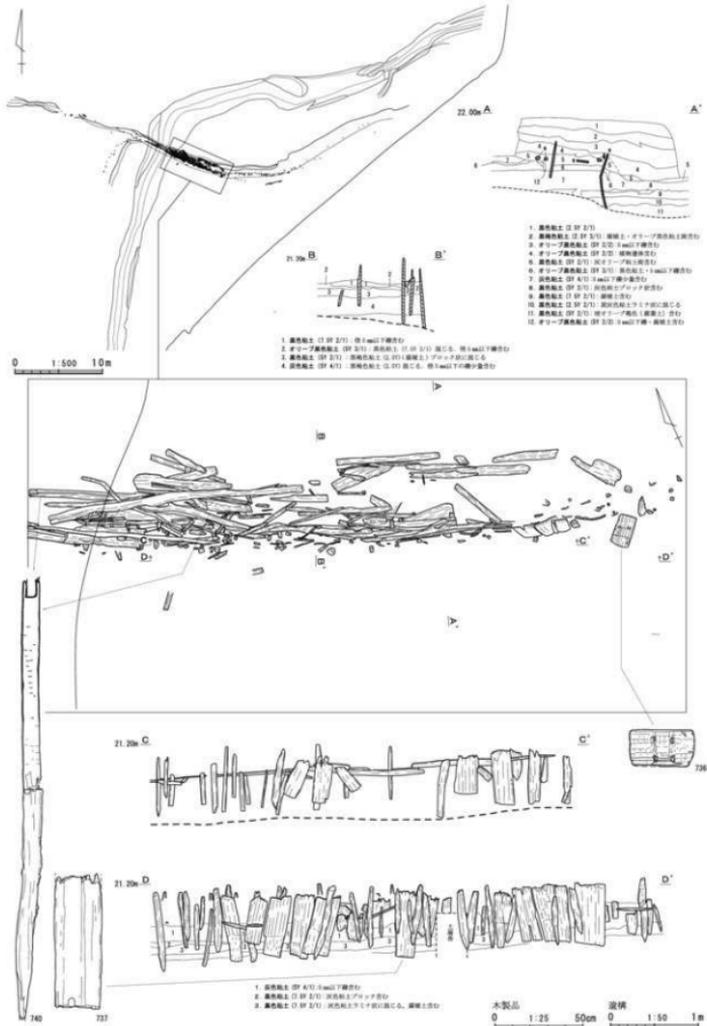
田域の境界の役割をもつことも考えられる。さらにSK10466の下層では自然流路SR10470が流れていたことを土層断面で確認している(第75図)。覆土は礫層を下層と考え、大きく2層に分層している。最下層は砂礫層、上層の流れは杭・矢板列辺りで大きく曲ったことがわかる。流路上層には炭化物を多く含む黒色粘土が互層となって続いている。もともと自然流路であったSR10470は、かなり流れが強く、開田時期に杭列(SK10466)を設置し、水利を調整して水田域へ回す役割も果たしていたのではないかと考えられる。そして杭列構築後も地盤の悪い所へは矢板や横木を入れて補強していたのであろう。流路と杭列は同時期に存在していたこともあり得る。SK10466の北側では自然流路SR10470から分岐したSR10471より水を南側の水田に引いていることもわかっている。調査区境にあたり判断し難い場所もあるが、地形の傾斜を上手く利用して水を万遍なく水田に引き込めるように畔を築いている様子がうかがえる。

出土した土器は弥生土器の小片である。木製品は矢板列脇で四穴田下駄が出土している(『寺家前Ⅱ』第112図736)。出土遺物の年代から、自然流路と杭・矢板列には大きな時期差はなく弥生時代後期後半から古墳時代初頭の遺構ととらえている。

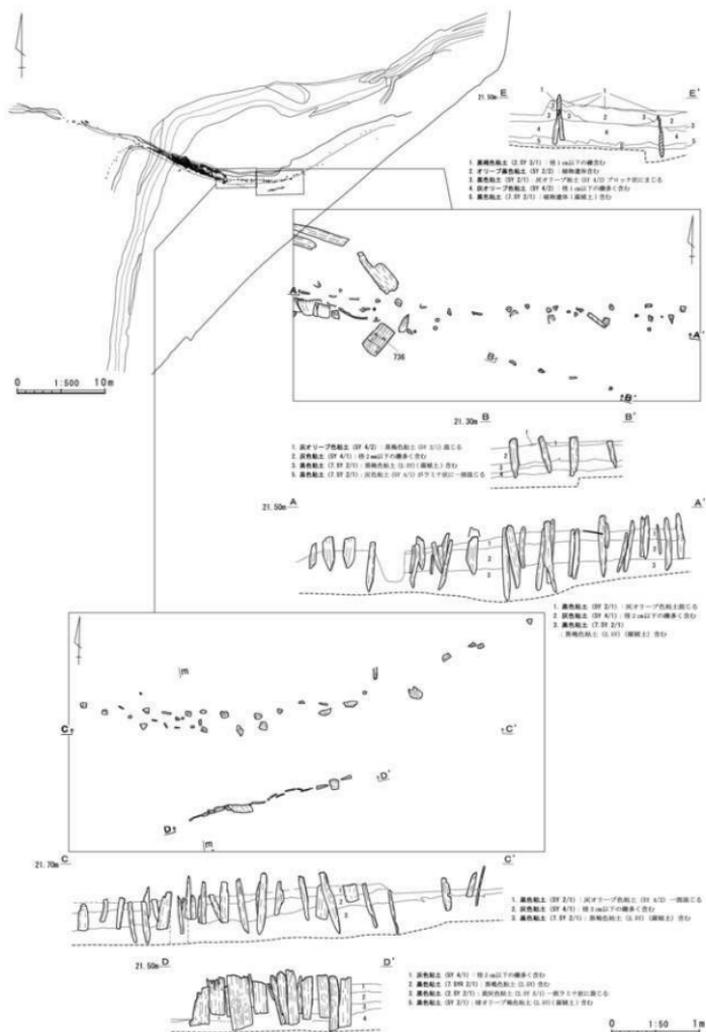
SK10465はSK10466の西側で直交する南北方向の杭列である(第74図)。延長は6.2mである。調査時の所見では西側に、もう一列並行する杭列が確認され、杭列を伴う畔ではないかとの認識である(第74図)。しかし西側微高地にあるSR10472からの流れをSK10465で分岐して、SK10464西側の水田へ流す機能も担っていた可能性が考えられる。



第75図 SK10465・SK10466 実測図2



第76図 SK10465・SK10466 実測図3



第77図 SK10465・SK10466 実測図4

**SK10463・10464** (第78図) E-3区、南西側の低地で検出した杭列を伴う群である。群の向きは東西方向とほぼ一致する。調査区内で検出した群は延長13mほどである。杭は針葉樹の細い割材で、30cmほどの短い杭と50～70cmほどの長い杭が見られる。杭列はSK10464との交点から以東に10～20cm間隔で打ち込まれている。群の北東側には板材がまとまって出土しているが、ちょうどこの位置の下層にSR10470があることから、横木ではなく流木が杭列手前で留まった様相と考えられる。杭列を境に南側は一段低くなっている。後述するSK10464とは1291-9グリッド内で直角に交差する。SK10463の西端は微高地に突き当たるところでSE10485(第50図)と隣接する。東端は調査区外へ出るが、A-2区のSK596と繋がる。SK596は東端でSK2・3～SK597と接続する(第52図)。SK596と合わせると総延長は90mほどの長さとなる。SK10463は水田域の東西を横断する主要な大群と言える。

SK10464はSK10463と交差する南北方向の杭列を伴った群である。総延長は30mほど検出されているが、南北の端はいずれも消滅している。杭はSK10463の交点より南側にある。杭の間隔は規則性がなく疎らである。杭の素材は針葉樹の割材で30～60cmほどの長さがある。群はわずかに高まりをもち、杭列以西は地形が緩やかに下がっている。杭列以西で検出した小群やA-2区のSK606(第85図)と小群の方向はSK10464と並行している(第78図)。

**SK600・601** (第79図) A-2区南半部で検出した南北方向の大群である。北端は東西方向の大群SK599の東端に繋がる。そこから南側へA-2区の調査区境まで40mほど延びている。群の西側のみに杭列を打ち込んだ群であるのは、西側へ崩れるのを防ぐ目的があったと思われる。杭列の間隔は1m前後、いずれも割材であることから建築部材の廃材より再利用されたものであろう。杭の長さは80cm前後で、なかには1mを超える杭もあった。杭材の主体はスギであったが、クリ材もわずかにある。群からは曲柄の漆器を装着する平銀が出土している(『寺家前II』第101図610)。曲柄平銀の形状から推定する年代は弥生時代後期後半～古墳時代初頭の時期と思われる。

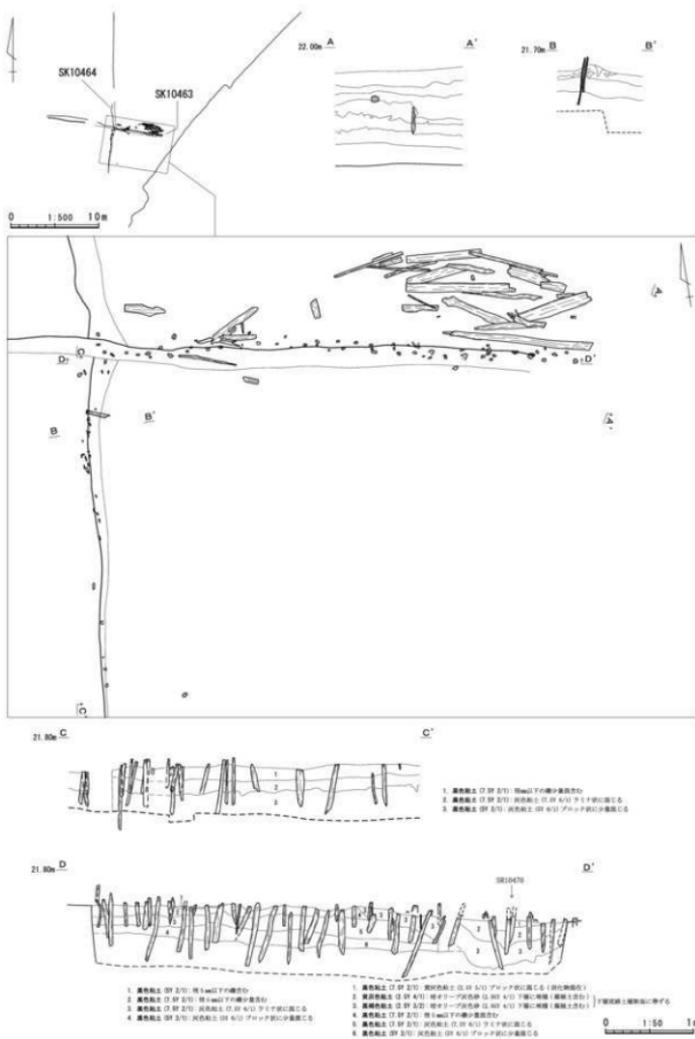
SK601はSK600の北端からほぼ直角に東へ派生する南北方向の群である。群は杭列と横木を伴っているが、杭列の密度は低く、横木も疎らな状態であった。東端は調査区外へ抜けるがA-2南区のSK8に続く群であろう。SK600との交点では土器が出土した(第79図中段の拡大図)。

**SK602** (第80図) SK600から西へ派生している群である。群は東西方向で延長5.8mほどある。西端は調査区外になるが、隣接するA-1区で検出したSK593の北端に繋がる。群の北側に杭列が2列ある。北側の杭は角状の割材に先端加工したもので、比較的疎らに打ち込まれている。横木も数はなく所々に固まっている程度であった。一方、南側の杭列は0.2m間隔の密度がある。その様子はSK600やSK603とも同様である。調査時の所見では杭列に修復補強している痕跡があることが指摘されている。

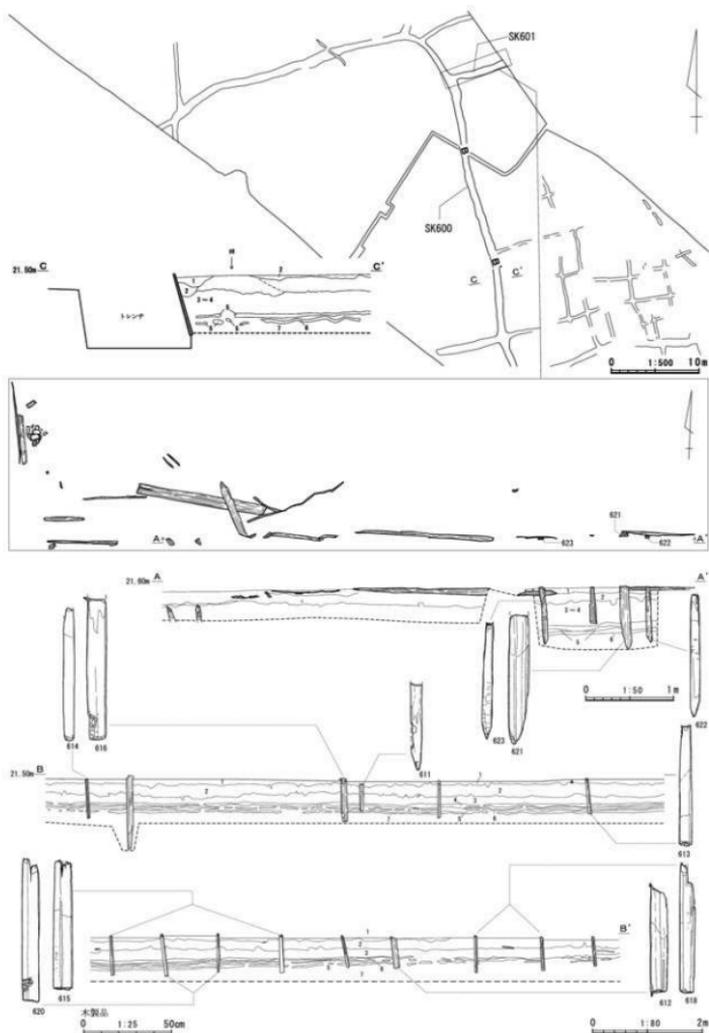
杭列内ではS字溝口縁部(第134図566)や四穴田下駄、曲柄平銀、用途不明品が出土している(『寺家前II』第102図624・626・632)。曲柄平銀は西端の横木列のなかで見つかった。このすぐ北側で四穴田下駄も見つかった。出土土器や銀の形状から見て群の年代は弥生時代後期後半～古墳時代初頭であろう。

**SK603** (第81図) SK603はSK600から東へ延びる群のひとつである。150C-4グリッド内でSK600より分岐し、群の延長は東へ30mほど延びている。SK600より分岐した付近では杭・矢板列と横木を伴うが、群の途中から杭・矢板列は検出されていない。東側は補強する必要がなかったためであろうか。杭・矢板の長さは0.8m前後、建築部材を再利用した割材を杭に加工している。樹種はスギ材である。また群の上より曲柄又銀が出土した(『寺家前II』第102図635)。三又の多又銀で、材はイチイガシである。

**SK591** (第52図) A-1区の北西部端、150B-1グリッドで検出した群である。検出面は基本土層9層上面である。群は7mほどの延長をもつ。西端は自然流路SR1047から続くくぼ地で消滅している。東端は調査区外に出るがA-2区で検出した群SK599の方向と一致していることから、同じ大群と思われる。



第78図 SK10463・SK10464実測図

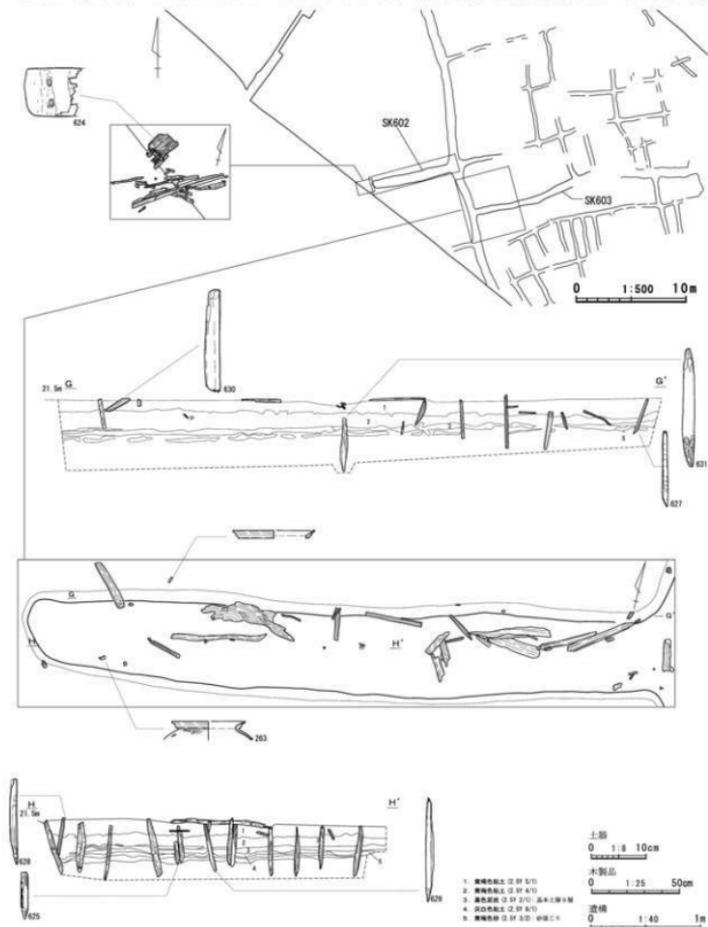


第79図 SK600・SK601実測図

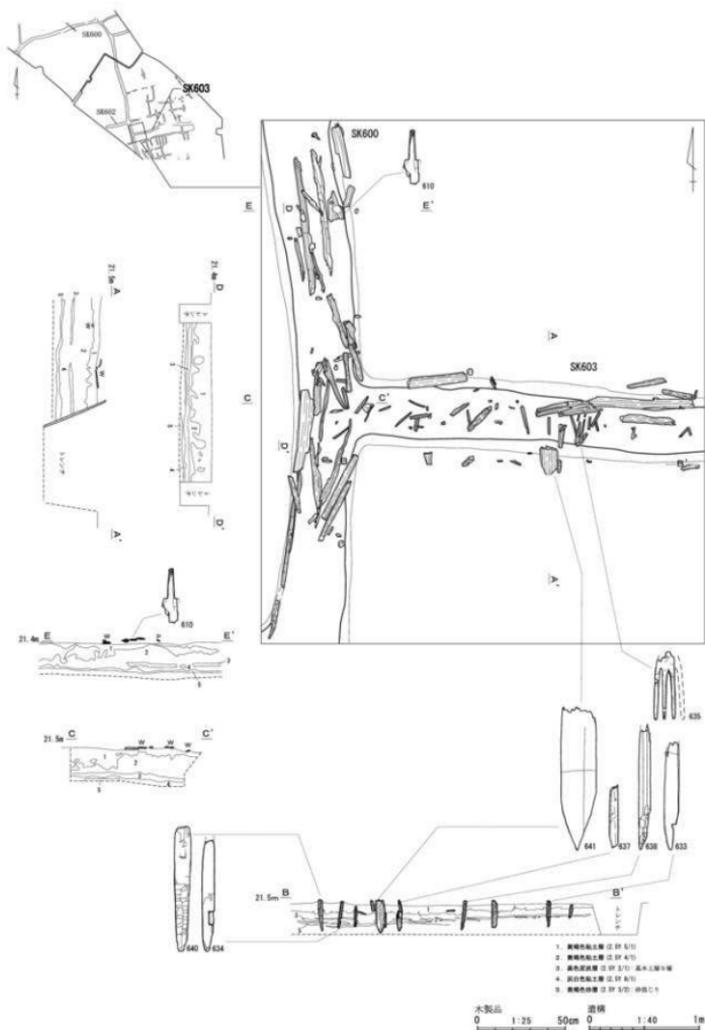
SK599はA-2区内で畔の交点が出ている。

畔内の出土遺物は鼠返し『寺家前Ⅱ』第86図(482)と梯子(同書483)のみで土器は出土していない。年代は不確定だが弥生時代後期後半に開田された水田の畔であろう。

SK592(第52図) A-1区の150B-1・150C-1グリッド内でくぼみ状の遺構を検出した。畔SK591の南



第80図 SK602実測図



第 81 図 SK603 実測図



にあたる位置で、くぼみは浅く不定形である。自然流路 SR10470 の続きとも考えられるが、横木のような木製品が伴っていることから SK591 と交わる畔の可能性もある。木製品は板状木製品（『寺家前Ⅱ』第86図484）が出土している。遺構のやや南側では掘り棒？（同書485）と全長150cmほどの板状木製品（同書486）が同じ方向に平行に並んだ状態で9層より出土した。木製品では時期判断は出来ないが弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺構であろう。

**SK593**（第82図） A-1区の中央付近、150C-D-3グリッド内で検出した杭・矢板列、横木を伴う畔である。基本土層9層上面で検出した。東壁付近で十文字に交差する。南北方向の畔は南側のSK594と繋がる。SK593から東方向へ枝分かれする畔はA-2区のSK602に繋がる大畔となる。

出土遺物は畔の交点よりやや南側で古式土師器が出土している（第114図264）。木製品は畔の構築材である杭・矢板のほか、垂木、四穴田下駄、梯子、曲柄平鋸、建築部材などが出土している（『寺家前Ⅱ』第87図487～496）。農耕土木具の形状からみて畔SK593の時期は弥生時代後期後半～古墳時代初頭であろう。

**SK594**（第82図） A-1区150D-2・3グリッドで東西方向の大畔を検出した。畔の東端はSK593と繋がっている。畔SK594は杭列と矢板列、横木で補強されている。南西端はSR607と切り合っている。西端は杭と矢板が疎だが、SR607の線より東側は杭列と矢板列とともに横木が多く残っている。特に畔の東半分には矢板が密に打ち込まれている。畔SK593との交点はほぼ直角で、北側にも杭列と矢板が延長している。

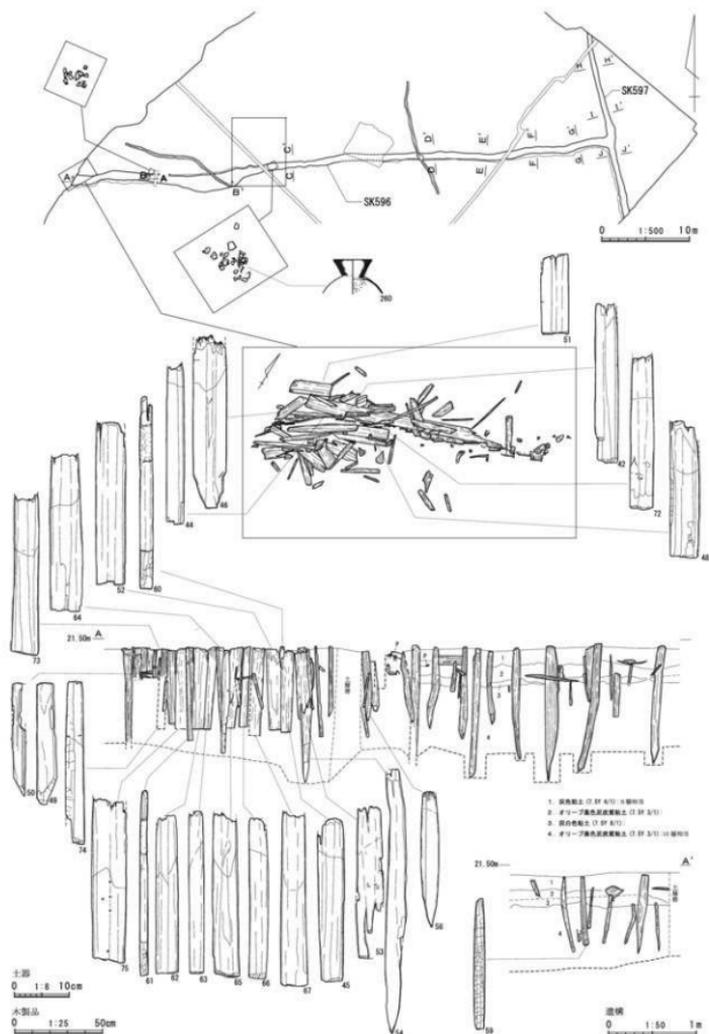
出土木製品は畔の構築材（杭と矢板、横木）としてスギ材の建築部材が再利用されていた。年代を示す出土遺物としては古墳時代の土師器片が畔内で出土している。畔SK594は自然流路SR607と重複しているが、新旧関係は畔のほうが新しい可能性がある。杭・矢板列は古墳時代に補強・改修したとも考えられる。北側にある東西方向の畔とは方向が微妙に違うのは、等高線に沿って畔を構築して水利を調整しているためと思われる。畔の下層は礎層だが杭・矢板はこの礎層にまでは達していない。比較的安定した地盤であったと思われる。矢板列の密度が高いことから水路等の水利に関連する施設の可能性も考えられる。

**SK595**（第52図） A-1区南南部150E-4・5グリッド内にある東西方向の大畔である。畔は調査区内の東端で南北方向の畔に分かれ、更に東側へも延びる痕跡が確認された。南北方向はA-2区でSK600と繋がると思われるが東西方向に繋がる畔は確認されていない。東側はSR608のところで消滅している。

畔解体時に若干の杭や横木が出土した。なかには明らかに建築部材からの転用とわかる製品もある（『寺家前Ⅱ』第89図）。そのほかに曲柄又鋸の破片が2点見ついている（同書505・506）。接点はないが同一個体の可能性もある。同形の二又鋸は静清平野では弥生時代後期～古墳時代初頭に属するものである。畔の年代も当該時期に属すると考えられる。

**SK596・597**（第83・84図） SK596はA-2区の北側に位置する東西方向の大畔である。調査区内では130E-1～2グリッドにかけて長さ62mほど、ほぼ東西に真っ直ぐ延びている。西側はE-3区のSK10463に繋がり、東端は南北方向の畔SK597に突き当たる。特に西端の杭列部分では杭のほか矢板も密集している。また杭・矢板列に沿って横木を伴っている。東側に行くにつれて杭は疎らに打ち込まれている。杭や矢板、横木の素材は建築部材の廃材から転用されたものである。そのため大半はスギ材が占めており、わずかにムクロジ材やクリ材がある（『寺家前Ⅲ』第16表）。矢板は0.8～0.9mほどの板材、杭は長いもので1.5～1.6mほどの割材を用いている（『寺家前Ⅱ』第9～12図）。中には納孔のある矢板や切り欠きをもつ杭もある。

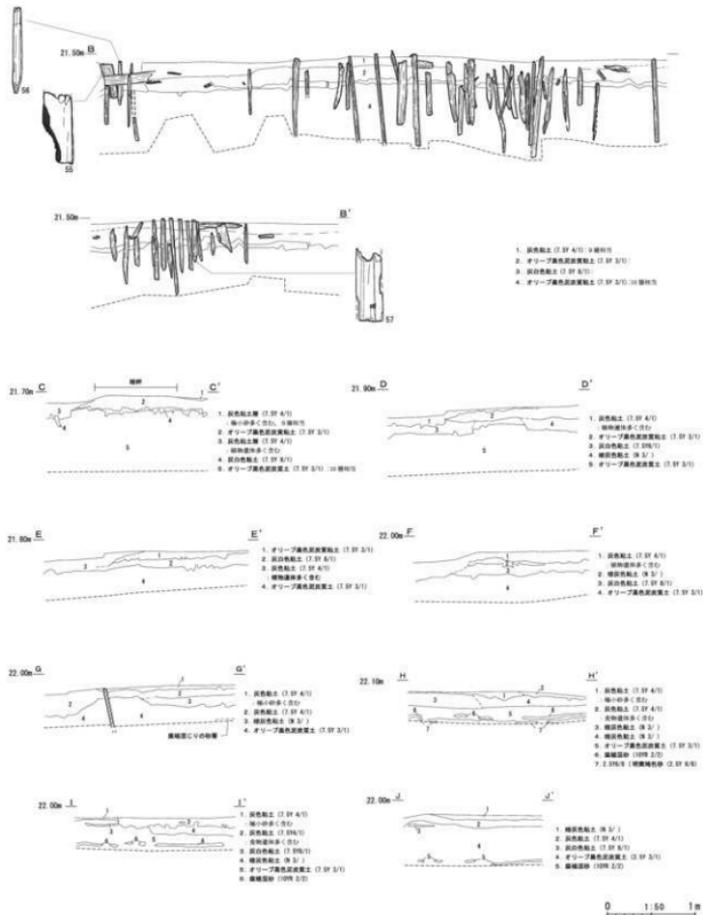
出土品は杭・矢板と土師器のみである。土師器（第114図260・261）は出土状況図がある。何個体かの大形の破片を含んでおり、耕作あるいは畔の形成に伴って混入したのではなく、畔の築りに伴うも



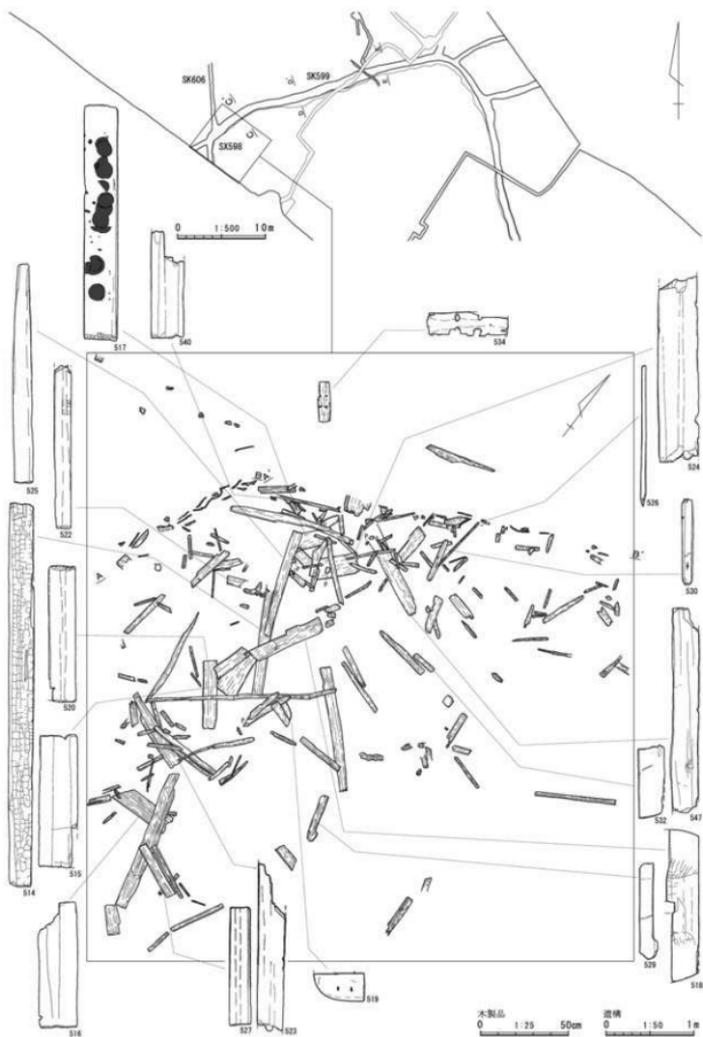
第83図 SK596・SK597 実測図1

のである可能性が考えられる。出土した土器のほぼ全てが古墳時代中期の土師器であり、完形品は何らかの水田祭祀の名残ではないだろうか。時期の判断に繋がるのはこの土師器であることから SK596 が存続した年代の下限は古墳時代中期であろう。

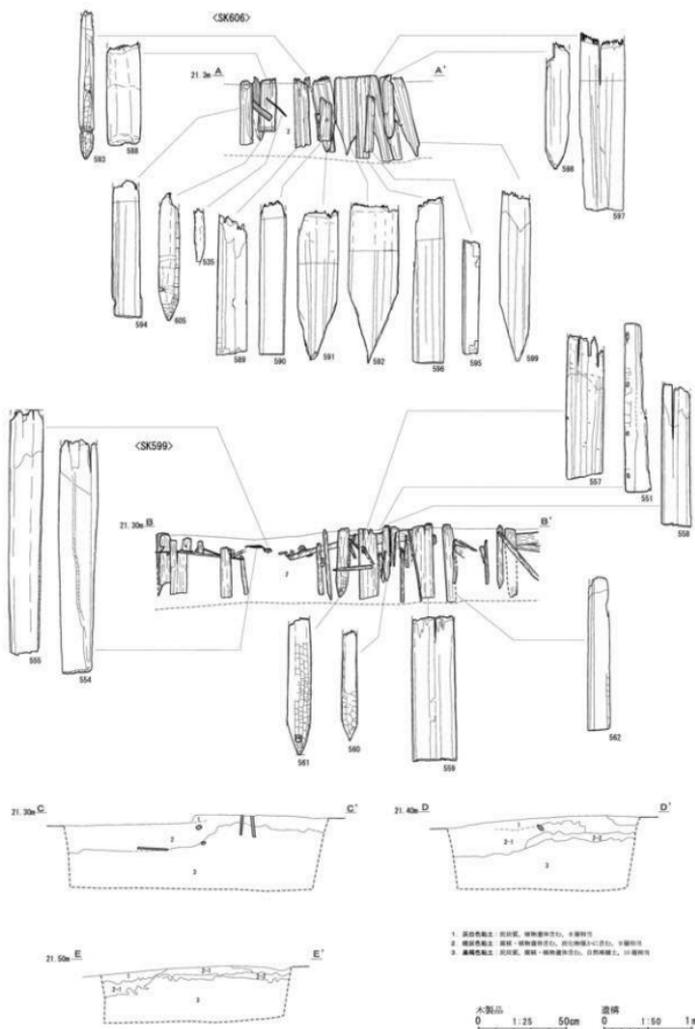
SK597 は A-2 区北半部の東端で検出した南北方向の畦で、22 m ほどの長さがある。畦は北側の B 区



第 84 図 SK596・SK597 実測図 2



第 85 図 SX598・SK599・SK606 実測図 1



第 86 图 SK598・SK599・SK606 実測図 2

北のSK 2・3やE-5区②の畔、さらにE-2区のSK6774へと繋がる(第70図)。南側は調査区外になるが、おそらくSK599から派生した杭列のどこかに繋がるものと思われる。第52図で見えるとおり南北方向の主要な大畔の一部であり、総延長は100 m以上ある。

**SX598**(木製品集中箇所)(第85図) SK599とSK606との交点の南側にかけて木製品が平面的に広がり集中していた範囲をSX598としている。検出面は9層から10層上面に相当する。木製品はSK599南西端から南側の100 mほどの範囲に広がっていた。出土状況は規則性が見られず散在している状態であった。畔SK599の杭・矢板列に使われた木材は1.3～1.8 mの長さに揃っている。それに対して横木は2.0 mを超える板材が目立つ。SX598の木製品も2.0 mに近い板状製品が多い。このことから田面に散らばっていた木製品は杭・矢板列に伴う横木であった可能性がある。それが雨水等の水圧または田面が水没したことにより、畔から崩れ流出したと想定される。畔SK599の西側に多く見られる矢板列は畔の交点から1.0～2.0 mの部分が低く沈んでいる(第86図B-B'土層断面図)。もともと田面が低く畔が壊れやすいところだったのであろう。畔には修復や補強の痕跡が見られる。

木製品はすべてスギ板材で建築部材等からの再利用であろう。杭・矢板、横木以外の製品は四穴田下駄(『寺家前Ⅱ』第90図519)や鼠返し(同図518)などがある。

**SK599・606**(第85・86図) A-2区北側で検出した杭・矢板列を伴う東西方向の大畔である。畔は杭・矢板、横板を伴っている。西端はSK606と交差する。さらに西へ進むとA-1区北端のSK591へと繋がる。調査区内では38 mほどの長さがある。途中で大きく南側に曲がってSK606に至る。SK606との交点付近では木製品が平面的に広がっていたSX598がある。この木製品はもともとSK599やSK606の畔から流出したものと考えられる。その理由としては、SK599周辺はもともと田面が低い区画であったと想定されている。そのために畔の内側を杭や矢板、横木などで補強している。しかし雨水の影響で水没しやすいところであったらしく、たびたび湿地化したため腐植土や植物遺体を多く含んでいる。耕作地としては決して良い条件ではないだろう。矢板列は南側へ大きく折れ曲がっていた。これは急激な強い圧力で曲がったものではなく、徐々に曲がっていったと思われる。

杭列の検出時に畔内では5世紀代の土師器が出土している。木製品はスギ板材が多く、建築部材の再利用であろう。一部、ヤマザクラ材やクリ材の板も見られる。製品では四穴田下駄(『寺家前Ⅱ』第92図533・534)が出土した。田下駄(534)はモミ属である。農耕土木具を見る限りでは弥生時代後期のもので、古墳時代には該当しない。開田はあくまでも弥生時代後期だが、古墳時代以降も畔の補修をしながら継続して水田が使われていたと考えられる。

SK606はSK599の西端とほぼ直角に交差した南北方向の大畔である。北はSK596に向かって伸びている。南は調査区外へ出るがA-1区のSK593に繋がる。総延長は80 mほどになる。東側のSK600と併行している。SK599との交点付近は矢板列になっている。矢板列際では曲柄又鍬が1点出土した(『寺家前Ⅱ』第92図535)。農耕土木具の形状から畔の年代は弥生時代後期後半の開田と同時期であったと思われる。

**SK614**(第87図) A-2区の南、東壁沿いで検出した杭列である。杭列は南北方向で延長30 mほどになる。北側では東西方向の畔SK603との交点が見つかっている。列はさらに北側へ行くとA-2南区のSK611と繋がる。南端に近いところでは東へ派生する杭列が確認されている。南端で杭列は消滅しているが、これより南は地形が大きく下がっていくことから、この辺りが水田の南限と考えられる。検出した杭はいずれも20～30 cm以下の短いもので丸木の先端を削ってある。杭は0.2～0.6 m間隔で規則的に並んで打ち込まれている。SK611からSK614の杭列は弥生時代後期後半の水田面よりもやや上層で検出しており、小畔の方向と若干ずれることから、年代も古墳時代以降になる可能性がある。

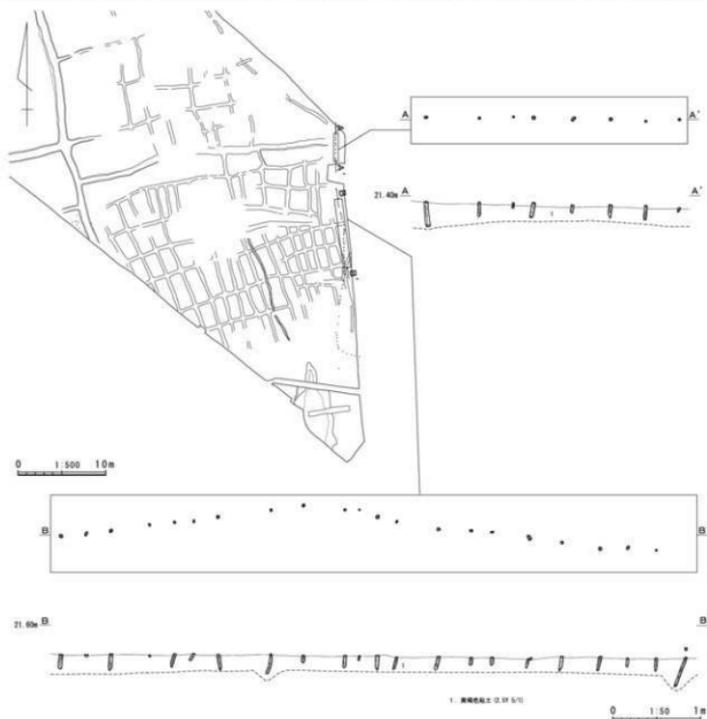
**SK 8**(第88図) A-2南区で横木を伴った杭列畔を検出した。SK 8はA-2区のSK601からB区南の

SK613まで繋がる延長85mに及ぶ大群である。東西方向の主要な大群といえる。群の構造は0.5～1m間隔に杭が並び、その北側に横木を配している。

群の覆土よりS字襷の口縁部が出土した(第114図262)。杭列や横木は建築部材を再利用したもので、面調整の手斧痕や納孔のあるものが目立つ。群の北側で四穴田下駄が2点見つかった(『寺家前II』第108図706・707)。このほか有頭状の加工のある製品(同書704)や建築部材の一部(同書705)が出土している。出土品から見て群の年代は弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えている。

**SK611**(第99図) SK611はA-2南区で検出した杭列である。SK8の東側から西に向かい、途中で90度曲がって南下する。杭材は丸木の短いもので、打ち込み間隔は広い。南下した方向の先にあるSK614と構造がよく似ていることから一連の杭列と思われる。年代はSK8よりも新しい時期の杭列であろう。四穴田下駄が1点出土している(『寺家前II』第103図643)。

**SK6**(第89図) 群SK6はB区南の中央で検出した東西方向の大群である。群の延長は30mほどある。群の西端からほぼ直角方向に南へ延びる群SK612が繋がる。群SK6は東列に矢板を多く伴って



第87図 SK614実測図

いる。また南東方向に杭列が伸びていたことから拡張区を設定して調査した。出土土器は土師器が主体、弥生土器もある。土器から群SK 6の年代は弥生時代後期末～5世紀代と考えられる。群SK 6の横木には建築部材の柱（イヌマキ属）を転用した木製品が使われていた（『寺家前Ⅱ』第104図647）。矢板は建築部材として使われた板を再利用したもので、すべてスギ材である。面調整の手斧痕や柄孔のある板が多く、0.5mから0.8m前後の長さで、0.9mを超えるものもある。

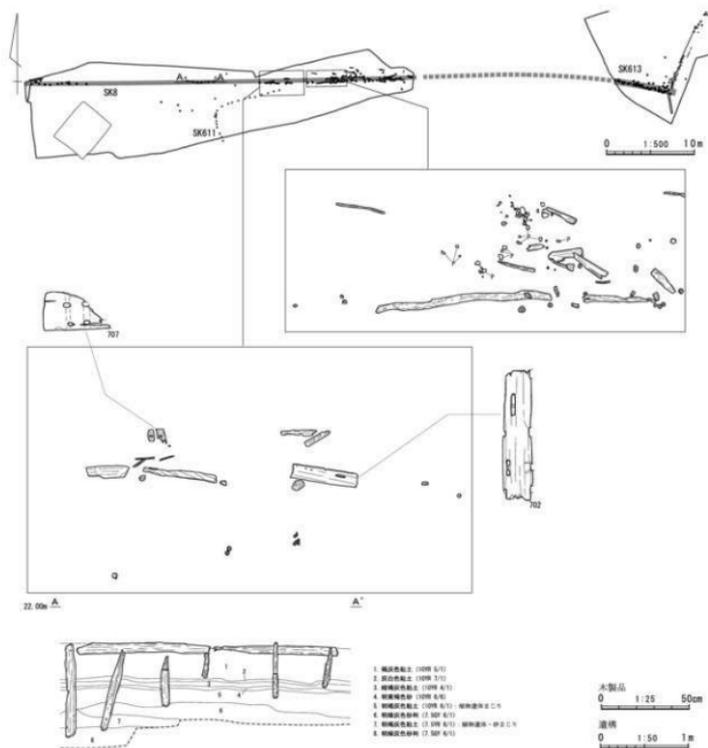
**SK 7**（第89図） B区南で検出した東西方向の杭列である。杭列はSK612やA-2南区のSK 8と重複する部分もあるが、おそらくA-2南区のSK611やA-2区のSK6に繋がる杭列であろうと考えている（『寺家前Ⅱ』第103図参照）。杭列はいずれも丸木を使った短い杭が広い間隔で打ち込まれている構造をもつ。若干上層で検出しているため、周囲の杭列群よりも新しい時期の杭列と見ている。

**SK612**（第89図） B区南の西側で検出した杭・矢板列を伴う群である。北東から南西方向へ20mほど延びている。北端はSK 6と繋がり、途中でSK 7やSK613との交点がある。杭列の間隔は広く、所々に矢板が打ち込まれている。南端の杭列は部分的に2列になっており、その間には長さ3.9mほどの横木がある。SK613の交点に近い杭列の間から小型の丸底埴（第133図563）や大型の打製石斧（『寺家前Ⅱ』第116図760）が出土している。杭や矢板は建築部材を再加工したものが多く、柄孔や切り欠きが残っている。時期の決め手になる出土品は小型丸底埴で古墳時代初期のものである。しかし同じ標高値で大型の打製石斧が出土していることから、これを同時期のものととらえるべきか判断しかねる。

**SK613**（第89図） B区南の調査区西端で検出した杭列を伴う群である。ほぼ東西方向に延び、SK 6と並行している。SK613の東端はSK612と繋がる。西端は調査区外に出るが、A-2南区のSK 8と同じ群であろう。A-2区のSK601からの延長は85mに及ぶ。杭と横木で構成された群で、杭列はかなり密集し、所々に矢板が打ち込まれていた。杭・矢板は建築部材を再利用したもので、手斧や柄孔の痕跡が残っている。出土遺物はSK612との交点近くで打製石斧1点（『寺家前Ⅱ』第116図761）、四穴田下駄1点（同書第107図683）がある。

**SX610**（第51・89図） SX610は東西方向に並ぶ杭列群SK 6の南側に位置する遺構である。東西の幅は最大5.8m、南北方向は7.0mほどある。現地調査では中世の土坑という所見で調査されているが、出土土器等からみて中世の遺構ではないことがわかっている。遺構の北側にある杭列SK 6は自然木の丸杭や建築廃材から再加工した割杭が並び、所々に矢板を打ち込んでいる。一部には杭列に平行した横木が残っていることから東西方向の大群であった可能性が高い。SX610は杭列の辺りから南側へ落ち込む不定形な溝状を呈している。縁の立ち上がりは全てあるわけではなく南壁側に入りこんでいるため、土坑というよりは不定形な落ち込みとしたほうが適切であろう。あるいはSX610は人工的な遺構ではなく、自然の地形による起伏と考えられる。SX610が位置するB区南では杭列を伴う群が数列確認されているが、地形は杭列を境に大きく南側へ下がっている（第12図）。またA-2南区の端で検出したSX605は当初、土坑状の遺構との所見であったが、SX610と同様に不定形である。A-1区南端も流路とともに標高値も下がっていく。このように周辺の地形から勘案すると、SX610の位置から南へ低地がさらに大きく下がっていく自然地形なのであろう。つまり群SK 6辺りが水田域の南縁部といえるのではないだろうか。

SX610覆土内から出土した遺物は土師器・弥生土器と山茶碗も少量混じる。そのほかに鉄刀が付いたほぼ完形の鎌などの木製品がある。土師器の坏は遺構検出面付近で出土したもので、底面よりも0.3mほど上層である。遺構の底部に近いところから出ている土器は、弥生時代後期末の壺型土器などの破片が主体である。柄付き鉄製鎌はSX610の底部に近いところで出土した（図版50）。鎌の後主面側が上面向き、鎌刃が遺構の縁に近い方、鎌柄の末端は南側に向いていた。このほかの木製品は楕円形の刺り物（『寺家前Ⅱ』第113図742）や大型の槽（同書743）、杭（同書744）などが出土している。遺構図や出土状

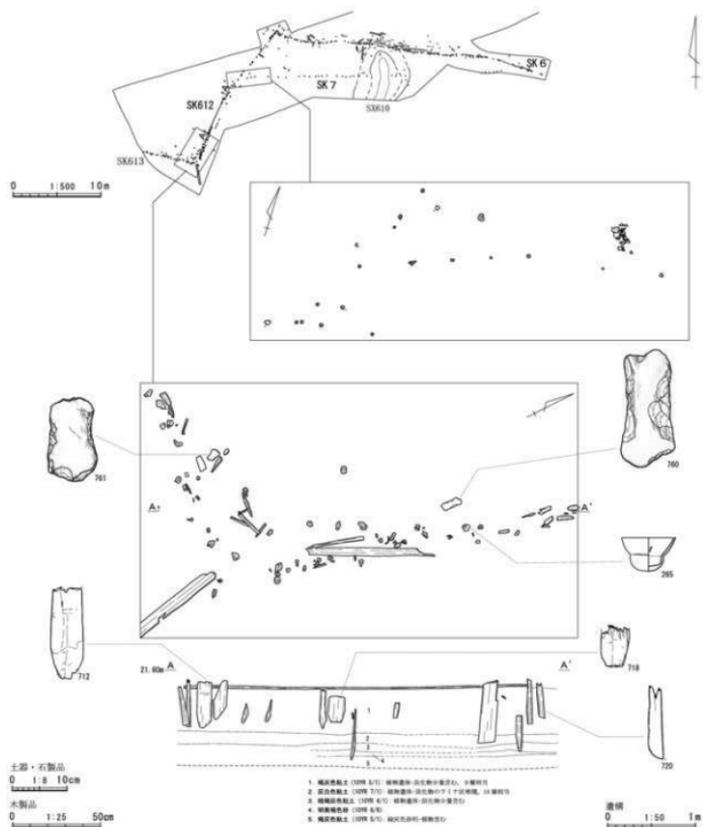


第88図 SK B実測図

況写真、あるいは座標値などを見る限りでは、土師器や大型の槽は上層から出土しており、柄付き鉄製鎌と同じ標高で出土しているのは楕円形の刺り物と弥生時代後期末に属する土器破片だけである。共存する木製品も弥生時代後期以降に静岡平野でよく見られる形態の製品とよく似ている。この出土状況から考えると、底面近くで出ている柄付き鉄製鎌は弥生時代後期末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

### 註

1 少なくとも弥生後期、特にその後半段階に、平野部に営まれた集落の周辺で水位の上昇が推定できる地域は少なくない。登呂遺跡の南にある有明遺跡ではこうした現象が明らかに認められているし、掛川市街地を取り巻く地域では、後期後半の集落の多くが台地の上に移動していることは、こうした周辺環境の変化を反映したものでだろうと推定している。



第 89 図 SK612 実測図

2 台地の上に営まれた集落でも平地式の住居跡なのか堅穴住居跡なのか明らかにしていないものがある。もちろん後世の変形を考慮しなければならないが、台地上であっても平地式の形態を取ることは十分考慮しておく必要があろう。地下に粘土質の土層を持つ場合、外側に深く溝を掘っても居住部分は堅穴住居跡にしていなくてもその存在を考慮する必要がある。こうした住居跡 (B 類) の出現を「住居の防湿効果」に求めていることを考えると、丘陵上の堅穴住居跡でも、その周辺の土層の状況を観察する必要があろう。

3 衣原遺跡 3 区 (No.83 地点) で石切り場跡が見ついている『衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古宮群 (第 1 分冊)』(2010) 第 3 章第 3 節 2)。

## 第3章 出土遺物

### 第1節 遺物の概要と出土状態

#### 1 遺物の出土状況

弥生時代の遺物は後期後半の土器が大半を占める。遺跡が集落域と低地、水田域からなることは既述の通りだが、低地、水田域から出土した土器は少なく、大半は集落域から出土した。

集落がある微高地では、弥生時代の包含層が薄いことと、遺構の切り合いが複雑であったため、住居跡の検出は難航を極めた。住居跡の掘りこみ面は既に失われており、床面付近が残っていたにすぎない。床面の残りも良好ではなく、壁溝の検出により住居跡の輪郭を把握するのが精一杯で、それでも輪郭の全体を検出できたものは皆無であった。

このような状況であったため、住居跡の床面で出土した遺物を除いて、確実に住居跡に伴うと判断できた遺物は少ない。したがって、遺構検出以前に包含層掘削で出土した遺物の中に、住居跡に含まれていた遺物が相当数含まれていると思われるが、遺構単位での分離は不可能であった。

これに対して溝や自然流路のように深さのある遺構では、遺物が良好に残っており、特にSR6400からは弥生時代後期後半の一時期に収まるとされる一括遺物が出土した。ただ、包含層出土の土器を含めて全体的に風化が進んでおり、文様や調整痕の観察が困難なものが多い。

弥生時代後期後半の土器と古墳時代初頭の土器が混ざって出土している上に、両者の分類が困難な土器も多いため、ここでは弥生時代後期後半の土器～古墳時代前半の土器を一括して報告する。

#### 2 土器の分類

土器のほとんどは弥生時代後期後半の菊川式に属すると考えて良く、一部、器形や調整技術の点で、登呂式の要素が見られる土器が含まれており、両者の折衷土器といったものも出土している。

器種の構成は壺と台付甕が主体で、高坏が極めて少ない特徴がある。したがって、ここでは壺と甕の分類を示しておく。

##### (1) 壺の分類

広口壺

複合口縁壺 (有文 無文)

折り返し口縁壺 (有文 無文)

単純口縁壺 (有文 無文)

受口壺 (有文 無文)

##### (2) 甕の分類

台付甕

折り返し口縁台付甕 (有文 無文)

単純口縁台付甕 (有文 無文)

S字甕

文様には刻み目、柳描文(波状文、扇形文など)、木目沈線、縄文などがあり、一部には文様を意識した刷毛目も見られるが、ここでは分類を設定せずに個別に記載する。また、上記とは分類基準が異なるが、壺、甕ともに模造品の一群が存在する。

## 第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の土器

### 1 住居跡出土土器

#### SB202 出土土器 (第90図1・2)

1は複合口縁壺で、口縁部外面に粘土帯を貼り付けて拡張してある。2は複合口縁壺の口縁部で、内湾する特徴がある。1・2とも風化のため調整痕は不明である。

#### SB209 出土土器 (第90図3～6)

3は複合口縁壺である。口縁部外面に棒状浮文を貼り付けてあり、口縁端部を面取りした後、刺突文を施している。4は広口壺で、口縁部は頸部で屈曲して外反している。5は広口壺の頸部～口縁部で、頸部から口縁部にかけて緩やかな弧を描きながら外反している。口縁部の形態は折り返し口縁になっているが、口縁部外面に貼り付けた粘土帯が薄いため、口縁部は大して厚くなっていない。6は台付甕の台で、脚がやや外反しながら広がっている。内面はなでて仕上げていると思われる。

#### SB215 出土土器 (第90図7・8)

7は広口壺で、胴部下半に最大径がありながら、球胴ぎみの胴部で、胴部～口縁部にかけて緩やかな「S」字カーブを描いている。口縁部は折り返し口縁になっており、口縁端部は面取りしてある。風化のため、調整痕は不明だが、肩の内面に粘土の接合痕が残っている。胴部下半に屈曲がなく、胴部上半～口縁部を連続成形していると考えられる点で、登呂式の特徴が見られる。8は壺の胴部で、胴部下半に最大径があり、胴部下半の粘土接合部分に屈曲がある。風化のため調整痕は不明である。

#### SB218 出土土器 (第90図9・10)

9は住居跡の柱穴 SP6445から出土した壺の胴部下半～底部である。胴部下半に屈曲部があり、屈曲部から上に胴部が直立している。屈曲部をわざわざ厚さが大きく変わっていることから、屈曲部の上下で製作工程が異なるか、屈曲部上げを別々に作ってから両者を接合していると思われる。胴部上半を欠損しているが、胴部上半が大きく広がらないと考えられることから、小型の壺と思われる。調整痕は風化のため不明である。10は壺の底部で、若干突出した底部になっている。外面の一部に刷毛目がわずかに残っている以外は、風化により調整痕は不明である。

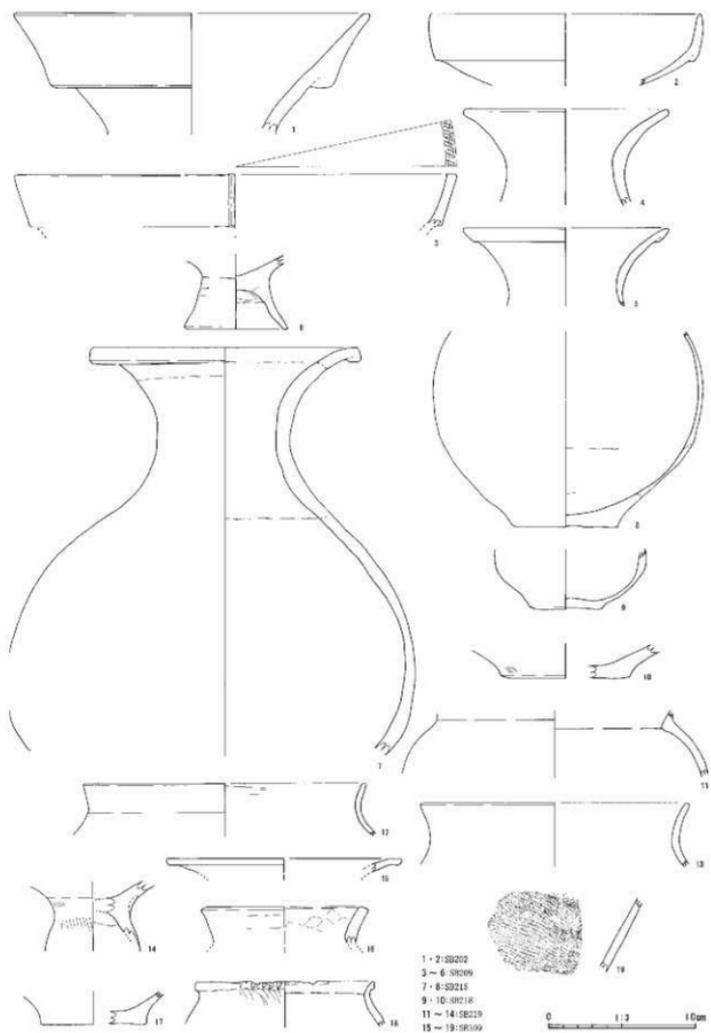
#### SB219 出土土器 (第90図11～14)

11は甕で、頸部が90度程度屈曲している。口縁部は欠損しているが、頸部に比べて半分程度の厚さになっている。調整痕は風化のため不明である。12は甕の頸部～口縁部で、頸部は緩やかな弧を描き、口縁部は直線的に外反している。調整痕は風化のため不明である。13は甕の頸部～口縁部で、頸部が緩やかな弧を描きながら口縁部が外反している。調整痕は風化のため不明である。14は台付甕の甕と台の接合部分で、脚はやや内湾すると思われる。外面の一部に刷毛目が残っている以外、調整痕は不明である。

#### SB309 出土土器 (第90図15～19)

15は住居の床面で出土した広口壺の口縁部で、端部は水平になるほどに外反している。風化により調整痕は不明である。16は単純口縁壺の口縁部で、あまり外反していない。全体をなでて仕上げている。内面には工具の当たりと思われる痕跡がある。口縁端部はなでて面取りしてある。17は壺の底部で、突出している。調整痕は風化のため観察できない。18は単純口縁壺の口縁部～頸部付近で、頸部が屈曲して口縁部が短く外反している。口縁端部はなでて面取りした後刻み目を入れてある。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、外面に粗い刷毛目が残っている。

19は甕の胴部の破片で、断面の傾きは推定である。外面に斜め方向の調整痕が見られる。調整痕は、条が広く条間が狭い特徴があり、通常の刷毛目とは異なる。



第90図 住居跡出土土器実測図1

**SB310 出土土器** (第91図20～22)

20は広口壺で、折り返し口縁になっている。折り返し部分の断面は四角形になるように仕上げられており、口縁部外面には棒状浮文が付けられている。21は壺の胴部下半で、底部との接合部分ではずれている。内面には右から左に向かう刷毛目が見られる。22は壺の頸部～口縁部で、床面から出土した。頸部が屈曲して口縁部が外反している。口縁部の形態は単純口縁で端部を面取りしてあるように見える。

**SB311 出土土器** (第91図23)

23は広口壺で、折り返し口縁になっている。口縁端部は面取りしてある。

**SB313 出土土器** (第91図24～26)

24は壺の胴部で、胴部下位に見られる粘土の接合部分で屈曲している。一部に刷毛目が残っている。25は壺の肩で縄文施文後に円形浮文を付けている。縄文の撚りの方向は不明で、調整痕も見えない。26は壺の底部付近で、底部との接合部分で外れている。外面の一部に刷毛目が残っている。

**SB314 出土土器** (第91図27・28)

27は鉢の口縁部で、波状口縁になっている。器形と黒っぽい胎土から、縄文土器の可能性もあるが、住居跡が縄文時代のものとは考えられないため、縄文土器とすれば流れ込みである。28は台付甕の底部と台の接合部分である。台の部分は剥離して残っていないが、台が剥離したことによって、甕と台の接合部分に粘土帯を貼り付けて両者を接着させたことが読み取れる資料である。

**SB317 出土土器** (第91図29・30)

29は広口壺で、水平に近くなるまで外反した口縁部は折り返し口縁になっている。口縁部外面に貼り付けた粘土を下方に狭み出すようになっているため、折り返し部分の断面は三角形になっている。内面の一部に横方向の刷毛目が残っている。30は甕で、頸部が屈曲して口縁部が直線的に外反している。口縁部外面には小さな刻み目が入っている。外面の一部に刷毛目が残っている。

**SB319 出土土器** (第91図31・33)

31は甕で、頸部～口縁部が緩やかな弧を描きながら外反している。口縁端部は面取りしてあり、頸部と口縁部の接合痕も観察できる。33は高坏で、脚部が緩やかに外反し、穿孔がある。外面に磨きと思われる痕跡が残っている。これは古式土器の可能性もある。

**SB321 出土土器** (第91図32・34)

34は広口壺で、床面から出土した。口縁の形態は折り返し口縁である。折り返し部分の断面が四角形になるように仕上がっている。32は壺の底部付近で、床面から出土した。底部との接合部分で外れている。外面に縦方向の刷毛目が残っている。

**SB325 出土土器** (第91図36・37)

36と37は台付甕の底部で、台は欠損している。風化が進んでいるため、調整痕は不明である。

**SB331 出土土器** (第91図35)

35は甕で、器壁が薄く、頸部が鋭く屈曲している。内外面ともなで仕上げられているが、頸部の屈曲部分ではなでることができないため、なでる前に付けた刷毛目と原体の当たりが残っている。

**SB335 出土土器** (第91図39)

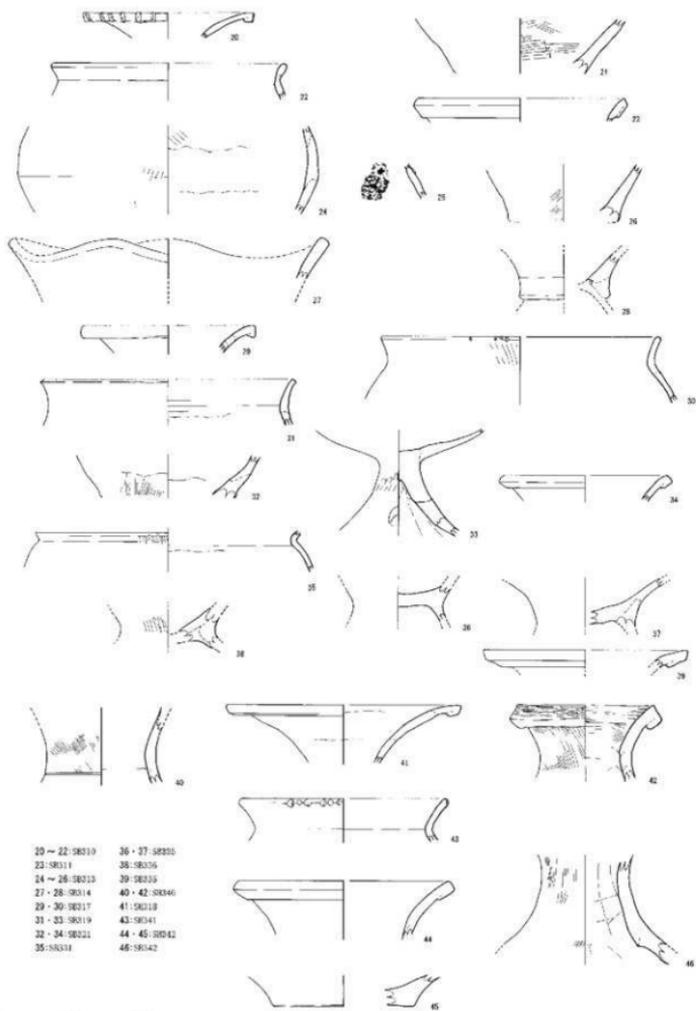
39は広口壺で、折り返し口縁になっているが、口縁部はあまり厚くなっていない。

**SB336 出土土器** (第91図38)

38は台付甕の甕と台の接合部分で、接合部分の外面には縦方向の刷毛目が見られる。

**SH218 出土土器** (第91図41)

41は広口壺で、破片からの復元であるため、頸部はもう少し太くなるかもしれない。水平に近いほどに広がった口縁部は折り返し口縁になっている。風化が進んでいるため、調整痕は不明である。



第91図 住居跡出土土器実測図2

**SH340 出土土器** (第91図 40・42)

40は壺の頸部で、頸部と口縁部の境界が屈曲している。頸部下端に沈線が入っており、内面には沈線を入れたあたりに粘土の接合痕があることから、頸部と肩の境界を意識して付けられた区画沈線と思われる。42は壺で、頸部は内傾しながら直線的に立ち上がっており、粘土の接合部分で弱く屈曲して口縁部が外反している。口縁部の外反は弱い、頸部との接合部分で屈曲している点に特徴がでている。口縁部は折り返し口縁になっており、口縁端部は横方向の刷毛目調整で面取りしてある。粘土帯外面には粘土帯を接着させた時の指頭痕跡が残っている。外面には粘土帯を貼り付ける前の刷毛目調整が見られる。口縁部内面には横方向の刷毛目残り、頸部内面には、粘土の接合痕が残っている。

**SH341 出土土器** (第91図 43)

43は甕で、90度ほど屈曲した頸部から口縁部が直線的に外反している。口縁端部は面取りしてあり、この面取りによってできた稜線上には、角のある工具を押し当てた刻み目がある。

**SH342 出土土器** (第91図 44・45)

44は広口壺で、折り返し口縁になっている。折り返し部分に貼り付けた粘土帯が薄いため、口縁部はあまり厚くなっていない。口縁端部は面取りしてある。45は壺の底部で、底部が突出している。

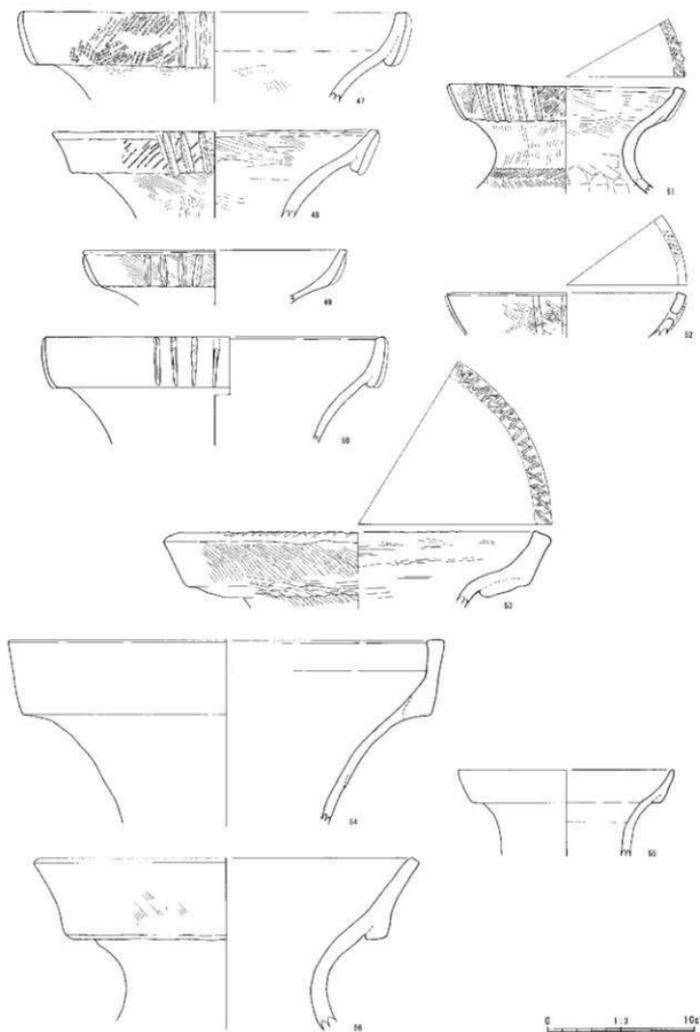
**SB342 出土土器** (第91図 46)

46は壺で、肩と頸部の境界に粘土の接合痕残り、その部分を境界に器壁の厚さが大きく変化している。外面には縦方向の刷毛目が残っている。内面はなでて仕上げているが、粘土の接合痕が残っている。住居跡の床面で出土した土器だが、この土器は弥生時代中期にさかのぼる可能性がある。

**2 流路跡出土土器****SR6400 出土土器****広口壺(複合口縁)** (第92図)

47は口縁部外面にLRの縄文を施文後、棒状浮文を付けている。口縁部直下の外面に、口縁部外面に粘土帯を貼り付ける前の刷毛目がある。内面はなでて仕上げているが、一部に刷毛目が残っている。

48は口縁部外面にLRの縄文を施文後、棒状浮文を付けている。口縁直下の外面には粘土帯を貼り付ける前に付けた刷毛目があり、頸部に近い部分には縦方向の磨きが見られる。内面は横方向に刷毛目調整した後になでているが、刷毛目が残っている部分が多い。49は口縁部外面に刷毛目調整後、棒状浮文を付けている。50は口縁部外面に棒状浮文を付けてある。51は口縁部外面に細かい摺りのLR縄文を施文後、棒状浮文を貼り付けている。口縁端部にも同様のLR縄文がある。頸部には縦方向の刷毛目が残っており、肩には木目沈線が巡り、その下位に羽状刺突文がある。口縁部内面には横方向の刷毛目があり、頸部内面には、板を使ったと思われるなどの痕跡、胸部内面には指頭圧痕が残っている。52は口縁部外面に縄文を施文後、棒状浮文を貼り付けている。口縁端部は面取りの後、刷毛目の原体を使ったと思われる刺突文がある。口縁部には穿孔がある。53は口縁部外面に貼り付けた粘土帯の下面に、粘土帯を密着させた時の指頭圧痕がほぼ等間隔で残っている。口縁端部には、なでて面取りした後、櫛状工具が刷毛目の原体を使った刺突文が施文されている。刺突文には「X」字状や「N」を左右逆にしたような形が見られる。頸部外面には粘土帯を貼り付ける前の刷毛目がある。内面は工具を使ってなでているらしく、工具痕が付いている。54は、単純口縁に粘土を継ぎ足して口縁部を上方に拡張している。拡張部の内面はなでて内湾しているのに対して、拡張部の外面はなでて平坦にしてある。55は小型の広口壺で、複合口縁だが、拡張部分は小さい。調整は内外面ともになでて仕上げている。56は、頸部が弧を描くように屈曲している。口縁部は複合口縁だが、拡張部が内湾せず頸部の外反をそのまま延長したように外反している。口縁部外面に斜め方向の刷毛目がわずかに残っている。



第92図 流路跡 SR6400 出土土器実測図1

## 大口壺（折り返し口縁）（第93～95図）

第93図57は、折り返し部分に粘土帯を二本重ねて貼り付けている。口縁端部を斜め方向の刷毛目調整で面取り後、棒状浮文を付けている。棒状浮文は6本が一単位になっていると思われる。口縁部直下の外面には斜め方向の刷毛目があり、頸部は刷毛目調整の後でなでている。口縁部内面にはLRの端末結節縄文を羽状に施文してある。その下、頸部内面には横方向の刷毛目の後でなでた痕跡がある。

58も折り返し部分に粘土帯を二本重ねて貼り付けている。口縁端部にはRLの縄文を施文した後棒状浮文を付けている。外面は刷毛目調整の後でなでているが、刷毛目が残っている部分が多い。口縁部内面は端部に近い部分をなでて面を作り、その面にRLの縄文を施文し、その下位に端末結節縄文を施文している。縄文は羽状になるように施文してある。

59の口縁部は水平を通り越して端部が垂れ下がるほどに外反している。口縁部外面に貼り付けた粘土帯を下方に擴まみ出すようになでているため、粘土帯の断面が三角形になっている。口縁部外面には棒状浮文を付けてある。外面には斜め方向の粗い刷毛目がある。口縁部内面にはRLの羽状縄文が施文されており、縄文の下位には斜め方向の粗い刷毛目がある。

60は口縁端部を面取りした上に棒状浮文を付けてある。口縁部内面には撚りの細かいLRの端末結節縄文を施文してある。61は折り返し部分に貼り付けた粘土帯が太く、口縁部が2倍以上の厚さになっている。口縁端部をなでて面取りした後、棒状浮文を付けている。口縁部内面には撚りの細かいRLの端末結節縄文を施文してある。縄文は2段施文されており、2段目の結節部は、欠損のため確認できないが、1段目と2段目が同じ原体であることから、2段目も端末結節縄文と思われる。

62の口縁部は水平に近くなるほどに外反している。口縁部がやや厚くなっているため、外面に粘土帯を貼り付けて折り返し口縁にしていると思われる。口縁部外面には棒状浮文を付けてある。口縁部内面にはLRの縄文を施文してある。調整は内外面ともになでである。

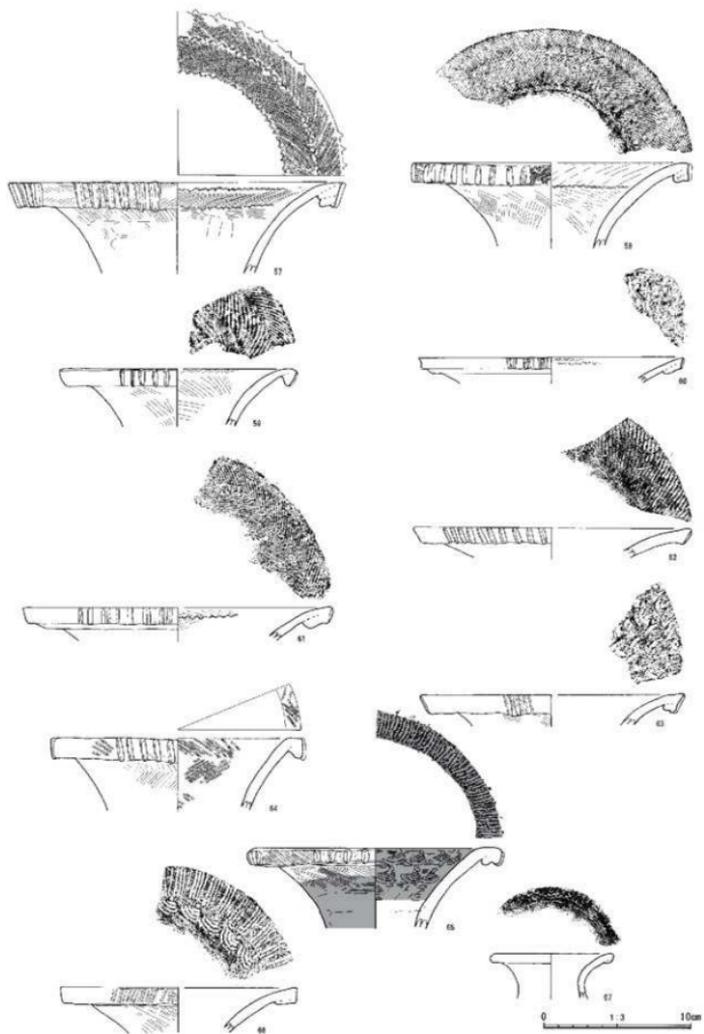
63の口縁部は水平に近い程に外反しており、口縁部外面に貼り付けた粘土帯には、密着させた時の指頭圧痕が残っている。そして、口縁部外面をなでて面取りした後、棒状浮文を付けている。口縁部直下には、棒状浮文を付ける前の刷毛目調整がある。口縁部内面には扇形文が少なくとも4列確認できる。

64の口縁部は逆「ハ」の字状に外反している。折り返し部分に貼り付けた粘土帯は大きく、粘土帯を下方に擴まみ出すようになでているため、折り返し部分の断面が三角形になっている。口縁端部はなでて面取りした後、RL縄文を施文し、その上に棒状浮文を貼っている。口縁部直下の外面には斜め方向の刷毛目が見られる。口縁部内面には、なでて面取りして水平になった部分にRLの縄文を施文してあり、その下位に羽状縄文を施文してある。さらに頸部に近い部分にもRLの縄文を施文している。

65の口縁部は水平を通り越してやや垂れ下がるほどに外反している。口縁部外面に貼り付けた粘土帯には、密着させたときの指頭圧痕が残っている。口縁端部は斜め方向の刷毛目調整の後、棒状浮文を付けている。外面の調整は斜め方向の刷毛目で、頸部は刷毛目の後でなである。口縁直下の内面をなでて平坦面を作った後、櫛描き文を入れている。その下位には扇形文を二段施文してある。内面調整は、口縁部付近が横方向の刷毛目で頸部はなであるが、粘土の接合痕が残っている。

66の口縁外面に貼り付けた粘土帯はなでつけられたらしく、つぶれて広がったようになっている。口縁端部には櫛状工具による刺突文がある。口縁部外面には粘土帯を貼り付ける前の刷毛目調整が残っている。口縁部内面には櫛状工具による押し引き文と扇形文がある。これは口縁端部にある刺突文と同じ工具を使っていると思われる。

67は小型の壺と思われる。頸部が屈曲して口縁部が大きく外反している。口縁部外面に細い粘土帯を貼り付けて折り返し口縁にしてある。外面はなでて仕上げた。内面はなでて仕上げた後に、口縁部内面に櫛状工具で波状文を施文している。

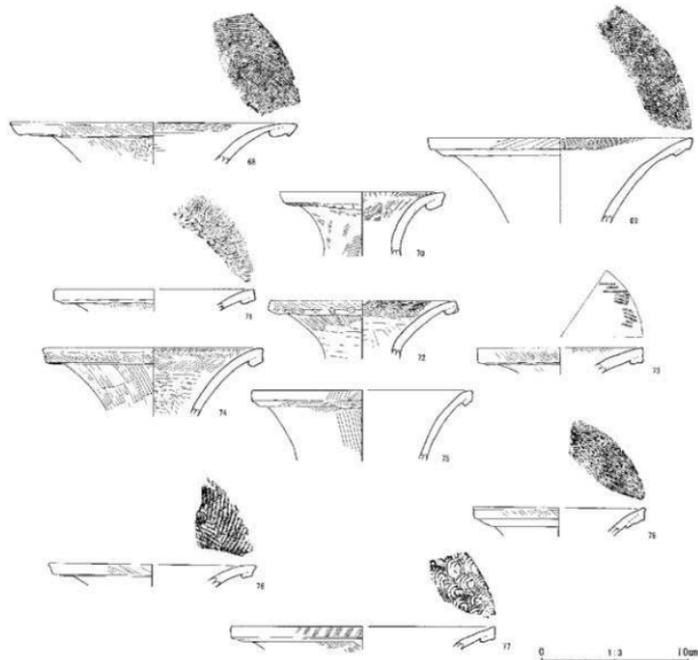


第93図 流路跡 SR6400 出土土器実測図2

第94図68の口縁部は水平に近いほど外反している。口縁部外面に貼り付けた粘土帯には、粘土帯を口縁部外面に密着させた時の指頭圧痕が残っている。口縁端部は斜め方向の刷毛目によって面取りしてある。口縁部直下には刷毛目調整がある。この刷毛目が口縁部外面の粘土帯の下に潜り込んでいることから、粘土帯を貼り付ける前に刷毛目調整していたことが分かる。そして、刷毛目調整の後に磨いた痕跡がある。口縁部内面には撚りの細かい丸の縄文が施文されており、その下位はなでで仕上げられているが、一部に横方向の刷毛目が残っている。

69の口縁端部は斜め方向の刷毛目調整によって面取りしてある。外面は刷毛目調整の後でなでで仕上げている。口縁部内面には撚りの細かい丸の端末結節縄文を施文してある。

70は頸部と口縁部の境界に弱い屈曲がある。頸部と口縁部の境界に粘土の接合痕は見えないが、頸部に粘土を継ぎ足したところで器壁の方向を変えて口縁部を外反させていると思われる。口縁部外面に貼り付けた粘土帯には、刷毛目の原体による刺突文が施文されている。外面から見やすい口縁端部が無文で、口縁部の外反によって見えにくくなった折り返し部分に文様を入れていることになる。頸部外面には縦方向の刷毛目があり、口縁部直下には原体端部の当たりがある。口縁部内面には刷毛目の原体による刺突文が放射状に並んでいる。口縁部直下には横方向の刷毛目があり、その下位はなでである。



第94図 流路跡 SR6400 出土土器実測図3

71 は口縁部外面に貼り付けた粘土帯に密着させた時の指頭圧痕が残っている。口縁端部はなでて面取りしてある。口縁部外面にある刷毛目は、口縁部外面に貼り付けた粘土帯の下に潜り込んでいることから、粘土帯を貼り付ける前に刷毛目調整を行っていたことになる。口縁部内面には、外面に付けられた刷毛目とは異なる原体による施文がある。特徴は条が広く条間が狭いことと、条間に原体が当たっていることである。条間に原体が当たっていることから、櫛状の工具ではない。また、条が広く条間が狭いことから、木の年輪による刷毛目とも異なるようである。

72 は口縁端部と口縁外面に貼り付けた粘土帯をなで分けることで、口縁部外面に稜線を作り出し、その稜線上に刻み目を入れている。刻み目には刷毛目の痕跡が見られることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。口縁直下の外面には、粘土帯を貼り付ける前に付けられた斜め方向の刷毛目、頸部には横方向になでた痕跡が残っている。口縁部内面には櫛状工具による波状文が施文されており、その下位は刷毛目調整の後でなでて仕上げている。

73 は口縁端部を斜め方向の刷毛目調整によって面取りしてある。口縁内面にはRLの縄文が施文されているが、風化により失われた部分が多い。口縁部外面には斜め方向の刷毛目がわずかに残っている。

74 は口縁端部を斜め方向の刷毛目調整によって面取りしてある。口縁部直下の外面には、粘土帯を貼り付ける前に付けられた斜め方向の刷毛目が残っているが、目が非常に細かいことから、板によるなでかもしれない。口縁部内面には、刷毛目の原体を押し当てたとと思われる羽状刺突文が巡っている。羽状刺突文の下位には、斜め方向の刷毛目があり、さらにその下位には磨いた痕跡が残っている。頸部内面を磨くのは珍しい例であろう。

75 は口縁部外面に粘土帯を貼り付け、口縁端部と口縁部の外面を刷毛目調整によって面取りしている。そのため、口縁部の折り返し部分の断面が四角形に仕上がっている。外面の口縁部直下には刷毛目調整が見られる。この刷毛目は粘土帯の下に潜り込んでいることから、粘土帯を貼り付ける前に行われた調整である。その下位には縦方向の刷毛目がある。内面はなでて仕上げている。

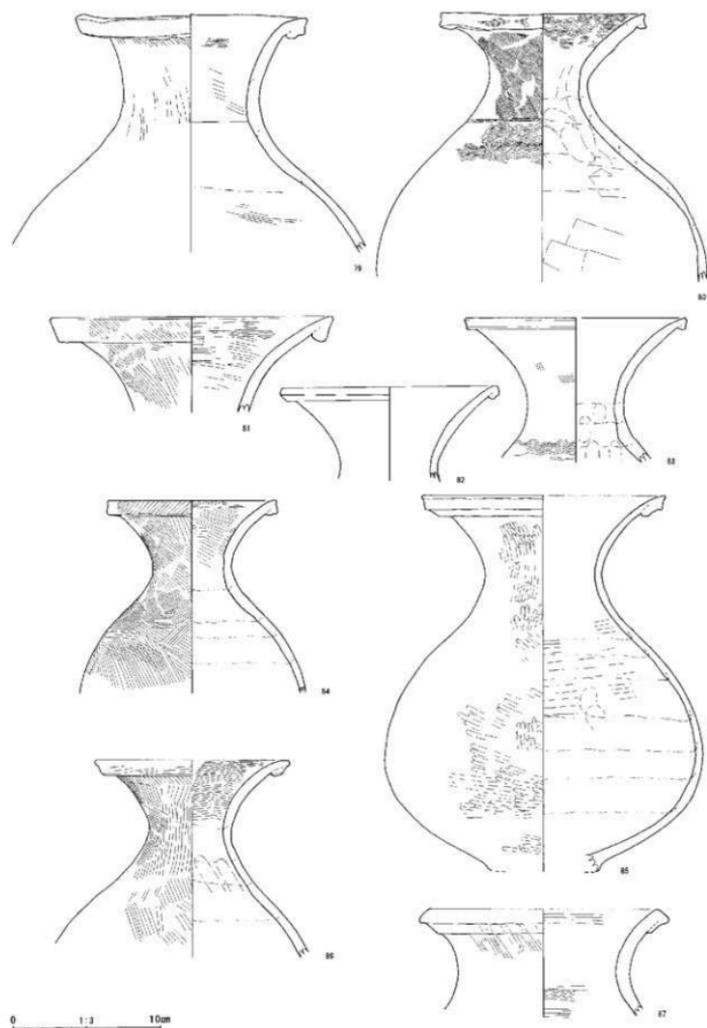
76 は口縁端部を刷毛目調整によって面取りしてある。口縁部内面にはRLの羽状縄文を施文してある。

77 は端部をなでて面取りした後、刻み目を入れている。刻み目に刷毛目が見えることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。口縁部内面には櫛状工具による扇形文を施文してある。

78 は口縁端部を刷毛目調整によって面取りしてあり、口縁部直下はなでて仕上げている。内面にはRLの端末結節縄文を施文しており、縄文の下位には刷毛目調整が残っている。

第95図79は肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、ここで器壁が外湾して頸部が立ち上がっている。頸部と口縁部の境界にも粘土の接合痕があり、ここで器壁が屈曲して口縁部が外反している。口縁部外面に貼り付けた粘土帯には、粘土帯を密着させた時の指頭圧痕が残っている。口縁端部はなでて面取りしてあるが、文様は確認できない。外面には、口縁部外面に粘土帯を貼り付ける前の刷毛目調整が残っている。頸部は風化のため調整痕を観察しにくい、縦方向に磨いているかもしれない。内面はなでて仕上げていると思われるが、横方向の刷毛目と粘土の接合痕が残っている。

80 は胴部が大きく膨らむ器形で、肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、その接合痕から器壁の向きを変えて頸部が直立している。口縁外面に貼り付けた粘土帯には、粘土帯を密着させた時の指頭圧痕が残っている。口縁端部は横方向の刷毛目調整によって面取りしてあるが、文様は確認できない。頸部と肩の境界に刺突による木目沈線を入れ、その下位に櫛描きによる波状文を3段入れている。また、口縁部内面にも櫛描き波状文が二段見られ、その下位には横方向の刷毛目が残っている。外面調整は、頸部に斜め方向の刷毛目が見られる。刷毛目調整は木目沈線で切れていることから、木目沈線が文様帯と無文部分の境界として引かれたことがうかがえる。胴部はなでて仕上げている。胴部下内面は工具を使って、反時計回りのらせん状になっている。肩～頸部の内面には指頭圧痕と粘土の接合痕が見られる。



第95圖 流路跡SR6400出土土器実測図4

81は折り返し部分に貼り付けた粘土帯は太く、断面は三角形に仕上がっている。口縁端部は斜め方向の刷毛目調整によって面取りしてある。外面には斜め方向の粗い刷毛目があり、内面にも横方向の刷毛目調整が見られる。

82は頸部と口縁部の境界に屈曲がある。粘土の接合痕は見えないが、ここで粘土をつないでいると思われる。折り返し部分は小さいが、口縁端部と口縁部外面をなでてあるため、折り返し部分の断面が四角形になっている。風化が進んでいるため、調整痕は不明である。

83は頸部内面に粘土の接合痕が残っていることから、肩から粘土を引き延ばして頸部を作るのではなく、肩に粘土ひもを接合して頸部を立ち上げて作っていることがわかる。これによって頸部に垂直の立ち上がり形成されている。頸部と口縁部の境界にも粘土の接合痕があり、この接合痕で器壁の向きが変わって口縁部が外反している。口縁部外面に貼り付けた粘土帯は細いが、粘土帯を下方に摘み出すようになっているため、折り返し部分の断面が三角形になっている。外面はなでて仕上げているが、一部に縦方向の刷毛目が残っている。肩には櫛掻きによる波状文が施文されている。内面には粘土の接合痕とともに指頭圧痕が残っている。

84はなで肩気味になっている。肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、接合痕をはきんで器壁の向きが変わり、頸部が直立して立ち上がっている。83と同様に、肩から粘土を引き延ばして頸部を形成するのではなく、肩に粘土ひもを接合して頸部を形成していることがわかる。口縁端部は斜め方向の刷毛目調整によって面取りしてある。外面はほぼ全面刷毛目調整で、口縁部、頸部、肩、胴部で刷毛目の向きが異なっていることから、部位によって刷毛目調整の工程が異なっていたことが分かる。内面は口縁部～頸部が刷毛目調整、肩～胴部がなでであり、粘土の接合痕が残っている。

85は肩が張らずに胴部下半が大きく張り出し、胴部下半に屈曲部は形成されていないため、球胴に近くなっている。胴部に比べると、頸部は太く短い。口縁部外面に貼り付けた粘土帯には、粘土帯を密着させた時の指頭圧痕が残っている。口縁端部はなでて面取りしてあるが、口縁端部を摘み出すようになっているため、端部が尖るように突出している。頸部外面には縦方向の磨きがあり、胴部上半には斜め方向の磨き、胴部下半には横方向の磨きがある。部位によって磨きの方向が異なっていることから、磨きの工程が異なっていたと思われる。手首の回転運動で磨いた場合、磨きの方向は斜め方向になるのが自然だが、頸部は縦方向に磨いていることから、これは土器の上下方向を意識して垂直方向に磨いたと思われる。口縁部～肩の内面はなでて仕上げであり、胴部上半の内面には横方向の刷毛目があるが、粘土の接合痕が残っている。胴部下半もなでているが、粘土の接合痕が消えきらずに残っている。球胴に近い胴部と太く短い頸部といった形態から、菊川式の新しい段階の土器と思われる。

86は肩が張らず、頸部と口縁部の境界に粘土の接合痕があり、この接合部で器壁が屈曲して口縁部が外反している。外面はほぼ全面刷毛目調整で、口縁部直下の刷毛目は粘土帯を貼り付ける前に刷毛目調整をしていたことが分かる。粘土帯を貼り付けた後も、口縁端部を横方向の刷毛目調整によって面取りしてある。頸部の刷毛目は器面に沿って縦方向に付ける特徴がある。手首の回転運動によって刷毛目を付ける場合、刷毛目は斜め方向になるのが自然であるが、頸部の刷毛目は垂直方向に付けてあることから、意図的に縦方向に刷毛目調整していると思われる。口縁部～頸部上半の内面は横方向の刷毛目があり、頸部下半より下はなでて仕上げであり、粘土の接合痕が残っている。

87は頸部が太く短く、頸部～口縁部は緩やかに弧を描いて外反している。口縁部外面に貼り付けた粘土帯には、粘土帯を密着させた時の指頭圧痕が残っている。口縁端部はなでて面取りしてある。口縁部直下には斜め方向の刷毛目があり、粘土帯の下に潜り込んでいることから、粘土帯を貼り付ける前の刷毛目調整とわかる。内面はなでて仕上げているが、一部に横方向の刷毛目が残っている。太く短い頸部から、菊川式の新しい段階の壺と思われる。

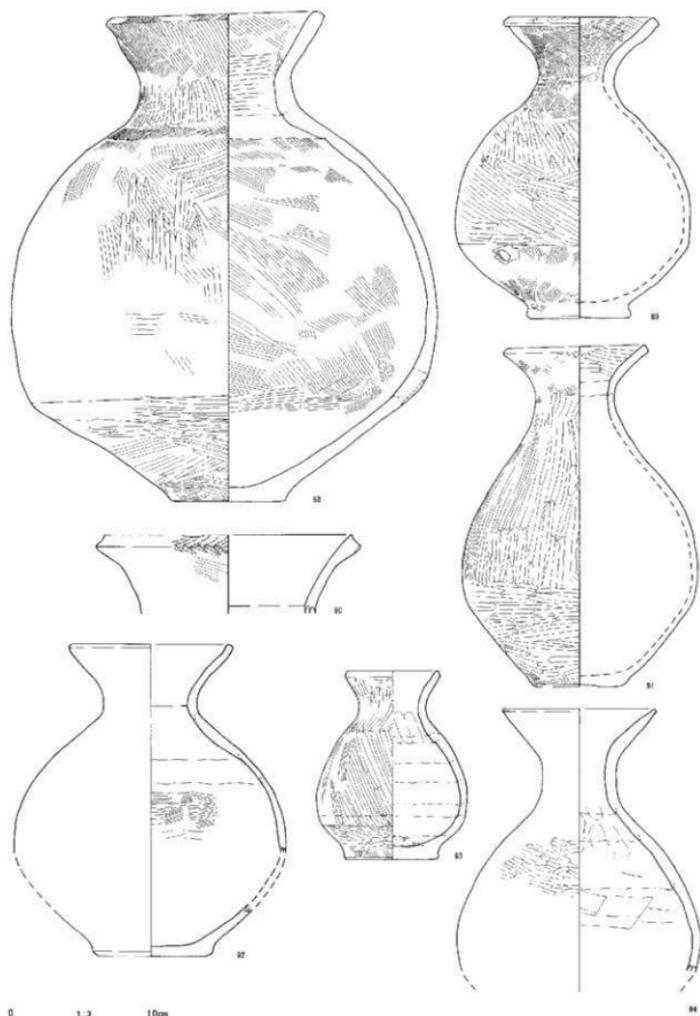
第100図121は小型の壺である。胸部は下半に最大径があり、胸部下半の粘土接合部分に屈曲部がある。頸部～口縁部は弧を描きながら外反している。口縁部外面に貼り付けた粘土帯を下方に摘み出すようになっているため、折り返し部分の断面が三角形になっている。そして、口縁端部に斜め方向の刷毛目調整によって面取りをした後、棒状浮文に似せた刻み目を入れている。刻み目は9本一単位になっている。頸部には刺突文が巡り、その直下に円形浮文が付いている。円形浮文は3個一単位になっている。円形浮文を付ける前に縄文を施文しているかもしれないが、風化によりはっきりしない。外面の調整は、口縁直下に斜め方向の刷毛目があり、頸部はなでて仕上げている。胸部は刷毛目がわずかに残っていることから、刷毛目の後でなでていると思われる。内面は、口縁部内部に羽状刺突文が3列施文されている。その下、頸部はなでて仕上げている。肩の内面には絞りと思われる痕跡が見られる。胸部内面のうち、屈曲部より上はなでてあり、屈曲部より下には刷毛目がわずかに残っている。

広口壺(単純口縁)(第96・97図)

第96図88は肩が張った球胴ぎみの器形で、胸部下半に屈曲部がある。肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、そこから頸部が立ち上がっている。頸部～口縁部が厚く、頸部は太く短いのが特徴である。底部はやや突出している。胸部下半に粘土の接合痕が残っており、ここに屈曲部が形成されている。この屈曲部より下は刷毛目調整の後、横方向に磨いて仕上げられており、屈曲部より上は斜め方向の刷毛目調整の後で磨いている。磨きの方向は胸部が縦方向、肩が斜め方向である。肩には櫛状工具を使ったと思われる刺突文があり、頸部には縦方向の磨きがある。口縁部外面には斜め方向の刷毛目がある。口縁端部はなでて面取りした後、櫛状の工具による刺突文がある。内面は、胸部屈曲部より下は横方向の刷毛目、屈曲部より上は反時計回り、らせん状に掻き上げる刷毛目がある。内外面とも胸部屈曲部をはさんで調整方向が変わることから、まずは底部から屈曲部までの胸部下半を作り、そこで器面を調整し、その後に粘土ひもを積み上げて胸部上半を作ったか、胸部上半と下半を別々に作ってから接合したと思われる。また、肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、その接合痕で胸部内面の刷毛目が切れていることから、胸部と頸部も別工程で作っていると思われる。頸部内面はなでて仕上げられており、口縁部内面には左斜めに掻き上げる刷毛目が見られる。このように、胸部下半の屈曲部形成と屈曲部をはさんだ作り分け、頸部の磨きによる仕上げといった菊川式の特徴をもった壺で、肩が張っている点と頸部が太く短くなっている点、胸部下半を磨いている点で、菊川式でも新しい段階のものと考えられる。

89は胸部下半に穿孔がある。胸部下半に最大径があり、最大径の辺りに屈曲部がある。頸部は弧を描くように屈曲し、口縁部は緩やかに外反し、端部付近がわずかに内湾している。底部は大きく突出している。口縁端部は刷毛目調整によって面取りしてある。口縁部～肩には斜め方向の刷毛目が見られる。頸部には刷毛目原体端部の当たりがある。胸部中央より上は縦方向に磨いてあり、胸部中央、屈曲部より上は斜め方向に磨いてある。屈曲部より下は刷毛目調整だけである。磨き、刷毛目ともに屈曲部を境に切れていることから、最初、底部から屈曲部までを作ったところで調整し、その後、粘土を積み上げて胸部を形成したか、屈曲部の上下を別々に作ってから接合したと思われる。口縁部内面～頸部内面には横方向の刷毛目が見られる。胸部内面は調整痕を観察しにくい、なでて仕上げていると思われる。これも胸部下半の屈曲部形成と屈曲部をはさんだ作り分け、胸部内面の全面で仕上げ、無文の頸部といった点で菊川式の特徴をもっているが、菊川式には底部の突出が大きい。

90は折り返し口縁にしていると思われるが、他の折り返し口縁の壺に比べると口縁の開きが小さい。口縁端部をなでて面取りした後、刷毛目の原体と思われる工具を押し当てて刺突文を付けている。その後、口縁端部の面取りによってできた口縁部外面の稜線上にも刻み目を入れている。刻み目には刷毛目と思われる痕跡が見られることから、これも刺突文と同様、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。口縁直下の外には斜め方向の刷毛目が残っている。内面はなでて仕上げている。



第96図 流路跡 SR6400 出土土器実測図5

91は肩が張らず、胸部が細長く、胸部下半に弱いながらも屈曲がある。胸部にはっきりした屈曲はない。頸部～口縁部は緩やかに弧を描きながら外反している。頸部に粘土の接合痕が残っているが、屈曲はしていない。口縁端部はなでて面取りしてある。底部は突出していない。口縁部外面～頸部外面は刷毛目調整しており、胸部上半は縦方向に磨いてある。胸部下半は横方向に磨いて仕上げている。底部付近は磨きが及ばなかったため、刷毛目が残っている。口縁部内面も磨いてあり、頸部より下の内面はなでて仕上げている。胸部下半に屈曲があり、その屈曲を境界に調整工程がはっきり分かれている点や、底部が突出していない点で菊川式の特徴をもっている。

92は肩がやや張る特徴がある。頸部下端に粘土の接合痕があり、そこから頸部が短く立ち上がり、口縁部が直線的に外反し、端部はわずかに内湾している。底部は突出している。口縁端部は面取りしてあると思われる。胸部内面には横方向の刷毛目と粘土の接合痕が残っている。菊川式の壺と思われるが、肩がやや張っている点と頸部が短い点で新しい要素がうかがえる。

93は小型の壺で、下膨れの胸部と胸部下半の屈曲に特徴がある。底部は突出している。頸部～胸部外面は磨いて仕上げているが、底部付近は磨きが及んでいないため、縦方向の刷毛目が残っている。磨きの方向は、胸部屈曲部より下は横方向、屈曲部より上は斜め～縦方向である。口縁部は内外面ともなでてあり、口縁端部はなでて面取りしてある。頸部～肩の内面には指でなでた痕跡が残っている。胸部内面はなでているが、粘土の接合痕が残っている。底部付近もなでて仕上げているが、一部に刷毛目が残っている。小型の壺であるが、菊川式の特徴をもっている。

94は胸部下半を欠損しており、頸部が長く、垂直に立ち上がっている。肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、接合部分から器壁の方向を変えて頸部を立ち上げている。口縁部は端部が薄くなっている。口縁部外面から頸部外面はなでてあり、胸部はなでた後で部分的に磨いている。肩の内面には指頭圧痕が残っている。胸部内面には、板状工具を使ったと思われるなどが見られる。

第97図 95は底部が突出し、胸部の下半に屈曲がある。肩はなで肩になっている。肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、そこから頸部が立ち上がり、口縁部が逆「ハ」の字状に外反している。肩にわずか羽状文が残っている。胸部内面には粘土の接合痕が残っている。口縁部外面に斜め方向の刷毛目が見られる。内面はなでて仕上げているが、粘土の接合痕が残っている。

96は菊川式の特徴がよく出ている。底部が突出している点は典型的な菊川式と異なるものの、胸部下半の粘土接合部分に屈曲部が形成されている。胸部上半は緩やかにしぼんで肩に至るが、肩は張っていない。肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、そこから頸部が直立して伸び、頸部と口縁部にも粘土の接合痕があり、そこから逆「ハ」の字状に口縁部が外反している。口縁端部は刷毛目調整によって面取りしてある。肩と頸部の境界に、刺突による木目沈線を入れ、肩に羽状刺突文を入れている。木目沈線、羽状刺突文ともに櫛状の工具を押し当てている。外面調整は、胸部屈曲部より下位は横方向のなで、胸部屈曲部より上位は一部に刷毛目が残っているが、全面を丁寧になでているか、磨いている。肩～頸部はなでて仕上げている。口縁部の外反部分は斜め～縦方向の刷毛目調整である。内面調整は、底部付近は反時計回り、横方向の刷毛目調整、胸部屈曲部直下はなで、胸部屈曲部～胸部中央は反時計回りの刷毛目調整、胸部上位～肩～頸部は指で調整、口縁部内面は横方向の刷毛目調整を行っている。

97も菊川式の特徴が見られる壺である。底部は突出せず、胸部下半に屈曲があり、これによって、胸部が算盤玉に似た形になっている。肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、ここから頸部が垂直に立ち上がっている。口縁部は逆「ハ」の字状に外反している。肩に端末結節縄文が見られるが、風化のため、縄文の燃りは不明である。頸部は刷毛目調整の後、縦方向になでている。口縁端部はなでて面取りしてある。口縁部～頸部の内面には横方向の刷毛目が見られ、頸部～肩の内面はなでである。



100 は肩が張らず、頸部が屈曲して口縁部が逆「ハ」の字状に外反している。口縁端部は刷毛目調整によって面取りしており、口縁部外面には斜め方向の刷毛目が見られる。頸部は刷毛目調整の後で縦方向に磨いている。肩は斜め方向の刷毛目調整の後、LRの縄文を施文してある。胴部上半も斜め方向の刷毛目調整である。口縁部内面には横方向の刷毛目があり、頸部内面はなでである。肩～胴部内面は横方向の刷毛目調整があるが、粘土の接合痕を境界に調整方向が変わっていることから、粘土を積み上げることによって刷毛目調整していたと考えられる。肩に文様帯があり、頸部が無文になる点で菊川式の特徴をもっている。101 は頸部が大きく屈曲して口縁部が外反している。口縁端部はなで面取りしてある。調整は内外面ともなでているが、一部に刷毛目が残っている。

102 は頸部にわずかながら垂直の立ち上がりがある。口縁部は逆「ハ」の字状に外反している。口縁端部はなで面取りしてある。口縁部外面は横方向の刷毛目調整であるのに対して、頸部は縦方向の刷毛目調整である。口縁部外面の刷毛目の方が目が細かいことから、口縁部と頸部では刷毛目の原体が異なっていると思われる。内面はなで仕上げている。103 は頸部との接合部分で外れており、口縁部が逆「ハ」の字状に外反している。口縁端部はなで面取りしてある。外面には斜め方向の刷毛目、内面には横方向の刷毛目が残っている。

#### 口縁形態不明の壺

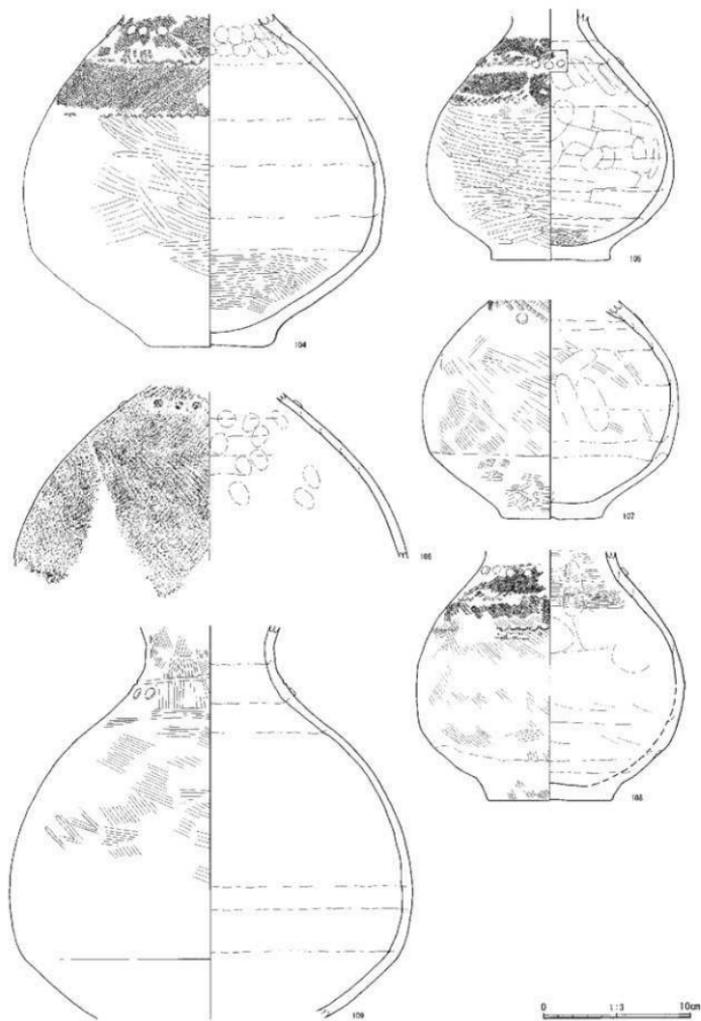
口縁形態が不明のものは、有文（第98図～第100図）と無文（第101図126・131）に分け、元々文様が入らない胴部下半と底部を第101図125・127～130と第102図に示した。

104 は底部が突出しており、胴部下半は直線的に外反し、途中で屈曲部を作って胴部上半が立ち上がっている。胴部外面は刷毛目調整の後、磨いて仕上げている。肩にはLRの端末結節縄文が二段施文されされており、一段目は縄文施文後に円形浮文を3個一単位で4箇所付けてある。内面調整は、底部付近はなでであり、胴部屈曲部より下は横方向の刷毛目調整である。屈曲部～肩の下まではなで仕上げているが、粘土の接合痕が残っている。肩には指頭圧痕と粘土の接合痕が残っている。

105 はなで肩で胴部は球胴ぎみになっており、屈曲部がない。肩～胴部上半に文様があり、LRの縄文を二段施文しているが、器壁が凹んでいる部分には縄文が当たっていないため、縄文施文前の刷毛目調整が残っている。そして、一段目の縄文施文後、その上に円形浮文を3個一単位で貼り付けている。3個一単位の円形浮文は4箇所付けられていたと思われる。二段施文されている縄文の端部には結節部とは異なる痕跡が付いている。この痕跡は縄文の回転と運動しているため、縄文原体の肩部であることは間違いないが、通常の結節部とは異なる。胴部は横方向に丁寧に磨いている。頸部～肩の内面はなで仕上げられており、肩の内面には指の圧痕が残っている。胴部内面には工具を使ったなでの痕があり、指頭圧痕が残っている部分もある。底部付近には刷毛目が見られる。

106 は肩がやや張って、胴部が大きく膨らんでいる。外面に刷毛目が見られるが、方向を変えて羽状にしているようである。文様効果を狙った調整と思われる。肩には円形浮文が3つ確認できる。内面には指頭圧痕と粘土の接合痕が残っている。

107 は肩が張りぎみで球胴に近いが、胴部下半に屈曲部が作られている。そして、屈曲部の上下で調整痕が異なる。屈曲部より下位は磨いてあり、屈曲部より上位は斜め方向の刷毛目調整の後、なでであり、部分的に刷毛目が残っている。肩には刷毛目の原体を押し当てたと思われる刺突文があり、その下位に円形浮文が残っている。刷毛目の原体を使った刺突文は、縄文を模しているように見える。内面は、胴部屈曲部より下はなで仕上げられており、屈曲部より上は斜め上に掻き上げる刷毛目調整の後、なで仕上げているが、部分的になでが及ばない部分があり、刷毛目が残っている。肩内面はなで仕上げている。また、胴部内面には粘土の接合痕が残っており、肩と頸部の接合部には、粘土の接合痕とともに、頸部の粘土がなでつけられて肩の内面にはみ出した痕跡が残っている。



第98図 流路跡 SR6400 出土土器実測図7

108 は底が突出しており、胴部下半に屈曲はないものの、粘土の接合痕がはっきり残っている。これは単なる粘土のつなぎ目ではなく、積み上げた粘土を胴部下半に密着させるために、積み上げた粘土ひもを下方方向になでつけた痕跡である。このことから、底部から胴部下半を作った後、時間をおいてから粘土を積み上げて胴部上半を作ったと考えられる。胴部上半～肩は緩やかにすばむように作られているが、胴部上半と頸部の境界にも粘土の接合痕があり、内面を見ると、この接合痕を境に刷毛目が切れている。このことから、胴部上半と頸部を別に分けて作った後に両者を接合していると考えられる。このように、この土器は胴部下半、胴部上半、頸部の成形に工程差がある点で、菊川式の製作方法によって作られたことになる。肩は斜め方向の刷毛目調整の後にRLの端末結節縄文を二段入れ、一段目の縄文の上に円形浮文を3つ付けている。二段目の縄文の結節部下位には、結節部とは別の痕跡が付いている。縄文の回転に連動して付いていることから、縄の一部であることは間違いない。端末結節縄文の原体で、結節部の下位にあるものという、縄の末端以外に考えにくいことから、縄の末端が当たった痕跡と思われる。外面調整は斜め方向の刷毛目調整の後でなでているが、なでが弱いためか、刷毛目が残っている部分が多い。頸部内面は横方向の刷毛目が見られる。肩から下はなでており、粘土の接合痕も残っている。

109 は肩が張り気味で胴部が大きく膨らみ、胴部下半に屈曲部がある。また、頸部の立ち上がり短いながらも直立部分がある。頸部は縦方向に刷毛目調整をした後、肩との境界に沈線を入れ、その下に2個一単位の円形浮文を付けている。肩～胴部上半は斜め方向の刷毛目調整で、一部に磨きが見られる。胴部下半は風化により調整痕は不明である。内面はなでて仕上げているが、粘土の接合痕が残っている。

第99図110は肩が張り、胴部が丸く膨らんでいる。胴部下半を欠損しているため、胴部下半に屈曲があったかどうかは不明である。外面はなでて仕上げられており、胴部下半はなでた後に磨いて仕上げている。頸部には2段の波状文とその間に横方向の櫛描文が施文されている。頸部内面には粘土の紋り痕があり、胴部は刷毛目調整の後でなでているが、刷毛目が残っている部分がある。

111 は肩が張り、胴部は寸胴ぎみになっている。胴部下半には屈曲がある。外面はなでて仕上げられており、胴部上半には磨きが見られる。この磨きは胴部の屈曲部を境に切れており、屈曲部より下は磨いていない。器壁調整の最後に行う磨きが、屈曲部を境界に途切れていることから、製作者は、屈曲部をはさんで胴部上半と下半を意図的に区別していたと考えられる。文様は、頸部に2段の波状文とその間に横方向の櫛描文が施文されている。内面調整は、胴部内面は刷毛目調整の後になでているが、なでが及ばない部分に刷毛目が残っている。肩の内面には指頭圧痕が残っている。

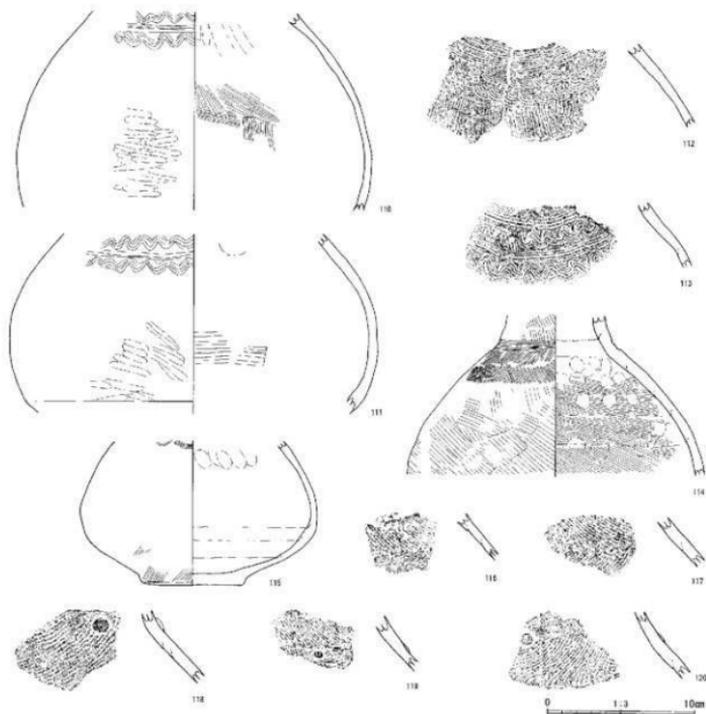
112 は壺の胴で、外面に横方向の櫛描文がある。櫛描きは3cmずつ原体を引きずった単位が拓本からわかる。このことから、櫛描文の施文時に土器を3cmずつ回転させていたことが読み取れる。櫛描文の下位には扇形文が2段あり、左から右に移動しながら施文している。この施文方向は横方向の櫛描文と同じ回転方向である。調整は、外面には縦方向の刷毛目が確認でき、内面はなでて仕上げている。

113 も壺の肩で、外面に少なくとも3段の櫛描き波状文とその間に2段の横方向の櫛描文が確認できる。横方向の櫛描文には2段とも文様の描き始めと描き終わりが見える。内面はなでて仕上げている。

114 はなで肩の壺で、肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、ここで器壁が屈曲して頸部立ち上がっている。粘土をつないだところで器壁の立ち上げ方向を変えていることがわかる。頸部外面には縦方向の刷毛目があり、胴部には右斜め下に向かう刷毛目が付いている。文様は、頸部と肩の境界に横方向の櫛描文を入れ、その下位に櫛描羽状文を入れている。横方向の櫛描文には描き終わりの部分で櫛描文が切り合っている状態を確認できる。頸部内面はなでて仕上げているが、粘土の接合痕が消えきらずに残っている。肩の内面には指頭圧痕が残り、胴部内面には反時計回り、らせん状に描き上げる刷毛目が見られる。一部に指頭圧痕も残っている。刷毛目調整は、外面と内面で原体が異なっており、外面が粗い刷毛目で、内面が細かい刷毛目になっている。内面に刷毛目が明確に残っているのが特徴である。

115は胴部を縦方向に潰したような胴になっている。胴部下半に粘土の接合痕が残っており、屈曲部が作られている。肩には櫛描き波状文がかわうじて確認できる。胴部外面は刷毛目調整の後でなでて仕上げているが、底部に近い部分には刷毛目が残っている。胴部内面はなでであるが、粘土の接合痕が消えきらずに残っている。肩の内面には指頭圧痕が残っている。

116～120は壺の肩の部分である。116はなで調整の後、RLの端末結節縄文を施文してある。内面はなでである。117は端末結節縄文を2段施文してある。同じ原体を使い、180度向きを変えて同じ方向に転がしている。風化が進んでいるため、撚りの方向は不明である。118はなで調整した後にRLの端末結節縄文を施文し、その上に円形浮文を貼り付けている。内面はなでで仕上げているが、一部に刷毛目が残っている。119はRLの端末結節縄文を施文した後で円形浮文を貼り付けている。縄文は二段観察でき、同じ原体を使い、180度向きを変えて同じ方向に転がしている。内面には刷毛目調整が見られる。120はなで調整した後にRLの縄文を施文し、円形浮文を貼り付けている。内面はなでで仕上げているが、指頭圧痕が残っている。



第99図 流路跡 SR6400 出土土器実測図8

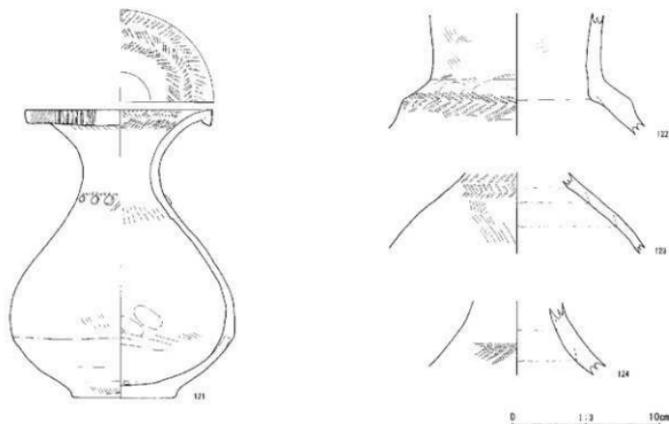
第100図122は肩～頸部の破片で、胴部と肩の境界と思われる箇所に屈曲があり、外面が突出して稜線を作っている。その内面には粘土の接合痕があり、そこから器壁の方向を変えて頸部を立ち上げていることから、この屈曲が肩と頸部の境界として作られたと思われる。肩から屈曲した頸部は長く垂直に立ち上がっており、破片ではあるが、特徴的な形態である。また、器壁が厚く、大型の壺であったと思われる。肩と頸部の境界に作り出された稜線上に、櫛状工具による刺突文が施されており、その下位にも方向を変えた刺突文があり、両者で羽状刺突文を形成している。頸部直立部分の外面はなでて仕上げているが、一部に斜め方向の刷毛目が消えきらずに残っている。頸部内面もなでて仕上げているが、一部に横方向の刷毛目がわずかに残っている。肩内面の調整は風化のため不明であるが、なでて仕上げていると思われる。

123は壺の肩～胴部上半の破片で、肩が張る形態になると思われる。外面に羽状刺突文を3段施文していることから、ここが肩であることが分かる。刺突文の下位はなでているが、斜め方向の刷毛目が残っている部分がある。内面はなでて仕上げているが、粘土の接合痕が消えきらずに残っている。

124は壺の頸部～肩で、外面をなでて調整した後、外面の頸部と肩の境界に櫛状工具により木目沈線を施文し、木目沈線施文後、その下位に同じ工具で刺突文を入れている。内面もなでてあるが、粘土の接合痕が消えきらずに残っている。木目沈線は肩と頸部の境界に施文したと思われるが、内面で観察できる肩と頸部の境界になっている粘土の接合部分とは位置がずれている。土器製作時に意識した肩と頸部の境界と文様施文時に意識した肩と頸部の境界が異なっていたのかもしれない。

第101図125は壺の胴部下半で、底部は突出している。胴部下半に粘土の接合痕が残っているが、屈曲部は形成していない、外面はなでて仕上げているが、一部に斜め方向の刷毛目が残っている。内面には反時計回りでらせん状に掻き上げる刷毛目が見られる。内面の刷毛目調整は粘土の接合痕をまたいで連続していることから、接合後に行われた調整であることがわかる。

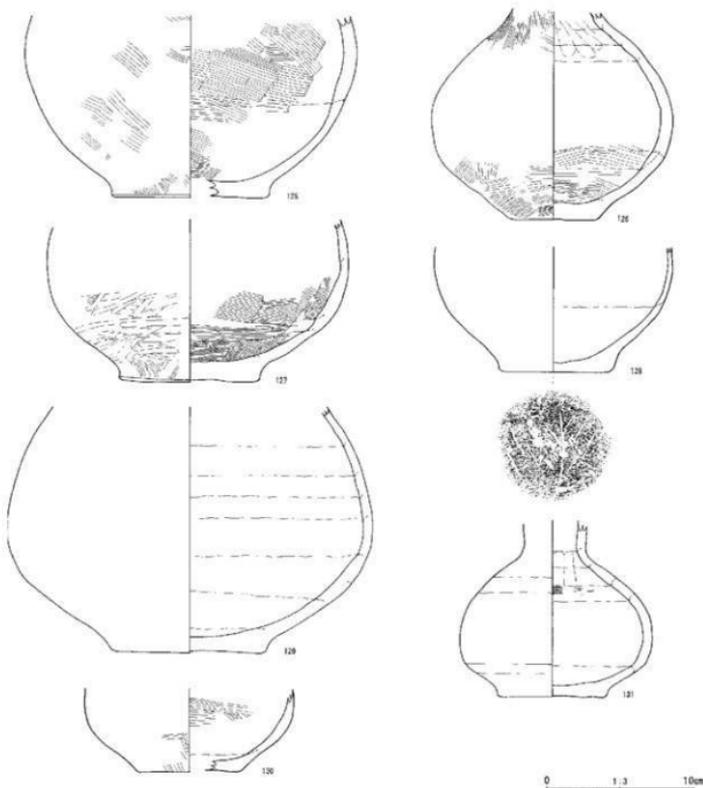
126は頸部から上を欠損した壺で、胴部に粘土の接合痕が認められるが、接合部分で屈曲せずには横に大きく広がった球胴になっている。底部はやや突出している。調整痕は部位によって異なっており、内



第100図 流路跡SR6400出土土器実測図9

面に残っている粘土の接合痕を境に調整の種類や方向が異なっている。胴部上半と肩の境界に残る粘土の接合痕よりも上位は、外面は縦方向の刷毛目調整、内面は指によるなで調整である。胴部中央の辺りは内外面ともになでて仕上げている。胴部過半にある粘土の接合痕より下位は内外面ともに刷毛目調整である。このように、粘土の接合痕に対応して、胴部下半、胴部中央付近、肩～頸部で調整工程が異なっていることから、胴部下位、胴部中央、肩から上を作り分けていたと思われる。

127は壺の底部～胴部下半で、底部は突出しており、胴部は球胴に近いと思われる。胴部下半で粘土を接合した痕跡が確認できるが、屈曲部は形成していない。外面調整は、底部付近は縦方向の刷毛目調整で、胴部は刷毛目調整の後で、横方向～斜め方向に磨いて仕上げている。内面は反時計回りで横方向～らせん状に掻き上げる刷毛目調整になっている。



第101図 流路跡SR6400出土土器実測図10

128は壺の底部～胴部下半で、胴部は球胴に近いと思われ、底部は突出している。胴部下半に粘土の接合痕が残っているが、屈曲は作られていない。風化が進んでいるため、底部の木葉痕は確認できるが、調整痕は不明である。

129は壺の胴部で、底部が突出している。胴部下半に最大径があり、全体的に球胴に近くなっているが、最大径付近でやや屈曲しているように見える。内面には粘土の接合痕が残っており、粘土紐を積み上げた単位がわかる。風化が進んでいるため、調整痕の観察が困難だが、実物を詳細に観察すると、胴部の最大径部分をはさんで上下で外面調整の方向が異なっているように見える。この観察が正しいとすると、胴部の屈曲部分を境界にその上下で作り分けるといふ、菊川式に見られる特徴をもっていることになる。

130は小型の壺と思われる。底部がやや突出しており、胴部は丸みを帯びている。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、外面には、底部付近に縦方向の刷毛目、胴部下半に横方向の刷毛目が残っている。内面には横方向の刷毛目が残っている。

131は小型の壺で、突出した底部から立ち上がった胴部下半が大きく膨らんで、肩に向かって急激にすぼんでいるため、寸胴になっている。肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、ここで粘土をつないだところで器壁の向きを変えて頸部が直線的に長く立ち上がっている。寸胴に細長い頸部をもつ点で、この遺跡では珍しい器形である。外面調整は風化のため、不明だが、外面にも粘土の接合痕が残っていることから、あまり強い調整は行っていないと思われる。頸部内面はなでであり、頸部内面には指による調整痕が残っている。肩の内面には横方向の刷毛が見られ、胴部内面～底部はなでで仕上げられている。

第102図に掲載した図はすべて壺の底部である。132は突出した底部から、胴部が大きく開いている。胴部下半で屈曲して胴部上半が内傾しながら立ち上がっていく菊川式に特徴的な形態を想定できる。調整は内外面とも刷毛目調整である。底部付近にも刷毛目調整が及んでいる点に注目してほしい。胴部が大きく広がっているだけに、土器を正立した状態でこの部分を調整することは不可能だからである。底部付近を刷毛目調整する際には、土器は倒立していたと思われる。底には木葉痕が残っている。

133は風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、外面にわずかに刷毛目が残っており、内面にも刷毛目と指頭圧痕が残っている。底部には木葉痕が残っている。これも底部に近い部分に刷毛目調整が入っていることから、底部付近を調整する際には土器は倒立していたと考えられる。

134は上げ底になっている。調整は内外面ともに刷毛目調整で、外面の刷毛目は底部の最下面まで及んでいる。底部最下面は、土器を正立した状態では調整不可能な部位である。

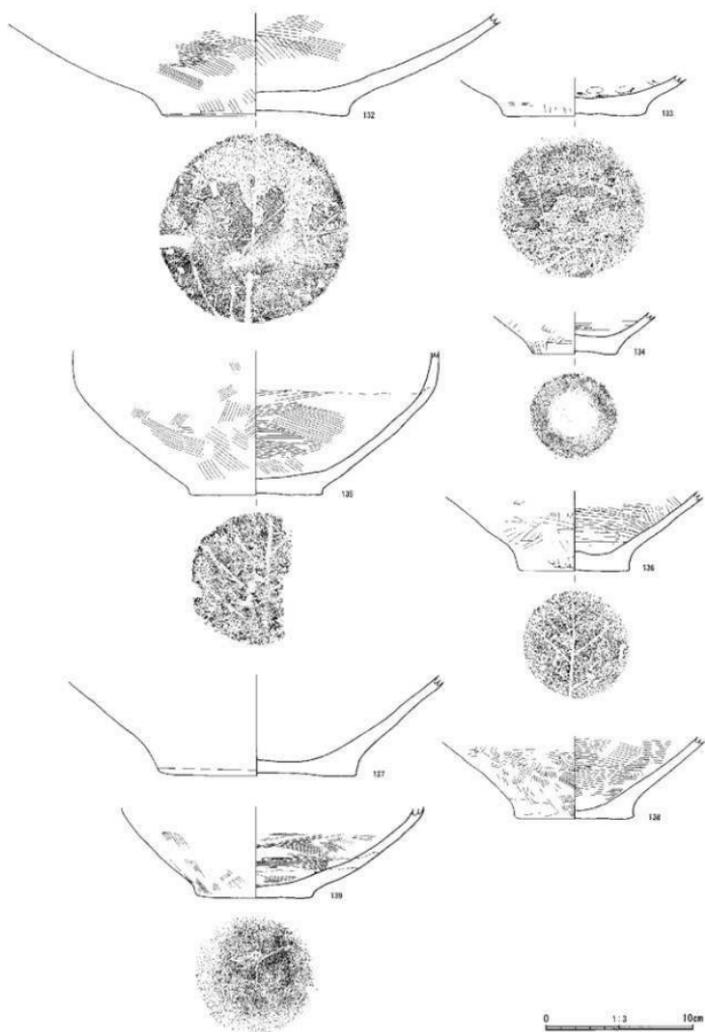
135はやや突出した底部から胴部が立ち上がり、胴部下半と上半の境界に粘土の接合痕が残り、その部分で器壁が屈曲している。外面には斜め方向の粗い刷毛が残っている。内面は屈曲部より下には反時計回りの刷毛目が見られ、屈曲部より上はなでで仕上げている。屈曲部の粘土接合痕で内面の刷毛目が途切れていることから、屈曲部まで作ったところで一端乾燥させて刷毛目調整をした後、その上に粘土を継ぎ足して胴部上半を作ったが、屈曲部の上下を別に作ってから両者を接合したと思われる。これも菊川式に見られる製作方法である。

136は胴部が直線的に外反している。外面は刷毛目調整の後でなでであり、内面には反時計回り、らせん状に掻き上げる刷毛目調整が見られる。底部には木葉痕が残っている。

137は突出した底部から胴部が直線的に外反している。風化が進んでいるため、調整痕は不明である。

138は突出した底部から胴部が直線的に立ち上がっている。外面は刷毛目調整の後でなでであり、その後に磨いて仕上げているが、磨きはまばらな上に、底部付近は磨いていない。内面には反時計回り、横の刷毛目が見られる。

139は、突出した底部から胴部が緩やかな弧を描きながら広がっている。外面は刷毛目調整の後でなでであるが、一部に刷毛目が残っている。内面には反時計回りの刷毛目が見られる。



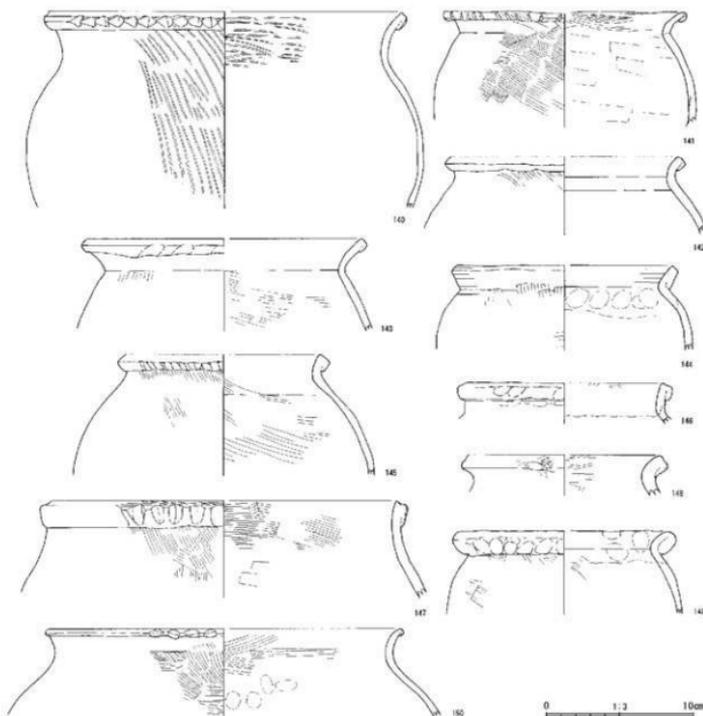
第102図 流路跡SR6400出土土器実測図11

## 甕 (折り返し口縁) (第103図)

第103図140は頸部～口縁部は緩やかな弧を描いている。口縁部外面に貼り付けた粘土帯に大きめの刻み目を付けている。刻み目は角のある工具を使っており、隙間を作らずに連続して施文してある。外面と口縁部～頸部内面には非常に粗い刷毛目が見られる。胴部内面はなでて仕上げている。

141は頸部の立ち上がり部分に粘土の接合痕があり、そこで90度近く屈曲して口縁部が短く外反している。粘土をつないだ所で器壁の向きを変えたことがわかる資料である。口縁部外面に細い粘土帯を貼り付け、その粘土帯の上に刻み目を入れている。外面には、左斜め上の方向に掻き上げる刷毛目が見られる。口縁部内面には右から左に向かう刷毛目調整があり、胴部内面はなでているが、工具を使ったと思われる、工具の痕跡がついている。

142は頸部が90度ほど屈曲して口縁部が短く外反している。口縁部外面には刷毛目調整が見られる。この刷毛目は口縁部外面に貼り付けた粘土帯の下に潜り込んでいることから、粘土帯を貼り付ける前に行われた調整である。内面はなでて仕上げている。



第103図 流路跡SR6400出土土器実測図12

143の頸部は90度ほど屈曲して口縁部が線的に外反している。口縁部外面には細い粘土帯を貼り付けてあり、粘土帯には、口縁部外面に密着させた時の指頭圧痕が残っている。指頭圧痕は等間隔で付いており、刺突文を意識しているように見える。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、頸部外面に縦方向の刷毛目、内面に横方向の刷毛目が残っている。

144は90度ほど屈曲した頸部から短い口縁部が直線的に外反している。口縁部外面には粘土帯が貼り付けられ、折り返し口縁になっているが、口縁部が短いため、貼り付けた粘土帯が頸部に覆いかぶさっている。粘土帯の表面はなでであるが、粘土帯の上に刷毛目が付いている部分があることから、粘土帯を貼り付けた後で部分的に刷毛目調整を行ったことになる。口縁端部はなでて面取りしてある。胴部外面もなでて仕上げているが、一部に刷毛目が残っている。口縁部内面はなでて仕上げている。頸部内面には指頭圧痕が残り、胴部内面はなでて仕上げている。

145も144と同様、口縁部が短いため、口縁部外面に貼り付けた粘土帯が頸部にかかっている。粘土帯には、口縁部外面に密着させた時の指頭圧痕が等間隔で残っている。これも刻み目を意識しているのかもしれない。口縁端部はなでて面取りしてある。胴部外面はなでであるが、口縁の折り返し部分直下には刷毛目が残っている。この刷毛目は粘土帯の下に潜り込んでいることから、粘土帯を貼り付ける前に刷毛目調整を行っていることがわかる。胴部の一部にも斜め方向の刷毛目が残っている。内面には斜め方向の刷毛目が残っている。

146は口縁部が垂直に近い角度で立ち上がっている。口縁部外面に貼り付けた粘土帯には、密着させた時の指頭圧痕が付いている。口縁端部は刷毛目調整によって面取りしてある。外面はなでて仕上げているが、粘土帯の直下はなでが及ばなかったため、わずかに粘土帯を貼り付ける前の刷毛目が残っている。内面もなでて仕上げているが、口縁部直下の一部に刷毛目が残っている。

147は頸部～口縁部がわずかに外反しているが、口縁部は直立に近い。口縁端部は刷毛目調整で面取りしており、口縁部外面に貼り付けた粘土帯には、角のある工具の角の部分を押当てた大きな刻み目がある。粘土帯直下には、粘土帯を貼り付ける前の刷毛目調整が見られる。口縁部～頸部内面には右から左に向かう刷毛目があり、胴部内面はなである。

148は90度近く屈曲した頸部から口縁部が短く外反している。分厚い口縁部を無理に外反させたような印象を受ける。口縁部外面に薄い粘土帯を貼り付けて折り返し口縁にしてあるが、口縁部が短いため、折り返し部分が頸部にかかっている。口縁端部に刷毛目を入れて面取りすることで、口縁部外面に稜線を作り出し、その稜線上に棒状工具を押し当てた押圧がある。外面はなでて仕上げられており、内面には横方向の刷毛目が見られる。

149は90度ほど屈曲した頸部から短い口縁部が外反している。口縁部外面に貼り付けた粘土帯は太く、頸部にまでかかっており、粘土帯を密着させた時の指頭圧痕のはっきり残っている。指頭圧痕は等間隔についており、刺突文を意識したように見える。外面はなでて仕上げているが、粘土帯直下はなでが及ばないため、刷毛目が残っている。この刷毛目は粘土帯の下に続いていることから、粘土帯を貼り付ける前に刷毛目調整をしていたことになる。したがって、刷毛目調整、粘土帯貼り付け、なで調整の順で仕上げたことになる。胴部外面はなでて仕上げているが、一部に斜め方向の刷毛目が残っている。口縁部内面には、粘土帯を密着させた時に付いたと思われる指頭圧痕がある。頸部より下は刷毛目調整の後でなでており、一部、なでが及ばない部分に刷毛目が残っている。

150は頸部が緩やかな弧を描いて口縁部が外反している。口縁部の外面には細い粘土帯を貼り付けてあり、折り返し口縁になっている。そして、粘土帯の上に大きめの刻み目を入れている。外面には横～斜め方向の刷毛目が見られ、口縁部～頸部の内面には横方向の刷毛目が見られる。頸部内面には指頭圧痕が残っている。

甕（単純口縁、有文）（第104・105図）

第104図151は器壁が厚く、口縁部の外反が弱い特徴がある。口縁部が厚くなっているため、粘土帯を貼り付けて折り返し口縁にしている可能性がある。口縁端部は横方向の刷毛目調整によって面取りして口縁部外面に稜線を作り、その稜線上に比較的大きな刻み目を入れてある。刻み目には刷毛目の痕跡が見られるため、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。外面と口縁部内面～頸部内面には粗い刷毛目が見られる。頸部より下には指頭圧痕が残っている。

152は頸部が90度近く屈曲して短い口縁部が外反している。口縁部端部をなでて面取りして、口縁端部に稜線を作り出し、その稜線上に刻み目を入れている。刻み目には刷毛目の痕跡が見られることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。外面にはやや斜めに傾く方向の刷毛目が見られる。内面はなでて仕上げている。

153は弧を描くように屈曲した頸部から口縁部が直線的に立ち上がっている。口縁端部に横方向の刷毛目を入れて面取りし、口縁部外面に刻み目を入れてある。刻み目に刷毛目の痕跡が見られることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。外面には斜め方向の粗い刷毛目が見られ、口縁部～頸部の内面には横方向の刷毛目が見られる。頸部より下には指頭圧痕が残っている。

154は90度近く屈曲した頸部から口縁部が短く外反している。口縁部端部をなでて面取りして口縁部外面に稜線を作り出してあるが、この土器の場合は、その稜線上ではなく、口縁端部に刻み目を入れている。刻み目に刷毛目の痕跡が見られることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、外面にはわずかに斜め方向の刷毛目が残っている。内面には横方向の刷毛目が残っている。

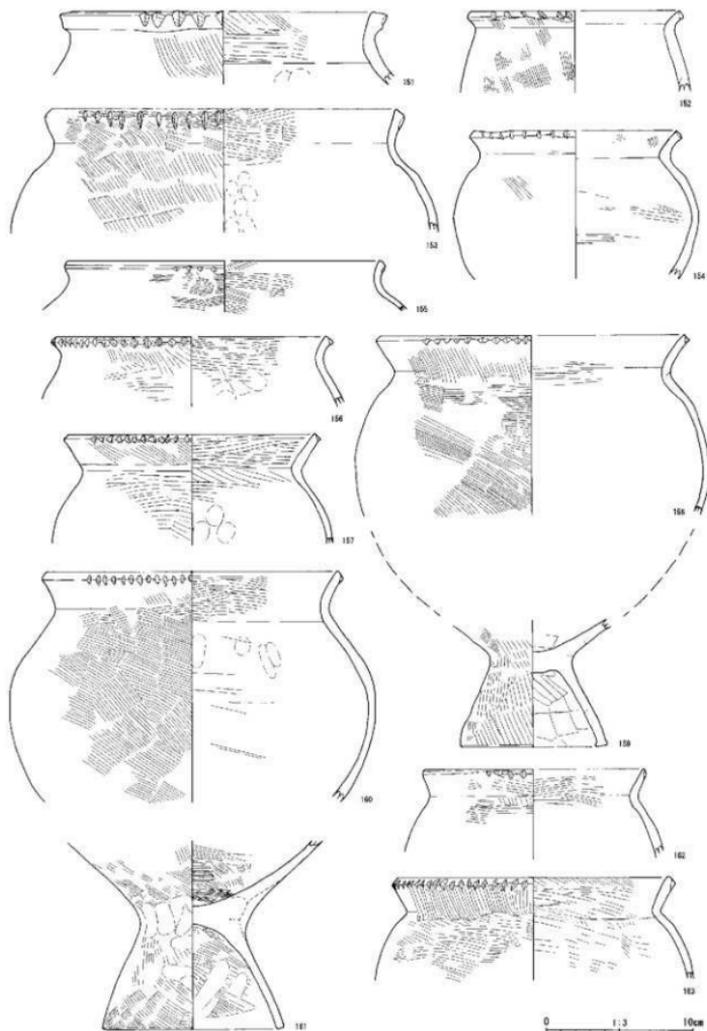
155は頸部が短く立ち上がっている。口縁部端部をなでて面取りして口縁部外面に稜線を作り出し、その稜線上に小さな刻み目を入れている。調整は内外面ともに横方向の刷毛目が見られる。

156は頸部が弧を描いており、口縁部が短く外反している。口縁部端部をなでて面取りして作り出した稜線上に刻み目を入れている。刻み目には刷毛目の痕跡が見られることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。外面の口縁部直下に見られる調整痕は、刷毛目に見えるが、調整痕が光沢をもっており、磨きに近い。肩には横方向の刷毛目が見られるが、口縁部直下に付けられた刷毛目とは原体が異なり、肩の外面に見られる調整痕は通常の刷毛目である。口縁部～頸部内面には横方向の刷毛目が見られ、胴部内面には指頭圧痕が残っている。

157は90度ほど屈曲した頸部から口縁部が直線的に外反している。口縁部端部をなでて口縁部外面に稜線を作り、その稜線上に刻み目を入れている。刻み目には刷毛目の痕跡が見られることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。口縁部外面には斜め方向の刷毛目があり、胴部には横方向に刷毛目が付いている。頸部の屈曲部に、横方向に強くなでた部分があり、この部分には刷毛目の原体が当たっていないため、この部分だけ刷毛目が途切れている。口縁部内面には横方向の刷毛目、頸部内面には斜め方向の刷毛目、胴部上半には横方向の刷毛目が見られる。胴部の膨らんだ部分はなでて仕上げであり、指頭圧痕が残っている。外面では口縁部と胴部、内面では口縁部、頸部、胴部でそれぞれ調整工程を分けてある。部位によって調整が異なることから、部位毎に成形していたのかもしれない。

158は口縁部端部をなでて面取りして口縁部外面に稜線を作り出し、その稜線上に刻み目を入れている。刻み目は角のある工具の角を押し当てている。口縁部外面は縦方向の刷毛目調整、頸部には横方向の刷毛目調整があるように、胴部と頸部で刷毛目の工程が異なっている。胴部には斜め方向の刷毛目が見られる。口縁部内面はなでてあり、頸部内面には横方向の刷毛目が見られる。

159は台付甕の台で、胴部内面はなでて仕上げている。台の脚はわずかに内湾している。外面には粗い刷毛目が付いている。内面はなでて仕上げている。



第104図 流路跡SR6400出土土器実測図13

160は口縁端部をなでて面取りして口縁部外面に稜線を作り出し、その稜線上に刻み目を入れている。刻み目には刷毛目の痕跡が見られることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。口縁部外面はなでであり、頸部から下は全面、斜め方向の刷毛目調整である。口縁部内面は横方向の刷毛目調整で、頸部以下の内面はなでであり、工具痕と思われる痕跡がある。一部には指頭圧痕が残っている。

161は甕と台の接合部分で、外面調整は、甕の部分には斜め方向の刷毛目があり、甕と台の接合部分には、指でなでたと思われる痕跡が残っている。脚部の上半には、縦方向の刷毛目の後で、部分的になでた痕跡がある。脚部下半には左斜め上に向かう刷毛目が見られる。内面調整は、甕の部分は反時計回りの刷毛目、脚部にも反時計回りの刷毛目があり、内面には刷毛目調整の後でなでた痕跡がある。

162は90度近く屈曲した頸部から口縁が直線状に外反している。口縁端部は面取りしないまま、口縁部外面に刻み目を付けている。内外面ともに横方向の刷毛目が見られる。

163は、頸部が90度近く屈曲し、口縁部が直線的に外反している。口縁端部は刷毛目調整で面取りしており、それによって口縁部外面に稜線を作り出し、その稜線上に刻み目を入れている。刻み目には刷毛目の痕跡が見られることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。口縁部外面には口縁端部から頸部に向かう刷毛目があり、刷毛目の終点には原体端部の当たりが残っている。頸部～胴部外面には右斜め下に向かう刷毛目が付けられている。外面は口縁部～頸部と肩～胴部で刷毛目調整の工程が異なっており、肩～胴部を刷毛目調整の後、口縁部～頸部を縦方向に刷毛目調整している。口縁部内面には横～斜め方向の刷毛目、頸部～胴部内面には反時計回り、らせん状に掻き上げる方向のなで調整が見られる。なでは工具を使っただけと思われる痕跡が付いている。

第105図164は、頸部が90度ほど屈曲して口縁部が外反している。口縁端部を刷毛目調整して面取りし、口縁部外面に稜線を作り出し、その稜線上に刻み目を入れている。刻み目には刷毛目が見られることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。外面はなでて仕上げているが、頸部の屈曲部にはなでが及ばなかったようで、この部分には刷毛目が残っている。口縁部～頸部の内面もなでて仕上げているが、一部に刷毛目が残っている。頸部から下には指でなでたと思われる痕跡が残っている。

165は頸部が緩やかに屈曲して口縁部外反している。口縁部外面に刻み目が入っている。調整は内外面ともに横～斜め方向の刷毛目で、登呂式の台付甕に見られる調整法と思われる。

166は頸部が緩やかな弧を描いて口縁部が外反している。口縁端部をなでて面取りし、口縁部外面に稜線を作り、その稜線上に刻み目を入れている。頸部外面には斜め方向の刷毛目が見られ、胴部には横方向の刷毛目が見られる点で、頸部と胴部で調整工程が異なる。

167は頸部が緩やかに弧を描いて短い口縁部が外反している。胴部には、上半と下半の境界と思われる部分に弱い屈曲がある。口縁端部には刻み目がある。外面は斜め方向の刷毛目調整だが、口縁部～頸部と胴部では刷毛目の方向が異なっていることから、刷毛目調整の工程が異なっていたことになる。内面は横方向の刷毛目である。胴部～口縁部が緩い「S」字を描くように作られていることから、胴部～口縁部は連続整形していると思われる。また、内外面とも斜め～横方向の刷毛目調整が行われている点で、登呂式台付甕の調整法をとっていると思われる。

168は、頸部～口縁部が弧を描くように外反している。口縁端部に横方向の刷毛目を入れて面取りして口縁部外面に稜線を作り出し、その稜線上に刻み目を入れている。内外面ともに横方向の刷毛目調整をしている点で、登呂式台付甕の調整法をとっていると考えられる。

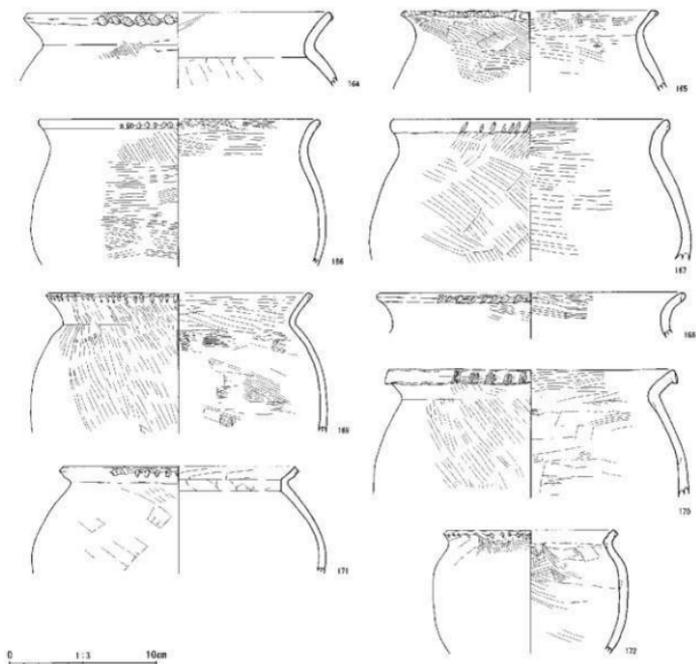
169は、頸部が90度近く屈曲し、口縁部は直線的に外反している。口縁端部はなでて面取りしており、面取りによって口縁部外面に稜線を作り出し、その稜線上に櫛状工具で刺突文を入れている。外面には斜め方向の粗い刷毛目がみられ、口縁部内面にも同様の粗い刷毛目が見られる。頸部～胴部内面には板を使ったと思われるなでが見られる。頸部の粘土接合痕は確認できないが、頸部で粘土をつないで屈曲部

を作り、口縁部を外反させている点や口縁部内面と頸部以下で調整法が異なる点は菊川式台付甕の製作技術をとっていると思われる。

170は頸部が90度ほど屈曲して口縁部が外反している。口縁端部は横方向の刷毛目によって面取りしており、面取りした際に削られた粘土が下方にはみ出しているため、折り返し口縁のように見える。口縁部外面の面取り部分には櫛状工具による刺突文が見られる。刺突文は2つが一単位になっている。口縁部外面と胴部外面には斜め方向の粗い刷毛目が見られる。口縁部内面には横方向の刷毛目があり、頸部～胴部の内面には板を使ったと思われるなでが見られる。頸部で粘土をつないで口縁部を外反させている点と口縁部内面と胴部内面で調整が異なる点で菊川式台付甕の特徴をもっている。

171は頸部が90度近く屈曲しており、縁部外面に刻み目がある。刻み目は丸い棒状の工具を押し当てて付けている。外面は全面であり、工具痕と思われる痕跡が付いている。胴部内面は風化のため、調整痕が見えないが、口縁部内面には板によると思われるなでの痕跡、頸部には指頭圧痕が残っている。

172は、口縁端部をなでて面取りして口縁外面に稜線を作り、その稜線に刻み目を入れている。頸部外面には上から下方向の刷毛目が付いている。口縁部内面はなでであり、頸部～胴部内面は刷毛目を入れた後でなでているが、刷毛目が残っている部分が多い。



第105図 流路跡SR6400出土土器実測図14

## 甕（単純口縁、無文）（第106図）

第106図173は台を欠損した台付甕で、胴部が大きく横に張り出した球胴になっている。頸部には粘土の接合痕があり、粘土を継ぎ足した所で器壁を90度ほど屈曲させて口縁部を外反させている。胴部下半にも粘土の接合痕がある。口縁部端部はなでて面取りしてある。外面、口縁部～頸部、胴部ともに斜め方向の粗い刷毛目があり、口縁部内面にも右から左方向に向かう粗い刷毛目が見られる。頸部～胴部内面はなでて仕上げている。

174も台付甕で台の部分を欠損している。胴部中央付近が大きく膨らみ、頸部が屈曲して口縁部が直線的に外反している。外面は全面刷毛目調整で、頸部付近に斜め方向の刷毛目に切られて縦方向の刷毛目が見られることから、縦方向の刷毛目調整の後で斜め方向の刷毛目調整を行っていることがわかる。口縁部内面～頸部には右から左方向の刷毛目が見られる。胴部内面はなでて仕上げている。

175は、頸部に粘土の接合痕があり、ここから口縁部を外反させていることがわかる。内外面ともなでているが、工具痕と思われる痕跡が付いており、内面の一部には指頭圧痕も残っている。

176は、頸部が屈曲せずに頸部～胴部が緩やかなS字状のカーブを描いている。口縁部端部はなでて面取りしてある。内外面とも斜め方向の刷毛目が見られる点で、登呂式台付甕の特徴をもっている。

177は、頸部が屈曲して口縁部が短く外反している。口縁部端部は刷毛目調整で面取りしてある。頸部には縦方向の刷毛目があり、原体端部の当たりも観察できる。胴部は斜め方向の刷毛目調整の後、なでて仕上げている。頸部～肩の内面には刷毛目があり、胴部内面はなでて仕上げている。

178は頸部～口縁部が弧を描くように外反している。口縁部端部はなでて面取りしてある。口縁部外面はなでてあり、頸部は縦方向の刷毛目調整、胴部は横～斜め方向の刷毛目調整である。口縁部内面は横方向の刷毛目調整、頸部内面はなでてあり、胴部内面には下から掻き上げる縦方向の刷毛目調整が見られ、この刷毛目は、外面、口縁部内面の刷毛目とは原体が異なっており、目の細かい刷毛目である。

179は頸部が90度ほど屈曲して短い口縁部が外反している。口縁部端部をなでて面取りしてある。内外面ともなでてであるが、一部の刷毛目が残っている。

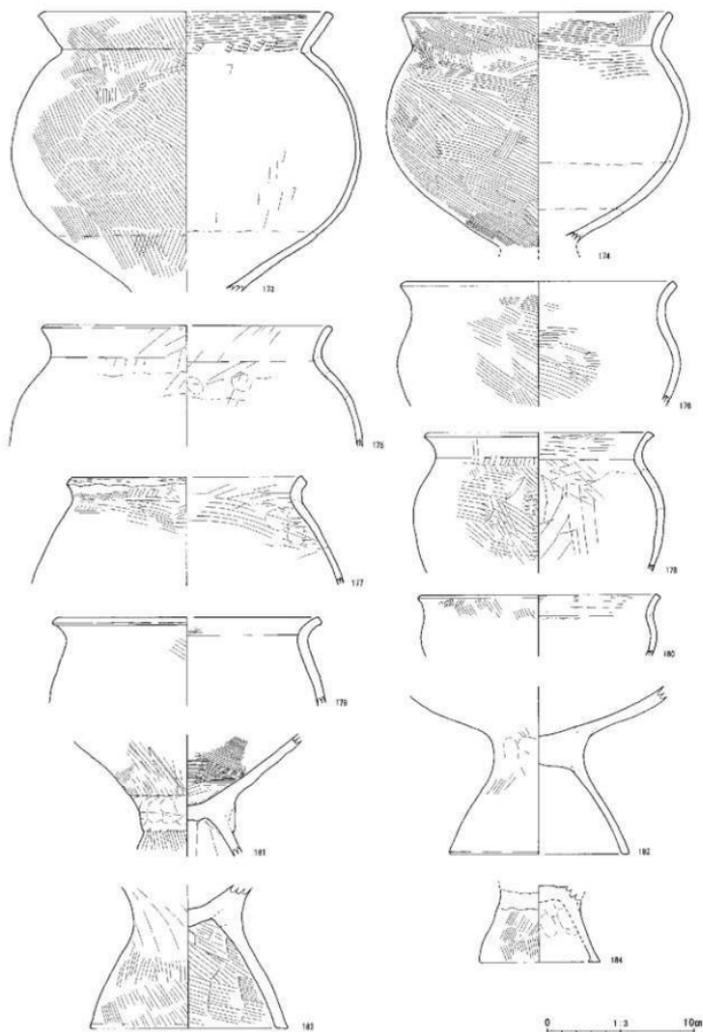
180は口縁部が緩やかに外反している。外面はなでて仕上げているが、部分的に斜め方向の刷毛目が残っている。内面もなでてであるが、口縁部内面にはなでる前の刷毛目がわずかに残っている。

181は台付甕の甕と台の接合部分で、接合部分の外面に粘土を貼り付けてあり、密着させた時の指頭圧痕が残っている。外面には粗い刷毛目が残っており、甕の内面にも反時計回り、らせん状に掻き上げる刷毛目が残っている。台の内面はなでて仕上げている。

182～184は台付甕の台である。182は脚部がわずかに内湾している。甕の部分は大きく広がっていることから、球胴の甕が付いていたと思われる。甕の部分は内外面ともなでて仕上げている。脚と甕の接合部外面には指頭圧痕が残っている。脚部内面はなでて仕上げている。183は脚部はわずかに内湾している。調整は、脚部外面は縦方向の刷毛目調整、甕との接合部分はなでてである。内面は反時計回り、らせん状の刷毛目が見られる。184は脚部は直線的に外反している。甕との接合部分は刺離している。外面には縦方向の刷毛目が見られ、内面には指頭圧痕が残っている。

## 鉢（第107図185～188）

第107図185は下半に粘土の接合痕があり、屈曲部分が作られている。口縁部端部はなでて面取りしてあり、外面は工具を使ってなでてである。内面も工具を使ってなでているが、工具が当たらない部分には粘土の接合痕や指頭圧痕が残っている。186は口縁部付近と胴部の境界に屈曲部分があり、口縁部付近は直立している。全体をなでて仕上げているが、口縁部端部は面取りして平坦にしてある。187は全面をなでて仕上げているが、口縁部端部は面取りしてある。内面にはなでた際の指の痕跡が残っている。188は胴部に穿孔がある。全体をなでて仕上げているが、口縁部端部は面取りしてある。



第106図 流路跡SR6400出土土器実測図15

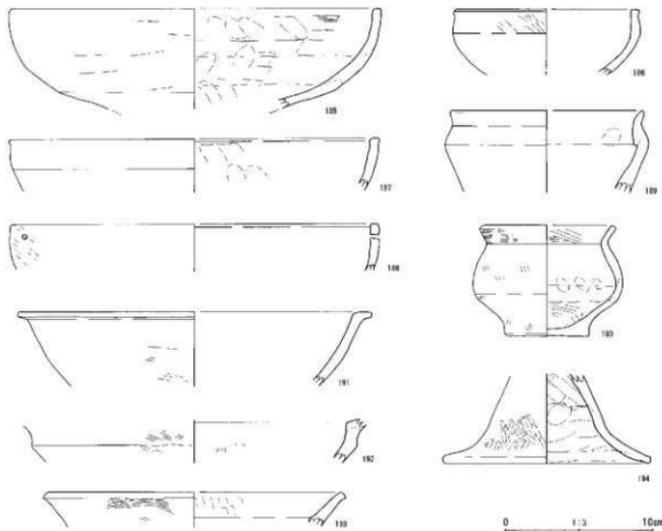
## その他の器種 (第107図189～194)

第18図189は小型の短頸壺か甕と思われる。製作工程を追って形態を記載すると、胴部を直線的に外反させ、粘土を継ぎ足したところで器壁を内湾させて肩を形成している。ここで胴部に屈曲部が作られている。その後、口縁部を短く外反させている。調整痕は風化のため観察できないが、口縁部が急激に薄くなっていることから、口縁部をつまみ上げるように横なでしていると思われる。

190は小型の壺、もしくは甕と思われる。これも製作工程を追って形態を記載すると、突出した底部から胴部が張り出すように外反し、胴部を屈曲させて胴部上半を作っている。この屈曲は胴部上半と下半の境界を意識したものである。胴部上半は頸部に向けてすぼむように作っており、頸部が90度近く屈曲して口縁部が短く立ち上がっている。外面は刷毛目調整の後になでており、一部に刷毛目が残っている。内面は、底部付近は反時計回り、らせん状に刷毛目が付いており、胴部には指頭圧痕が見られる。口縁部内面には横方向の刷毛目が見られる。

191は鉢か高坏と思われる。口縁部を外側に広げ出すように外反させている。内外面ともなでて仕上げているが、外面にはわずかに刷毛目が残っている。192は特有の屈曲から、高坏の可能性が高い。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、一部に刷毛目の痕跡が残っている。193は粘土の接合部分で外れた口縁部で、接合部分が厚くなっている。口縁端部はなでて面取りしており、口縁部外側に面取りした際の粘土のはみ出しが見られる。外面には横方向の刷毛目が残っている。複合口縁壺の口縁拡張部分が高坏の口縁部と思われる。

194は高坏の脚で、途中に屈曲があり下半が大きく外反している。脚の端部はなでて面取りしてある。外面はなでた後、屈曲部付近を磨いてある。内面はなでて仕上げている。



第107図 流路跡SR6400出土土器実測図16

SR10045、SR10046、SR10075は、他の遺構に切られているため、SR4600とは直接つながらないが、SR4600の延長と考えられる。したがって、下記で報告するSR10045、10046、10075出土の土器はSR4600出土の土器と一括して扱うことができる。

#### SR10045 出土土器（第108図195～199）

第108図195は広口壺の頸部～口縁部で、頸部がやや内湾しながらも垂直に近い角度で立ち上がり、頸部と口縁部の境界で屈曲して口縁部が直線的に外反している。口縁端部は水平に近いほどに外反している。口縁部は折り返し口縁になっており、外面に粘土帯を貼り付けてある。粘土帯には密着させた時の指頭圧痕が残っている。内外面の一部に刷毛目の痕跡が残っている。

196は広口壺の口縁部で、緩い弧を描きながら外反している。端部は水平になるほどに外反しており、折り返し口縁になっている。風化が進んでいるため、調整痕は観察できないが、口縁端部は面取りしてあると思われる。そこに棒状浮文を貼り付けている。口縁部内面には櫛状工具による直線状の施文があり、その下部には扇形文が見られるが、風化によりほとんど消えかかっている。

197は広口壺の頸部～口縁部で、太く短い頸部から急激に屈曲した口縁部が水平に近いほどに外反している。口縁部は折り返し口縁になっている。口縁端部はなでて面取りしてある。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、頸部内面にわずかに刷毛目が残っている部分がある。

198は単純口縁部で、口縁部が逆「ハ」の字状に開いている。風化のため、調整痕は不明である。

199は高杯の杯の部分で、直線的に外反した杯が屈曲して口縁部が外反して伸びている。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、内外面ともに磨いて仕上げていると思われる。屈曲部の外面には刷毛目がわずかに残っている。

#### SR10046 出土土器（第108図200・201）

第108図200は壺で、底部が突出しており、肩は張らず胴部は球胴になっている。胴部に屈曲はなく、頸部は肩から弧を描くように立ち上がり、やや長く伸びている。口縁部は逆「ハ」の字上に外反している。風化により、調整痕は不明だが、口縁端部は面取りしてあるようである。

201は甕の胴部上半で、ミニチュアではないが、小型の甕である。頸部が90度ほど屈曲して口縁部が直線的に外反している。口縁端部はなでて面取りしてある。口縁外面はなでて仕上げているが、一部に斜め方向の刷毛目が残っている。また、口縁部外面の一部に扇形文がわずかに残っている。頸部には4本の沈線が見られる。胴部外面には扇形文が施文されている。内面はなでて仕上げている。

#### SR10075 出土土器（第108図202・203）

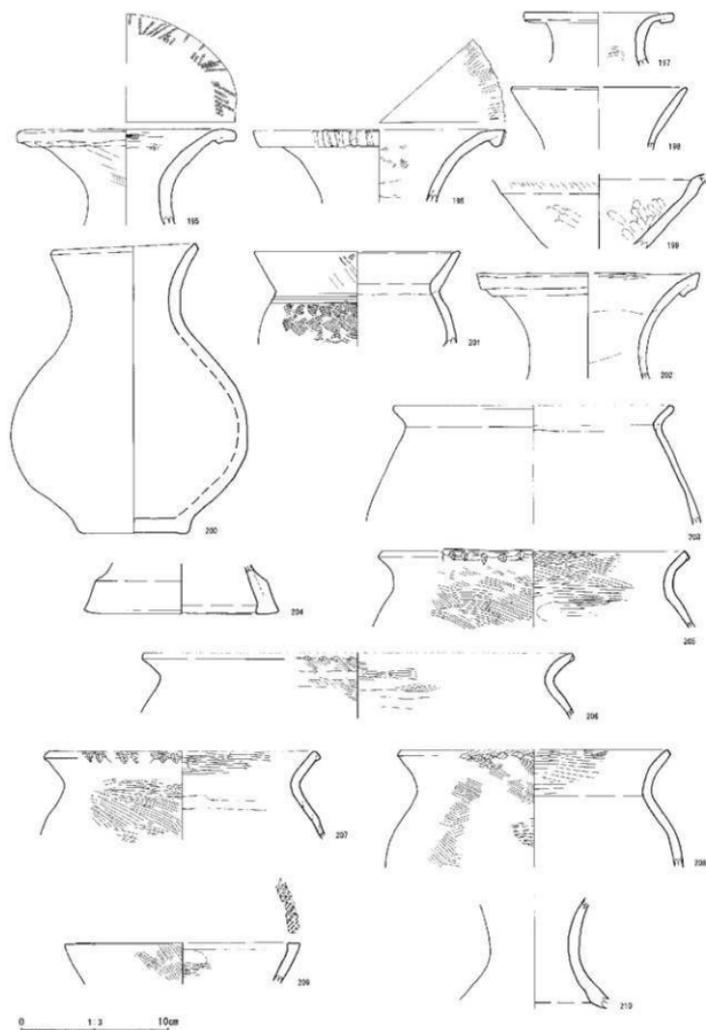
第108図202は広口壺の頸部～口縁部で、頸部が直立して伸び、口縁部との境界に粘土の接合痕があり、ここで器壁が弱く屈曲して口縁部が外反している。口縁部は折り返し口縁になっており、端部をなでて面取りしてある。風化のため、調整痕の観察が難しいが、口縁部内面の一部に刷毛目が残っている。また、頸部内面には粘土の接合痕が残っている。

203は甕の胴部上半～口縁部で、胴部のふくらみが球形ではなく、直線的に膨らんでいる。頸部に粘土の接合痕があり、そこで器壁を90度程屈曲させて口縁部を外反させている。口縁端部がわずかに上方に伸ばされているが、口縁端部を横なでして仕上げた時に、上につまみ上げるようにしたのであろう。

#### SR6139 出土土器（第108図204・206）

第108図204は高杯の脚部で、端部の外面に粘土帯を貼り付けてあるため、端部が急激に厚くなっている。内外面ともなでてあるが、外面はなでた後磨いているかもしれない。

205は甕の胴部上半～口縁部で、肩と頸部の境界に屈曲があり、ここから頸部が立ち上がっている。頸部と口縁部の境界にも弱い屈曲があり、ここから口縁部が外反している。口縁端部を面取りして口縁部外面に稜線を作り、その稜線の上に刻み目を入れている。刻み目には刷毛目の痕跡が見られることから、



第108图 流路跡 SR10045 出土土器実測図

刷毛目の原体を押し当てていると思われる。また、刻み目は土器の正面に対して左斜め前方から入れている。頸部はなでであり、なでの端部に引きずられた粘土の溜まりがある。これによって、左から右方向へなでていることがわかる。また、胴部外面にある斜め方向の刷毛目は、右下がりの方向で付けられている。口縁部～頸部内面の刷毛目は左から右に向かって付けられている。頸部以下はなでて仕上げているが、これも左から右方向へなでている。以上の調整方向と刻み目を左斜め前方から付けている動作から考えると、製作者は左利きだった可能性が高い。

206 は甕の頸部～口縁部で、口縁端部を面取りして口縁部外面に角を作り、その角に刻み目がある。刻み目に刷毛目の痕跡が見られることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。口縁部～頸部外面に斜め方向の刷毛目が見られるが、頸部の屈曲部分は刷毛目原体の当たっていない。口縁部～頸部内面は横方向の刷毛目調整で、頸部以下はなでている。

#### SR6296 出土土器 (第108図207～209)

第108図207は甕の胴部上半～口縁部で、頸部が90度近く屈曲して口縁部が外反している。口縁端部に斜め方向の刷毛目を入れて面取りし、口縁部外面に稜線を作り、その稜線上に刻み目を入れている。刻み目には刷毛目の痕跡が見られることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。口縁部外面は刷毛目調整の後でなでており、頸部～胴部上半は横方向～斜め方向の刷毛目を入れている。内面調整は、口縁部は横方向の刷毛目で、頸部～胴部上半はなでている。

208 も甕の胴部上半～口縁部で、口縁端部斜め方向の刷毛目調整によって面取りして、口縁部外面に稜線を作り、その稜線上に刻み目を入れている。刻み目には刷毛目の痕跡が見られることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。外面には横方向～斜め方向の刷毛目が見られる。内面調整は、口縁部～頸部には横方向の刷毛目が見られるが、胴部内面は風化が進んでいるが、なでていると思われる。

209 は鉢の口縁部付近と思われる。口縁端部を面取りした上にLRの縄文が見られる。外面には斜め方向の刷毛目があり、内面には横方向の刷毛目、口縁部内面はなで見られる。

#### SR6348 出土土器 (第108図210)

第108図210は壺の肩～頸部で、肩と頸部の境界がやや厚くなっており、ここが肩と頸部の接合部分であったと思われる。この接合部分から頸部が緩やかな弧を描いて立ち上がっている。風化が進んでいるが、内外面ともなでてあると思われる。

#### SR6494 出土土器 (第109図211)

第109図211は広口壺の口縁部で、折り返し口縁になっている。口縁部外面に張り付けた粘土帯が小さいため、折り返し部分はあまり厚くなっていない。

#### SR6503 出土土器 (第109図212～214)

第109図212は広口壺の頸部～口縁部で、風化が進んでおり、調整痕は不明である。213は甕の頸部～口縁部で、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に外反している。口縁端部は面取りしてあるようだが、全体に風化が進んでおり、調整痕は不明である。214は高坏の脚部で、大きく外反している。風化のため、調整痕は不明である。ミニチュアの高坏と思われる。

#### SR6515 出土土器 (第109図215)

第109図215は器台で、穿孔がある。ミニチュアの器台で、古式土器の可能性はある。

#### SR10050 出土土器 (第109図216～220)

第109図216は壺の胴部～口縁部で、肩が張らない長胴になると思われる。肩と頸部の境界に屈曲があり、そこから頸部がやや外反しながら直線的に立ち上がっている。頸部と口縁部の境界にも屈曲があり、そこから口縁部は緩やかに外反している。外面調整は風化のため不明だが、口縁端部をなでて面取りしてあるように見える。内面には横方向の刷毛目と肩の部分に粘土の接合痕と指頭圧痕が見られる。

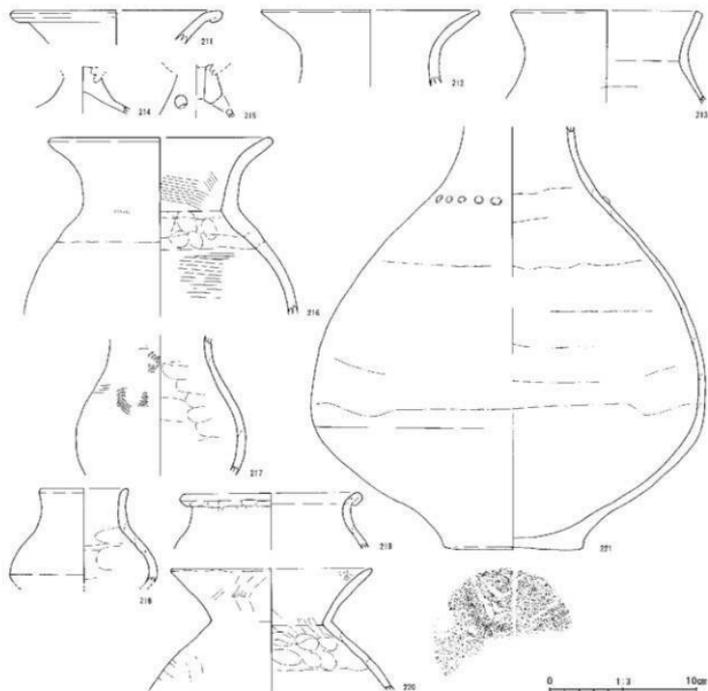
217は壺の頸部～胴部で、器形は肩が張らない長胴になると思われる。頸部と肩に波状文と横方向の櫛描文がかすかに残っている。胴部内面は右から左になでており、底部付近に下からなで上げている。

218は小型の壺で、頸部～口縁部が直立し、肩が張って胴部が広がり、胴部中央で屈曲して底部に至っている。内面に指でなでた痕跡と粘土の接合痕が残っている以外は、風化のため調整痕は観察できない。

219は頸部が急激に屈曲して口縁部が外反している。口縁部は折り返し口縁で、貼り付けた粘土帯には、密着させた時の指頭圧痕が残っている。内外面ともなでているが、内面には指頭圧痕と粘土の接合痕が残っている。220は古式土師器の壺で、内外面ともなでているが、内面には指頭圧痕が残っている。

#### SR10204 出土土器 (第109図 221)

第109図 221は口縁部を欠損した壺で、胴部下半が大きく膨らみ、最大径の辺りに屈曲部がある。屈曲部に粘土の接合痕が残っている。胴部下半と胴部上半で製作工程が異なっていた可能性がある。底部は突出し、木葉痕が残っている。頸部は細く、肩から緩やかに弧を描きながら立ち上がっている。肩には円形浮文が付けられている。風化により、調整痕は不明だが、粘土の接合痕が残っている。



第109図 流路跡SR6494 出土土器実測図

## SR10065 出土土器 (第110図)

第110図222は複合口縁壺の肩～頸部と口縁部である。頸部と口縁部は接合しないが、同一個体の可能性が高い。頸部が太く短い特徴がある。肩と頸部の境界に粘土の接合痕が残っており、ここで器壁がわずかに屈曲して頸部が立ち上がっている。口縁部の拡張部分に縄文を施文していると思われる、かすかに縄文らしき痕跡が見える部分がある。そして、縄文施文後に棒状浮文を貼り付けている。また、肩と頸部の境界に3個一単位の円形浮文が付けられている。この円形浮文は肩と頸部の境界になる粘土の接合痕の上に貼り付けてあることから、肩と頸部の境界を意識して貼り付けたものと思われる。頸部が太く短い特徴から、菊川式の新しい段階の壺と思われる。

223は複合口縁壺の頸部～口縁部で、単純口縁に粘土を継ぎ足して口縁部を上方に引き伸ばして外反させている。口縁部内面には棒状工具の端部を押し当てたと思われる刺突文が2列施文されている。その下位には円形浮文を付けている。調整痕は風化のためは不明である。

224は壺の肩～頸部で、頸部が太く短い特徴がある。肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、そこから器壁を屈曲させて頸部が立ち上がっている。肩には3列の刺突文が施文されている。

225は広口壺の頸部～口縁部で、口縁部は弧を描きながら外反している。口縁部外面には粘土帯を貼り付けて折り返し口縁にしてある。風化が進んでいるため、調整痕は観察できないが、口縁端部はなでて面取りしてあると思われる。口径は破片からの復元であるが、もう少し広がるかもしれない。

226は壺の胴部下半～底部で、底部は突出しており、胴部は弧を描くように立ち上がっている。胴部の屈曲部は形成されていない。底部には木葉痕が残っており、内面には粘土の接合痕が残っている。

227は壺の肩～頸部で、肩と頸部の境界に粘土の接合痕が残っている。接合痕の上位に櫛描きによる波状文が2列施文されており、その上位には横方向の櫛描文がわずかに残っている。接合痕の下位には横方向の刷毛目が見られる。接合痕の下位には文様がないことから、接合痕を境に肩と頸部の違いが意識されていたことと思われる。

228は壺で、底部が突出し、胴部は屈曲のない長胴になっている。風化のため、調整痕は不明だが、内面に粘土の接合痕が残っている。

229は単純口縁甕の肩～口縁部で、小型の甕である。頸部に粘土の接合痕があり、ここで器壁の向きを変えることで頸部を90度近く屈曲させて口縁部が外反している。口縁部を面取りする土器が多い中で、これは面取りをしていない。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、口縁部～頸部外面は刷毛目調整の後で磨いて仕上げていると思われる。

230は甕の肩～口縁部で、頸部が90度程屈曲して短い口縁部が外反し、端部は折り返し口縁になっている。口縁端部を刷毛目調整することで、口縁部外面に稜線を作り出し、その稜線上に刻み目を入れている。外面には上から下に向かう刷毛目が見られる。この刷毛目は口縁部外面に粘土帯を貼り付ける前の調整である。口縁部内面には横方向の刷毛目調整、頸部以下にはなで調整が見られる。

231は器台の脚部である。脚は直線的に外反しており、端部は尖るように調整されている。3箇所に透かしを空けてある。調整痕は風化のため不明である。これは古式土師器の可能性がある。

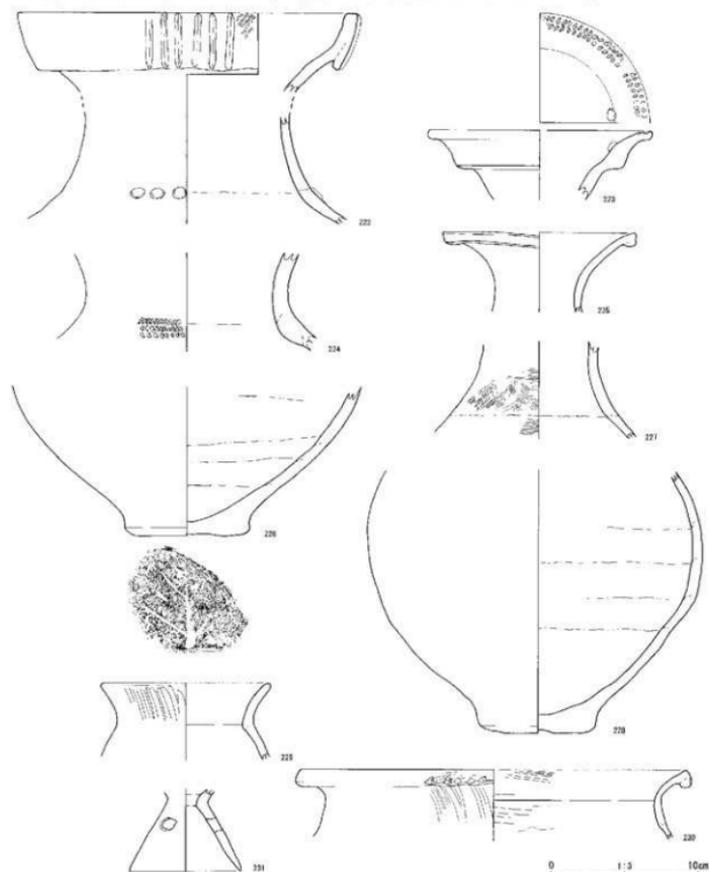
## 3 土坑出土土器

## SK6475 出土土器 (第111図232)

第111図232は甕の頸部～口縁部で、口縁部は弧を描きながら外反している。口縁端部をなでて面取りし、口縁部外面に稜線を作り、その稜線状に刻み目を入れている。刻み目には刷毛目の痕跡が見られることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。調整痕は風化のためはつきりしないが、外面の口縁直下に斜め方向の刷毛目がわずかに残っている。内面には横方向の刷毛目が残っている。

## SK6572 出土土器 (第111図 233)

第111図233は甕で、胴部の張りが弱く、頸部の屈曲、口縁部の外反も弱い。口縁端部は折り返し口縁になっており、端部と外面をなで分けることで、口縁部外面に稜線を作り、その稜線上に刻み目を入れている。刻み目には刷毛目の痕跡が見えるため、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。外面には、非常に粗い刷毛目があり、頸部付近では、縦方向の刷毛目調整の後で斜め方向の刷毛目調整を行っている。内面はなでで仕上げているが、口縁部～頸部は横方向の刷毛目が残っている。



第110図 流路跡 SR10065 地出土土器実測図

## SK6625 出土土器 (第111図 234・235)

第111図234は広口壺の頸部～口縁部で、口縁部は折り返し口縁になっている。口縁部外面に貼り付けた粘土帯が細いため、折り返し部分はあまり厚くなっていない。口縁部外面に粘土が剥離したような痕跡があるため、棒状浮文が付けられていた可能性がある。口径は破片からの復元だが、もう少し広がるかもしれない。風化により調整痕は不明である。

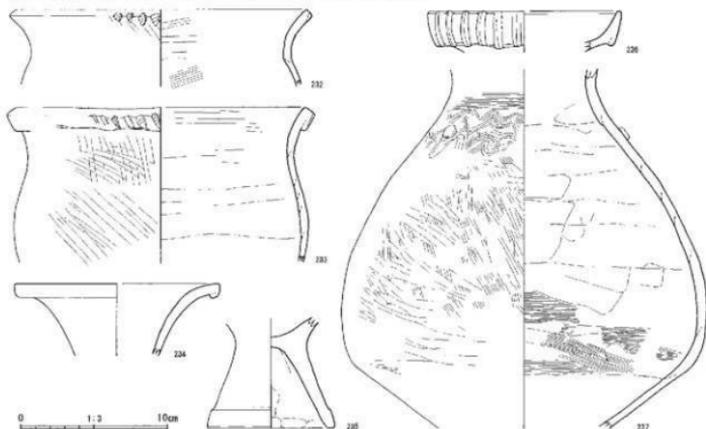
235は台付甕の台で、脚部は直線的に外反している。脚部末端の外面に粘土帯を貼り付けているようで、脚部の単部が厚くなる特徴がある。調整痕は風化のためはっきりしないが、脚部末端の内面に指頭圧痕が残っている。外面はなでて仕上げていると思われる。

## SK10198 出土土器 (第111図 236)

第111図236は複合口縁壺の口縁部で、口縁部外面に粘土帯を貼り付けて、口縁部をを上方に引き伸ばして拡張している。拡張部分の外面には棒状浮文を貼り付けている。調整痕は風化のため不明である。口径は破片からの復元であるが、もう少し広がるかもしれない。

## SX610 出土土器 (第111図 237)

第111図237は底部と口縁部を欠損した壺で、胴部下半に最大径があり、胴部下半の粘土接合部分に屈曲がある。肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、ここから頸部が立ち上がっている。外面調整は刷毛目調整の後になでており、さらに磨いている部分もあるが、胴部上半では、なでて磨きが全面には及んでいないため、刷毛目が残っている。胴部下半はほぼ全面を磨いていると思われる。肩には櫛描きによる波状文が二段施文され、その上に円形浮文を付けてある。頸部には横方弧の櫛描文がある。内面には粘土の接合痕が残っており、接合の単位によって調整が変わっている。底部付近～胴部の屈曲部はなでて仕上げている。屈曲部～胴部中央付近は反時計回りの刷毛目調整の後、工具を使ってなでている。屈曲部を境界に刷毛目が切れていることから、屈曲部の上下を別々に作った後に両者を接合していると思われる。胴部上半～頸部の内面はなでて仕上げている。粘土の接合単位ごとに調整が異なることから、粘土を接合して成形する度に内面を調整していたと思われる。



第111図 土坑出土土器実測図

## 4 性格不明遺構出土土器

## SX6663 出土土器 (第112図)

## 広口壺 (複合口縁)

第112図 238は頸部～口縁部で、口縁部と頸部の境界に粘土の接合痕があり、ここから口縁部を外反させていることがわかる。口縁拡張部の外面に棒状浮文を貼り付けている。棒状浮文は4本一単位になっていると思われる。外面調整はなでて仕上げている。内面は、頸部と口縁部の接合痕より上位はなでてあり、下位は指頭圧痕が残っている。

## 受口壺

239は肩が張らずに胴部は球胴になっている。口縁部の外面に棒状浮文を貼り付けてある。肩には羽状文を施文しており、その上に、円形浮文を貼り付けている。円形浮文は2個一単位で、全周で5箇所付いていると思われる。風化のため調整痕の観察は難しいが、頸部～肩の内面に指の跡が残っている。

## 広口壺 (折り返し口縁)

240は口縁部が水平になるほどに外反しており、口縁部外面に貼り付けた粘土帯には指頭圧痕が見られる。口縁端部はなでて面取りしてある。風化が進んでいるため、調整痕は不明である。頸部内面には粘土の接合痕が残っている。

241は口縁部と頸部～肩で、肩と頸部の境界に屈曲があり、頸部～口縁部が外反している。頸部と口縁部が接合しないが、頸部は短いと想定される。口縁部の折り返し部分に貼り付けた粘土帯には指頭圧痕が残っている。風化のため、調整痕の観察が難しいが、内外面ともなでて仕上げている。

242は頸部に粘土の接合痕が2箇所見られる。下の接合痕が肩と頸部の境界、上の接合痕が頸部と口縁部の境界と思われる。接合痕から、肩から頸部を立ち上げ、頸部から器壁の向きを変えて口縁部を外反させる成形を観察できる。口縁部外面に貼り付けた粘土帯は細い。

243は風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、折り返した部分は断面が円形になっており、面取りしたようには見えない。また、口縁部外面には棒状浮文を付けたような痕跡が残っている。

244は頸部～口縁部が弧を描くように立ち上がっている。折り返し部分は、断面が丸みを帯びるようになっていると思われる。245は肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、ここから器壁が屈曲して頸部が立ち上がっている。頸部が太く、短い特徴がある。口縁部外面に貼り付けた粘土帯は小さく、口縁部が少し膨らんだ程度になっている。太く短い頸部から考えて、菊川式の新しい段階の壺と思われる。

## 壺 (単純口縁)

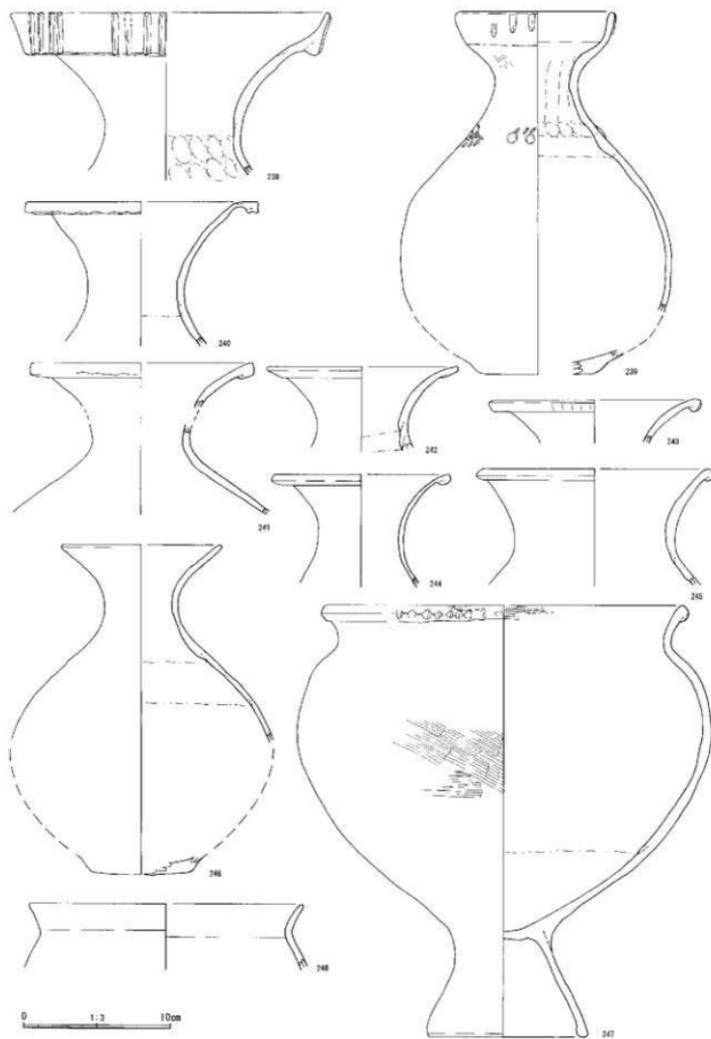
246は底部と胴部上半の破片で、両者は接合しないが、同一個体の可能性が高い。肩～胴部の張りが強く、胴部が大きく広がっている。肩と頸部の境界で粘土の接合は確認できないが、頸部の立ち上がり部分で器壁の厚さが変わっていることから、ここで粘土をつないで頸部を立ち上げていると思われる。頸部と口縁部の境界ははっきりしない。風化のため調整痕は不明だが、粘土の接合痕が残っている。

## 甕 (折り返し口縁)

247は台付甕で、肩が張って胴部上半に最大径がある。頸部が屈曲して短い口縁部が外反している。口縁端部を刷毛目調整して面取りすることで口縁部外面に稜線を作り出し、その稜線上に刻み目を入れている。刻みに刷毛目が観察できることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。風化のため、調整痕の観察が難しいが、外面の一部に右斜め下方向の刷毛目が観察できる。内面はなでて仕上げているが、口縁部内面の一部に横方向の刷毛目が残っている。台の部分は風化により調整痕不明である。

## 甕 (単純口縁)

248は頸部が屈曲して口縁部が直線的に外反している。風化が進んでいるため、調整痕は不明である。



第112図 性格不明造模 SX6663 出土土器実測図

## 5 水田域出土土器

## SK422 出土土器 (第113図)

広口壺 (折り返し口縁)

第113図 249は口縁内面に端末結節縄文がわずかに残っているが、磨りの方向は不明である。

250は風化が著しく、調整痕は見えない。251は折り返し部分は断面が三角形になるようになでて仕上げている。口縁端部に棒状浮文が付けられている。252は風化が著しいが、外面に縦方向の刷毛目、口縁内面に縄文がわずかに残っている。縄文の磨りは不明である。253は広口壺の頸部～口縁部で、頸部から屈曲した口縁部が大きく外反している。口縁部の折り返し部分は大きく、断面が四角形になるように仕上げている。外面調整は、口縁直下が斜め方向の刷毛目、頸部は縦方向に磨いてあるかもしれない。口縁部内面になでて面取りした部分があり、文様施文の準備のように見えるが、文様は確認できない。

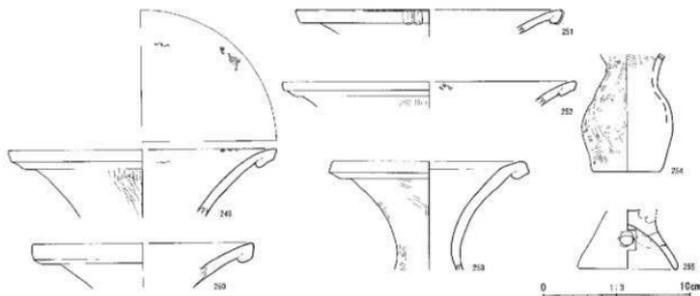
壺 (小型模造品)

254は長胴壺の模造品で、外面には細かい刷毛目が見られ、刷毛調整の後になでて仕上げている。調整痕は細かく、模造品とは言え丁寧なことがうかがえる。頸部内面には横方向の刷毛目が見られる。胴部内面の調整痕は観察が難しいが、なでて仕上げていると思われる。底部も丁寧になでて仕上げている。底部が厚いため、持った時に重量感を感じる。255は小型高坏の脚で、穿孔がある。

その他の水田域出土土器 (第114図)

第114図 256は広口壺の口縁部で、折り返し口縁になっている。口縁端部には棒状浮文を付けているが、ほとんどが剥落している。257は壺の底部～胴部下半で、突出した底部から、胴部が緩やかな弧を描いて立ち上がっている。底部付近と胴部の一部に刷毛目が残っている。内面調整は、底部は刷毛目調整で、胴部は刷毛調整の後で工具を使ってなでている。258は甕の胴部上半で、胴部が張らず、頸部の屈曲、口縁部の外反も小さい。長細い胴部になると思われる。外面にはわずかに横方向の刷毛目が残っており、内面にはわずかに指頭瓦痕が残っている。259は甕の肩～口縁部で、頸部が90度近く屈曲して口縁部が直線的に外反している。口縁端部はなでて面取りしてある。外面は刷毛目調整の後になでて仕上げているが、刷毛目が消えきらずに残っている。口縁部内面には横方向の刷毛目があり、頸部から下はなでて仕上げている。260は古式土師器の壺で、球形の胴部から頸部が90度ほど屈曲して口縁部が長く直線的に外反している。口縁部は内外面ともになでて仕上げている。胴部外面もなでてあり、胴部内面はなでてあるが、肩の内面には指頭瓦痕が残っている。

261は古式土師器の壺で、肩と頸部の境界に接合痕があり、ここで器壁を屈曲させて頸部～口縁部を



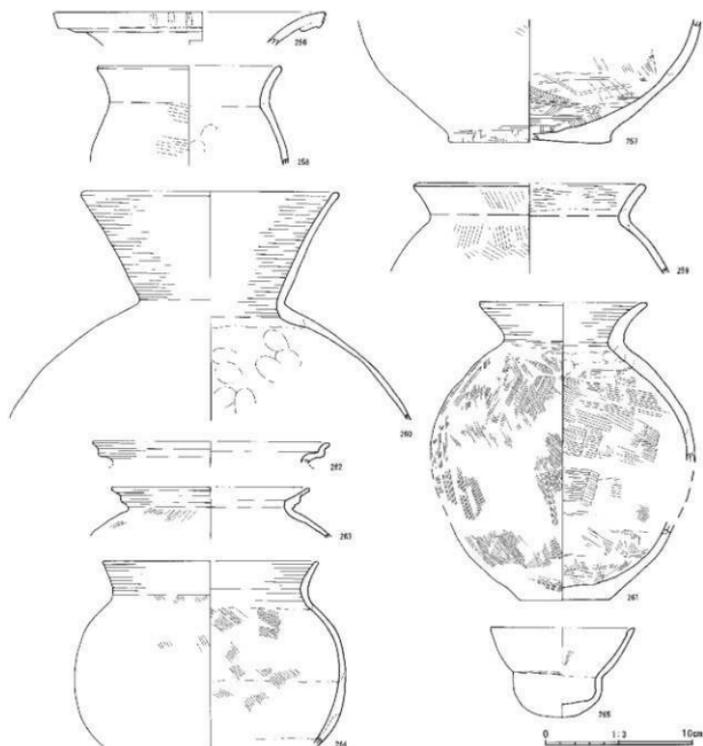
第113図 水田遺構出土土器実測図1

成形している。口縁部は内外面ともなでて仕上げている。胴部外面は刷毛目調整で、胴部内面は反時計回り、らせん状に掻き上げる刷毛目調整と横方向の刷毛目調整である。

262はS字甕の口縁部で、口縁部に直角に近い屈曲があり、端部が外反している。調整は内外面ともになでである。263はS字甕の肩～口縁部で、頸部から屈曲した口縁部に肥厚が見られる。口縁部と頸部は内外面ともになでであり、胴部外面には縦方向の刷毛目がある。胴部内面はなでて仕上げている。

264は単純口縁の甕で、球胴から頸部～口縁部が弧を描くように外反しているため、口縁部～胴部が緩やかなS字を描いている。口縁部の内外面はなでて仕上げられており、胴部は内外面ともに刷毛目調整の後でなでているが、刷毛目が残っている部分もある。古墳時代初頭の甕であろう。

265は小型の埴で、全面をなでて仕上げているが、なで調整の前に刷毛目調整を行っていたようで、くびれ部分や内面のなでが及ばなかった部分に刷毛目が残っている。



第114図 水田遺横出土土器実測図2

## 6 包含層出土土器

寺家前遺跡で出土した弥生土器は、後期後半の一時期に収まるものがほとんどである。したがって、各器種の全容を把握しやすくするため、遺構出土の土器も器種ごとに再掲載した。

再掲載した土器と出土遺構は下記の通りである。

第115図 266・268・271 (以上 SR6400)・267 (SX6663)・270 (SR10065)

第116図 284・289・290 (SR6400)

第117図 297・299 (SR6400)。

第118図 320・325・326・328・335 (SR6400)

第119図 342・345・346・347 (SR6400)

第121図 388 (SR6400)・390 (SR10065)

第122図 396 (SX6663)・397・398 (SR6400)

第123図 399 (SR10046)・400・401・402 (SR6400)

第124図 404 (SR10046)・405・406 (SR6400)。

第125図 422 (SR6400)・424 (SK610)

第126図 425 (SR6400)

第130図 514 (SR6400)

第131図 519・520 (SR6400)・528 (SK422)

第133図 559 (SR6400)

第134図 566 (SK602)・567 (SK8)

## (1) 弥生時代後期の土器

灰口壺 (複合口縁、有文) (第115図)

第115図 269は口縁部で、端部ははっきりと面取りしており、外面には櫛状工具による波状文を施した後で棒状浮文を付けている。272は口縁の拡張部分が直線的に立ち上がっており、その外面に棒状浮文を貼り付けている。拡張部分直下の一部に刷毛目が残っている。

273は拡張した口縁部の外面に太い粘土帯を貼り付け、外面が垂直になるようにしている。その上にRLの縄文を施した後、棒状浮文を貼り付けている。口縁部内面にもRLの縄文が施文されているが、風化のため、一部しか残っていない。

274は口縁部が大きく上方に拡張され、外面に棒状浮文が付いている。口縁部の半分近くを欠損しているが、棒状浮文は5本単位の部分と6本単位の部分が、間隔を空けて交互に配置されている。欠損部分にも同様に棒状浮文が配置されていたとすれば、5本単位の棒状浮文が相対する方向に2箇所、90度向きを変えて6本単位の棒状浮文が、これも相対する方向に2箇所配置されていたと考えられる。

275は口縁部の外面をなでて仕上げた後、棒状浮文を貼り付けている。浮文は6本確認できる。

276は大きく上方に拡張した口縁部外面を斜め方向の刷毛目で調整した後、棒状浮文を貼り付けている。口縁端部はなでて面取りしてある。277は外面に棒状浮文が5本確認できる。278は口縁部を内湾させながら拡張した部分に棒状浮文を貼り付けている。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、全体をなでて仕上げていると思われる。279は拡張部分の外面をなでて面取りしてあり、その上に棒状浮文を付けている。棒状浮文は3本確認でき、剥落が著しい。調整痕は風化のため不明である。

280は粘土を継ぎ足して口縁部を上方に拡張したつなぎ目を観察できる。調整痕は風化のため不明だが、口縁部外面に棒状浮文が3本確認できる。281は大きく拡張した口縁部の外面に棒状浮文が付いている。風化が進んでおり、棒状浮文の剥落が著しく、調整痕も不明である。



第115図 包含層出土土器実測図1

**広口壺（複合口縁、無文）（第116図282～286）**

第116図282は、口縁部の外面に粘土帯を貼り付けて大きく拡張してある。拡張部分は逆「ハ」の字状に外反している。

283は拡張部を折り曲げるようにして上方に伸ばし、拡張部の外面をなでて平坦にしている。

285は口縁部外面に太い粘土帯を貼り付けており、粘土帯が大きく突出している。調整痕は風化のため観察できない。

286は、拡張部分が逆「ハ」の字状に外反していると思われる。

**広口壺（折り返し口縁、有文）（第116図287～292）**

第116図287は頸部が垂直方向に長く伸び、口縁部が弧を描きながら外反している。口縁部は水平になるほどに外反し、折り返し口縁になっている。口縁端部をなでて調整した後4本一単位の棒状浮文を付けている。外面には、粘土帯を貼り付ける前に付けられた斜め方向の刷毛目が見られる。口縁部内面には結節縄文があるが、風化のため撚りの方向は不明である。内面調整は横方向の刷毛目と思われるが、風化が進んでいるため、はっきりしない。

288の折り返し部分はあまり厚くなっていないが、口縁端部は、横方向の刷毛目によって面取りしており、その上に棒状浮文を付けている。口縁部内面にはLRの端末結節縄文が2段付けられている。外面には粘土帯を貼り付ける前に付けられた斜め方向の刷毛目が見られる。

291の口縁外面には棒状浮文があり、内面にはRLの細かい縄文が付いている。

292は口縁部が水平に近いほど外反している。口縁端部をなでて面取りした後、棒状浮文を付けている。口縁部直下の外面には粘土帯を貼り付ける前の刷毛目が見られる。口縁部内面にはRLの縄文が二段施文されており、一段目は端末結節縄文になっている。二段目は欠損のため結節部分を確認できないが、一段目と同じ原体の可能性が高い。

**広口壺（折り返し口縁、有文）（第117図、第118図、第119図337～339）**

第117図293は折り返した部分が非常に小さく、口縁端部がわずかに肥厚しているだけである。口径は破片からの復元だが、もう少し大きくなるかもしれない。風化が進んでいるため、文様や調整痕の観察が困難だが、口縁外面に棒状浮文が見られ、口縁内面にはLRの縄文が見られる。

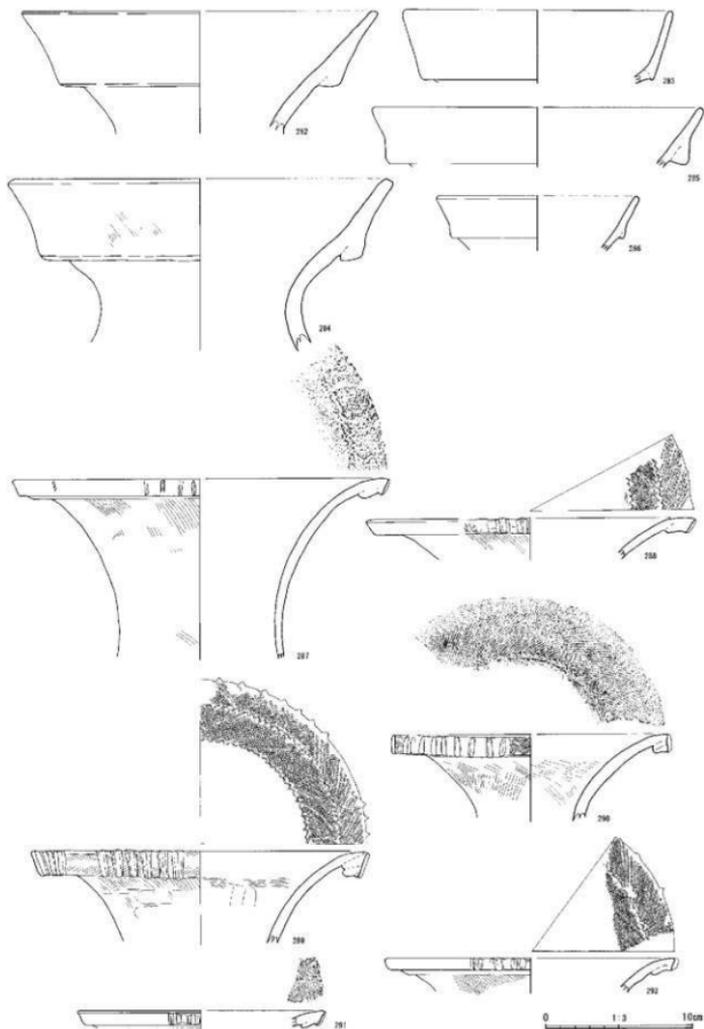
294は口縁部が水平に近くなるほどに外反している。口縁端部をなでて仕上げた後、棒状浮文を貼り付けている。頸部外面には斜め方向の刷毛目が見られる。口縁部内面には外側から内側に向けて刷毛目の原体を使った文様を付けてあり、その下位に楕円形による扇形文が見られる。口径は、破片からの復元だが、もう少し広がるかもしれない。

295は口縁部外面に貼り付けた粘土帯に刷毛目調整が見られる。口縁端部にはRLの縄文を入れた後に棒状浮文を付けてある。外面には粗い刷毛目が見られる。口縁部内面にはRLの縄文を施文してあるが、風化により見えなくなっている部分が多い。内面の調整は風化のため不明である。

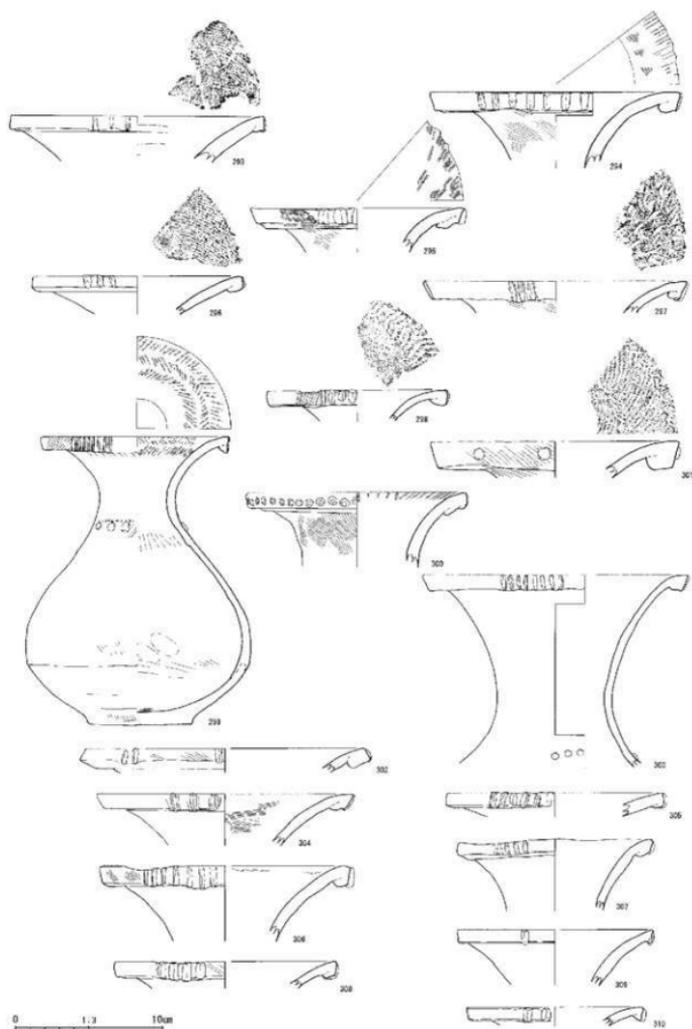
296の口径は破片からの復元のため、図示よりも大きくなるかもしれない。口縁内面にはRLの縄文が付いており、口縁外面には棒状浮文が3つ付いている。風化が進んでいるため、調整痕の観察は難しい。

298は口縁端部は水平に近い。折り返し部分は厚くなっており、断面が三角形になっている。口縁端部をなでて面取りした上で棒状浮文を貼付し、場所によっては楕円状工具か刷毛目の原体と思われるものによる刺突も見られる。また、口縁内面には羽状の刺突文が見られる。これも破片からの復元のため、口径はもっと広がるかもしれない。

300は口縁端部をなでて仕上げた後、竹管のような工具で刺突文を施文している。頸部外面には、口縁部外面に粘土帯を貼り付ける前の刷毛目調整が見られる。口縁部内面はなでて仕上げた後、刷毛目の原体を使ったと思われる刺突文を施文している。



第116図 包含層出土土器実測図2



第117图 包舍厝出土土器实测图3

301は折り返し部分に太い粘土帯を貼り付けているため、口縁部が分厚くなっている。折り返し部分はややなでによって、断面が四角形になるように仕上げてある。口縁端部は斜め方向の刷毛目調整によって面取りし、その上に円形浮文を貼り付けてある。口縁部内面には、刷毛目調整の後、R1の端末結節縄文を2段付けている。

302は口縁端部と口縁部外面を分けてなでているため、折り返し部分に貼り付けた粘土帯の断面が長方形になっている。口縁端部を刷毛目調整の後、棒状浮文を付けている。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、口縁内面にわずかに刷毛目が残っている。

303は長い頸部が緩やかな弧を描いて立ち上がっており、口縁部も同様の弧を描きながら外反し、口縁端部はやや屈曲して水平に近いほどに広がっている。口縁端部は面取りの後、棒状浮文を付けている。また、肩には円形浮文が3つ確認できる。調整痕は風化のため不明である。

304は口縁部が水平に近いほどに外反している。口縁端部はややなで面取りしてあり、棒状浮文を付けている。棒状浮文は剥落が著しく、一部が残っているだけである。風化が進んでおり、調整痕ははっきりしないが、口縁部内面に横方向の刷毛目が残っている。

305も口縁部が水平に近いほどに外反している。口縁外面に張り付けた粘土帯は小さく、口縁端部はあまり厚くなっていないが、口縁端部は面取りしてあり、その上に棒状浮文を付けている。調整痕は風化のため不明である。

306は口縁部の開きが弱いが、折り返し部分は分厚くなっており、口縁端部に斜め方向の刷毛目調整によって面取りし、棒状浮文を付けている。口縁部内面には端末結節縄文を施しているようだが、風化のためははっきりしない。口径は破片からの復元のため、もう少し広がるかもしれない。

307は頸部が直立してやや長く延びていたと思われる。口縁部の開きが弱いが、口縁端部を面取りして、棒状浮文を付けている。風化が進んでいるため、調整痕は不明である。

308は折り返し部分は小さいが、口縁端部をややなで面取りした上に棒状浮文を付けている。棒状浮文を付ける前、口縁端部に斜め方向の刷毛目を入れているようで、刷毛目がわずかに残っている。その他の調整痕は風化のため不明である。

309は折り返し口縁だが、口縁部外面に貼り付けた粘土帯が非常に細いため、口縁端部の厚さは単純口縁とあまり変わっていない。口縁端部を面取りした後、口縁外面に棒状浮文を付けている。風化が進んでいるため、文様や調整痕は不明である。

310は口縁部が水平に近くなるほどに広がっている。折り返し部分を下方に狭み出すようになっていられると思われ、折り返し部分の断面が三角形になっている。口縁端部を面取りの後、棒状浮文を付けている。口径は破片からの復元のため、図示よりも広がるかもしれない。

第118図311は、口縁部が水平に近いほどに外反している。口縁部の折り返し部分はあまり厚くなっていないが、口縁端部を面取りして稜線を作りだし、その稜線上に刻み目を入れている。刻み目は小さいが、間隔を空けずに連続して入れている。

312は口縁部が水平に近くなるほどに外反している。口縁端部をややなで調整した後、棒状浮文を付けている。風化のため、調整痕は不明である。

313は折り返し口縁だが、口縁部外面に貼り付けた粘土帯が細いため、口縁端部はあまり厚くなっていない。口縁部外面に棒状浮文が付いている。風化が進んでいるため、文様や調整痕の観察が難しいが、口縁内面に縄文が施されていた可能性がある。

314は口縁部外面に太い粘土帯を貼り付けているため、口縁端部が厚くなっている。粘土帯の断面は丸くなるように仕上げてある。口縁外面には刷毛目の原体を押し当てたと思われる刻み目が入っている。また、口縁内面には縄文が付いているかもしれないが、風化が進んでいるため、はっきりしない。

315 は口縁部外面に貼り付けた粘土帯を下方に狭み出すようにならていると思われ、折り返し部分の断面が三角形になっている。口縁部外面には、斜め方向の刷毛目の後で、小さな刻み目が入っている。風化のため、調整痕は不明である。

316 は端部が水平に近くなるほどに外反している。口縁部外面をなで分けることで折り返し部分に角を作り、その角に浅い刻み目を入れている。口縁部内部に入れた刻み目ではないため、刻み目は外面からは見えにくい。調整痕は風化のため不明である。

317 は口縁部外面の破片である。口縁部外面に張り付けた粘土帯を下方に狭み出すようにならているため、折り返し部分の断面が三角形になっている。口縁部内部には刷毛目の原体によると思われる刻み目がある。口縁部内面には縄文を施文してあるが、風化が進んでいるため、縄文の一部が残っているだけであり、燃りの方向も不明である。調整痕は風化のため不明である。

318 は風化のため調整痕は不明だが、口縁部外面に貼り付けた粘土帯を下方に狭み出すようにならていると思われ、折り返し部分の断面が三角形になっている。口縁部外面は面取りしてあり、刷毛目の原体と思われる工具による刺突が見られ、間隔を空けずに連続して施文している。

319 は細い頸部から口縁部が大きく広がっているが、頸部の直径はもう少し広がるかもしれない。口縁部外面を面取りして稜線を作りだし、その稜線上に小さな刻み目を入れている。風化のため、文様や調整痕の観察が困難だが、口縁部内面に縄文が施文されていた可能性がある。

321 は口縁部外面が屈曲して外反している。風化のため、調整痕は不明だが、口縁部外面をなで面取りしてあるようで、このなでによって口縁部外面に稜線を作り出し、その稜線上に刻み目を入れている。刻み目は角のある工具を遣い、工具の角の部分を押し当てている。

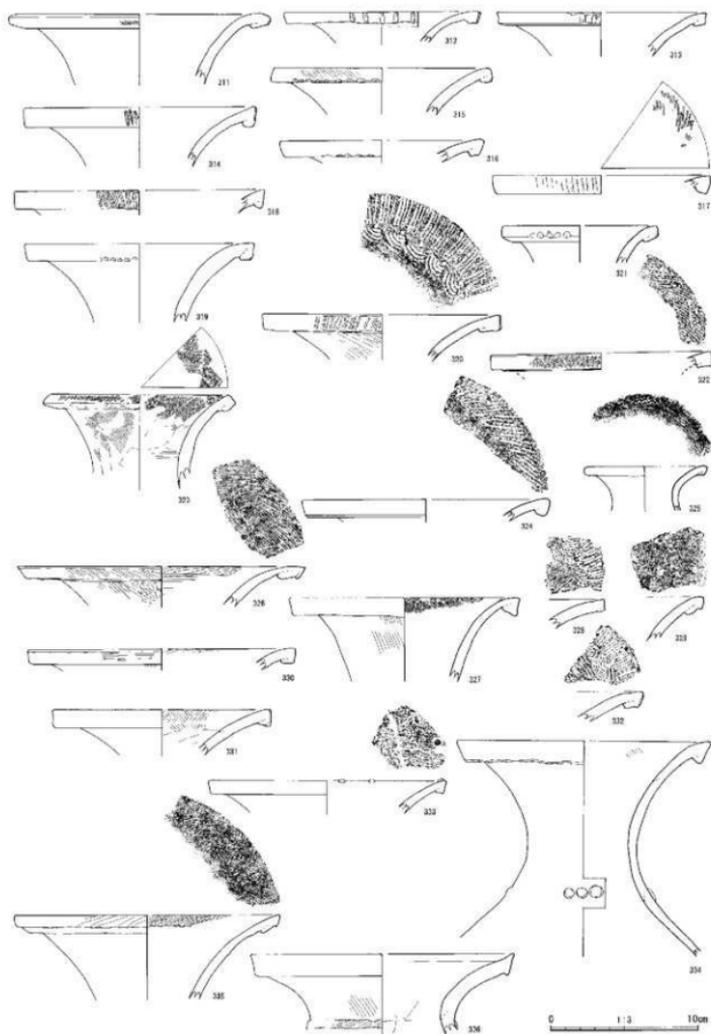
322 は口縁部外面の破片で、端部をなで面取りをした後、LRの縄文を施文している。また、口縁部内面にもLRの縄文が付いている。

323 は口縁部外面に貼り付けた粘土帯に、粘土帯を口縁部に密着させた時の指頭圧痕が残っている。口縁部外面はなで面取りしてあり、その上にLRの縄文を付けている。口縁部内面にも同様の縄文が見られるが、風化により部分的に確認できるだけである。外面には斜め方向の刷毛目があり、頸部は刷毛目調整の後でなでている。内面はなでて仕上げている。

324 は口縁部外面に貼り付けた粘土帯を下方に狭み出すようにならているため、折り返し部分の断面が三角形になっている。外面はなでて仕上げている。口縁部内面にはLRの縄文が施文されている。

327 は頸部が緩やかに外反し、口縁部屈曲して水平に近いほどに外反している。口縁部外面に貼り付けた粘土帯を下方に狭み出すようにならているため、折り返し部分の断面が三角形になっている。外面は風化のため調整痕が見えにくい。一部に刷毛目が残っている。口縁部内面にはLRの羽状縄文を施文した後、円形浮文を付けている。

329 は口縁部外面に刺突文があるようだが、風化のため、はっきりしない。口縁部内面には端末結節縄文がある。縄文が非常に細かい上に風化が激しいため、縄の燃りは不明である。口縁部内面には縄文施文前に付けた横方向の調整痕が見られる。拓本が小さいため、観察しにくい。この調整痕は条間よりも条溝の方が広い特徴がある。拓本では、黒く墨が付いている部分よりも白く抜けている部分の方が広い。調整に使った工具が、年輪の部分が楕円状に突出した木の板だとすれば、年輪の部分が凹み、年輪の間が盛り上がり残る。この痕跡の拓本を取ると、年輪の間の盛り上がりには墨が付き、年輪が当たった部分は白く残る。したがって拓本には、黒い墨の間に細い白線を引いたように刷毛目が写しとられる。この土器の調整痕はその逆で、墨の当たっていない白い部分が広く、墨の当たっている黒い部分が狭いことから、楕円状に突起のある原体ではない。可能性があるのは放射肋のある貝殻であるが、貝殻を使った調整がこの時期に通例なのか、別途検討が必要である。



第118図 包含層出土土器実測図4

330は口縁部が水平に近くなるほどに広がっている。口縁部外面に貼り付けた粘土帯が小さいため、口縁部は大して厚くなっていない。口縁端部は横方向の刷毛目調整によって面取りをしてある。また、口縁部内面には縄文を入れてあるが、風化が進んでいるため、撚りの方向は不明である。

331は、口縁部外面に貼り付けた粘土帯を下方に狭まみ出すようにならしているため、折り返し部分の断面が三角形になっている。口縁部内面には羽状文が見られる。外面の調整痕は風化のため不明である。

332は、口縁端部を刷毛目調整によって面取りし、刻み目を入れてある。口縁部内面には、横方向の刷毛目調整の後、櫛描きによる直線文と扇形文が見られる。

333は、口縁部外面に張り付けた粘土帯を下に狭まみ出すようにならしているため、折り返し部分の断面が三角形になっている。口縁部内面には円形浮文が付いている。また、円形浮文を付ける前に縄文を施していた可能性があるが、風化のためはっきりしない。

334は肩と頸部の境界付近に粘土の接合痕があり、頸部～口縁部が弧を描きながら外反している。口縁部外面に貼り付けた粘土帯を下方に狭まみ出すようにならしているため、口縁部の折り返し部分の断面が三角形になっている。また、粘土帯を密着させた時の指頭圧痕も残っている。頸部には円形浮文が3つ確認できる。調整痕は風化のため不明である。

336は、頸部に屈曲があり、そこから口縁部が外反している。頸部には粘土帯を貼り付けてあり、その上に刺突文を入れている。口縁部外面に細い粘土帯を貼り付けて折り返し口縁にしていると思われるが、口縁端部を強くなでて粘土が下方にはみ出しているために折り返し口縁に見えているだけかもしれない。頸部外面に斜め方向の刷毛目調整が見える以外は、風化により調整痕は観察できない。

第119図337は口縁部が逆「ハ」の字に広がっている。口縁部外面に張り付けた粘土帯は細いもので、口縁部はあまり厚くなっていない。穿孔が2箇所認められる。調整痕は、風化のため不明である。

338は口縁部が水平に近いほどに外反している。口縁部の立ち上がり部分が厚くなっており、口縁端部は薄くなっている。その薄くなった部分に粘土帯を貼り付けて折り返し口縁にしているが、貼り付けた粘土帯が薄いため、結果的には口縁端部と口縁部立ち上がり部分では厚さが変わっていない。また、折り返し部分の断面は丸くなっている。口縁内面には円形浮文が付けられている。風化が進んでいるため、調整痕は不明である。

339は頸部～口縁部が弧を描くように外反している。口縁部の折り返し部分は、口縁部外面に粘土帯を貼り付けるのではなく、単純口縁の端部に粘土を継ぎ足して折り返し口縁を作っている。口縁部外面には縄文を施文してあるが、風化のため、ごく一部でかろうじて確認できる程度である。撚りの方向は不明である。口縁部内面には円形浮文を貼り付けてある。

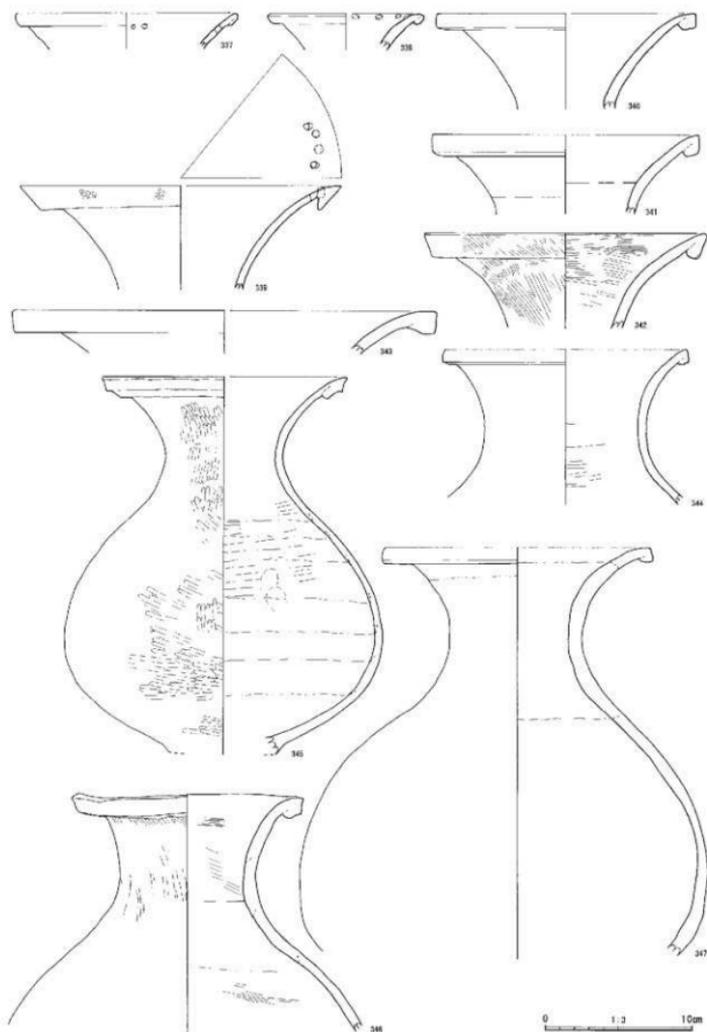
#### 広口壺（折り返し口縁、無文）（第119図340～347、第120図、第121図384～387）

第119図340は頸部の粘土接合部分ではずれた破片である。直立して立ち上がってきた頸部が屈曲して口縁部が外反している。口縁部外面に貼り付けた粘土帯断面が四角形になるように仕上げている。調整痕は風化のため不明である。

341は口縁端部と外面をなで分けているため、折り返し部分の断面が四角形になっている。内外面ともなで仕上げている。

343は口縁部が水平になるほどに外反しており、折り返し部分は分厚くなっている。口縁端部はしっかりなで面取りしてあるが、文様は確認できない。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、内外面ともなでていると思われる。

344は頸部が太く短い特徴がある。口縁端部は折り返し口縁になっており、端部をなで面取りしてある。外面の調整痕は風化のため不明であるが、内面は頸部から下に刷毛目が残っており、口縁部内面はなでている。太く短い頸部から、この土器が菊川式とすると新しい段階と思われる。



第119図 包含層出土土器実測図5

第120図348は底部が突出しており、胸部は球胸になっている。肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、そこから頸部が弯曲しながら立ち上がり、口縁部が大きく外反している。頸部は太く短い。口縁部外面に貼り付けた粘土帯は押さえてつけただけで、その後の器面調整をしていないようで、歪んでいる。風化が進んでいるため、調整痕はほとんど観察できないが、内面の一部に刷毛目が残っている。胸部と頸部の形態から、菊川式の新しい段階の壺と思われる。

349は口縁外側に添付した粘土帯を下方に摘み出すようにならしているため、折り返し部分の断面が三角形になっている。また、内面の口縁直下も強くなっているため、口縁内側に平坦面がある。

350は頸部が細く、口縁部は緩やかな弧を描いて外反しているが、口の開き方は大きくない。口縁外面に粘土帯を貼り付けて2倍ほどの厚さにした後口縁端部と口縁外面をなでている。

351は頸部と口縁部の境界に屈曲がある。口縁端部はなでて仕上げている。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、頸部外面に斜め方向の刷毛目が残っている。

352は口縁部は直線的に外反している。風化が進んでいるため、調整痕は不明である。

353は内傾しながら立ち上がってきた頸部が屈曲して垂直方向に向きを変えて立ち上がり、粘土を継いだ所でさらに屈曲して口縁部が外反している。口縁端部はさらに屈曲して水平に広がっている。口縁外面に張り付けた粘土帯は太く、口縁部が2倍の厚さになっている。また、口縁端部と口縁外面をなで分けてあるため、折り返し部分の断面が四角形になっている。調整は内外面ともなでている。

354は折り返し部分は分厚く、口縁端部に斜め方向の刷毛目が見られる。頸部～口縁部は弧を描きながら外反している。頸部上半の外面にも斜め方向の刷毛目が見られ、頸部下半はなでて仕上げている。また、頸部と胸部の境界付近に沈線を入れてあり、この部分に粘土の接合痕があることから、ここが肩と頸部の境界になっていたと思われる。口縁部内面は横～斜め方向の刷毛目で、頸部内面はなでている。

355は折り返し部分が分厚く、口縁端部に斜め方向の刷毛目が見られる。頸部は内傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部との境界で屈曲して口縁部が外反している。頸部上半には斜め方向の刷毛目、頸部下半には横方向の刷毛目が見られる。内面調整は、口縁部～頸部上半が横方向の刷毛目で、頸部下半はなでて仕上げている。

356は頸部から口縁部が円を描くように外反しており、頸部が太い特徴がある。口縁部は折り返し口縁になっているが、貼り付けた粘土帯が薄いため、口縁部はあまり厚くなっていない。口縁端部をなでて面取りする土器が多い中で、これは端部を面取りしていない。調整痕は風化のため不明である。

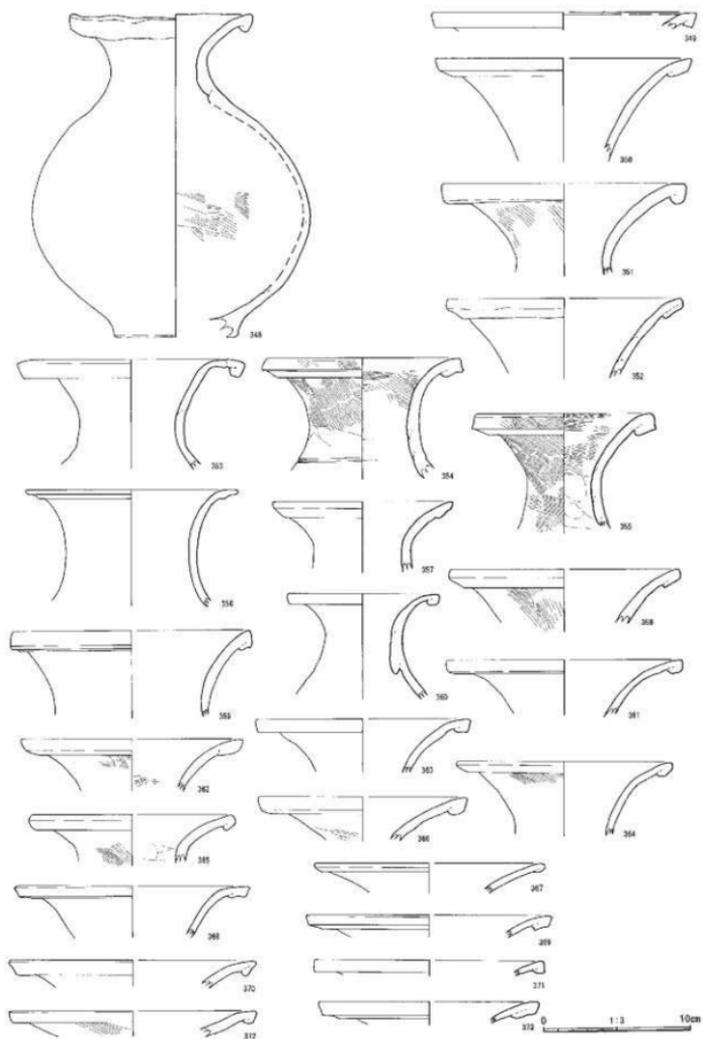
357は直立した頸部が屈曲して口縁部が外反している。端部は折り返し口縁になっているが、口縁外面に貼付した粘土帯は小さく、口縁部は大して厚くなっていない。また、外反の度合いも小さいため、直立した状態で拡張口縁の外面がはっきり見える。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、刷毛目調整の後でなでていると思われる。

358は折り返し部分は大きくないが、口縁端部と口縁外面をなで分けてあるため、折り返し部分の断面が長方形になっている。風化が進んでいるため、調整痕は観察しにくいだが、外面に斜め方向の刷毛目が残っている。

359は頸部が太くなっている。頸部下半は欠損しているが、頸部は短いかもしれない。

360は水平に近いほどに外反した口縁部は折り返し口縁になっている。口縁端部と外面をはっきりなでているため、折り返し部分の断面は四角形になっている。頸部立ち上がり部分の内面には、粘土の接合痕がはっきり残っている。登呂式に見られるように、肩から頸部を連続して作るのではなく、菊川式に見られるように、肩と頸部を別工程で作っているのがわかるが、頸部の粘土が肩の内側に貼り付けられているため、頸部の粘土が内側に大きくはみ出している。

361は口縁部が水平に近くなるほどに外反している。風化のため、調整痕は確認できない。



第120図 包含層出土土器実測図6

362は口縁部外面に張り付けた粘土帯が薄いため、口縁部はあまり厚くなっていない。口縁部直下の外面に斜め方向の刷毛目が見られ、口縁部内面には横方向の刷毛目が残っている。

363は折り返し部分は分厚く、端部をなでて面取りしてある。調整痕は風化のためはっきりしない。

364は折り返し部分の断面は楕円形に近くなっている。風化のため、調整痕ははっきりせず、口縁直下の外面に刷毛目が残っているだけである。

365は風化が進んでいるため、折り返し部分の調整がはっきりしないが、断面が丸みを帯びるように仕上がっている。外面には斜め方向の刷毛目が見られ、内面はなでて仕上げていると思われる。

366は口縁の外面に粘土帯を貼り付けることで、土器の厚さが2倍程度になっている。風化のため、調整痕は不明で、文様も確認できない。口径は破片からの推定だが、もともと広がるかもしれない。

367は器壁が薄く、折り返し部分も非常に小さい。368は口縁端部が屈曲して水平になっている。折り返し部分に貼り付けた粘土帯には強くなでつけてある。また、口縁端部も強くなでである。

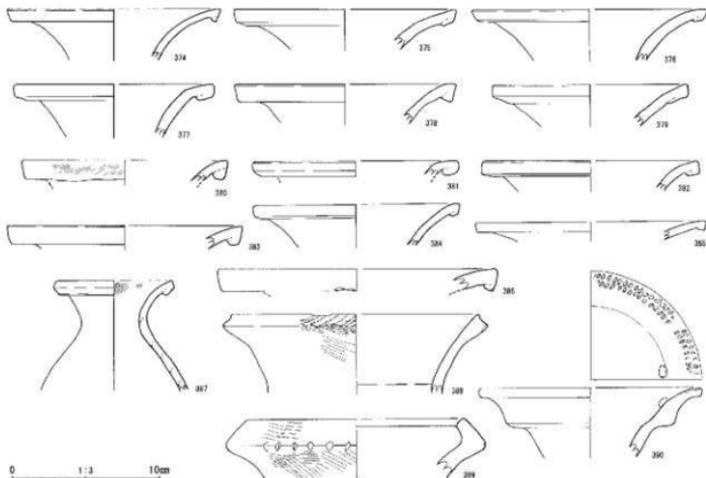
369は口縁端部は水平に近くなるほどに広がっており、口縁外面に張り付けた粘土土も大きく、口縁部の厚さが2倍ほどになっている。また、口縁端部と外面を別になでているため、折り返し部分の断面が長方形に近くなっている。調整痕は風化のため不明である。

370は折り返し部分を下方に広げ出すようになでているため、折り返し部分の断面は三角形になっている。風化が進んでいるため、文様や調整痕は観察できない。

371は口縁部外面に粘土帯を貼り付け、なでつけてあるため、粘土帯が下方に伸びたように広がっている。調整痕は風化のため観察できない。

372は口縁部が水平に近くなるほどに広がっている。風化が進んでいるため、文様や調整痕の観察が困難だが、外面に斜め方向の刷毛目が残っている。

373は風化が進んでいるため、調整痕は見えないが、口縁端部はなでて面取りしてあるように見える。



第121図 包含層出土土器実測図7

第121図374は口縁部が水平に近いほどに外反している。折り返し部分は、貼り付けた粘土を下方に広まみ出すようになっていて、断面が三角形になっている。風化のため、調整痕は不明である。

375の口縁部外面に貼り付けた粘土帯は小さく、口縁端部は大して厚くなっていないが、口縁端部と口縁部外面ははっきりと分けてなでている。調整痕は風化のため不明である。

376の口縁部は水平に近いほどに外反している。口縁部外面に張り付けた粘土帯は小さなもので、折り返し口縁とは言い、口縁部を拡張した効果は小さい。しかし、口縁端部はなでてはつきりと面を作り出してある。調整痕は風化により不明である。377は逆「ハ」の字状に外反した口縁部の端部が屈曲して外反している。378も口縁端部が屈曲して水平に近いほどに外反している。口縁部外面に貼り付けた粘土帯を下方に広まみ出すようになっていて、折り返し部分の断面が三角形になっている。

379は口縁部外面に張り付けた粘土帯をなでつけているため、口縁部は大して厚くなっていない。

380の折り返し部分は厚く、口縁端部は斜め方向の刷毛目調整で面取りをしてある。381は口縁端部の破片で、折り返し部分は風化のため、角が取れて丸くなっている。調整痕も風化により、観察できない。

382は口縁端部が屈曲して外反している。383は折り返し部分が厚く、断面が三角形になっている。

384は口縁端部の折り返し部分は小さく、その断面も丸みは帯びている。385は口縁部が水平に近いほどに外反している。口径は破片からの復元だが、もっと広がるかもしれない。

386は口縁部が水平に近いほどに広がっている。折り返し部分を下方に広まみ出すようになっていて、折り返し部分の断面が三角形に近くなっている。折り返し部分の端部には粘土帯を密着させた時の指頭王痕が残っている。387は肩が張らず、肩～胴部上半は「ハ」の字状に広がっている。頭部が屈曲して口縁部が外反している。口縁端部と口縁部外面をなでて面取りしてあるため、折り返し部分の断面は四角形に近くなっている。口縁部内面に刷毛目が残っている部分がある。

受口壺(有文)(第121図389～390、第122・123図、第124図404～413)

第121図389は一度外反した口縁部が屈曲、内湾して受け口状になる特徴がある。屈曲部の外面に刻み目を入れている。外面は刷毛目調整で、内面はなで仕上げている。

広口壺(単純口縁、無文もしくは文様を確認できないもの)

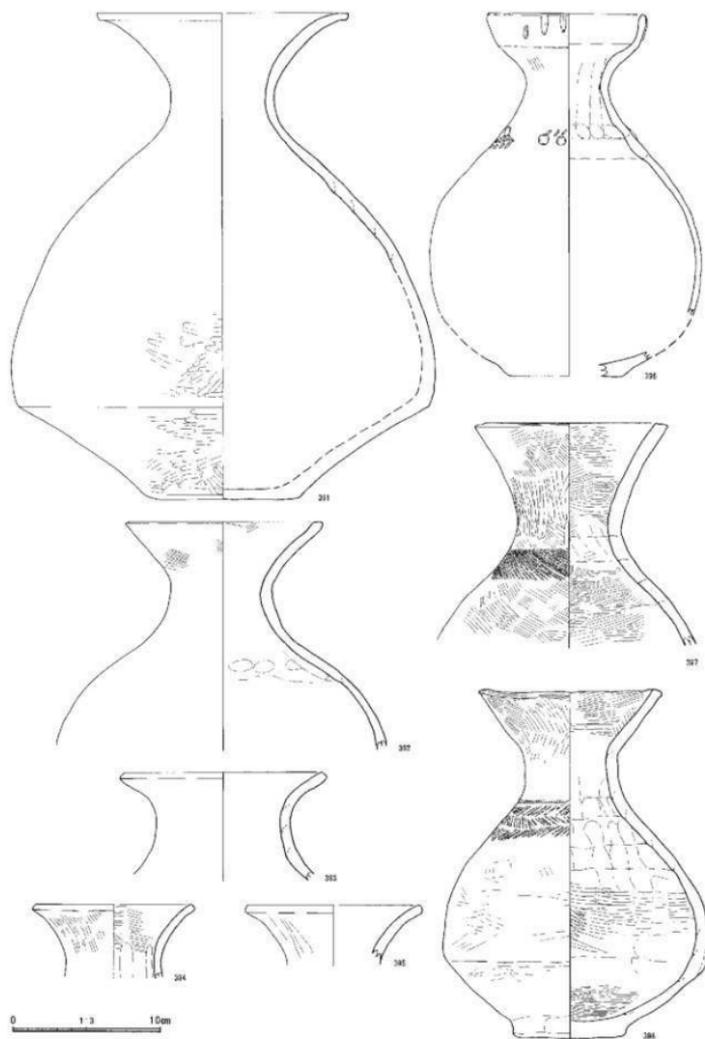
第122図391は底部が突出せず、胴部下半にはっきりした屈曲部がある。おそらくここで粘土をつないでいると思われる。頭部～口縁部は弧を描いて外反しているが、頭部にわずかながら直立する部分があることから、器形の点では菊川式の特徴をもっている。風化のため調整痕の観察が難しいが、胴部下半は磨いて仕上げている。胴部上半の断面に粘土の接合痕が確認でき、小刻みに粘土を積み上げて成形したことがうかがえる。

392は胴部が大きく張り出している。肩と頭部の境界で器壁の厚さが変わっており、わずかながら屈曲していることから、肩で粘土をつないで器壁の方向を変えて頭部を立ち上げていると思われる。そして、頭部と口縁部の境界で屈曲して口縁部が外反している。口縁端部は面取りしてある。風化のため、調整痕の観察が難しいが、外面と口縁部内面の一部に刷毛目が残っている。胴部内面には粘土の接合痕と指頭王痕が残っている。肩、頭部、口縁部を作り分けられていると考えられる点で菊川式の特徴がある。

393は頭部が太く短い特徴がある。また、粘土の接合痕から、小刻みに粘土を積み上げて成形していることが読み取れる。口縁端部は面取りしていると思われる。

394は頭部と口縁部の境界がわずかに屈曲しており、この屈曲から口縁部が外反している。口縁端部はなでて面取りしてある。外面には斜め方向の刷毛目があり、口縁部内面には右から左に向かう刷毛目、頭部内面にはなでた痕跡がある。口径は破片からの推定だが、もっと広がるかもしれない。

395は口縁部の破片で、緩い弧を描きながら外反している。口縁端部はなでて面取りしてあるのがわかるが、他の調整痕は風化のため、不明である。口径は破片からの推定だが、もっと広がるかもしれない。



第 122 图 包舍厝出土土器实测图 9

第123図403は底部が突出し、胴部下半に粘土の接合痕があり、ここで胴部が屈曲している。屈曲から上は胴部がすぼんでいき、胴部上半と肩の境界に粘土の接合痕がある。肩を成形した後、頸部との境界でも粘土をつなぎ、頸部を立ち上げている。頸部は直立しながら立ち上がり、口縁部との境界で弱く屈曲してから口縁部が直線的に外反している。頸部と口縁部の境界でも粘土をつないでいると思われる。内面調整を見ると、底部～屈曲部はなでであり、屈曲部～肩は横方向の刷毛目調整である。肩の内面は指でなでた痕跡があり、頸部～口縁部はなでで仕上げられている。このように、粘土の接合を境界に調整方法が異なっていることから、粘土を積み上げるごとに内面を調整しながら成形していたと思われる。口縁部を面取りする土器が多い中で、これは面取りしていない。

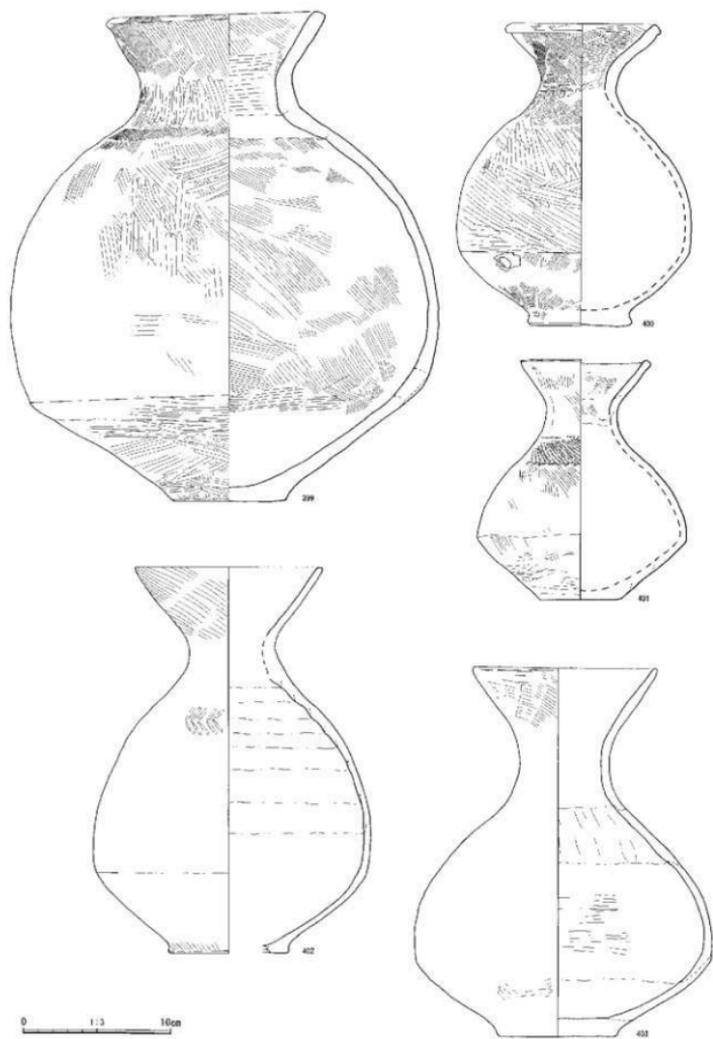
第124図407はなで肩の壺で、長胴になるとと思われる。頸部～口縁部はゆるやかな弧を描きながら外反している。肩と頸部の境界と思われる部分に粘土の接合痕があるが、器壁の成形方向は変わらず、胴部の内傾をそのまま延長して頸部が立ち上がり、途中で緩やかに弧を描くように外反して口縁部に至っている。この土器も口縁部を面取りしていない。408は肩と頸部の境界、頸部と口縁部の境界にそれぞれ粘土の接合痕があり、接合部を境に器壁の立ち上がる方向が変わっている。このことから、肩～頸部、頸部～口縁部を工程別に作り分けていることが読み取れる。口縁部は逆「ハ」の字状に広がっており、端部はなでで面取りしてある。頸部は細く、外面に斜め～横方向の刷毛目が見られる。内面には横方向の刷毛目が見られ、頸部の細くなっている部分は、刷毛目の原体が入らないため、なでで仕上げている。

409は頸部と口縁部の境界に屈曲があり、この屈曲から口縁部が逆「ハ」の字状に広がっている。口縁部はなでで面取りしてある。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、外面に斜め方向の刷毛目が残っている。410は口縁部が逆「ハ」の字形に外反している。破片から口径を復元しているが、もう少し口径が広がるであろう。風化が進んでいるため、調整痕は確認できないが、口縁部を面取りしていると思われる。411は頸部と口縁部の境界に屈曲があり、この屈曲から口縁部が外反しており、わずかに内湾している。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、口縁部は面取りしてあると思われる。412は細い頸部から緩やかな弧を描いて口縁部が立ち上がっているが、口縁部の開きは小さい。口縁部はなでで面取りしてある。調整痕は風化のため、観察が難しいが、頸部に指による圧痕が残っている。413は口縁部が逆「ハ」の字状に外反している。口縁部はなでで面取りしてある。調整痕は風化のため観察しにくい、なでで仕上げていると思われる。

#### 口縁部を確認できない壺(有文) (第124図414～417、第125図、第126図425～435)

第124図414は、やや頸部が長いなで肩の壺で、内面に残る粘土の接合痕と器壁の厚さの変化から成形工程がわかる。胴部と肩の境界に粘土の接合痕があり、この接合痕を挟んで肩の方が器壁が厚くなっている。そして、わずかに器壁が屈曲して肩が立ち上がっている。肩と頸部の境界にも粘土の接合痕があり、ここから頸部が立ち上がっている。頸部は途中で屈曲して口縁部が外反している。頸部と口縁部の境界では粘土の接合痕は確認できないが、胴部、肩、頸部は工程を分けて作っていると考えられる。外面では、頸部と肩の境界付近には沈線があり、沈線施文後、沈線上に円形浮文を貼り付けている。この沈線は肩と頸部の境界として引かれていると思われるが、内面の粘土接合痕に示されている肩と頸部の境界とは若干ずれていることから、土器成型時の肩と頸部の境界と、文様施文時の肩と頸部の境界には、製作者の意識の上でずれがあったことがうかがえる。

415は頸部と胴部の境界付近に沈線を入れた後、沈線上に円形浮文を貼り付けている。沈線の下位には羽状刺突文を入れているようだが、風化により鮮明ではない。3つ確認できる円形浮文のうち、間隔が開いている部分にわずかな凹凸があることから、本来はここにも円形浮文があったと思われる。内面には粘土の接合痕があり、この接合部をはきんで器壁の向きが変わっているため、ここで肩と頸部を作り分けたと思われる。成形途上で肩と頸部を作り分けた境界と、施文時に肩と頸部の境界として引いた

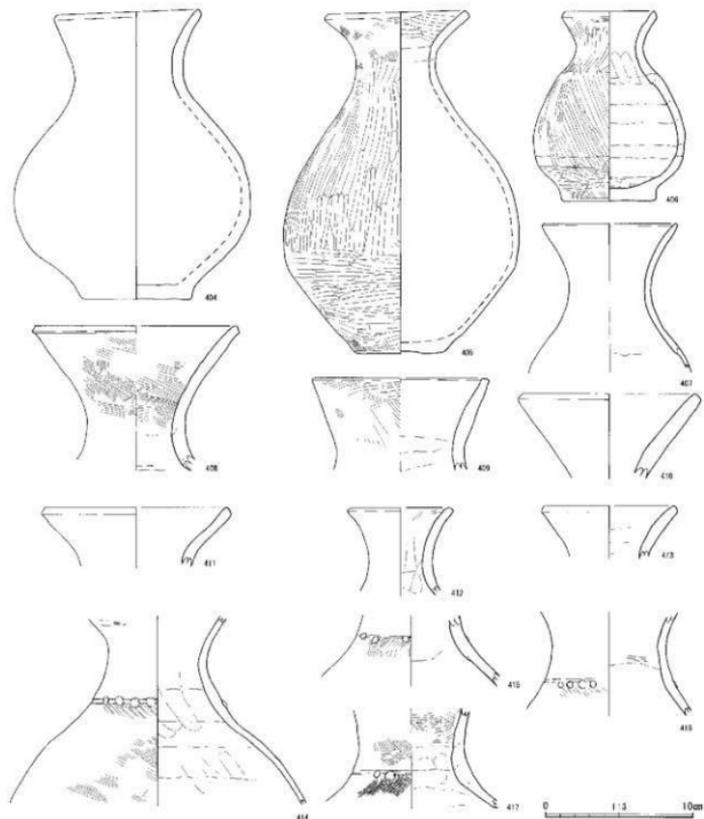


第123図 包含層出土土器実測図9

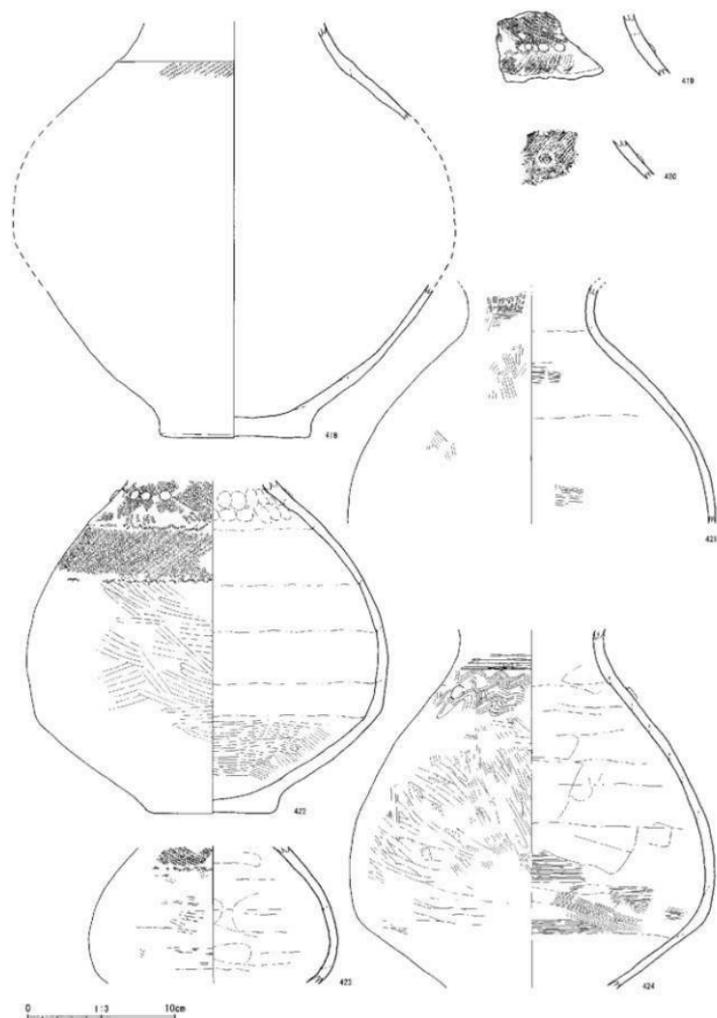
沈線の位置がずれていることから、成形時に意識した肩と頸部の境界と、施文時に意識した肩と頸部の境界にずれがあったことがわかる。調整痕は風化のためはっきりしない。

416は肩と頸部の境界に粘土のつなぎ目が見られ、ここから器壁が緩やかに外反して口縁部が作られている。外面には肩と頸部の境界付近の沈線と円形浮文がある。円形浮文を添付する前に、沈線の下位に刺突文を入れている可能性があるが、風化によりはっきりしない。

417は肩と頸部の境界で粘土をつなぎ、ここから器壁の向きを変えて頸部を立ち上げている。頸部と肩の境界に沈線を入れ、その下位にLRの縄文を施文した後、円形浮文を付けている。沈線の上位は無文で斜め方向の刷毛目調整が見られる。



第124図 包含層出土土器実測図10



第125圖 包含層出土土器実測図11

第125図418は底部～胴部下半と肩の破片で、同一個体の可能性が高い。底部突出しており、胴部が緩やかな弧を描きながら立ち上がっている。胴部中央付近が最大径になると思われる。胴部上半に粘土の接合部分があり、ここから器壁の成形方向が変わっていることから、この接合部分が肩と頸部の境界になっていると思われる。外面にも粘土の接合部分に稜線ができており、この稜線の下に、櫛状工具を斜めに押し当てた刺突文がある。縄文の代わりに付けたと思われる。風化が進んでいるため、底部～胴部下半の破片では調整痕は不明だが、肩の破片は内外面ともなっているとされる。

419は肩の部分で、外面に端末結節縄文があり、その上に円形浮文が付いている。

420も肩の破片で、刷毛目調整の後に円形浮文を付けている。内面の調整は風化のため、不明である。

421は肩と頸部の境界にある粘土の接合痕で器壁の向きを変えて頸部を立ち上げている。胴部は大きく広がっている。頸部に横方向の櫛描文のような痕跡が見える部分があるが、一部、縦方向の刷毛目によって切られている部分がある。文様を付けた後で刷毛目調整を入れるとは考えにくいことから、頸部に見える横方向の痕跡も刷毛目による調整であろう。胴部内外面の一部に刷毛目が残っている。

423は胴部の下の方に最大径があり、底部に向かって急激にすぼんでいるため、寸胴になると思われる。底部に向かってすぼんでいくあたりに粘土の接合痕があり、ここが胴部上半と下半の境界になると思われるが、屈曲部は形成していない。頸部直下にLRの端末結節縄文が見られる。胴部は横方向に磨いてあり、内面は指によると思われるのが見られる。

第126図426～435は肩の破片で、426～429は風化が進んでいるため調整痕は不明だが、円形浮文を付けてある。430は外面に円形浮文と羽状刺突文が見られる。431は外面に粘土帯を貼り付けた後で、粘土帯の上に羽状刺突文を付けている。この遺跡では珍しい例である。432は櫛描きによる波状文が確認できる。433は刷毛目調整の後で半円状の工具による刺突文が施文されている。434は外面にLRの端末結節縄文が見られる。調整は内外面ともなで仕上げている。435はRLの端末結節縄文が二段施文されている。内面はなで仕上げているが、指頭圧痕が残っている。

口縁部を確認できない壺（無文、もしくは文様を確認できないもの）（第126図436～442）

第126図436は胴部が球割みみではあるが、胴部下半に最大径がある。肩と頸部の境界に屈曲があり、ここから頸部が垂直に立ち上がっている。437は胴部屈曲部の破片で、屈曲部を境界に厚さが異なる。

438は胴部上半と下半の境界に粘土の接合痕があり、屈曲部が作られている。底部はやや突出している。風化が進んでいるため、調整痕はほとんど確認できないが、内面に粘土の接合痕が残っている。

439は胴部下半は直線的に外反しているのに対して、下半と上半の境界になる粘土の接合痕を挟んで胴部上半は丸みを帯びている。これは古式土師器の可能性がある。

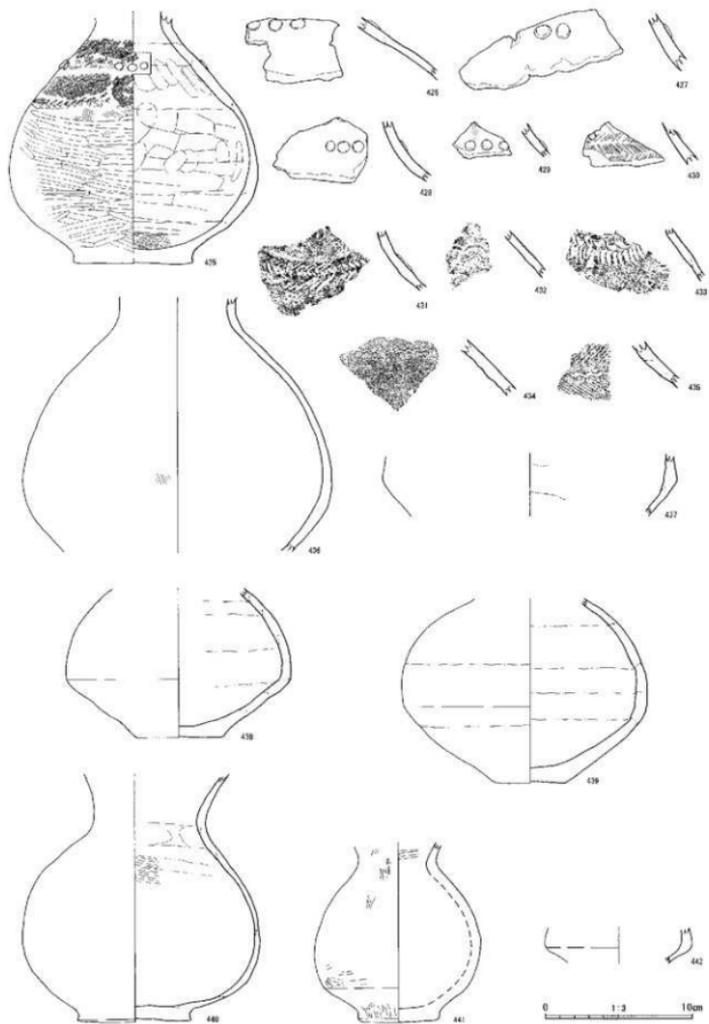
440は底部が突出しており、胴部に粘土の接合痕は確認できるが、胴部上半と下半の境界に屈曲は作られていない。肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、そこから器壁が屈曲して口縁部が外反している。胴部の最大径に比べて頸部が太い。外面の調整痕は風化のためほとんど残っていないが、内面には胴部上半に刷毛目、頸部に指によると思われるのが残っている。

441は小型の壺で、底部が突出しており、胴部は球割に近い。頸部は屈曲して口縁部が外反している。外面はほぼ全面磨いていると思われる。内面は頸部に横方向の刷毛目が見られ、胴部はなである。

442は小型壺の胴部である。底部から斜めに立ち上がった胴部が90度近く屈曲しており、屈曲部を挟んで器壁の厚さが大きく異なっている。

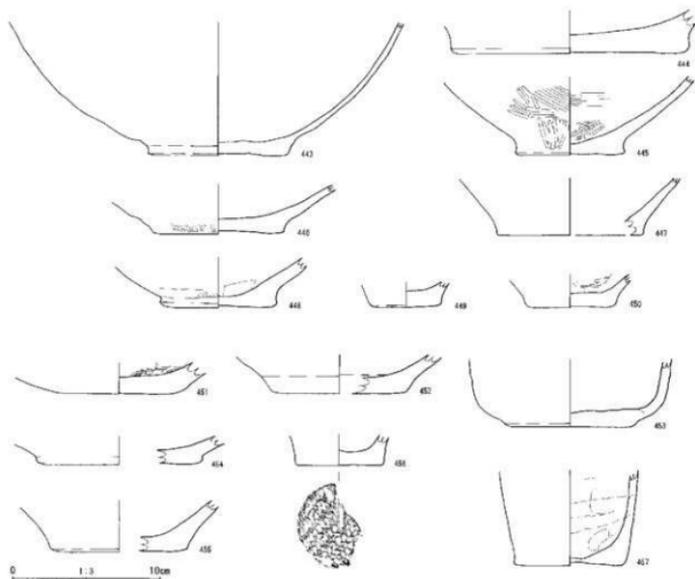
壺の底部（第127図）

第127図443は底部が突出しており、胴部が丸く立ち上がっている。大きさの割に器壁が薄い特徴がある。444は底部の破片で、厚みがある。445は底部が突出しており、外面は刷毛目調整の後に磨いて仕上げている。内面は刷毛目調整である。



第126图 包含层出土器物实测图12

- 446 は風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、外面にわずかながら刷毛目が残っている。
- 447 は底部との接合付近で剥離した胴部の破片で、底になる粘土盤の上面に粘土ひもを積み上げるのではなく、粘土盤の側面に粘土ひもを継ぎ足して胴部を立ち上げていることがわかる。
- 448 は底部が突出している。外面の底部立ち上がり部分にわずかに刷毛目が残っていることから、刷毛目調整後でなでていることがわかる。内面はなでて仕上げてある。
- 449 は底部のみの破片で、胴部は底部との接合面で剥離している。底になる粘土盤の上に胴部になる粘土ひもを積み上げた痕跡が残っている。風化が進んでいるため、調整痕は観察できない。
- 450 は突出した底部から胴部の立ち上がりが確認できる。風化のため調整痕は観察できない。
- 451 は底部が突出しない壺の底部で、内面に刷毛目が残っている。
- 452 は突出した底部～胴部が立ち上がっている。調整痕は風化のため観察できない。
- 453 は、わずかに突出した底部から、胴部が垂直に近い方向で立ち上がっている。風化が進んでいるため、調整痕は観察できない。454・455 は風化が進んでいるため、調整痕は確認できない。
- 456 は胴部が垂直に近い角度で立ち上がっている。底面には網代痕が残っている。
- 457 は胴部が直立して立ち上がっている。底になる粘土盤が薄かったらしく、底部の中央付近が非常に薄い。胴部の立ち上がり部分が厚くなっているのは、底部の粘土盤に太い粘土ひもを継ぎ足したためと思われる。また、底部は上げ底になっている。外面はなでて仕上げてあり、内面もなでているが、内面には粘土の接合痕と指頭圧痕が残っている。



第127図 包含層出土土器実測図13

### 壺(単純口縁、有文) (第128図)

第128図458は、頭部が90度近く屈曲して口縁部が外反している。口縁端部を面取りした後、刻み目を入れている。刻み目は刷毛目の原体を押し当てていると思われる。外面には斜め方向の刷毛目が見られるが、頭部の屈曲部分は刷毛目原体の当たりが浅い。内面には横方向の刷毛目が見られる。

459は頭部の屈曲、口縁部の外反ともに弱い。口縁端部は面取りした後、外面に刻み目を入れている。

460は頭部が90度ほど屈曲して口縁部が短く外反している。口縁端部をなでて面取りした後、刻み目を入れている。刻み目は刷毛目の原体を使っていると思われる。

461は頭部が「く」の字状に屈曲して口縁部が直線的に外反している。口縁端部を面取りして口縁部外面に角を作り、その角に刻み目を入れている。風化が進んでいる。

462は頭部～口縁部が弧を描くように外反している。口縁部外面には刻み目がある。この刻み目は、土器の正面ではなく、左斜め前方から刺突されている。刻み目に刷毛目が観察できることから、刷毛目の原体を押し当てていると思われる。頭部～胴部の外面には右斜め下に向かう刷毛目が付けられている。口縁部内面には左から右に向かう刷毛目が見られ、胴部内面も同様に左から右に向かう方向になでである。以上の調整痕の動きは左利きの動きで理解できる。

463は頭部～口縁部が弧を描くように屈曲、外反しており、口縁端部に刻み目を入れている。464は頭部の屈曲、口縁部の外反ともに弱く、肩も張っていない。口縁端部には刻み目を入れている。

465は口縁部が緩やかに外反し、口縁部外面を刷毛目調整した後で、刻み目を入れている。刻み目は刷毛目の原体で刺突していると思われる。口縁部の内面には横方向の刷毛目が見られる。

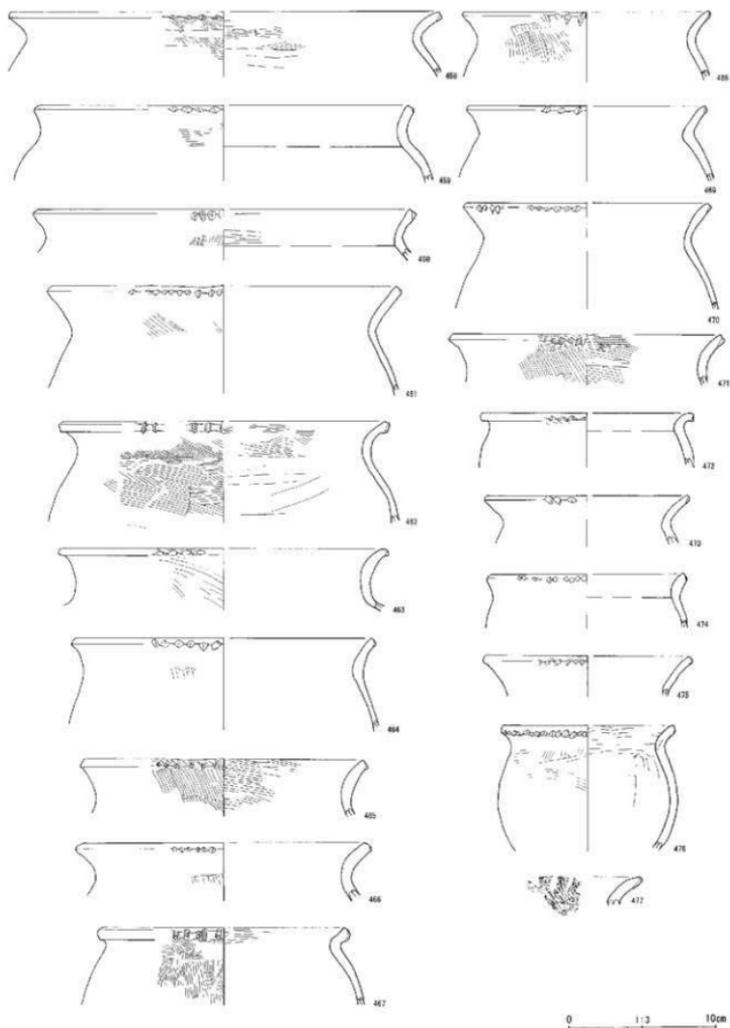
466は頭部が90度ほど屈曲して口縁部が外反している。口縁端部には小さな刻み目を入れている。風化が進んでいるため、調整痕の観察が困難だが、頭部外面に縦方向の刷毛目が残っており、刷毛目自体の端部の当たりも残っていることから、上から下方向への刷毛目であったことがかろうじてわかる。

467は頭部が90度ほど屈曲して短い口縁部が外反している。口縁端部には刻み目がある。刻み目は櫛状の工具を強く押し当てている。外面には縦方向、下向きの刷毛目が付いている。口縁内面には横方向の刷毛目が付いており、頭部から下はなで仕上げている。

468は頭部が緩やかに屈曲して口縁部が外反している。口縁端部には刷毛目の原体を押し当てたとと思われる刻み目が見られる。外面には刷毛目が観察でき、原体端部の当たりも確認できることから、上から下に向かう刷毛目調整だったことがわかる。469は口縁端部には、角のある工具を押し当てた刻み目がある。470は口縁端部を面取りして口縁部外面に角を作り、その角に刻み目を入れている。

471は口縁部が緩やかに外反している。口縁端部に刻み目が見られる。刻み目は刷毛目原体の端部を押し当てていると思われる。口縁端部には刻み目を付ける前の刷毛目調整が見られる。外面には斜め方向の刷毛目があり、内面には横方向の刷毛目が見られる。472は頭部が鋭く屈曲している。口縁部は短いものの端部が水平に近くなるほどに外反している。口縁端部には刻み目が入っている。473は頭部が90度ほど屈曲して口縁部が外反している。口縁端部をなでて面取りをすることで、口縁部外面に角を作り、その角に刻み目を入れている。474は頭部の屈曲、口縁部に外反ともに弱い。口縁部は頭部よりも厚くなる特徴がある。口縁外面には非常に小さな刻み目が見られる。475は口縁端部を面取りすることで、口縁部外面に稜線を作り出し、その稜線上に刻み目を入れている。立ち上りの角度から考えて、これは壺の口縁部の可能性もある。

476は球胴の壺で、頭部は90度ほど屈曲して短い口縁部が外反している。口縁部外面には刻み目を入れている。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、胴部上半～頭部の外面と口縁部内面には刷毛目が残っている部分がある。胴部内面は工具を使ってなでていると思われる。477は口縁部の破片で、端部に刻み目と縦方向の刷毛目が観察できる。



第128図 包含層出土土器実測図14

**壺（折り返し口縁、有文）**（第129図478～480）

第129図478～480は口縁端部を面取して口縁部外面に稜線を作りだし、その稜線の上に刻み目を入れている。刻み目は角のある工具の角の部分を押し当てている。

**壺（折り返し口縁、無文）**（第129図481～485）

481は頸部が弧を描くように屈曲して短い口縁部が外反している。折り返し部分に張り付けた粘土帯が小さいため、口縁部は大して厚くなっていない。482は肩が張っており、頸部は鋭く屈曲して短い口縁部が立ち上がっている。頸部が短いため、口縁部の外面に貼り付けた粘土帯が頸部にまでかかっている。内外面とも粗い刷毛目調整が残っている。483は頸部の屈曲が弱く、口縁部は垂直に近い角度で立ち上がり、端部をわずかに外側に摘み出すようになっているため、口縁端部がわずかに外反している。外面に斜め方向の刷毛目、口縁部内面に横方向の刷毛目、頸部の指頭圧痕がわずかに残っている。

484は頸部が90度ほど屈曲して短い口縁部が外反している。口縁端部は強くなでであり、なでつけられた粘土が外面にはみ出している。485は、頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部が直線的に外反している。風化が進んでいるため、調整痕は観察できないが、口縁端部を面取してある。口縁部外面には、刻み目があった可能性がある。

**壺（単純口縁 無文）**（第129図486～491）

486は頸部が90度ほど屈曲して口縁部が外反しているが、口縁端部が欠損している。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、内外面とも刷毛目調整の後でなでていると思われる。487は頸部が90度以上屈曲して口縁部が直線的に外反している。頸部の屈曲から考えて肩が張る形態と思われる。口縁部の内外面には粗い刷毛目が見られ、胴部の内外面はなでて仕上げている。488は、頸部が90度近く屈曲して口縁部が直線的に外反している。口縁端部の面取りは見られない。口縁部外面に縦方向の刷毛目があるのに対して、胴部は斜め方向の刷毛目があることから、口縁部外面と胴部外面では刷毛目調整の工程が異なっていたことがわかる。489は、頸部が弧を描いて口縁部が外反している。口縁端部はなでて面取りしてある。外面はなでて仕上げているが、上から下に向かう刷毛目が残っており、原体端部の当たりも確認できる。内面もなでて仕上げているが、口縁部内面には横方向の刷毛目、頸部下の内面には縦方向～斜め方向の刷毛目が残っている部分がある。490は口縁部の破片で、緩やかに外反している。外面に粗い調整痕が見られる。その特徴を列記すると、条よりも条間の方が広いこと、条間にも調整原体が当たっていること、条の断面は緩やかな丸みをもって凹んでいること、条間は緩やかな丸みをもって盛り上がっていることがあげられる。このような特徴から、刷毛目よりも貝殻条痕に近いと思われる。拓本に、この調整痕を切って斜め方向の線が写っているが、これは発掘時についた傷である。

491は頸部が90度近く屈曲して短い口縁部が外反している。口縁端部はなでて面取りしてある。風化が進んでいるが、外面にかなり粗い刷毛目が残っている。

**台付壺の台**（第129図492～502）

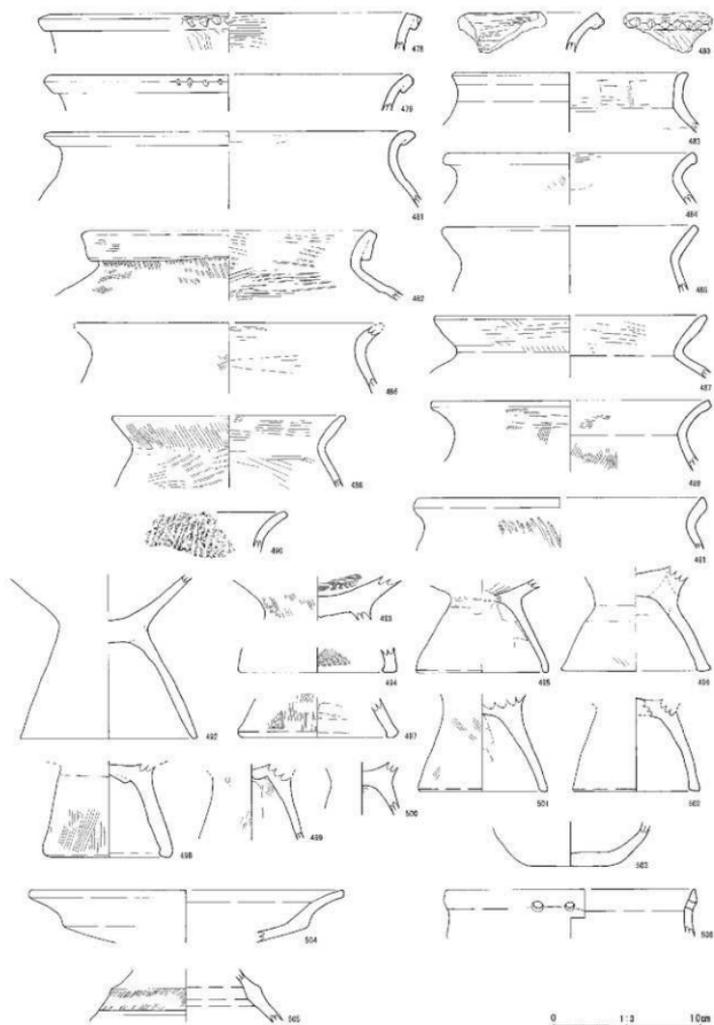
第40図492～502は台付壺の台の部分の破片である。特徴的な点を記載しておく、脚部が内湾しながら広がっていくものと直線的に広がっていくものに分けられる。

**壺か甕の底部**（第129図503）

第40図503は壺か甕の底部で、底部が突出せずに、底部～胴部が緩やかな弧を描きながら胴部が立ち上がっている。内面では底部と胴部の境界に屈曲ができています。調整痕は風化のため不明である。

**高坏**（第129図504・506）

第40図504は高坏の坏の部分で、途中に屈曲部分があり、口縁部が弧を描きながら外反している。風化が進んでいるため、調整痕は不明である。505は高坏の脚部で、粘土の接合部と思われる箇所が厚くなっている。外面には薄い板状の工具を斜めに押し当てた文様が連続している。



第129図 包含層出土土器実測図15

## 鉢 (第129図 506)

第129図 506 は口縁部がわずかに外反しており、口縁部直下に穿孔がある。

## ミニチュア土器・土製模造品 (第130・131図)

本来、ミニチュア土器という分類項目はないが、ここでは壺、甕といった器種による分類とは別に、器としての用途とは異なる可能性が高い土器の模造品を一括して報告する。下記では壺、甕といった器種を使うが、いずれも模造品である。

第130図 507 は壺と思われる。底部は突出しており、胴部中央付近が張り出して屈曲を作っている。外面は工具を使ってなでていると思われ、工具が当たった痕跡が見られる。内面には粘土の接合痕と指頭圧痕が残っている。ミニチュア土器ではあるが、菊川式の特徴をもっている。

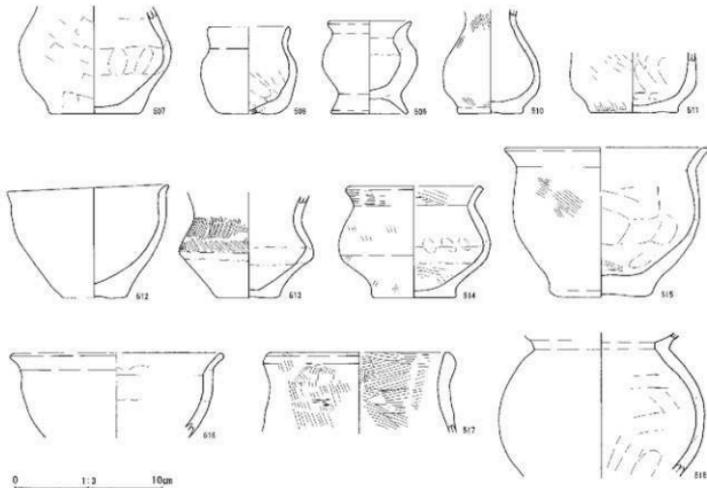
508 は頸部が大きいため、甕としても良いが、平底であること、頸部を絞って作ってあるため、壺と考えた。内面には指でなでた痕跡が残っている。外面調整は風化のためはっきりしない。

509 は台付甕で、球胴から口縁部が90度ほど屈曲して外反している。胴部は分厚いが、口縁部は急激に薄くなっている。台も末端に行くにしたがって急速に薄くなっている。

510 は底部が突出している壺で、胴部下半に最大径があり、最大径付近に屈曲部を作っている点で菊川式の特徴をもっている。外面はなでて仕上げているが、一部に刷毛目が残っている。内面はなでて仕上げている。

511 は壺の胴部下半～底部と思われる。突出した底部から胴部が直立している。外面は刷毛目調整の後、なでて仕上げているが底部付近にはなでが及んでいないため、刷毛目が残っている。内面はなでて仕上げられており、指の痕跡が残っている。

512 は鉢で、分厚い底部から緩やかな弧を描きながら胴部が立ち上がっている。口縁部はわずかに外



第130図 包含層出土土器実測図 16

反している。風化が進んでいるため、調整痕は不明である。

513は壺と思われる。胴部が大きく張り出し、はっきりとした屈曲があるため、算盤玉のような胴部になっている。頸部も屈曲して口縁部が外反している。胴部上半には羽状の刺突文が施されている。調整痕は風化のため不明だが、内面に粘土の接合痕が見られる。

515は甕で、頸部は「く」の字状に屈曲して口縁部が外反している。口縁部は内外面ともなでており、胴部外面には斜め方向の刷毛目が見られる。胴部内面には指によると思われるなでが見られる。

516は甕か鉢である。胴が張らない器形で、頸部が屈曲して口縁部が外反している。口縁端部はなでて面取りしてある。調整痕は風化のため不明である。

517は甕の胴部で、大きさに比べて分厚い。頸部がわずかに屈曲して口縁部が外反している。口縁端部は刷毛目調整の後でなでて仕上げている。外面に縦～斜め方向の刷毛目があり、内面には右から左に向かう刷毛目が見られる。

518は球胴の甕で、口縁部が急激に薄くなっている。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、内面にわずかに指でなでた痕跡が残っている。S字甕の模造品かもしれない。

第131図521は壺の頸部～口縁部で、全体にゆがみが大きく、特に口縁部は波打っている。頸部外面には粗い刷毛目と思われる調整痕が見られる。内面には粘土の接合痕が残っている。

522は壺の口縁部で、逆「ハ」の字状に外反した口縁部が途中でやや内湾している。端部はなでて面取りしてある。口縁部外面には斜め方向の刷毛目があり、頸部には縦方向の刷毛目調整があり、原体端部の当たりが観察できる。内面はなでて仕上げている。

523は壺と思われる。頸部が屈曲して口縁部が直線的に外反している。524は壺の頸部～口縁部で、頸部が屈曲して口縁部が外反している。525は非常に小さな模造品で、ここまで小さくなると器種判定は困難である。526は壺の胴部と思われる。中央付近が大きく張り出し、屈曲部を作っている。527は壺の底部と思われる。529～538は台付甕の台である。539は高坏の脚部で、大きく外反している。風化が進んでおり、調整痕は不明である。540～543は台付甕の台と思われる。544は器種判定が難しいが、脚の開きから考えて高坏と思われる。545・546は高坏の脚で、546には穿孔がある。



第131図 包含層出土土器実測図17

## (2) 古墳時代前期の土器

包含層から出土した土器には、弥生時代後期～古墳時代前期の土器が混ざっており、時代、時期の決定が困難な土器も多かった。弥生土器と古式土師器の両方の可能性がある土器については、弥生土器に入れて報告した。したがって、下記で報告するのは古墳時代前期の土器に分類したものである。

### 丸口壺（単純口縁、古式土師器）（第132図、第133図 554）

第132図 547は突出した底部から弧を描くように胴部が立ち上がり、球胴になっている。肩に粘土を接合した後、90度ほど器壁を屈曲させて頸部を作り、そこから口縁部が緩やかな弧を描きながら外反している。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、外面には磨いた痕跡が残っている。磨きは底部に近い部分にまで及んでいる。底部に近い部分は、土器を正立させた状態では調整不可能であることから、成形後、土器を逆にして底部付近を磨いたと思われる。口縁部内面にも磨いた痕跡が残っている。頸～肩の内面には指頭圧痕が残っている。胴部内面には粘土の接合痕と刷毛目が残っている。粘土を継ぎ足して成形した単位ごとに刷毛目の方向が異なっており、刷毛目調整が粘土の接合痕を超えることがないため、粘土を接合して器壁を成形する度に内面の刷毛目調整を行っていたと考えられる。

548はやや長胴の壺で、底部は突出していない。肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、粘土を継ぎ足したところで器壁の方向をかえて頸部を90度ほど屈曲させていることがわかる。口縁部は弧を描くように外反している。口縁部は内外面ともになでである。胴部下半外面には上下方向の刷毛目調整、胴部上半外面には斜め方向の刷毛目が見られることから、胴部上半と下半で刷毛目調整の工程が異なっていたと思われる。頸部～肩の内面は指頭圧痕と粘土の接合痕が残っている。胴部下半の内面には斜め方向に小刻みな刷毛目調整が見られる。これに対して胴部上半の内面には反時計回りに長く伸びる刷毛目が見られることから、外面と同様、内面も胴部上半と下半で調整の工程が異なっていたと思われる。しかし、内面の刷毛目は粘土の接合痕をまたいで連続していることから、547のように粘土を継ぎ足して成形する度に内面を調整したのではなく、少なくとも胴部下半を完成させたところで内外面を調整した後、胴部上半を完成させたところで、再び内外面を調整したと考えられる。

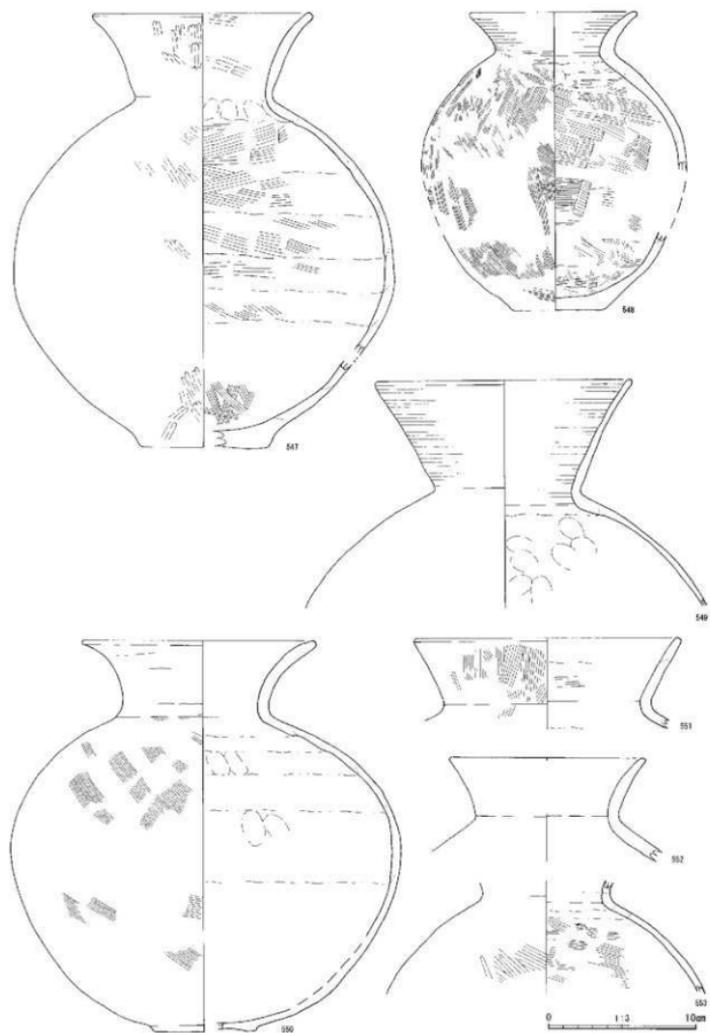
549は屈曲した頸部から口縁部が直線的に延びている。頸部の屈曲部分で土器が割れていることから、頸部に粘土の接合痕があり、ここで器壁の方向をかえて口縁部を立ち上げていると思われる。口縁部～頸部の内外面は横方向になでである。胴部内面はなでで仕上げているが、指頭圧痕が残っている。

550は球胴で、胴部の大きさに比べて底部が小さいため、安定が悪い印象がある。底部は若干上げ底になっている。頸部と肩の境界に粘土の接合痕があり、肩に粘土をつないだ後、器壁の方向を変えて頸部を形成していることがわかる。頸部は太く短く、口縁部は大きく外反している。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、口縁部～頸部の内外面はなでである。胴部外面には部分的に斜め方向の刷毛目が残っている。頸部～胴部内面には粘土の接合痕と指頭圧痕が残っている。粘土の接合痕をまたぐ指頭圧痕がないことから、粘土を継ぎ足しながら成形したと考えられる。

551は90度ほど屈曲した頸部から口縁部が直線的に外反している。口縁部外面には縦方向の刷毛目があり、内面はなでであるが、一部に横方向の刷毛目が残っている。

552は屈曲した頸部から口縁部が緩やかに外反している。肩と頸部の境界に粘土の接合痕は確認できないが、ここで器壁が屈曲していることから、肩と頸部の境界に粘土の接合痕があり、ここで器壁の方向を変えて頸部を屈曲させていると思われる。風化のため調整近は不明である。

553は球胴になると思われる胴部の肩に粘土をつなぎ、そこから器壁の方向を変えることで頸部を屈曲させている。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、胴部外面に斜め方向の刷毛目が残っている部分がある。頸部～肩の内面はなでであるが、粘土の接合痕が残っている。胴部内面には横方向の刷毛目が残っている。



第132図 包含層出土土器実測図18

第133図554は球胴の壺で、胴部の大きさに比べて底部が小さく、突出はしていない。肩と頸部の境界に粘土の接合痕があることから、ここで粘土をつないで器壁を屈曲させて口縁部を成形していることが分かる。口縁部の内外面は横方向になでて仕上げられており、胴部上半の外面には斜め方向の刷毛目が付いている。胴部中央に粘土の接合痕があり、その下は削って仕上げている。胴部中央の粘土接合痕は喜んで外面の調整が異なることと、胴部内面でも上半には指頭圧痕が残るが、下半には指頭圧痕がなく、なでて仕上げていることから、胴部下半を成形、調整後に胴部上半を作ったか、胴部下半と上半を別々に作ってから接合したと思われる。胴部上半と下半の作り分けは弥生土器の壺の製作に見られたことだが、古式土師器の壺でも同様の作り方をしている可能性がある。

#### 壺（単純口縁）（第133図555～557）

555は胴部下半を欠損しているが、残っている胴部の曲面から、寸胴になるとと思われる壺である。頸部の屈曲部直下に粘土の接合痕があることから、ここで粘土を継ぎ足してから頸部を90度ほど屈曲させていることがわかる。口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がっている。風化が進んでいるため、調整痕は不明である。

556は壺の模造品と思われる小型の土器である。肩の部分に沈線を入れている。風化のため調整痕の観察が難しいが、全体をなでて仕上げていると思われる。

557は球胴で、頸部～口縁部が弧を描くように外反している。頸部と肩の境界に粘土の接合痕があることから、肩まで成形したところで粘土をつなぎ、弧を描くように頸部を作り、頸部から器壁を外反させて口縁部を作っていることがわかる。頸部～口縁部は連続成形と思われる。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、口縁部～頸部の内外面はなでてあり、胴部外面の一部に刷毛目が残っている。胴部内面にも刷毛目と粘土の接合痕が残っている。

#### 高坏（第133図558～562）

寺家前遺跡がある志太平野では、弥生土器～古式土師器に高坏が少ないことが従来から指摘されているが、寺家前遺跡も例外ではなく、高坏は非常に少ない。

第133図558は坏に屈曲部があり、そこから口縁部が外反している。脚は分厚く、直線的に外反している。風化が進んでいるため、調整痕の観察が難しいが、坏の内外面、脚の外面はなでていると思われる。脚の内面には絞りが見られる。

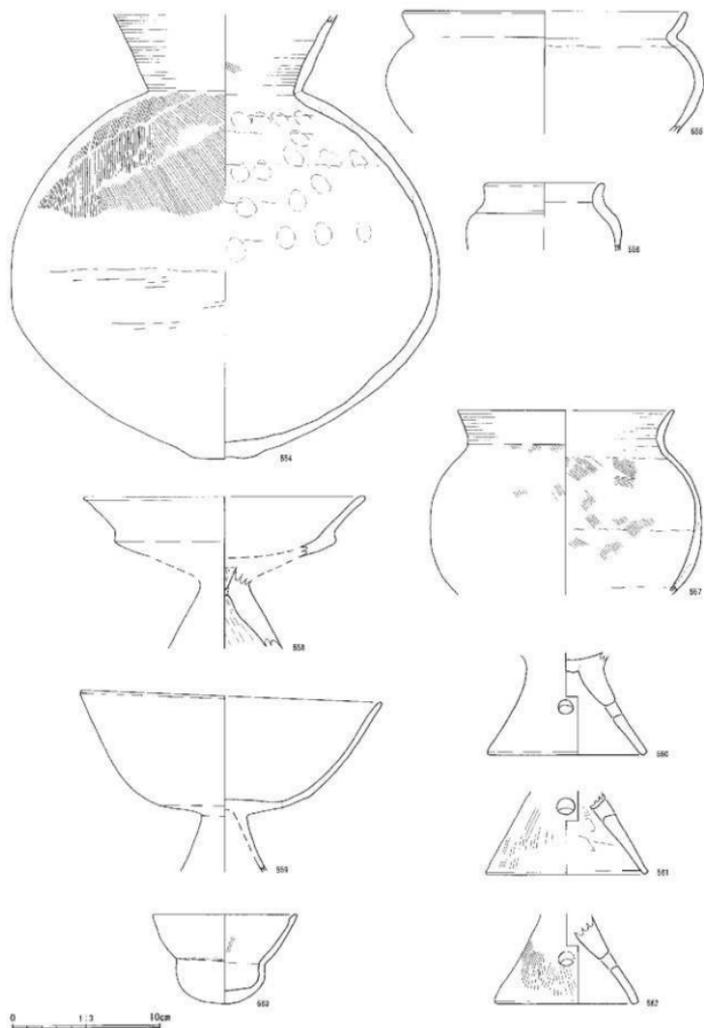
560はやや外湾した脚に穿孔がある。調整痕は風化のため不明である。561・562は直線的に外反した脚部に穿孔がある。外面には縦方向の刷毛目がみられ、内面はなでている。

#### S字壺（第134図）

第134図564は胴部の上半と下半が接合しないが、同一個体の可能性が高い。口縁部の拡張部分で90度ほど屈曲した後、口縁端部が水平に近いほどに外反している。頸部が90度以上屈曲しており、胴部と頸部の接合部を境に刷毛目が切れていることと、頸部の屈曲部は刷毛目の原体が入らないほどに狭くなっているため、頸部を作る以前に胴部の刷毛目調整までは終了していたと考えられる。

565もS字壺と思われるが、頸部の屈曲、口縁部の外反ともに弱い点に特徴がある。内面には、頸部直下に粘土の接合痕が残っている。これも胴部の刷毛目は頸部の屈曲部で切れている上に、頸部の屈曲部分は、刷毛目の原体が入らないほどに狭くなっていることから、胴部の調整まで済ませた後で頸部～口縁部を作ったと考えられる。567～570は口縁部の拡張部分が90度ほど屈曲して口縁端部を外側につまみ出すようになでており、端部は水平に近いほどに外反している。571は口縁部の拡張部に屈曲があるものの、端部の外反は弱い。572は頸部の破片で、口縁部を欠損している。

573は台の部分で、外面に胴部下半を調整した際の刷毛目端部が残っており、脚部外面には斜め方向の刷毛目が残っている。内面はなでて仕上げている。



第133図 包含層出土土器実測図19

## (3) その他の土器 (第135図)

第135図574は弥生時代前期までさかのぼるとされる壺である。頸部～口縁部が緩やかな弧を描きながら、長頭ぎみになる器形で、胴部の張りは弱いと思われる。全体をなでて仕上げた後、口縁端部に刻み目を入れ口縁直下の外面に2列の沈線を入れ、肩にも2列の沈線を入れている。口縁部直下の沈線には、描き始めと終わりの接合部分が見られる。口縁部内面には2列の竹管文があり、その間に沈線を入れてある。その他の部分はなでて仕上げた。

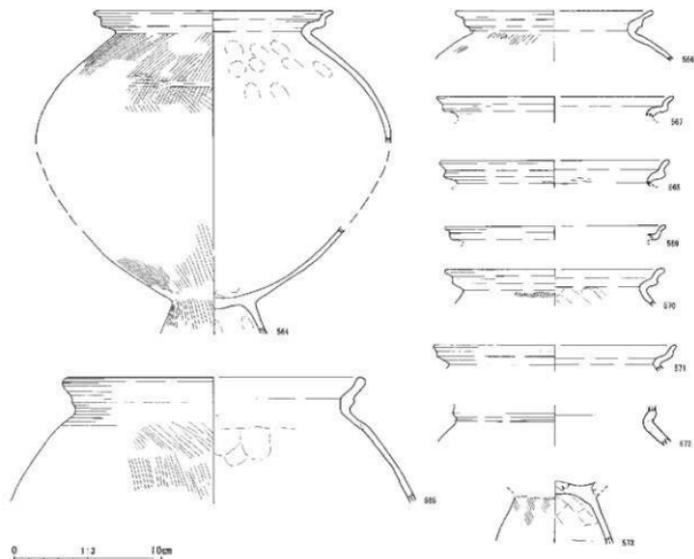
575は弥生時代中期と思われる壺の肩～口縁部で、頸部～口縁部が緩やかな弧を描いて外反しており、口縁端部には指による圧痕が残っている。外面は刷毛目調整だが、頸部の刷毛目は粗く、肩の部分に残っている刷毛目は細かい。両者で原体が異なっていることになる。内面はなでて仕上げたしており、粘土の接合痕も残っている。576は弥生時代中期と思われる壺の口縁部で、風化が進んでいるが、外面に櫛状工具による文様、もしくは調整痕が見られる。577は壺の口縁部で、口縁部外面に粘土帯を貼り付けてあるようで、口縁部が厚くなっている。口縁部直下には竹管を使ったような文様が見られる。

578は縄文時代後期と思われる浅鉢で、全面をなでて仕上げた後、4本の沈線を入れている。

579は縄文時代後期と思われる無文の鉢である。口縁部は波状になっている。内外面ともになでて仕上げた。

580は縄文時代中期の深鉢と思われる破片で、「U」か「J」の文字を描くような垂下文の下に「T」字状の隆起線文を入れている。文様構成から曾利式の範疇にはいると思われる。

581は壺の胴部下半～底部と思われる。胴部の外反が弱いことから、長胴になるとと思われる。



第134図 包含層出土土器実測図20

## 7 小結

流路跡 SR6-400 からは、弥生時代後期の菊川式を主体として一部に登呂式の属性が見られる一括資料で、寺家前遺跡の弥生土器を代表する資料であるため、この土器を中心に型式学的評価をしておく。

器種構成は壺と台付き甕が主体で高坏は極めて少ない。壺は広口壺と口縁部が逆「ハ」の字に広がる形態の二種類を作り分けている。

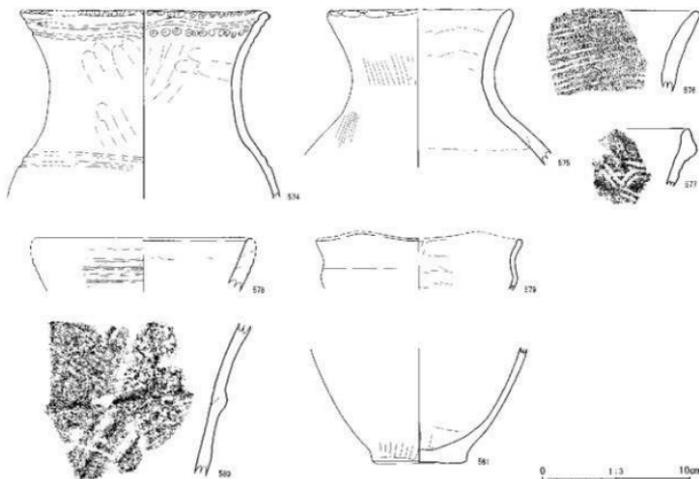
壺の形態は、口縁部は折り返し口縁、複合口縁、単純口縁の三種類がある。頸部には凹筒状の直立部分が見られる特徴（94、96 など）がある。胴部は下半に屈曲部をもつものが多い。屈曲部には粘土の接合痕が認められ、これを境界に上下で調整工程が異なるものがあることから、屈曲部の上位と下位で製作工程に時間差があるか、胴部の上半と下半を別々に作ってから接合したことが考えられる。底部は突出するものが多い。

壺の器面調整は、外面は斜め方向の刷毛目調整かなでが主体で、最後に磨いている例もある。胴部の屈曲より下位は横方向の調整、屈曲より上位は斜め方向の調整が主体で、頸部は斜め方向の刷毛目と垂直方向の刷毛目の両方が見られる。内面は全面で、全面刷毛目調整、胴部下半を刷毛目調整、胴部上半をなで仕上げの三種類が見られる。

壺の文様帯は口縁部と肩～胴部上半に限られる。口縁部の文様は、端部の浮文、縄文、口縁部内面の縄文、扇形文、波状文、羽状文が見られる。肩～胴部上半の文様は、頸部と肩の境界に沈線、木目沈線、その下位に縄文、羽状文、柳描文、円形浮文が見られる。

上記の特徴、特に胴部の屈曲をはさんだ作り分けといった点は菊川式を象徴する属性で、全体的に菊川式と言って良いが、底部が突出するものが多い点は菊川式よりも登呂式に近い特徴である。底部の粘土板から胴部を立ち上げる際の粘土紐の継ぎ足し方に違いがあると思われる。

台付き甕は口縁端部を面取りした後口縁部外面に刻み目を入れるものが多い。刻み目を入れていな



第 135 図 包含層出土土器実測図 21

いものでも口縁端部はほぼ例外なく面取りしている。これは、面取りによって口縁部外面に角を作り、その角を潰すように刻み目を入れる習慣から、無文の甕でも口縁端部を面取りしていると思われる。

頸部～口縁部は、ほとんどが頸部に粘土を継ぎ足して器壁の方向を変えることで、口縁を外反させており、粘土を押し広げて外反させているものはない。以上の特徴も菊川式の範疇で理解できる。

### 第3節 石器・金属製品他

石器の種類は打製石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、打製石鏃、磨製石鏃、紡錘車、石鏃、環状石製品、石核（投弾）、敲き石、磨石、砥石、玉類等がある。石器は集落内や水田域など広範囲で出土している。これらの事実記載や実測図は『寺家前遺跡Ⅱ（木製品・石製品・金属製品他編）』にまとめて掲載した（第116～126図）。そこでも触れているとおりだが、寺家前遺跡に集落が築かれたのは弥生時代後期末である。この時期、静岡平野では伐採・加工斧はすでに鉄器化が進んでいたようで、集落遺跡から出土する大陸系磨製石斧類は極端に減少する。ただし鉄器化は一気に進んだのではなく、小型の加工斧から徐々に鉄器に置き換わり、一方では大型の伐採斧である大型蛤刃石斧は弥生時代後期末で残る現象が見られる。これは鉄素材を多く使う大型品は遅れて鉄器化していくという指摘がある（註1）。寺家前遺跡では大型蛤刃石斧のような伐採斧がなく、柱状片刃石斧や扁平片刃石斧などの加工斧が出土している。また大型の打製石斧も集落や水田で出土している。志太平野ではこれまでのところ石斧を製作していた遺跡は見つかっておらず、寺家前遺跡においても石斧を製作していた痕跡は見られない。したがってこれらの磨製石斧は別の場所からの供給を受けていたのであろうが、どこから受給していたかが解っていない。石器は包含層より出土したのも多く、すべてが弥生時代後期後半に属するとは言いがたい。さらに乳棒状石斧や石匙、石鏃、打製石鏃などや古い要素も含んでいる。弥生時代中期後半から後期にかけて静岡平野で見られるような鉄器化の現象が、志太平野ではやや異なる様相をもっている可能性がある。

金属製品で注目される出土品は銅銚や銅環、鉄鏃がある。これらも既刊の『寺家前遺跡Ⅱ（木製品・石製品・金属製品他編）』に図・写真を掲載している（第129図 857～861）。なかでも銅銚は志太平野において完形の状態で見られた初例である。銅銚は鋳型を用いた鋳造品である。また銅銚が出土した遺構は弥生時代後期後半の自然流路SR6400覆土内という確実な年代がわかっている（本書第2章第2節）。銅環も弥生時代後期後半の土器を含む8層より出土している。銅環は完形品で、銅板を環状に曲げた鍛造品である。このほか銅銚の破片と思われる銅板が2点見つかっている。いずれも鍛造品である。もうひとつの希少な金属製品の発見は木製の柄に装着された鉄製鏃である。鉄製鏃が柄に装着した状態で見つかった例としては静岡県内初である。出土した場所は低湿地側に広がる弥生時代後期の水田の南端にあたるところで、地形が急激に下がる変換点でもある。同一層から出土した土器はいずれも弥生時代後期後半に属する。よって柄付き鉄製鏃は同時期に属するものであろう。鉄製鏃は刃先が欠け、刃部には細かい刃欠けがあり、かなり擦り減っていることから、実際に使われていた実用品と言える。

弥生時代には種子等の自然遺物も出土している。『寺家前遺跡Ⅱ（木製品・石製品・金属製品他編）』の第132図には種子などが出土した弥生時代の遺構を図示し、図版79下段には遺構より出土した種子等を掲載した。種子が出土した遺構は、柱穴SP10332や大畔SK422、自然流路SR6400などがある。

#### 註

- 1 平野吾郎氏によれば鉄素材の供給が鉄器化の大きな問題であったと指摘している（平野 1987）。

## 第4章 調査のまとめ

### 第1節 弥生時代集落の分析

報告で述べてきたように、弥生時代の集落からは住居跡 21 軒・掘立柱建物 7 棟が検出されており、これらを大きく 2 時期に分けている。

I 期を A 類の住居跡と掘立柱建物、II 期を B 類の住居跡と掘立柱建物とに分けてきている。第 16 図(住居跡時期別配置図)にそれぞれの配置図を示した。これらをベースにして寺家前遺跡の弥生時代集落の規模あるいは性格を考えてみよう。

掘立柱建物 7 棟は SH340～SH342、SH218、SH343 および調査区の北端で検出された SH212・SH213 の 4 箇所に分かれている。SH340 以下の掘立柱建物は I 期の住居跡である SB341 と重複していることから、II 期の建物であろうと考えている。SH218 は II 期の SB219 と重なっており、I 期に属するものであろうが、I 期に属す SB212 と一部で重なっており、判断がむずかしい。ここでは、SB212 との前後関係はあるにしてもやはり I 期に属するものと考えておきたい。SH343 は SB316 と重なっているが、SB316 の形態が明確になっていないことから、やはり時期判断がむずかしいが、ここでは I 期のものと考えている。SH212・SH213 も時期を特定できる資料がないが、調査区の北端で標高の高い位置に営まれていることから、ここでは II 期のものと考えている。したがって II 期のものであることがはっきりしている SH340 以下の 3 棟と SH212・SH213 を 2 期に、それ以外の 2 棟 (SH218・SH343) を I 期と考えると 1 時期に 2 棟程度の掘立柱建物が存在していることになろう。

II 期の集落は重複あるいは近接している住居跡を 1 軒として考えると SB202 と SB321、さらに SB215・SB218 および SB209・SB219 の 4 軒あるいは SB209 と SB219 を独立したものと考えれば、一時期に 5 軒の住居に、SH340～SH342 の掘立柱建物 1 棟からなるグループの存在を考慮することができる。調査区の北端に掘立柱建物 SH212 と SH213 とがあることから、この倉庫群を中心に 1 グループの住居群が存在していたことを推定すると II 期には 2 グループの存在を考慮することができる。

I 期の建物群は掘立柱建物 2 箇所 2 棟に加えて、SB224・SB212 および掘立柱建物 SH218 からなるグループ(北側に未調査区があることから、ここにも 2 軒程度の住居跡が存在していたことを推定している)と SB309A・SB309B・SB313・SB314 など SR9526 に近い標高の低い地域に広がる群との 2 つに分けることができる。したがって I 期・II 期ともに 4～5 軒の住居群と高床倉庫 1 棟からなるグループが 2 つ程度存在していたことを推定することが可能である。こうした堅穴住居跡数軒に加えて、掘立柱建物からなる集落の構造は広範囲に知られており、一単位の住居とそれに属する倉庫だと考えている(平野 1993)。特に天童川の東側では明確だと考えられている(松井 2002)。

こうした規模のグループを集落構成の最小単位として、世帯共同体と位置づけることは近藤義郎氏の提唱以来広く推定され、集落の分析の武器になっている。登呂遺跡の集落が掘立柱建物を中心に 3 つの世帯共同体からなることは以前にも推定したことがある(平野 1986)が、寺家前遺跡も、不明確な部分はあるにしても、2 つ程度の世帯共同体から構成される集落だと考えることができよう。

こうした集落の分析と住居跡の位置的な変化から、I 期には SR9526 に近い地域を中心に 1 グループ、その上側にもう 1 グループが営まれていたのに対し、II 期には SR9526 から離れて、より北側の標高の比較的高い地域に営まれていることが理解できる。住居跡の構造的な変化だけでなく、こうした集落における住居の占地的な変化からも、寺家前集落を含むこの地域が弥生後期末には集落の立地条件がより悪化

していることが読み取れる。

## 第2節 志太平野北東部の弥生～古墳時代集落について

志太平野北部にあたる藤枝市北東部域では、これまでに大規模な集落遺跡は見つかっていなかった。寺家前遺跡の調査前、周辺で知られていた弥生時代中期の遺跡は上叡田川の丁遺跡や清水遺跡、郡遺跡などがある。いずれも寺家前遺跡よりも下流に位置する。弥生時代後期になると遺跡周辺の花倉大柳遺跡や衣原遺跡で堅穴住居跡が発見されているほか、上叡田モミダ遺跡では弥生時代後期中頃の遺構から弥生土器の好資料が見つかっている。今回、寺家前遺跡の発掘調査では葉梨川中流域に所在する弥生時代後期の集落跡を検出した。また葉梨川を挟んで対岸の中ノ合遺跡では古墳時代前期の集落跡が見つかった。第二東名建設工事に伴う発掘調査ではこれまで明らかとなっていなかった年代を補充する発見となった（註1）。

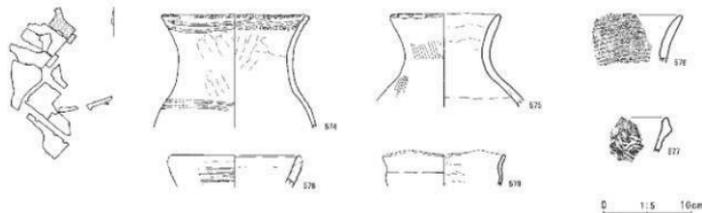
寺家前遺跡で見つかった最も古い年代の出土品は第136図に示した土器である（574～579）。土器の年代は胎土や文様等の特徴から弥生時代前～中期に属する。これらは遺構に伴ったものではなく、調査区東端のE-4区低地部包含層から出土した。寺家前遺跡のなかにはこの時期の遺構は見つかっていない。だとすれば流れ込んできたものであろうが、土器の表面はあまり消耗してはおらず、そう遠く離れていない場所に弥生時代中期の集落が存在した可能性も考えられる。衣原遺跡でも弥生時代中期中葉の壺形土器が出土している（註2）。

本節では弥生時代から奈良・平安時代までの葉梨川流域の遺跡変遷を第137図に示した。弥生時代中期の年代は上叡田川の丁遺跡で中期後半期の堅穴住居群が見つかっている。2km上流の寺家前遺跡周辺では西側の低丘陵上に弥生時代中期中葉の土器が出土した堅穴住居跡を検出した。西側に隣接する衣原遺跡でも10区で中期の土器が溝内より見つかっている。寺家前遺跡では包含層内に土器等が散在しているに過ぎないが、規模は小さいものの、弥生時代中期にも人々が生活していた痕跡が見受けられる。

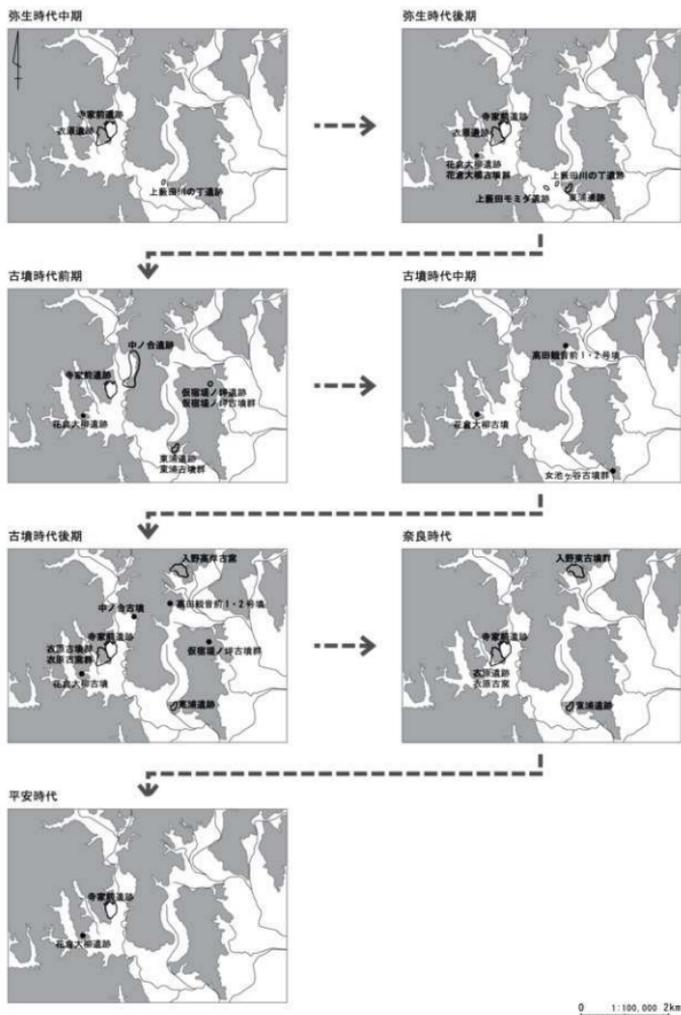
弥生時代後期の年代は、寺家前遺跡で寺家山裾の微高地上で後期後半から古墳時代初頭の堅穴住居群や独立柱建物群、水田跡を検出している。西側に隣接する衣原遺跡や花倉大柳遺跡でも低丘陵上に堅穴住居が数件見つかっている。上叡田モミダ遺跡や東浦遺跡など葉梨川流域の低丘陵から微高地一帯に開発が進み、集落が広がっていく様相が見える。

古墳時代前期になると集落は中ノ合遺跡へと移転していったと考えられる。潮山の丘陵裾には東浦遺跡や仮宿場ノ坪遺跡で堅穴住居や古墳が存在する。

続く古墳時代中期は今のところ葉梨川流域で集落の痕跡は見つかっていない。しかし花倉大柳古墳や



第136図 寺家前遺跡出土弥生時代中期土器実測図



第 137 図 粟梨川流域遺跡変遷図

高田観音前古墳群、女池ヶ谷古墳群のように前期末から中期に属する墳墓など、近年新たな発見が相次いだ。

古墳時代後期に入ると志太平野北東部域でも後期群集墳が増加し、寺家前遺跡では再び集落が築かれる。それとともに衣原古窯群や入野高岸古窯などの須恵器生産を行った窯跡も新たに発見されたことで、当地に窯業生産を行う集団が存在したことが明らかとなった。

奈良時代以降は衣原遺跡の低丘陵上に竪穴住居が複数軒と横口付炭窯などが見つかった。寺家前遺跡でも条里制水田を検出し、包含層より8世紀代の須恵器が出土している。

今回調査の最大の成果は葉梨川流域に開発の手が入り人々が居住し始めたのは、弥生時代中期後半から後期というのが明らかとなったことである。また弥生時代後期から古墳時代初頭には水田耕作を生業とし、大量の木材を加工していたことが解っている。古墳時代後期は周辺で見つかった須恵器窯により窯業生産を中心とした人々が居住していた範囲であった。また周辺の遺跡調査事例が増えたことにより、葉梨川流域で集落が移動していく可能性も指摘できるようになった。現段階では人々が移り住んだ痕跡はまだ完全に解明されたとは言えないが、寺家前遺跡の調査成果が葉梨川流域の集落変遷を解明していく一端となることが期待される。

### 第3節 弥生時代の水田遺構

寺家前遺跡では寺家山麓の微高地で見つかった集落跡の東から南側低地部にかけて弥生時代の水田跡を検出している。水田跡は各調査区の一部または全域に渡っており、低地一帯に広がる水田面では杭列を伴う大畔や小畔を検出した(第52図)。現地調査の段階では大畔の列ごとに遺構の種類を示す「SK」の後ろに通し番号を付している。ただし小規模の畔については番号が付いていないところもある。本報告書内は基本的には現地調査で付けた番号をそのまま生かしている。「SK」は杭列や矢板列を伴う大畔のほか、杭列のみの場合にも用いている。

#### (1) 水田の開田時期

寺家前遺跡での開田時期は、調査区全体で見ると集落と同時期の弥生時代後期後半期と考えて良いだろう。畔などから出土した遺物は鎌・田下駄などの木製農具や、大型打製石斧がある。遺構内や包含層に含まれる出土土器もこの時期から古墳時代初頭のものまでである。四穴田下駄は静岡平野では弥生時代後期まで使われ、古墳時代中期以降は一変して平野全体が輪かんじき型田下駄に置き換わっている。この変化が志太平野にも当てはまるかどうかであるが、志太平野での弥生時代後期の水田調査事例が数少ないものの、ほぼ同じ変化であったと思われる。寺家前遺跡では輪かんじき型田下駄は出土しておらず、四穴田下駄のみである。このことから水田が使われていた時期を推測すると、弥生時代後期後半から古墳時代初頭と考えられる。通常、水田域では出土遺物が少なく充分な根拠となり得ないが、わずかながら農具の反り柄や古式土師器が出土していることから、少なくとも輪かんじき型田下駄が使われ始める直前までは水田として利用していたと思われる。

#### (2) 水田の区画と範囲

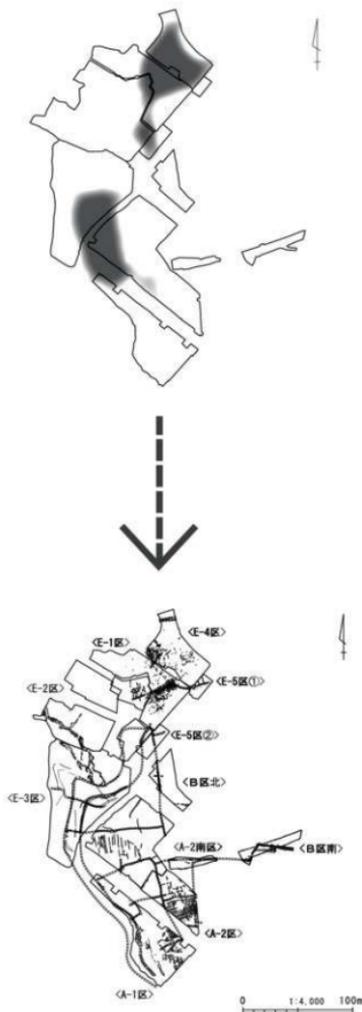
寺家前遺跡の水田は大小の畔で区画され、畔には杭列・矢板・横木が伴う。大きな畔で区画された範囲は場所によるが1,000 mほどの広さがある。この区画のなかには更に小区画の畔があり、大畔のなかに小畔の区画をもった水田であったと想定される。杭列の方向は南北にほぼその方向に合っており、所々で東西方向へ枝分かれしている。大畔とはいえ、正確に東西南北が揃うことや方形区画になるわけではなく、地形の高低差に沿った方向に畔が作られている。

A-1区・A-2区の南端は杭列の大群がなくなっている範囲がある。標高値も水田面よりもかなり下がってきていることから、この辺りが水田城の南限と想定される。

E-4区の北端に2本の浅い溝がある(第52図)。この溝は蛇行している自然流路とは異なり真直ぐで、人為的に掘り込まれた溝であろう。方向はE-4区の低地部で見つかった小畔の方向とよく似ている。排水などの役割か、敵などの痕跡であったか、何の用途に使われた溝であったかは不明である。この付近が水田城の北限であろう。

B区南では南東壁にかかる落込み状の遺構SX610がある。遺構の北側には杭列の畔SK6がある。SX610は東西方向に延びる畔から南側へ低く落ち込んでいき、浅く不定形である。土器は弥生時代後期のもとの土師器が出土しているが、土師器はかなり上層から出たものであり、直接の時期を示すものではないと思われる。同遺構からは鉄製鎌と柄が装着した状態で出土している(第51図、図版50-5)。弥生時代後期に遡る鉄製鎌の出土例が数少ないのと、さらに着柄状態であることから、全国的にも見られない希少な発見例となった。同遺構で共存している木製品は楕円形の削り物容器、大型の槽などがある。遺構の性格ははっきりしないが、ほぼ完形な柄付き鉄製鎌が出ていることや削り物が伴うことなどから、特殊な意味をもつもの(農耕に伴う祭祀を行っている可能性)ではないかと指摘する意見もある。やはりこの辺りが水田の南東限と思われる。

第138図では腐植土が検出された範囲を図示した。腐植土は湿地化した範囲と見られ、その範囲にはどちらにも杭列が作られている。杭列の周辺には建築部材を再利用した木で何度も補強した様子



第138図 泥炭層の広がり和大畔の位置関係図

が見られた。水田とするには条件が良くないところへ杭列を築き、地盤を補強していたのであろう。

### (3) 水田の継続期間

水田の杭列畔に伴う遺物は土器・木製品などがある。木製品は田下駄や建築材などが畔の杭や矢板に使用されている。ほかに畔の補強材の横木として建築部材などが転用されている。畔から出土した遺物からみると弥生時代後期後半～古墳時代初頭のものが多い。例えば農耕土木具は曲柄平鋸や曲柄二又鋸などが見られるが、これは静清平野の出土例に照らし合わせると、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられている。静清平野では古墳時代中期になると鋸の着柄部分がナスビ型の構造を持つ形状になってきている。またこのころにはU字型鋸先を装着する鋸身も登場し、農耕具が大きく変化する時期でもある。さらに田下駄でみると、静清平野では弥生時代後期～古墳時代前期までは四穴田下駄が盛んに使われているが、古墳時代中期以降は輪かんじき型田下駄へ一斉に変化する。寺家前遺跡の田下駄は四穴田下駄しか見られず、輪かんじき型田下駄は存在しない。『寺家前Ⅱ』第108図704を輪かんじき型田下駄の横木とみるか否かだが、それにしても足板など特徴のある木製品は出ていない。そのほか又鋸や膝柄の形状からみても、寺家前遺跡の農耕土木具は弥生時代後期後半～古墳時代初頭の範疇に収まっている。

土器は水田耕作土からS字口縁の甕がわずかに出土している。少なくともその頃には水田が使われていたと考えることもできる。A-2区南半部でも土師器が数点出土している。小区画の畔は開田期の畔ではなく、その後の出土した土師器の年代であろう。この時期が水田の使われていた下限と考える。

A-2区中央部の木製品集中箇所周辺の杭列畔は多量の矢板と畔を修復した痕跡が認められた。

以上のことから、寺家前遺跡の水田は弥生時代後期に開墾され、古墳時代前期前半頃まで継続して使われていたと考えられる。古墳時代中期以降の出土遺物は少なく、集落内でも古墳中期の遺構は見つかっていない。その後の古墳時代後期も土器集中出土箇所が数箇所みられるのみである。よって水田の継続期間は前述の通りで古墳時代中期には大規模に水田耕作は使われていなかった可能性が指摘できる。その後、古墳時代後期になってから再び当地に集落が営まれるようになると、これまでの水田を一部補修して使っていた様相が見える。さらに奈良時代に入ってから条里制に伴って、再度、この低地部が水田として使われて、以後、現代まで断続的に水田として使われていた。

## 第4節 弥生時代の木材使用について

寺家前遺跡ではE-1区とE-4区の低地部包含層(SX423・SK422関連)より大量の木製品が出土した。木製品のほとんどはもともと建築部材であった板状の木製品であり、なかには柄孔や切り欠きをもっているものもあった。板状木製品は建築部材としての役割を終え、何らかの目的に再利用するため貯木してあったと思われる。それが降雨が何らかの影響で湿地部分へ流れ出てしまったのであろう。

一方、低地部で検出した水田では杭列や矢板列を伴う大畔が見つまっている。杭列・矢板列には建築部材の廃材を利用した材がかなりの割合で含まれていた。その際、建築廃材をさらに細かく割り裂いて使っている様子が見られた(第65～67図)。こうした発掘調査の成果から、弥生時代後期後半期、この地に集落を築いた人々は森林資源である木材を加工して建築部材とし、その廃材を畔の杭列・矢板列の構築材として使っていたことが明らかとなった。さらにその後に崩れた畔を補強するためにも廃材を利用していたことが判明した。

寺家前遺跡では当時、もう一つの木材再利用方法が見られた。弥生時代後期後半期の集落では建物を建てる際に堅穴住居や独立柱建物の柱を据えるため柱穴の底へ礎板を敷きこんでいる例があった。その

顕著な例は竪穴住居 SB309A や SB309B の主柱穴や掘立柱建物 SH212・SH213（註3）の梁・桁行の柱穴から出土した礎板である。特に掘立柱建物 SH212・213 の礎板は扉板を分割して再利用されたものであった。このうち『寺家前Ⅱ』の第3図2は扉板のなかでも希少な形態で、中ノ合遺跡より出土した木製品と同じ形態であることがわかった（註4）。

中ノ合遺跡（Na 80 地点）は寺家前遺跡と同じく第二東名建設工事に伴い発掘調査が実施された古墳時代前期の集落が見つかった遺跡である。中ノ合遺跡はすでに発掘調査報告書が刊行されている。第85図314と第86図315は木組み遺構 SX03より出土した木製品で、木組みの土台として側面側を地中に埋め込まれた状態で検出している。314と315はその後の資料検討の結果、接合することがわかった（第139図右、写真1・2）。木組み遺構のすぐ近くでは古墳時代前期の竪穴住居跡や古墳時代前期の土器集積跡が見つまっていることから、これらの木製品も同じ年代に属する資料と考えられる。寺家前遺跡の掘立柱建物の柱穴より出土した扉板もこれと同形態であり、弥生時代後期後半期に属する資料である。

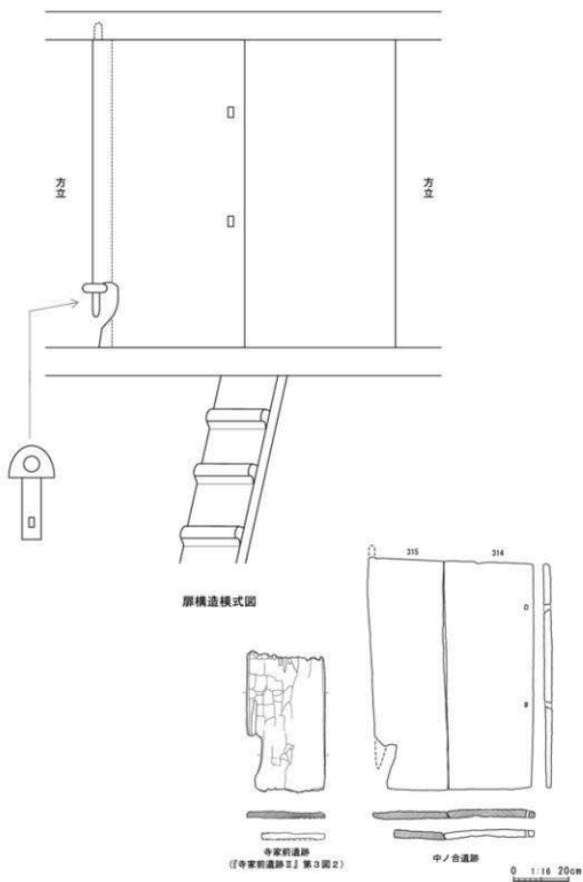
中ノ合遺跡の扉板は長さ87.4cm、幅61.0cm、厚さ3.0cmの板状木製品である。縦横の比率は横を1とすると縦は1.4倍ほどである。木目は柾目だが芯部に近いところで木取りしていることがわかる。右側端には長方形の柄孔が2箇所貫通している。柄孔はやや上寄りに開けられており、上部孔は上から16cm、下部孔は上から51cmの位置にあり、柄孔同士の間隔は35cmである。何らかの引手が付いていたと思われる。上端部左端には突出した軸棒が折れた痕跡が残っていた。左側下方には板の下端から斜めに切り込んで削り出された軸部がやはり折れた状態であった。寺家前遺跡の礎板に転用された『寺家前Ⅱ』第3図2もこの部分であろう。中ノ合遺跡の扉板は転用時に分割された可能性があり、ほぼ中央で縦方向に割れている。

この種の扉板で最も残存状態が良いのは、和歌山県和歌山市の鳴神Ⅱ遺跡の資料である。この資料から扉板の使用形態想定図を第139図に示した。扉板の隣に位置する方立には模式図に示した栓状の枘材が差し込まれ、枘材の頭部を開けられた円形孔に下方軸が差し込まれる構造となっている。こういった扉は扉板の取り付け取り外しが容易であり、非常に考えられた造りであるといえる。



写真1 中ノ合遺跡出土扉（表面）

写真2 中ノ合遺跡出土扉（表面）



第139図 扉

鳴神Ⅱ遺跡の資料のほかにも、扉板の類例は滋賀県守山市の下長遺跡、静岡県静岡市の長崎遺跡があり、最近では宮城県仙台市在家南遺跡でも古墳時代前期の流路跡から同形の扉板が見つっている(註5)。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期に属する資料である。一方、下方の軸部に付属する栓状の部品の類例は先の鳴神Ⅱ遺跡で建築部材に組み合った部材がある。また近いところでは寺家前遺跡よ

りも2kmほど下流に位置する上藪田モミダ遺跡で見つかっている。上藪田モミダ遺跡の年代は寺家前遺跡の直前にあたる時期である。このほかにも檜のなかには円形の柵孔をもつ資料が兵庫県篠山市の上板井遺跡や鳥取県の青谷上寺地遺跡で見つかっている。あるいはこの種の扉板部材であった可能性も考えられる。

まだ扉板すべての資料を調査しているわけではないが、扉板と柱状の部品を足しても、全国で類例はわずか7例の少なさである。まだこれから資料調査により見つかる可能性は高いが、同じ藤枝市の葉梨地区で3例が見つかることは特筆すべきことかもしれない。

藤枝市葉梨地区の遺跡で3箇所にもこの特徴をもつ扉板関連の資料が出土していることは、弥生時代後期から古墳時代前期の時期に当地では一般的に使われていたと想定される。あるいは同じ集落の単位が葉梨地区を移り住んでいる可能性も指摘してきたが、それを裏付ける資料となり得るだろうか。

第1表 妻壁計測表

跡目 No.	図号 No.	遺物番号	区	グリッド	遺構 層位	年代	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	角度	備考	
226	26	W-341	F-1	110F-6	SK422	弥生後期	スギ	286.10	10.80	2.90	34°	板目	
227	26	W-435	F-1	110F-6	SK422	弥生後期	スギ	218.60	21.00	2.10	25°	板目	
228	27	W-564-970	F-1	110F-7	SK422	弥生後期	スギ	187.00	14.00	1.10 ~ 1.70	38°	板目	
229	27	W-603	F-1	110F-7	SK422	弥生後期	スギ	179.20	15.40	1.70	35°	板目	
230	27	W-478	F-1	110F-8	SK422	弥生後期	スギ	176.80	20.40	2.40	34°	板目	
231	28	W-358	F-1	110F-7	SK422	弥生後期	スギ	174.70	19.60	2.20	36°	板目	
232	27	W-1354	F-1	110F-8	SK422	弥生後期	スギ	140.00	19.40	2.80	36°	板目	
233	28	W-1441	F-1	110F-6	SK422	弥生後期	スギ	90.40	10.70	1.60	42°	板目	
234	27	W-477	F-1	110F-8	SK422	弥生後期	スギ	126.20	26.70	2.20	43°	板目	
235	26	W-601	F-1	110F-7	SK422	弥生後期	スギ	137.90	15.90	2.00	44°	板目	
236	28	W-356	F-1	110F-8	SK422	弥生後期	スギ	119.30	20.95	2.75	40°	板目	
235	30	W-861	F-1	110F-8	SK422	弥生後期	スギ	157.50	25.80	3.60	50°	板目 縦向き?	
256	31	W-200	F-1	110F-7	SK422	弥生後期	スギ	160.80	23.00	3.20	63°	板目	
280	33	W-544	F-1	110F-7	SK422	弥生後期	スギ	117.90	18.70	1.60	34°	板目 縦向き?	
304	37	W-579	F-1	110F-7	SK422	弥生後期	スギ	81.90	6.30	1.90	47°	板目	
343	39	W-847	F-1	110F-7	SK422	弥生後期	スギ	66.70	17.60	1.70	33°	板目	
394	46	W-10139	E-4	110B-6	SK5002	弥生後期	スギ	152.70	17.20	2.00	-	板目	
424	53	W-10852	F-4	110C-7	SX423	弥生後期	スギ	198.40	11.80	2.00	42°/37°	板目	
425	53	W-10135	F-4	110D-7	SX423	弥生後期	スギ	115.95	11.25	1.55	35°	板目	
426	53	W-10126	E-4	110B-8 110C-8	SX423	弥生後期	スギ	86.60	17.20	3.40	55°	板目	
427	53	W-10988	E-4	110C-6	SX423	弥生後期	スギ	137.30	8.60	2.00	23°	板目	
428	53	W-10228	F-4	110C-6	SX423	弥生後期	スギ	244.60	20.30	2.20	45°	板目	
428	56	W-10120	E-4	110C-9	SX423	弥生後期	スギ	194.70	23.20	3.30	-	板目	
553		W-15	A-2	150A-2	SK599	弥生後期	スギ	158.60	10.90	2.10	37°	板目	
681		W-156	B南	151A-4 151A-5		南東 肥前区	弥生後期	スギ	73.80	13.80	1.60	30°	板目
753	68	W-1619	F-1	110F-6	19層	弥生後期	スギ	135.50	19.40	2.30	34°	板目 縦向き又は表壁	

## 第5節 「登呂型住居跡」について

竅穴住居跡あるいは平地式の住居の外側に溝を巡らせた住居跡の存在が、近年いくつかの地域で気が付かれている。多くは「周溝を持った建物」の名で呼ばれており、出現の時期あるいは分布もある程度明らかにされている（岡本 1997・松井 2002）。

しかし、こうした住居跡の存在は早く登呂遺跡の調査段階で気が付かれていることで、「登呂」前編（日本考古学協会 1949）で集落址を担当した後藤守一・杉原荘介両氏は1号住居跡が「板羽目」をもったもので、その痕跡を追求することによって、住居跡が「小判形に近いプラン」をもち、「板羽目によって囲まれた住居面の外」に「多くの杉材の小杭が繞って柵を結って」いることから、この柵の役割を「羽目板を支えている外方の土堤の土留め」の柵であり、住居の羽目板の外側に、土留めの杭列をもった「土堤」が存在すること、その幅が「2.1 m前後」であることを説明し、さらには「軒先は地（土堤の上）に着いていたか、壁部があったとしても高くはない」と推定して、「壁部があって、軒先が地をはなれていたら軒先は土堤上か又は外柵外にあった」と推定している（後藤・杉原 1949）。

2号住居址では「住居の床は地表面より高い羽目板と土堤によって守られていた」とし、住居跡の床面の高さが水田畦畔の杭の頭の高さとほぼ同じであり、基本的には竅穴住居跡ではなく床面が外の地面の高さと同じな平地式の住居であろうことを推定している。

さらに、続いて公表された本編で、火災に遭ったと推定した1号住居址（48-1）で、土堤の幅は入口部分で1.38 m、奥の部分では2.15 mほどの広さになること、したがって、住居跡は長軸11 m×短軸9.75 mで、居住部分の広さは87.45 m<sup>2</sup>であるとしている。さらには炭化して残った羽目板材から、その長さは最低で30 cmほどであることが計測され、床下を合わせると50 cmほどの長さになること、外側の杭は30～40 cmであり、これらから杭の長さも60～70 cmに及ぶこと（したがって周堤の高さも40 cm以上であること）を推定している。

また、「住居址の建築的考察」を行った関野克氏は「羽目板」の存在を認め、「住居跡の内側に板を張っており、外側に杭列を持ち、その間は土堤になっている」とし、外側の溝を土を掘った跡だとしながら、その機能を防湿・排水のためのものだとしている。また、残存していた木杭列の露面の長さが41 cmであったことから、「土破の高さは少なくとも41 cm以上あった」として、その形状・機能について原則的な部分を明らかにしている（関野 1954）。したがって、現在各地域で検出されている「周溝を持った建物」の基本的なあり方、その機能はすでに、この段階ですでに明らかとされていると考えてよい（註6）。

住居跡の周囲に巡らされた土堤の高さは、平成5年から平成8年にかけて行われた登呂遺跡再発掘調査のSB2022住居跡（登呂遺跡調査時の1-49）から検出された羽目板の長さによって確認されているが、それによれば、検出された板の長さは1.1 mであり、20 cmが床下部にあったとして、羽目の高さは90 cmほどの高さがあり、土堤の高さをこの前後に推定している。また、住居の広さについても、外周の杭列の径を7.5 m、羽目板に囲まれた内側を径4.8 mほどとしている（岡村 2005）（註7）。

登呂遺跡の調査によって確認された「登呂型住居跡」の概要は以上であるが、整理をしてみれば、

- ① 住居跡の外側に溝を巡らせている。その溝は外の排水路などにつながっている場合もある。溝の幅・深さは基本的にはかなり大きい。
- ② 住居跡本体は床面を掘りくぼめて造った竅穴住居跡にはならず、床面の高さが外の高さとほぼ等しい「平地式」をなしている。これは後にも述べるが、必ずしも平地式のみではなく、遺跡によっては竅穴になっている場合もある。両者の間には住居の機能といった面では基本的には差がない。
- ③ 住居の居住部分と溝の間は土堤になっている。土堤の高さは1 m前後、広さには多少の幅がある

うが、1～3mほどあり、かなり広い。登呂遺跡ではこの土堤が通路として利用されていたと推定されている。

④ 上屋を支える支柱は4本である。登呂遺跡の場合がそうであるように、東海地方では弥生後期から古墳時代にかけての竪穴住居跡の支柱穴は4本が中心であるが、それは必ずしも、この建物の機能を考えるときの基本的な条件ではない。後に述べるが、地域によっては上屋の形態に差があることから、支柱穴の数は一定である必要はない。

このように整理してみたが、こうした形態の住居跡はすでに各地域で検出されているが、身近な遠江・駿河の地域で目に付く事例を挙げてみよう。すでに松井一明氏が「周溝を持った建物」が検出された遺跡の概要を整理しており、それに追加するものは静岡市飯田遺跡例（現地調査を行った大川隆夫氏の指示による）あるいは静岡市北部の川合遺跡（山田 1990）程度で、多くはないが、住居跡の形態分類などについて、多少触れてみよう。

先に触れたように「登呂型住居跡」は、溝の内側に「周堤」をもったものであることは、早い段階に登呂遺跡の調査で指摘されていることで、このことは、大阪平野の長原遺跡（今津 1989）あるいは北陸地域でも調査例が増加し、遺存条件の良い遺構が検出されたことによって気が付かれている（岡本 1997）。

松井氏はこうした「周溝をもつ建物」の分類と機能を、北陸における岡本淳一郎氏の分類と編年案（岡本 1997）を基礎にして検討を加え、竪穴住居跡を伴うもの（A類）と平地式の住居になるもの（B類）とに分け、溝の幅あるいはその形状からさらに4つに分けて、それぞれを組み合わせて、A1・A2あるいはB1・B4等と詳細に分類している。

しかし、各遺跡で検出されている例は「残った遺構」の極く一部であり、例えば登呂遺跡で想定されたように1mほどの高さの周堤が存在したとすると、この分類は意味をもつものになるであろうか。また、この溝が「湿気防止」のためであり、その掘削は合わせて周堤を造る「土」を確保するためだとすれば、この周堤をもった住居跡は、壁のあり方を含めて考えれば、本来「平地式」でも「竪穴住居跡」と同じ機能を確保するためのものであり、さらに溝は本来「湿気防止」がその主たる機能であり、発掘調査によって検出された遺構が、調査以前にすでに上層を大幅に削平された姿であることを考慮すると、その溝の幅は遺構の遺存状態を示すことにはなっても、遺構の性格を考える場合にはさほどの意味をもたない。したがって、ここではこうした詳細な分類は行わず、単に「周堤をもった住居」（検出した遺構では周溝のみが目につくことは諸氏分類の通り）と考えておこう。

遠江・駿河の地域で、現在18遺跡ほどで登呂型住居の存在を挙げうるが、それらを概観すると

① 登呂遺跡あるいは汐入遺跡のような低湿地の遺跡での検出例が目につくが、島田市駿河山遺跡（河合他 2010）・菊川流域の赤谷遺跡（篠原 2006）あるいは掛川市上の平遺跡（田村 2008）等に見みょうように、丘陵上の遺跡でもかなりの数の登呂型住居跡の存在が認められる。したがって、低湿地遺跡においてだけでなく、丘陵上の遺跡でも、こうした防湿装置を持った住居跡が存在することが知られる。周溝と土堤と言う住居に防湿の構造を附加するための労力はかなりのものであったことを考えると、それら（登呂型住居）が集落内のどのような位置に配置されているのか、微地形を含めた検討が必要であり、加えて、それらが集落内で、どのような位置付けをもっていたのか集落の構成を含めて詳細な検討が必要であろう。

② 低地遺跡はともかく、丘陵上の遺跡には登呂型を取るものと、周囲に溝も周堤もたない、一般的な竪穴住居が混じっている。むしろ登呂型住居の比率は多くはない（上ノ平遺跡では165例中39例、赤谷遺跡は34例中8例）。また、丘陵上の遺跡には浜松市沢上I遺跡（太田他 1990）あるいは菊川町西原遺跡（水島 1985）など、全く登呂型住居を含まない遺跡がある。むしろ後者が圧倒的に多い。

③ 逆に日誌遺跡（佐藤他 1984）のように低地遺跡でも登呂型住居跡の形態をとらない住居跡があることを考慮すると、登呂型住居跡の機能が床面の防湿・排水のためのものだけということも考慮しても、そのあり方には各遺跡でかなりの差があることになり、個別の遺跡での事情を斟酌しなければならないだろう。この期（弥生後期～古墳前期）は、海水面の上昇などを背景にして、集落の立地条件が湿地対策を必要とするほどに悪化した状態であることを考慮したとしても、なおかつ、こうした形態をとる住居ととらない住居とが、低湿地の遺跡にも丘陵上に営まれた集落もあるわけである（註8）。

④ 先に挙げた条件と矛盾するように、登呂遺跡・菊川流域の東原田遺跡（山村他 2001）さらには今回の寺家前遺跡の2期とした遺構群のように、検出された全ての住居跡が登呂型住居跡である遺跡が認められる。こうした遺跡は登呂遺跡の例で見るまでもなく（登呂遺跡では水田面と住居跡床面との間にレベル差はほとんどない）、低湿地で、地下水が高く、集落の立地条件としては決して恵まれたものでない遺跡である。こうした条件の所に営まれている集落の特徴とその評価を周辺の遺跡群のあり方の中で検討してゆく必要がある。

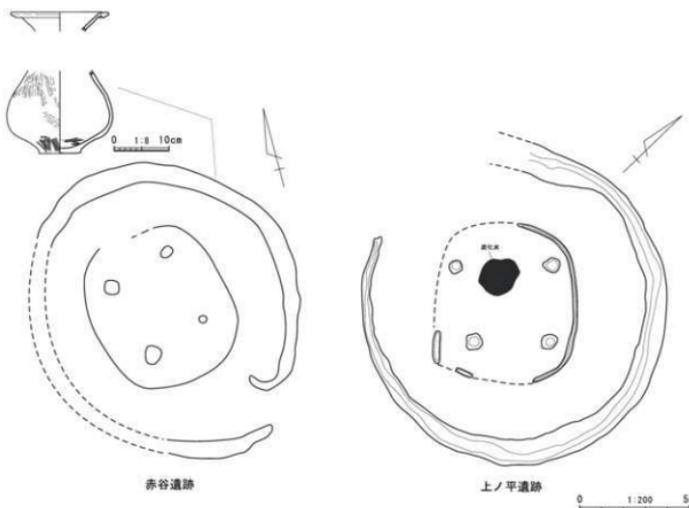
登呂型住居跡の終了段階に近い浜松市大平遺跡（鈴木 1992）で見ると、ここでは周堤は検出されていないが、外側に溝をもち、その内部に堅穴住居跡をもった（堅穴住居跡の外側と周溝までの間は2m前後の空間があり、それらは、おそらく周堤をもったものであろう）「登呂型住居跡」と考えられるものが2棟検出されており、さらに周囲に周溝の残存と考えられる溝が部分的に検出され、登呂型住居跡と推定されているものが少なくとも2～3軒確認できる。ここでは遺跡全体が方形の区画をもった「首長」の居館を含め、柵・建物の位置などから、全体が5～6群の建物群に分かれると考えられている。検出された登呂型の住居跡は、比較的規模の大きな住居跡にかざられていることを考慮すると、これらの「登呂型住居跡」は各区画の中で最も丁寧に造られた住居であることが推定できる（註9）。

そうした目で各集落での様子を検査してみると、少なくとも丘陵上の遺跡では比較的規模の大きな住居跡に登呂型住居の形態をとったものが多い。掛川市上ノ平遺跡でも登呂型住居跡が建て替えも含めて数多く検出されているが、全体を眺めると登呂型住居跡の分布は6箇所くらいに分かれることが考えられる。これらの住居跡は削平されている部分が多く、居住部分の面積は計測できないが、住居跡としては比較的規模の大きなものが目に付く（註10）。

③今のところ、「登呂型住居」が検出された最も早い遺跡は登呂遺跡であり、それ以前には明確ではない。したがってこの地域では、その始まる時期は登呂式（登呂遺跡）段階であり、その終わりは特殊な遺跡を除外すれば、基本的には古式土師器段階で終わるらしい。最も後出的な例を古墳時代中期の川合遺跡とする意見があるが、この遺跡の場合には、集落の東側に設定されている土堤・濠を含めて、遺跡の東側を流れる長尾川の洪水への備えが基本であったと考えられよう。したがって、川合遺跡は、やはり特殊な立地条件をもった集落跡であるといつてよい。

あわせて、焼津市宮ノ腰遺跡で検出された細い丸太材に茅を付けた、丈の高い壁体をもった住居跡の存在を考慮すると、この時期（5世紀）には、少なくとも東海地方の東部では、地面を深く掘り込んだ（高い壁をもった）堅穴住居跡あるいは高い周堤を繞らせた住居の存在を考えると難しい。やはり5世紀を境に、遺跡の立地、堅穴住居跡の形態、さらには集落景観そのものに大きな変化があったと考えられよう。

弥生時代中期後半から、後期前半にかけては住居跡の平面形が「小判形」あるいは「長楕円形」と表現される形態が多いが、こうした形態の住居跡が主となる集落には「登呂型住居」の数は多くはない。やはり数多く検出されるのは住居跡の平面形が円形あるいは隅丸方形を呈する後期中葉から後半にかけてのものである。したがって、少なくとも東海地方では登呂型住居は弥生後期前半に始まっているが、盛行するのは、やはり後期後半から古式土師器の段階にかけてであることが知られる。これは、こうし



第140図 登呂型住居類例図

た住居の建築技法が採用される条件が、弥生後期から古式土師器にかけて、水位の上昇と相まって、全体に集落域が湿地化し、平野部での居住条件が悪化してくるこの地域でのあり方とも一致していると考えてよい。したがって、「環境変化に伴う生活条件の悪化に対応した現象」という側面は当然考える必要があろう。

周堤帯を設置し、堅穴住居跡を深く掘り込まない（あるいは平地式とした）こうした新たな住居建築技術を自然発生的なものではなく、外部地域（あるいは北陸方面）からの影響と考えようとする意見もあるが、そうした系譜は今のところ明確ではない。ただ、この形態の住居跡が最も早く発見されている登呂式土器に「赤彩」あるいは「櫛描き波紋」など、それまで影響が強かった東海西部ではなく、信濃方面からの影響が考えられていること何らかの関わりがあるかもしれないが、それは今後の検討とすることにしよう。

#### 註

- 1 当地の集落継続変遷については『寺家前遺跡Ⅲ（古墳時代後期編）』の第4章第1節第4表 粟梨川流域の集落継続変遷表にまとめた。
- 2 衣原遺跡10区の溝状遺構 S102より弥生時代中期中頃の壺形土器が出土している（『衣原古墳群・衣原遺跡・衣原宮跡群』第3章第3節9.10区図158-1051）。
- 3 『寺家前Ⅱ』の報告書では当初古墳時代後期に含めたが、その後の検討の結果、掘立建物 S1212とS1213は弥生時代後期の集落遺構面に含めることとした。
- 4 首都大学東京の山田昌久教授、奈良文化財研究所の黒坂貴裕氏の御教示による。

- 5 出土土器研究会の折、仙台市教育委員会の荒井格氏より資料を実現する機会をいただいた。
- 6 「周溝をもった建物」は竪穴住居跡あるいは平地式の住居跡の外側に溝を巡らせた住居跡で、外側の溝だけが検出される場合が多いことから、そう呼ばれてきたものだと考えられる。後世に土壌の部分が削平されてしまい、残った溝だけが発掘調査で検出されたことから「周溝をもった建物」と認識されてきたもので、かつての「方形周溝墓」発見の時の状況と良く似た現象であろう。こうした住居跡の居住部分が竪穴住居跡にせよ平地式住居跡にせよ、居住部分と溝の間に土堤を造っていたことは確からしく、これは早く、登呂遺跡の調査段階で気が付かれていたことで、先に述べたように住居跡の復元的考察をおこなった関野克氏は住居を造る前に「周囲の溝から掘り上げられた土によって盛り土をし」、その後「竪穴住居跡が骨たれ、土留めのための板羽目が壊らされた」としており、その形態・機能の大半はすでに登呂遺跡の調査段階で指摘されている。したがって、ここでは「溝を持った建物」としたように、こうした遺構の形態の一部を示す呼び名で表すのではなく、本来外周に「土堤をもった建物」であることを前提に、最初の発見遺跡である登呂遺跡の名を尊重して「登呂型住居跡」の名で呼ぶことにしたい。
- 7 登呂遺跡の再整備に伴う復元では竪穴住居跡住居跡の屋根の先端が周境の上に設けられている。これは早く関野氏による復元案でも考えられていたことで、従来からの見解に従ったことらしい。また、屋根の外側に当たる土壌の部分は通路になったことも想定されており、これも屋根の先端位置を復元する根拠にもなっている。しかし、復元整備されて数年になる現況では屋根の先端に当たる部分では雨の影響で、土壌は崩れ始めている。当然と言えば当然の結果であろう。住居跡が機能していた段階でも、同様な現象は起きていたはずであるし、雨水の流れる土壌の上が通路として機能したであろうか。疑問が残るところである。やはり屋根の先端の位置を含めて、必要であれば、屋根の傾斜あるいはその構造にまで及んで、再度検討する必要がある。
- 8 同じような防雨機能をもった住居建築技術に、竪穴住居跡の床面下部に掘り込みをおこなった「下部構造」を持った住居跡があることは広く、認識されてきており、検出例も多いが、これと「登呂型住居跡」との間には、住居（の基礎）を造るに当たった投下労働量さらにはその外観の醸し出す景観にもかなりの差があるだろう。したがって、ここでは「下部構造」をもった住居跡と登呂型住居跡とは別なものと考えている。
- 9 大平遺跡で検出された遺構はいずれも浅い部分が多く、竪穴住居跡・溝なども10 cm程度の深さしかないものもある。しかし、これらは当初からこうしたものではなく、当然、後世に上部が大きく削平されている事を考慮しなければならぬだろう。したがって、調査の段階では検出されていないが、登呂遺跡で推定されているように、竪穴住居跡の壁の外側に高さ1 m前後の周境があったと考えると、検出された遺構群が示すものとはかなり異なった景観を呈していることになるだろう。こうしてみると、大平遺跡報告書の表紙返しに示された「壁の立ち」の高い竪穴住居跡が主体になる集落の景観は保たれるだろうか。再考が必要になる。
- 10 上ノ平遺跡では全域が発掘されたわけではないが、全体で、竪穴住居跡165軒の他、掘立柱建物185棟が検出されている。そのうち登呂型住居跡は40軒足らずである。重複しているものが多いので、一時期に何軒が建てられていたのかはよくわからない。しかし、登呂型住居跡の分布を手がかりに考えると、各住居跡は5～6群に分けることが可能である。この群を住居の一単位と考えると、各単位の中心的部分に比較的丁寧に造られた登呂型住居跡の存在を推定することが可能であろう。

## 第2編 寺家前遺跡調査の総括

### 第1章 寺家前遺跡の調査と資料整理体制

寺家前遺跡の発掘調査が平成12年度に始まってから14年度の中断期間を経て13年を経過した。調査事業の完了にあたり、再度、寺家前遺跡の調査と資料整理体制を振り返る。

平成12年度から平成25年度までの調査体制は第2表にまとめた。また各調査区の調査年度を第141図に示した。平成23年度までの調査経緯は『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』第1章の総論にまとめている。以下、概略を記す。

寺家前遺跡は平成12年度の6月より確認調査その1を開始し、その年の秋から本調査Ⅰ期に入っている。平成14年度は同じ静岡工区の衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群の調査に入ったため、寺家前遺跡の調査は一時中断した。平成15年度に入り、確認調査その2とともに本調査Ⅱ期が始まり、平成16年度からは本調査Ⅲ期と併行しながら調査を実施した。現地調査は平成18年度末にすべて完了した。

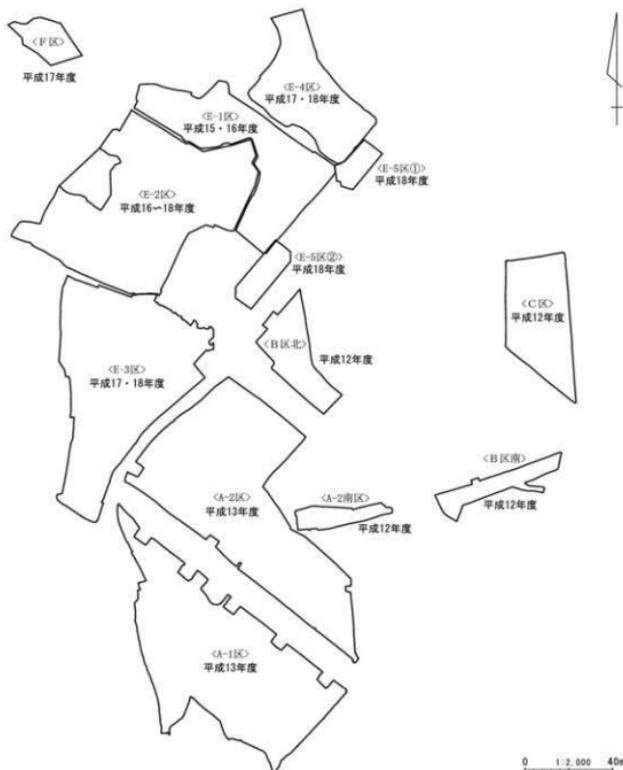
第2表 寺家前遺跡調査体制一覧表

組織	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所						
	12年度	13年度	14年度	15年度	17年度	18年度	19年度
所長	森藤 忠	森藤 忠	伊藤 忠	森藤 忠	森藤 忠	森藤 忠	森藤 忠
副所長・次長	山丁 亮	山丁 亮	森田英夫	森田英夫	森田英夫	森田英夫	森田英夫
常務理事	伊藤大輔	森田英夫	森田英夫	森田英夫	森田英夫	森田英夫	森田英夫
総務部長	伊藤大輔	森田英夫	森田英夫	森田英夫	森田英夫	森田英夫	森田英夫
総務課長	村木敏博	水村昭一	藤原亮己	藤原亮己	藤原亮己	藤原亮己	藤原亮己
総務係長	田中朝代	山本昭子	山本昭子	山本昭子	山本昭子	山本昭子	山本昭子
事業部長	大橋 康	大橋 康	野島高弘	野島高弘	野島高弘	野島高弘	野島高弘
設計部長	大橋 康	大橋 康	野島高弘	野島高弘	野島高弘	野島高弘	野島高弘
経理専任員	菅原謙雄	菅原謙雄	菅原謙雄	菅原謙雄	菅原謙雄	菅原謙雄	菅原謙雄
部長	及川 河	及川 河	中嶋昭夫	中嶋昭夫	中嶋昭夫	中嶋昭夫	中嶋昭夫
副部長	及川 河	及川 河	中嶋昭夫	中嶋昭夫	中嶋昭夫	中嶋昭夫	中嶋昭夫
主任調査研究員	新塚博隆	鈴木忠孝	三島文洋	長谷川勝	堀内立群	堀内立群	堀内立群
調査研究員	以上 惣	以上 惣	三島文洋	長谷川勝	堀内立群	堀内立群	堀内立群
	大橋 康	大橋 康	野島 康	野島 康	野島 康	野島 康	野島 康
	藤本実明	藤本実明	河合 康				
			村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎
			中井 田	大橋謙幸	中井 田	大橋謙幸	中井 田
			藤原亮己	藤原亮己	藤原亮己	藤原亮己	藤原亮己
			小塚正和	小塚正和	小塚正和	小塚正和	小塚正和
			鈴木昭子	鈴木昭子	鈴木昭子	鈴木昭子	鈴木昭子

組織	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所			静岡県埋蔵文化財センター		
	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
所長	森田英夫	森田英夫	森田英夫	森田英夫	森田英夫	森田英夫
副所長・次長	大橋正夫	村松 亨	村松 亨	村松 亨	村松 亨	村松 亨
常務理事	藤本 哲	大橋 正	山本 彰	山本 彰	山本 彰	山本 彰
総務部長	藤本 哲	大橋 正	山本 彰	山本 彰	山本 彰	山本 彰
総務課長	大橋正夫	村松 亨	村松 亨	村松 亨	村松 亨	村松 亨
総務係長	山内小百合	山内小百合	山内小百合	山内小百合	山内小百合	山内小百合
事業部長	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎
設計部長	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎
経理専任員	菅原謙雄	菅原謙雄	菅原謙雄	菅原謙雄	菅原謙雄	菅原謙雄
部長	及川 河	及川 河	中嶋昭治	中嶋昭治	中嶋昭治	中嶋昭治
副部長	及川 河	及川 河	中嶋昭治	中嶋昭治	中嶋昭治	中嶋昭治
主任調査研究員	中川謙子	中川謙子	中川謙子	中川謙子	中川謙子	中川謙子
調査研究員	以上 惣	以上 惣	以上 惣	以上 惣	以上 惣	以上 惣
	大橋正夫	大橋正夫	大橋正夫	大橋正夫	大橋正夫	大橋正夫
	藤本実明	藤本実明	藤本実明	藤本実明	藤本実明	藤本実明
	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎	村松隆太郎
	中井 田	中井 田	中井 田	中井 田	中井 田	中井 田
	藤原亮己	藤原亮己	藤原亮己	藤原亮己	藤原亮己	藤原亮己
	小塚正和	小塚正和	小塚正和	小塚正和	小塚正和	小塚正和
	鈴木昭子	鈴木昭子	鈴木昭子	鈴木昭子	鈴木昭子	鈴木昭子

現地調査と併行して行ってきた基礎資料整理は、平成19年度から本格的に始まった。計画的に報告書を刊行する計画のもと、7年間に渡って資料整理・報告書刊行作業を実施した。平成12年度当初は第二東名道路用地内に基礎資料整理作業を行う藤枝地区事務所（平成23年度から藤枝事務所）が建てられたが、第二東名道路の工事に入るため平成16年度に藤枝市上藪田へ藤枝地区事務所を移転し、以後、平成25年度末まで資料を整理し、報告書をまとめる作業を行った。藤枝事務所は平成26年1月末日に閉鎖した。

遺跡調査報告書は平成23年度に前述の『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』を刊行し、その後、平成24年度に『寺家前遺跡Ⅱ（木製品・石製品・金属製品他編）』、本年度に『寺家前遺跡Ⅲ（古墳時代後期編）』、『寺家前遺跡Ⅳ（弥生時代後期～古墳時代初頭・総括編）』をまとめた。よって寺家前遺跡の報告書は4分冊となる。各報告書の内容・構成については第2章の第3表報告書構成一覧表にまとめた。



第141図 現地調査年次

## 第2章 寺家前遺跡の報告書構成

寺家前遺跡の発掘調査報告書は4分冊の構成になっている。刊行した報告書は以下の通りである。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第19集

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』藤枝市-4 2012年3月26日

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第35集

『寺家前遺跡Ⅱ（木製品・石製品・金属製品他編）』藤枝市-6 2013年3月29日

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第43集

『寺家前遺跡Ⅲ（古墳時代後期編）』藤枝市-7 2014年3月31日

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第44集

『寺家前遺跡Ⅳ（弥生時代後期～古墳時代初頭・総括編）』藤枝市-8 2014年3月31日

各報告書の内容・構成は第3表に示した。遺跡調査に係る経過は『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』（2012）の第1章の総論にまとめている。また本業務の完了に伴い『寺家前遺跡Ⅳ（弥生時代後期～古墳時代初頭・総括編）』（2014）の本編に遺跡調査と資料整理体制および報告書構成について掲載した。

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』（以下、『寺家前Ⅰ』）では、第1章の総論のなかで確認調査その1・その2と本調査Ⅰ期、Ⅱ・Ⅲ期の調査に至る経緯と資料整理について概要を記した。また本遺跡の基本土層について第1章第4節-4に示した。『寺家前Ⅰ』に掲載した年代は奈良～平安時代と中世～近世までの記録図と出土品である。基本層位では5層から7層までに相当する。

『寺家前遺跡Ⅱ（木製品・石製品・金属製品他編）』（以下、『寺家前Ⅱ』）には、弥生時代から古墳時代までの遺構・包含層（8層～10層）より出土した木製品と石器、石製品、金属製品、自然遺物を掲載した。第4章には弥生時代から古墳時代の理化学分析も掲載した。

『寺家前遺跡Ⅲ（古墳時代後期編）』（以下、『寺家前Ⅲ』）は、古墳時代後期の記録図と出土品（土器・土製品）を掲載した。第5章には『寺家前Ⅰ』や『寺家前Ⅱ』で掲載した木製品の樹種同定結果と分析報告もある。附録では『寺家前Ⅰ』や『寺家前Ⅱ』に掲載した出土品の修正や追加、事実記載の正誤表を載せた。

『寺家前遺跡Ⅳ（弥生時代後期～古墳時代初頭・総括編）』（以下、『寺家前Ⅳ』）では、弥生時代後期から古墳時代初頭の記録図と出土品（土器・土製品）を掲載している。また総括編として第2編に調査が始まってから平成25年度までの経緯をまとめ、各報告書の内容についてわかるよう第3表にした。

寺家前遺跡は広大な面積の発掘調査を行っており、遺構・遺物とも非常に数が多い。遺構については各報告書に記録図を示したとおりだが、同一面で調査された遺構を年代ごとに切り分けていく作業は非常に困難を極めた。各報告書の巻頭には調査時の調査区全体図を掲載しているが、年代の異なる遺構が混在している状態であった。そこで出土品をもとに年代を分け遺構全体図を作成した。各報告書に掲載された年代ごとの遺構全体図を参照されたい。

寺家前遺跡全体の出土品は総数約850箱に及ぶ。奈良～平安時代、中世～近世までの年代の出土品はすべて『寺家前Ⅰ』掲載した。弥生時代後期～古墳時代初頭と古墳時代後期の年代は土器と木製品、自然遺物については遺構ごとにまとめ、章末に包含層の出土品を掲載した。ただし数量の少ない土製品、石器・石製品、金属製品については種類ごとにまとめた。これらの出土した遺構や層位は巻末の観察表で確認することができる。

第3表 寺家前遺跡報告書構成一覧表

報告書名	副題	各報告書共通項目	自然科学分析
寺家前遺跡Ⅰ	古代・中～近世編	調査に至る経緯 調査体制 位置と環境 確認調査の結果 本調査経緯の概要 基本土層	トイレ遺構埋積物の分析 井戸遺構の花粉分析 堆積化石分析 古代・中～近世遺構出土土質分析、本製品の放射性炭素年代 古代・中～近世木製品の樹種鑑定
寺家前遺跡Ⅱ	木製品・石製品・金属製品編	寺家前遺跡出土の 木製品・石製品・金属製品	プラントオパール分析 炭素・花粉分析 放射性炭素年代測定 銅銲・銅鏝・耳環の成分分析 軟骨の成分分析 須恵器・土師器の蛍光X線分析 須恵器・土師器の粘土分析
寺家前遺跡Ⅲ	古墳時代前期編		寺家前遺跡同定の全概観一覧 寺家前遺跡同定の概観組成一覧 スギ材の利用とその資源
寺家前遺跡Ⅳ	弥生時代～古墳時代前期・総括編		

## 引用・参考文献

- 飯島義雄 1998 「古墳時代前期における「周溝を持つ建物」の意義」『群馬県立博物館紀要』第19号  
群馬県立歴史博物館
- 岡村 渉 2005 『特別史跡登呂遺跡 再発掘調査報告書』 静岡市教育委員会
- 岡村 渉 2008 「清静平野 登呂遺跡」『集落から読む弥生遺跡』 同成社
- 岡本淳一郎 1997 「周溝を持つ建物について」『埋蔵文化財概要—平成8年度』 富山県文化振興事業団
- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学』 青海社
- 河合 修他 2012 『駿河山遺跡Ⅳ』 静岡県埋蔵文化財センター
- 後藤守一・杉原庄介 1949 「集落址」『登呂 前編』 日本考古学協会
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994 『川合遺跡 遺物編3（木製品図版編）』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『角江遺跡 遺物編2（木製品）』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『長崎遺跡Ⅱ（遺構編）本文編』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『瀬名遺跡Ⅴ（遺物編Ⅱ）本文編』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998 『静清バイパス総括編（集成図）』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳・中ノ合遺跡』
- 佐藤達雄他 1984 『日誌遺跡』 南伊豆町教育委員会
- 静岡県埋蔵文化財センター 2012 『有東遺跡—第22次発掘調査報告書—』
- 静岡県埋蔵文化財センター 2012 『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』
- 静岡県埋蔵文化財センター 2013 『寺家前遺跡Ⅱ（木製品・石製品・金属製品他編）』
- 静岡県埋蔵文化財センター 2014 『寺家前遺跡Ⅲ（古墳時代後期編）』
- 篠原和大 2006 「登呂式土器の成立と展開—静岡清水平野後期前半期弥生土器の編年の考察—」  
『特別史跡登呂遺跡再発掘調査報告書（自然化学分析・総括編）』 静岡市教育委員会
- 篠原和大 2006 「登呂式土器と雄鹿塚式土器—駿河湾周辺地域における弥生時代後期の地域色に関する予察—」  
『静岡県考古学研究』38号 静岡県考古学会
- 篠原修二 2006 「赤谷遺跡の概要」『細宜屋敷遺跡調査報告書』 菊川市教育委員会
- 鈴木敏則 1992 『佐鳴湖西岸遺跡群』 浜松市文化協会
- 関野 克 1954 「住居址と倉庫址との建築学的考察」『登呂 本編』 日本考古学協会
- 田村隆太郎 2008 「集落を構成する遺構」『上ノ平遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鉄器文化研究会 1997 『第4回 鉄器文化研究会 東日本における鉄器文化の受容と展開 発表要旨集』
- 水島和弘 1985 『三沢西原遺跡』 菊川町教育委員会
- 山村輝貴他 2001 『川田・東原田遺跡』 小笠町教育委員会
- 松井一明 2002 「繋ぐ住居と掘立柱建物」『弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会
- 中川律子 2008 「東日本の農耕具 東海」『季刊考古学』第104号 特集 弥生・古墳時代の木製農具 雄山閣
- 中川律子 2011 「藤枝市寺家前遺跡から出土した柄付き鉄製鎌について」『研究紀要』第17号  
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 奈良文化財研究所 2009 『遺跡出土の建築部材に関する総合的研究シンポジウム  
「出土建築部材の調査方法と視点」の記録』
- 樋上 昇 2010 『木製品から考える地域社会—弥生から古墳へ—』 雄山閣
- 平野吾郎 1986 『登呂遺跡』『弥生文化の研究』7 雄山閣

- 平野吾郎 1987 「川合遺跡出土の鉄斧・鉄鎌ならびに鋤先の出土状態について」『研究紀要Ⅱ』  
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 平野吾郎 1990 「東海地方における水稲耕作の開始について」『研究紀要Ⅲ』  
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 平野吾郎 1993 「高床倉庫群の成立—弥生時代集落の構造とその変化—」『二十一世紀への考古学』 雄山閣
- 藤枝市郷土博物館 1990 『女池ヶ谷古墳群発掘調査報告書』 藤枝市教育委員会
- 藤枝市史編纂委員会 2013 『因説 藤枝市史』
- 藤枝市史編纂委員会 2006 『藤枝市史 資料編 1 考古』 藤枝市
- 藤枝市史編纂委員会 2010 『藤枝市史 通史編 上 (原始・古代・中世)』 藤枝市
- 藤枝市埋蔵文化財調査事務所 1981 『国道1号藤枝バイパスく藤枝地区く埋蔵文化財調査報告書第6冊  
上敷田モミダ遺跡・上敷田川の丁遺跡・鳥内遺跡』 藤枝市教育委員会
- 守山市教育委員会 2001 『下長遺跡発掘調査報告書Ⅶ』
- 山田昌久編 2003 『考古資料大観 8 弥生・古墳時代 木・繊維製品』 小学館



第4表 出土土器観察表

種別 No.	坑	グリップ	遺構 位置	種類	器種名	口径	底径	器高	図解・注記の特徴	胎土	焼成	色調	検出層 (M)	備考
39	F-3	1300-1	0937 履上	赤生土器	広口壺	11.0	11.9	11.9	赤ノナデ・ハナ 底 3mm以下・灰・白 色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 5	摩滅	
40	F-3	1300-2	0937 履上	赤生土器	壺	10.5	11.5	14.5	赤ノナデ・焼灰 底 3mm以下・灰・白 色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 10	摩滅(10.10) 10 摩滅	
41	F-3	1300-1	0939 履上	赤生土器	壺	16.0	13.2	13.2	赤ノナデ・灰・褐色胎 土・褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 15	摩滅(13.0) 10 摩滅	
42	F-3	1300-10	0939 履上	赤生土器	広口壺				赤ノナデ 底 3mm以下・灰・ 白胎土	白	1000℃焼成	口縁部 5	摩滅	
43	F-3	1300-1	0939 履上(大式土器 跡)	赤生土器	高杯		17.10		赤ノナデ・灰・白・ 褐色胎土 白・褐色 胎土	白	1000℃焼成	口縁部 10	摩滅(17.10) 摩滅	
44	F-3	1290-10	0939 履上	赤生土器	壺	11.0	11.0	11.0	調整不明 赤ノナデ	白	1000℃焼成	口縁部 10	摩滅	
45	F-3	1300-1	0939	赤生土器	付付壺	17.43	12.83	12.83	調整不明 赤褐色・灰・褐色胎 土・褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 5	摩滅(17.43) 10 摩滅	
46	F-3	1300-2	0939	赤生土器	付付壺		12.4	調整不明	赤ノナデ・灰・褐色 胎土	白	1000℃焼成	口縁部 5	摩滅(16.4) 10 摩滅	
47	F-3	1300-2	0939	赤生土器	付付壺		13.0	調整不明	赤ノナデ・ハナ 底 3mm以下・灰・ 褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 20	摩滅(16.2) 10 摩滅	
48	F-3	1290-10	0939 CF10139	赤生土器	付付壺		12.70	調整不明	赤褐色・灰・褐色胎 土 3mm以下・灰・ 褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 10	摩滅(16.4) 10 摩滅	
49	F-3	1300-2	0939	赤生土器	広口壺	13.3	13.3	13.3	調整不明	赤褐色・灰・褐色胎 土	白	1000℃焼成	口縁部 10	摩滅
50	F-3	1290-10	0939 CF10140	赤生土器	広口壺			調整不明	灰・白・灰・褐色胎 土・褐色胎土・褐色 胎土・褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 25	摩滅(17.10) 10 摩滅・摩滅著しい	
51	F-2	0928	0928	赤生土器	壺	13.2	14.8	14.8	調整不明	灰・白・灰・褐色胎 土 3mm以下・灰・ 褐色胎土・灰・褐色 胎土	白	1000℃焼成	口縁部 5	摩滅・摩滅著しい
52	F-3	1290-10	0939 CF10141	赤生土器	壺	18.1	13.2	13.2	赤ノナデ	白	1000℃焼成	口縁部 45	摩滅(18.2) 10 摩滅	
53	F-3	1290-10	0939 CF10142	赤生土器	壺	11.10	12.90	12.90	赤ノナデ・調整不明・ 調整不明	灰・白・灰・褐色胎 土・褐色胎土・褐色 胎土・褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 5	摩滅(13.0) 10 摩滅
54	F-3	1290-10	0939 CF10143	赤生土器	広口壺	14.2	13.90	13.90	赤ノナデ・調整不明・ 調整不明	灰・白・灰・褐色胎 土・褐色胎土・褐色 胎土・褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 10	摩滅
55	F-3	1290-10	0939 CF10144	赤生土器	壺	18.53	12.23	12.23	調整不明	灰・白・灰・褐色胎 土・褐色胎土・褐色 胎土・褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 20	摩滅著しい
56	A-1	0934	0934	赤生土器	壺				赤ノナデ 底 3mm以下・灰・ 褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 10	摩滅(16.0) 10 摩滅	
57・ 57A	56	F-2	1001-9	300400	赤生土器	広口壺	13.40	16.2	赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明 赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明	灰・赤褐色・灰・ 褐色胎土 2mm 調整不明	白	1000℃焼成	口縁部 10	灰・調整(12.2) 10 10
58・ 58A	F-1	1001-8	300400	赤生土器	広口壺	12.1	16.9	16.9	赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明 赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明	灰・褐色・灰・褐色胎 土 3mm 調整不明	白	1000℃焼成	口縁部 10	摩滅
59	F-2	1001-9	300400	赤生土器	広口壺	13.40	13.7	13.7	赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明 赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明	灰・赤褐色・灰・ 褐色胎土 3mm 調整不明	白	1000℃焼成	口縁部 10	摩滅
60	F-3	09590 CF10040	09590	赤生土器	広口壺	13.7	17.2	17.2	調整不明 赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明	灰・赤褐色胎 土 1000℃焼成	白	1000℃焼成	口縁部 25	摩滅
61	56・ 70	F-2	1001-8	300400	赤生土器	広口壺	15.9	17.0	赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明 赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明	灰・白・赤褐色 胎土・褐色胎土 調整不明	白	1000℃焼成	口縁部 30	摩滅(16.3) 10 摩滅
62	F-3	09590 CF10040	09590	赤生土器	広口壺	13.1	13.1	13.1	赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明 赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明	灰・褐色胎 土 3mm以下・灰・ 褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 15	摩滅
63・ 63A	56	F-2	1001-8	300400	赤生土器	広口壺	12.1	15.2	赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明 赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明	灰・褐色胎 土 3mm以下・灰・ 褐色胎土 調整 不明・調整不明	白	1000℃焼成	口縁部 40	摩滅
64	F-3	09590 CF10040	09590	赤生土器	広口壺	12.9	13.4	13.4	赤ノナデ 底 3mm以下・灰・ 褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 10	摩滅	
65・ 65A	F-2	1001-8	300400	赤生土器	広口壺	13.43	13.9	13.9	赤ノナデ 底 3mm以下・灰・ 褐色胎土	灰・褐色胎 土 3mm以下・灰・ 褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 10	摩滅
66・ 66A	F-2	1001-8	300400	赤生土器	広口壺	13.2	11.80	11.80	赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明 赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明	灰・褐色胎 土 3mm以下・灰・ 褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 25	摩滅(13.0) 10 摩滅
67・ 67A	56	F-2	1001-8	300400	赤生土器	広口壺	12.10	16.2	赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明 赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明	灰・赤褐色・灰・ 褐色胎土 2～3mm 調整不明	白	1000℃焼成	口縁部 40	摩滅
68・ 68A	56	F-2	1001-8	300400	赤生土器	広口壺	13.43	13.9	赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明 赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明	灰・赤褐色・灰・ 褐色胎土 調整 不明	白	1000℃焼成	口縁部 40	摩滅
69	69	F-2	1001-8	300400	赤生土器	広口壺	13.43	14.8	赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明 赤ノナデ・褐色胎 土・調整不明	灰・褐色胎 土 3mm以下・赤 褐色胎土	白	1000℃焼成	口縁部 10	摩滅



第4表 出土土器観察表

種別	図号	区	グリッド	遺構 層位	植物	器種名	口径	底径	器高	図説・注法の特徴	胎土	構成	色調	検出層	備考
98・ 309	55	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	広口壺	13.6	7.8	23.55	外：白・赤・黄緑文・ 内：ナメシヤ	中・軽 3mm粒、白 胎粒多量	白	白緑/白黄緑	30	陶器層 10, 25 cm 検出層 20, 35 cm
99・ 400	70	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	広口壺	9.4	6.8	20.71	外：白・赤・ナメシヤ 内：ナメシヤ	外 白・灰・黄緑胎 粒	白	白緑/白黄緑	30	陶器層 1, 15 cm 検出層 13, 19 cm 赤土層
99・ 398	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	広口壺	(16, 40)			13.0	外：ナメシヤ・黄緑文・ 胎粒・ナメシヤ	胎 灰・白・黄緑胎多 量	白	外：1, 1007/2に白・黄 内：1007/2に白・黄胎	1	
99・ 402	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	広口壺	8.3	5.9	23.45	外：ナメシヤ・赤胎・ 胎粒・ナメシヤ	胎 赤・灰・黄緑胎 粒	白	白緑/白に黄	30	陶器層 1, 4 cm 検出層 14, 16 cm 黄緑 赤土層	
99	55	F-2	1001-7	100-600	赤生土層	広口壺	10.5	7.4	21.4	外：ナメシヤ・赤胎・ 胎粒・ナメシヤ	胎 灰・黄緑胎多 量	白	2, 1000/4黄緑	10	陶器層 1, 4 cm 検出層 14, 16 cm 黄緑 赤土層
99・ 403	55	F-2	1201-8	100-1000	赤生土層	小壺	16.0	6.2	33.60	外：ナメシヤ・赤胎・ 胎粒・ナメシヤ	胎 赤・灰・黄緑胎 粒	白	外：1000/4黄緑 内：1000/4黄胎	30	陶器層 10, 20 cm 赤土層
99	55	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	広口壺	10.1	18.2	18.2	外：ナメシヤ・赤胎・ 胎粒・ナメシヤ	胎 灰・赤・赤胎・ 胎粒多量	白	外：1, 1007/4黄 内：1, 1007/2黄胎	70	陶器層 13, 31 cm 検出層 13, 41 cm 赤土層
99・ 402	F-2	1200-10	100-600	赤生土層	広口壺	(12, 4)	(7, 9)	26.4	外：白・黄緑胎・ 胎粒・ナメシヤ	胎 白・灰・黄緑胎・ 胎粒	白	外：1, 1006/4に白・黄 内：1, 1007/4白胎	60	陶器層 1, 10 cm 検出層 13, 41 cm 赤土層	
99・ 399	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	広口壺	11.5	7.6	24.1	外：ナメシヤ・胎粒・ 胎粒・ナメシヤ	胎 灰・黄緑胎, 6 mm以下赤・白・黄 文・赤胎胎粒多 量	白	外：1, 1007/4に白・黄 内：1, 1007/2に白・黄	70	陶器層 6, 3 cm 検出層 11, 19 cm	
99・ 401	55・ 70	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	広口壺	6.9	5.35	19.6	外：白・黄緑胎・ 胎粒・ナメシヤ	胎 灰・白・黄緑胎・ 胎粒, 3mm以下赤・ 胎粒多量	白	外：1000/2黄胎 内：1, 1007/2黄胎	10	陶器層 4, 7 cm 赤土層 100
99	F-2	1002-9	100-600	赤生土層	広口壺	10.3	(7, 4)		胎 灰・赤・黄緑胎・ 胎粒	胎 灰・赤・黄緑胎・ 胎粒	白	外：1, 1006/2黄胎 内：1, 1007/2に白・黄	10	陶器層 15, 31 cm 赤土層	
99	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	壺	(8, 4)	(7, 6)		胎 赤・黄緑胎・胎 粒・ナメシヤ	胎 赤・黄緑胎・胎 粒・ナメシヤ	白	外：1, 1000/4黄緑 内：赤	10	陶器層 1, 7 cm	
100・ 397	56	F-2	1002-9	100-600	赤生土層	広口壺	11.4	11.4	11.4	外：ナメシヤ・赤胎・ 胎粒・ナメシヤ	胎 白胎粒 9 mm 胎粒, 3mm以下赤・ 胎粒・ナメシヤ	白	外：1, 1007/4に白・黄 内：1, 1007/2黄胎	10	陶器層 1, 9 cm
101	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	広口壺	11.4	16.4		胎 白・灰・赤胎胎 粒, 3mm以下白・灰・ 赤胎胎粒	胎 白・灰・赤胎胎 粒, 3mm以下白・灰・ 赤胎胎粒	白	外：1007/4に白・黄 内：1000/4黄胎	10	陶器層 17, 31 cm	
102	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	広口壺	(7, 6)	(5, 4)		外：ナメシヤ・赤胎 胎粒・ナメシヤ	胎 灰・赤胎胎粒, 3 mm以下赤・赤胎胎 粒	白	外：107/4白胎 内：1005/4に白・黄胎	10	陶器層 13, 21 cm	
103	F-2	1002-9	100-600	赤生土層	広口壺	(15, 6)	(14, 0)		外：ナメシヤ・赤胎 胎粒・ナメシヤ	胎 灰・赤胎胎粒, 3 mm以下赤・赤胎胎 粒	白	外：1000/2黄胎 内：1000/4黄胎	10	陶器層 13, 21 cm	
104・ 422	59	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	壺	8.3	(22, 8)		外：白胎胎文・胎 粒・ナメシヤ	胎 赤胎胎・胎粒胎 粒	白	外：1000/4黄胎 内：1007/4黄胎	10	陶器層 12, 31 cm 黄緑胎 40
105・ 425	59	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	壺	8.43	(17, 24)		外：紅胎胎文・胎 粒・ナメシヤ・白 胎胎文・ナメシヤ	胎 赤胎胎・胎粒胎 粒	白	外：1007/4黄胎 内：1000/4黄胎	10	陶器層 15, 21 cm 赤土 30
106	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	壺					外：紅胎胎文・胎 粒・ナメシヤ	胎 灰・黄緑胎多 白胎胎粒	白	外：1007/2に白・黄 内：1000/2に白胎	20	
107	59	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	壺	6.9	(12, 11)		外：胎胎文・胎粒・ 胎粒・ナメシヤ	胎 3mm以下赤・胎 粒・赤胎胎・胎粒 胎粒・赤胎胎・胎粒 胎粒	白	2, 1000/4黄緑 内：1007/2に白・黄胎	10	陶器層 17, 4 cm 赤土 100
108	59	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	壺	6.55	(17, 23)		外：ナメシヤ・赤胎・ 胎粒・ナメシヤ	胎 灰胎胎 3mm以 下白胎胎多量	白	外：1, 1006/2に白胎 内：1007/2に白・黄胎	10	陶器層 19, 2 cm
109	F-2	1001-8	100-600	赤生土層	壺					外：胎胎文・胎粒・ 胎粒・ナメシヤ	胎 3mm胎・胎・胎 胎胎	白	外：1, 1000/4黄緑 内：1, 1000/4黄胎	10	陶器層 15, 21 cm 赤土 30
110	F-2	1002-9	100-600	赤生土層	壺					外：胎胎文・胎粒・ 胎粒・ナメシヤ	胎 赤胎・胎胎胎 胎胎胎	白	外：1007/4に白・黄 内：1007/4黄胎	10	陶器層 12, 31 cm
111	F-2	1002-9	100-600	赤生土層	壺					外：胎胎文・胎粒・ 胎粒・ナメシヤ	胎 灰・白・赤胎胎 胎胎胎, 3mm以下赤 胎胎胎	白	外：1, 1007/4に白・黄 内：1, 100/4黄胎	10	陶器層 12, 41 cm
112	F-2	1200-10	100-600	赤生土層	壺					外：ナメシヤ・胎粒・ 胎粒・ナメシヤ	胎 灰・白・灰・黄緑 胎胎胎, 4mm以下白 胎胎胎	白	外：1007/4黄 内：1, 100/4黄胎	10	

第4表 出土土器観察表

種別 No.	図面 No.	区	グリッド	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	器高	調査・注目の特徴	胎土	焼成	色調	検出層 (No.)	備考
111	F-2		300-600	養生土留	壺					外・底筋文・底周文・口縁文 内・ナツメナツメ	灰・灰白・灰・褐色胎土 3mm以下灰白・褐色胎土	青 17, 1007/3 12.5cm+横 内 12.30cm 縦灰白	縦筋20		
114	F-2	1200-30	300-600	養生土留	壺					外・ナツメ・底筋文・底周筋紋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 白・灰褐色胎土	青 17, 1007/3 12.5cm+横 内 12.30cm 縦灰白	20	縦筋16 (6.4) cm 横筋・横周筋なし	
115	F-2	1001-6	300-600	養生土留	壺		6.8	(8.9)		外・底筋文・ナツメ・口縁文・底周筋紋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 灰・赤褐色・白色胎土 2mm以下灰・白・褐色胎土	青 12, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 1 横灰	縦筋20	縦筋11.9 cm 底筋 外底筋	
116	F-2	1001-6	300-600	養生土留	壺					外・底筋筋文・ナツメ内・ナツメ	灰 灰白・灰・褐色胎土 2mm以下灰・褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 12.5cm+横 底			
117	F-2	1002-9	300-600	養生土留	壺					外・底筋筋文 内・ナツメ	灰 灰白・灰・褐色胎土 2mm以下灰白・灰・褐色胎土	青 17, 1007/3 12.5cm+横 内 12.30cm 縦灰			
118	F-2	1002-9	300-600	養生土留	壺					外・ナツメ・底筋筋文・底周筋文・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 灰白・灰・褐色胎土 2mm以下灰・灰白・灰・褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 1 横灰		赤筋12.00cm 12.5cm+横 底筋	
119	F-2	1002-9	300-600	養生土留	壺					外・底筋筋文・口縁筋文・ナツメ内・ナツメ	灰 灰・褐色胎土 2mm以下灰・褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 12.30cm 12.5cm+横			
120	F-2	1001-6	300-600	養生土留	壺					外・ナツメ・ナツメ・底筋文・口縁筋文・ナツメ内・ナツメ	灰 灰・褐色胎土 2mm以下灰・褐色胎土 灰褐色胎土 灰の赤褐色 横	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 12.30cm 縦灰			
121・126・129	F-2	1001-6	300-600	養生土留	壺		12.6	(6.4)	(10.6)	外・ナツメ・底筋文・底周筋文・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 赤褐色・灰白・褐色胎土 2mm以下灰・褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 横	10	縦筋16 (6.4) cm 底筋 外底筋 (13.1) cm	
122	F-2	1002-9	300-600	養生土留	壺					外・ナツメ・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 灰白色胎土 2mm以下胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 横	縦筋20	縦筋16 (6.4) cm 底筋	
123	F-2	1002-9	300-600	養生土留	壺					外・口縁筋文・ナツメ内・ナツメ	灰 灰・褐色胎土 2mm以下灰・褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 横	縦筋10		
124	F-2	1001-7	300-600	養生土留	壺					外・ナツメ・底筋筋文・底周筋文・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 白・灰・赤褐色胎土 2mm以下灰・灰褐色胎土	青 17, 1007/3 12.5cm+横 内 12.30cm 縦灰	縦筋10		
125	F-2	1001-6	300-600	養生土留	壺		(10.4)	(12.1)		外・ナツメ・底筋筋文・底周筋文・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 赤褐色・灰・赤褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 1 横灰	縦筋15	縦筋12.00 cm 底筋 外底筋	
126	F-2	1001-6	300-600	養生土留	壺		6.8	(13.5)		外・ナツメ・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 黒付・赤褐色・褐色胎土 2mm以下灰・赤褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 1 横灰	縦筋10	縦筋16 (6.4) cm 底筋	
127 20	F-2	1002-9	300-600	養生土留	壺		8.6	(11.1)		外・ナツメ・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 灰白・灰・褐色胎土 2mm以下灰・褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 1 横灰	縦筋10	縦筋16 (6.4) cm 底筋 外底筋	
128	F-2	1001-7	300-600	養生土留	壺		6.78	(6.4)		外・底筋筋文・口縁筋文・底周筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 白・赤褐色・褐色胎土 2mm以下灰・赤褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 12.5cm+横 底	縦筋20	縦筋16 (6.4) cm 底筋 外底筋	
129	F-2	1001-6	300-600	養生土留	壺		10.4	(10.6)		外・ナツメ・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 灰・赤褐色胎土 2mm以下赤褐色・褐色胎土	青 12, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 横	縦筋15	縦筋14.9 cm 底筋 外底筋	
130	F-2	1002-7	300-600	養生土留	小壺		6.4	(5.7)		外・底筋筋文・ナツメ内・ナツメ	灰 灰・赤褐色胎土 2mm以下赤褐色・褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 12.30cm 縦灰	縦筋10	縦筋14.1 cm 底筋	
131 20	F-2	1200-10	300-600	養生土留	小壺		7.4	(12.1)		外・底筋筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 白・灰・褐色胎土	青 12, 1006/2 12.5cm+横 内 12.30cm 縦灰	縦筋10	縦筋14.1 cm 底筋 外底筋	
132	F-2	1001-6	300-600	養生土留	壺		12.4	(7.9)		底筋筋文 内・ナツメ	灰 灰・赤褐色胎土	青 12, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 1 横灰	底筋90		
133 70	F-2		300-600	養生土留	壺		8.8	(2.8)		外・ナツメ・底筋筋文・底周筋文・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 赤褐色胎土 2mm以下灰・白・褐色胎土 褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 1 横灰	底筋100		
134	F-2		300-600	養生土留	壺		5.8	(2.8)		外・ナツメ・ナツメ内・ナツメ	灰 赤褐色胎土 2mm以下灰・褐色胎土 褐色胎土	青 12, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 1 横灰	底筋100		
135	F-2	1001-6	300-600	養生土留	壺		(6.0)	(6.0)		外・ナツメ・ナツメ・底筋筋文・底周筋文・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 灰・褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 1 横灰	20	縦筋12 (6.4) cm 外底筋	
136 70	F-2	1200-10	300-600	養生土留	壺		7.2	(5.5)		外・ナツメ・底筋筋文・底周筋文・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 赤褐色・灰褐色胎土 2mm以下灰・白・褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 1 横灰	縦筋10	縦筋16 (6.4) cm 底筋 外底筋	
137	F-2	1002-9	300-600	養生土留	壺		13.4	(7.9)		外・底筋筋文・口縁筋文・底周筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 白・赤褐色胎土 2mm以下灰・褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 12.5cm+横 底	縦筋90	縦筋16 (6.4) cm 底筋	
138	F-2	1001-6	300-600	養生土留	壺		7.8	(5.7)		外・ナツメ・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 赤褐色胎土 2mm以下灰・赤褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 1 横灰	縦筋10	縦筋16 (6.4) cm 底筋 外底筋	
139	F-2	1001-6	300-600	養生土留	壺		7.8	(6.2)		外・ナツメ・ナツメ内・ナツメ	灰 灰・赤褐色胎土 2mm以下灰・赤褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 1 横灰	縦筋10	縦筋16 (6.4) cm 底筋 外底筋	
140	F-2	1002-9	300-600	養生土留	壺	(14.4)	(13.1)			外・ナツメ・口縁筋文・ナツメ内・ナツメナツメ	灰 灰・赤褐色胎土 2mm以下灰・赤褐色胎土	青 10, 1006/2 12.5cm+横 内 10.00cm 1 横灰	15	縦筋16 (6.4) cm 底筋 (22.1) cm 外底筋	



第4表 出土土器観察表

標記 No.	区画 No.	グリッド	遺構 番号	種類	器種名	口径	底径	高さ	図説・注法の特徴	胎土	焼成	色調	焼付率 (%)	備考	
171	F-2	1001-N	3001000	弥生土器	甕	115.0	17.0	14.0	外ノコテ+ナデ 内ノナデ、物ナデ	胎 3mm以下 赤褐色、灰白色	良	1000℃/1夜焼成	11~ 胎土 10	胎土質 (14.0) 赤 胎土質 (20.0) 赤 胎土質 焼付率	
172	F-2	1001-N	3001000	弥生土器	甕	111.0		13.0	胎 3mm以下赤褐色・ 灰・黒色胎土 内ノコテ+ナデ	胎 3mm以下赤褐色・ 灰・黒色胎土	良	7,000℃/3夜焼成	11胎土 15	胎土質 (11.0) 赤 胎土質 (13.0) 赤 胎土質 焼付率	
173	60	F-2	1001-N	3001000	弥生土器	付付甕	116.0	13.0	外ノコテ+ナデ 内ノコテ+ナデ	胎 4mm以下 下灰・褐色胎土	良	1000℃/2夜焼成 内ノコテに2.5~4焼成	11~ 胎土 10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 (12.0) 赤 胎土質 焼付率	
174	60	F-2	1001-N	3001000	弥生土器	付付甕	17.4	10.0	外ノコテ+ナデ 内ノコテ+ナデ	胎 灰・褐色胎土	良	7,000℃/2.5夜焼成	11~ 胎土 10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 (20.0) 赤 胎土質 焼付率	
175	F-2	1002-N	3001000	弥生土器	付付甕	119.0	18.0	18.0	外ノコテ+ナデ 内ノコテ+ナデ	胎 4~7mm焼成 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	外ノコテに2夜焼成 内ノコテに1夜焼成	11~ 胎土 10	胎土質 (18.0) 赤 胎土質 (17.0) 赤 胎土質 焼付率	
176	F-2	1001-N	3001000	弥生土器	甕	116.0	18.0	18.0	外ノコテ+ナデ 内ノコテ+ナデ	胎 白・灰褐色 1 mm焼成胎土	良	外ノコテに1夜焼成 内ノコテに1夜焼成	10	胎土質 (17.0) 赤 胎土質 (18.0) 赤 胎土質 焼付率	
177	F-2	1001-N	3001000	弥生土器	付付甕	116.0	17.0	17.0	ナデ+コテ	胎 4mm以下 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	1000℃/2夜焼成	11~ 胎土 10	胎土質 (18.0) 赤 胎土質 (17.0) 赤 胎土質 焼付率	
178	F-2	1001-N	3001000	弥生土器	付付甕	116.0	19.0	19.0	コテ+ナデ	胎 4mm以下胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	外ノコテに2夜焼成 内ノコテに2夜焼成	11~ 胎土 10	胎土質 (13.0) 赤 胎土質 (17.0) 赤 胎土質 焼付率	
179	F-2	1001-N	3001000	弥生土器	甕	117.0	15.0	15.0	コテ+ナデ	胎 4mm以下赤褐色・ 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	外ノコテに1夜焼成 内ノコテに2夜焼成	10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
180	F-2	1002-N	3001000	弥生土器	甕	115.0	14.0	14.0	コテ+ナデ	胎 2mm以下赤褐色・ 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	外ノコテに1夜焼成 内ノコテに2夜焼成	11 胎土 5	胎土質 (15.0) 赤 胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
181	F-2	1003-10	3001000	弥生土器	付付甕				胎土質 (14.0) 赤 (13.0)	胎 2mm以下白・灰・ 褐色胎土	良	外ノコテに2.5夜焼成 内ノコテに1夜焼成	10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
182	F-2	1003-N	3001000	弥生土器	付付甕	112.0	11.0	11.0	外ノコテ+ナデ 内ノコテ+ナデ	胎 3mm以下白・灰・ 赤褐色胎土	良	1000℃/2.5夜焼成	10胎土 10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
183	F-2	1001-N	3001000	弥生土器	付付甕	113.0	19.0	19.0	外ノコテ+コテ 内ノコテ+コテ 物ナデ	胎 3mm以下赤褐色・ 灰・白色胎土 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	外ノコテに2.5夜焼成 内ノコテに2夜焼成	10胎土 10	胎土質 (7.0) 赤 胎土質 焼付率	
184	F-2	1003-N	3001000	弥生土器	付付甕	8.0	15.0	15.0	外ノコテ+ナデ 内ノコテ+ナデ	胎 外ノコテに2.5夜焼成 内ノコテに2.5夜焼成 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	外ノコテに2夜焼成 内ノコテに2.5夜焼成	10胎土 100	胎土質 (10.0) 赤 胎土質 焼付率	
185	F-2	1003-N	3001000	弥生土器	鉢	125.0	16.0	16.0	外ノコテ+コテ 内ノコテ+コテ	胎 2mm以下赤褐色・ 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	7,000℃/4夜焼成	11~ 胎土 10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
186	F-2	1001-N	3001000	弥生土器	鉢	112.0	14.0	14.0	外ノコテ+コテ 内ノコテ+コテ	胎 胎土質胎土質 胎土質胎土質胎土質 胎土質胎土質胎土質	良	1000℃/2夜焼成	11~ 胎土 10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
187	F-2	1003-N	3001000	弥生土器	鉢	125.0	13.0	13.0	ナデ	胎 2mm以下赤褐色・ 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	外ノコテに1夜焼成 内ノコテに2夜焼成	11胎土 10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
188	F-2	1001-N	3001000	弥生土器	鉢	111.0	13.0	13.0	外ノコテ+コテ 内ノコテ+コテ	胎 灰・褐色胎土	良	1000℃/2.5夜焼成	11胎土 10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
189	F-2	1204-N	3001000	弥生土器	甕3-N	132.0	15.0	15.0	外ノコテ+胎土質 内ノコテ+胎土質	胎 3mm以下赤褐色・ 2mm以下灰・褐色胎土 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	外ノコテに2夜焼成 内ノコテに2.5夜焼成	5	胎土質 (12.0) 赤 胎土質 (13.0) 赤 胎土質 焼付率	
190- 191	60	F-2	1204-10	3001000	弥生土器	小型甕	18.0	5.2	5.2	外ノコテ+ナデ 内ノコテ+ナデ	胎 灰・褐色胎土 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	外ノコテに2夜焼成 内ノコテに2.5夜焼成	30	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 (18.0) 赤 胎土質 焼付率
192	F-2	1001-N	3001000	弥生土器	鉢	121.0	15.0	15.0	外ノコテ+ナデ 内ノコテ+ナデ	胎 2mm以下赤褐色・ 灰・白・褐色胎土 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	1000℃/2夜焼成	11胎土 10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
193	F-2	1001-N	3001000	弥生土器	高杯				コテ+ナデ	胎 3mm以下赤褐色少 2mm以下白・白・ 褐色胎土	良	外ノコテに2夜焼成 内ノコテに2夜焼成	10胎土 10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
194	F-2	1003-N	3001000	弥生土器	コ	120.0	12.0	12.0	コテ+ナデ	胎 3mm以下胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	外ノコテに2夜焼成 内ノコテに2夜焼成	11胎土 10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
195	F-2	1001-N	3001000	土師器	高杯		18.0	18.0	外ノコテ+コテ 内ノコテ+コテ	胎 胎土質胎土質 胎土質胎土質胎土質 胎土質胎土質胎土質	良	1000℃/2夜焼成	胎土質 10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
195	F-3	1300-1	3010010	弥生土器	甕	113.0	18.0	18.0	外ノコテ+ナデ 内ノコテ+ナデ	胎 胎土質胎土質 胎土質胎土質胎土質 胎土質胎土質胎土質	良	外ノコテに2夜焼成 内ノコテに2夜焼成	11胎土 100	胎土質 (5.0) 赤 胎土質 (5.0) 赤 胎土質 焼付率	
196	F-3	1300-1	3010010	弥生土器	甕	116.0	15.0	15.0	外ノコテ+胎土質 内ノコテ+胎土質	胎 胎土質胎土質 胎土質胎土質胎土質 胎土質胎土質胎土質	良	外ノコテに2.5夜焼成 内ノコテに2.5夜焼成	10	胎土質 (5.0) 赤 胎土質 (5.0) 赤 胎土質 焼付率	
197	F-3	1300-1	3010010	弥生土器	甕	119.0	13.0	13.0	外ノコテ+胎土質 内ノコテ+胎土質	胎 胎土質胎土質 胎土質胎土質胎土質 胎土質胎土質胎土質	良	外ノコテに2夜焼成 内ノコテに2.5夜焼成	11 胎土 10	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
198	F-3	1300-1	3010010	弥生土器	甕	111.0	14.0	14.0	胎土質不明	胎 灰・褐色胎土 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	1000℃/2.5夜焼成	25	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	
199	F-3	1300-1	3010010	弥生土器	高杯				外ノコテ+コテ 内ノコテ+コテ	胎 3mm以下赤褐色 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質 胎土質	良	外ノコテに1夜焼成 内ノコテに2夜焼成	25	胎土質 (16.0) 赤 胎土質 (16.0) 赤 胎土質 焼付率	

第4表 出土土器観察表

種別 No.	図号	区	グリッド	遺構 No.	種類	器種名	口径	底径	器高	調査・注法の特徴	胎土	構成	色調	焼成 No.	備考
200-493	E-3	129C-10	3010010-2	赤生土器	甕	10.0	13.9	19.7	外:白+灰赤色胎土・ 底黒色不明	胎 白+灰赤色胎土 3mm胎土	貝	1307/4に2.5+焼 内:1307/4に2.5+焼	85	胎直径:7.0cm 体高径:16.0cm 器高径:1.1	
201	E-3	129B-10	3010010	赤生土器	小壺	13.0	16.50	19.50	外:黒褐色・胎赤文・ 内:白+灰赤色胎土	胎 白+灰+褐色胎土	貝	5.300/4西黄焼 内:10100/3西黄焼	11- 1010/10	胎直径:13.0cm	
202	E-3	1300-2	3010015-4	赤生土器	甕	14.0	17.30			胎 灰白+灰+褐色胎土 3mm37%胎土・ 3mm37%胎土・灰赤胎土	貝	外:10100/4西黄焼 内:10100/3西黄焼	11録表 25	胎直径:17.0cm 器高径:1.1	
203	E-3	1300-1	3010015	赤生土器	甕	14.0	18.2			外:白+灰赤色胎土 胎直径不明	貝	外:10100/4西黄焼 内:13.300/4に2.5+焼	20	胎直径:17.0cm 外底径不明	
204	E-2	1093-8	30110	赤生土器	高杯	13.0	16.75	13.0	外:白+灰赤色胎土 胎直径不明	胎 白+灰赤色胎土 胎直径不明	貝	外:13.300/4に2.5+焼 内:10100/4に2.5+黄焼	20		
205	E-2	1093-8	30110	赤生土器	甕	10.0	13.2			胎 灰白+灰赤色胎土 胎直径不明	貝	外:10100/3西黄焼 内:10100/3に2.5+焼	15	胎直径:10.0cm 外底径不明	
206-498	E-2	1093-8	30110	赤生土器	甕	12.0	14.0			外:白+灰赤色胎土 胎直径不明	貝	外:10100/4に2.5+黄焼 内:10.100/3に2.5+黄焼 (507)ノ	3	胎直径:12.0cm 器高径:1.1	
207	E-2	1093-10	30120	赤生土器	甕	10.0	16.11			胎 灰白+灰赤色胎土 胎直径不明	貝	外:10100/3に2.5+黄焼 内:10100/3に2.5+黄焼	20	胎直径:13.0cm 外底径不明	
208	E-2	1093-9	30120	赤生土器	甕	11.0	18.02			外:白+灰赤色胎土 胎直径不明	貝	5.300/4に2.5+焼	11録表 10	胎直径:10.0cm	
209	E-2	1093-9	30120	赤生土器	鉢	14.0	17.75			外:白+灰赤色胎土 胎直径不明	貝	外:12.300/4に2.5+ 焼 胎直径不明 内:13.300/4に2.5+焼	3	器高径:1.1	
210	E-2	130-1	30130	赤生土器	甕	—	—	—	胎直径 (6.0)	胎 灰赤色胎土 胎直径不明	貝	10100/3に灰白 胎直径不明	胎直径 25		
211	E-2	130A-1	30140	赤生土器	式口壺	13.75	17.3			外:黒褐色不明+白+ 赤胎土	貝	外:10100/3西黄焼 内:10100/3に灰赤胎土	15	胎直径:15.0cm	
212	E-3	130A-1	30140	赤生土器	甕	14.0	15.11			胎 灰白+灰+褐色胎土 胎直径不明	貝	外:10100/3に2.5+ 黄焼 胎直径不明 内:17.300/4に2.5+焼	11 10 器高 20	胎直径:10.0cm 器高径:1.1	
213	E-3	130A-2	30150	赤生土器	甕	12.1	16.3			胎 灰白+灰+褐色胎土 胎直径不明	貝	外:12.300/4西黄焼 内:17.300/4に2.5+焼	15	胎直径:11.0cm 胎直径:1.1	
214-539	E-2	130A-1	30160	赤生土器	高杯					胎 灰白+灰+褐色胎土 胎直径不明	貝	外:12.300/4西黄焼 内:15.0/胎直径	60	胎直径	
215-540	E-2	130A-2	30160	赤生土器	高杯					胎 灰赤色胎土 胎直径不明	貝	外:12.300/4西黄焼 内:10100/2灰白	胎直径 60	胎直径	
216	E-3	129C-9	3010050	赤生土器	甕	14.0	17.2			外:白+灰赤色胎土 胎直径不明	貝	外:1307/4に2.5+焼 内:10100/3西黄焼	11-1010 器高 20	胎直径:16.0cm	
217	E-3	129C-9	3010050	赤生土器	甕	14.0	18.6			外:白+灰+褐色胎土 胎直径不明	貝	外:12.300/4に2.5+焼 内:12.300/3西黄焼	20	胎直径:16.0cm 器高径:1.1	
218	E-3	129C-9	3010050	赤生土器	小壺	13.30	16.4			胎 灰赤色胎土 胎直径不明	貝	5.300/4西黄焼 5.300/4に2.5+焼	20	胎直径:13.0cm 器高径:1.1	
219	E-3	129B-10	3010050	赤生土器	甕	11.0	13.9			胎 6mm赤褐色胎土 胎直径不明	貝	5.300/4西黄焼	11 25 -胎直径 5	胎直径:10.0cm	
220	E-3	129B-10	3010050	赤生土器	甕	12.0	16.4			胎 6mm赤褐色胎土 胎直径不明	貝	5.300/4西黄焼	11 25 -胎直径 5	胎直径:10.0cm	
221	E-3	129C-10	3010051	赤生土器	甕	9.45	12.0			外:白+灰赤色胎土 胎直径不明	貝	外:12.300/4胎直径 胎直径不明 内:13.300/4西黄焼	胎直径 20	胎直径:10.0cm 器高径:1.1	
222-570	E-3	129C-8	3010063	赤生土器	甕	13.0	—			外:白+灰赤色胎土 胎直径不明	貝	外:12.300/4に2.5+焼 内:10100/3に2.5+黄焼	11 10 -胎直径 20	胎直径:13.0cm	
223-560	E-3	129A-9	3010063	赤生土器	甕	14.0	17.75			外:白+灰赤色胎土 胎直径不明	貝	外:10100/4西黄焼 内:10100/3西黄焼	11録表 25	胎直径	
224	E-3	129A-9	3010063	赤生土器	甕					胎 灰白+灰+褐色胎土 胎直径不明	貝	5.300/4灰白	20	胎直径:13.0cm	
225	E-3	129A-9	3010063	赤生土器	甕	12.0	15.43			外:白+灰赤色胎土 胎直径不明	貝	外:1010/4西黄焼 内:10100/3に2.5+黄焼	11録表 20	胎直径:10.0cm 器高径:1.1	



第4表 出土土器観察表

種別	図号	No.	グリップ	遺種	産地	器種名	口径	底径	器高	図説・図法の特徴	胎土	焼成	色調	保存号	備考
352	F-1	110F-7	3K12 9層	弥生上層	広口壺	19.4(3)	11.7			赤いナズ・ハナ ナズ・コソナ	黒 3mm以下灰、焼 色胎土	中	107F/2に灰・黄 色胎土	1	破片
353	F-1	110F-7	3K12	弥生上層	壺	12.4(3)	12.4(3)			赤いナズ・コソナ ナズ	黒 3mm以下灰、焼 色胎土	中	赤 107F/2に灰黄 色胎土	10	頸部・底面(4.25cm 約部・頸部)
354・ 355	F-1	110F-7	3K12	弥生上層	壺	8.7	10.1(3)			赤いナズ	中・中細 3mm以下、灰 色胎土	中	赤 107F/2に灰黄 色胎土	10	頸部(4.5cm 約部・底面 径5.6cm)
356	F-1	110F-8	3K12直上 10層	上層部	小型高脚	8.3(3)	14.4(3)			赤いナズ・穿孔 内いナズ	赤 白・灰・褐色胎 土、3mm以下、褐色 胎土	中	赤 107F/2に灰 107F/2に灰・黄 色胎土	15	約部・底面(着し) なしあり
358	F-2	110F-8	北東部 8-9層	弥生上層	広口壺	18.2(3)	12.3			赤い藤原文・ナ ズ・コソナ 内いナズ・調整不 明	黒 灰白・灰・褐色 胎土、3mm以下白 ・白・褐色胎土	中	赤 107F/2に灰 内 107F/2に灰胎 土、7.07F/2に灰胎 土	10 35	破片(底面 径30)
357	F-1	130F-1	3598	弥生上層	広口壺	11.4(3)	16.4(3)			赤いナズ・調整不 明 赤いナズ・調整不 明	赤 2〜3mm以下、焼 色胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片(底面 径30)
358	F-2	130F-1	3598	弥生上層	広口壺	12.3(3)	16.9			赤いナズ・調整不 明 赤いナズ・調整不 明	赤 2〜3mm以下、焼 色胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片(底面 径30)
359	F-2	130F-1	3598	弥生上層	広口壺	12.3(3)	16.9			赤いナズ・調整不 明 赤いナズ・調整不 明	赤 2〜3mm以下、焼 色胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片(底面 径30)
360・ 361	F-2	130F-1	3598	弥生上層	広口壺	17.2	113.4(1)			ナズ・コソナ	赤 4mm以下褐色 白・褐色胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片(底面 径30)
362・ 363	F-2	130F-1	3598	弥生上層	広口壺	11.2	5.8			赤いナズ・ハナ ナズ・コソナ	赤 4〜6mm以下 褐色少 2mm以下 黄・灰・白胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片(底面 径30)
364・ 367	F-2	131F-1	365	弥生上層	3字壺	15.7(3)	13.3(3)			赤いコソナ・ナ ズ・コソナ 内いナズ	赤 灰白・褐色胎 土、3mm以下、灰 色胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片(底面 径30)
365・ 366	F-2	131F-1	365	弥生上層	3字壺	12.3(3)	12.3(3)			赤いナズ・コソナ 内いナズ	赤 灰白色胎、量 胎土多 灰白色胎 土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片(底面 径30)
368・ 369	F-2	131F-1	365	弥生上層	壺	13.4(3)	12.7(3)			赤いナズ・コソ ナズ	赤 3mm以下灰、黒 色胎、赤褐色胎 土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片(底面 径30)
369	F-2	130F-9	3682付	弥生上層	小型高脚	16.4(3)	6.2			赤いナズ・コソ ナズ・ハナ ナズ・コソナ	赤 灰白・褐色胎 土、3mm以下、灰 色胎土	中	赤 107F/2に灰・黄 色胎土	10	破片(底面 径30)
370	F-2	130F-9	3682付	弥生上層	広口壺	12.1(3)	15.9			赤い藤原文・ハ ナズ・コソナ 内いナズ	赤 灰白・褐色胎 土、3mm以下、灰 色胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片(底面 径30)
371	F-2	130F-9	3682付	弥生上層	広口壺	12.1(3)	15.9			赤いナズ・藤原 文・コソナ 内いナズ	赤 胎土多 白色胎 土、3mm以下灰胎 土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片(底面 径30)
372	F-1	90F-7		弥生上層	広口壺	20.2(3)	14.4(3)			赤いナズ・藤 原文・コソナ 内いナズ	赤 4mm以下胎 土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片
373	F-2	110F-3	114	弥生上層	広口壺	12.6(3)	10.3(3)			赤い藤原文・ナ ズ・コソナ 内いコソナ・ナ ズ	中・中細 灰白・灰・ 褐色胎、3mm以下 胎土多	中	赤 107F/2に灰・黄 色胎土	10	破片(底面 径30)
374	F-2	130F-1		弥生上層	広口壺	21.4(3)	14.8			赤いナズ・ハナ ナズ・コソナ 内いナズ	赤 灰・白・褐色胎 土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片
375	F-2	130F-1		弥生上層	広口壺	21.4(3)	14.8			赤い藤原文・ナ ズ・コソナ 内いナズ	赤 胎土多 白色胎 土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片
376	F-1	120F-9	114	弥生上層	広口壺	18.6(3)	16.4(3)			赤い藤原文・ハ ナズ・コソナ 内いナズ	赤 灰白色胎、3mm 以下灰・褐色胎土 3mm以下灰白色胎 土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片
377	F-1	110F-7	8層	弥生上層	広口壺	13.4(3)	12.7(3)			赤い藤原文・ハ ナズ・コソナ 内いナズ	赤 胎土多 白色胎 土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片(底面 径30)
378	F-1	120F-10	114	弥生上層	広口壺	16.4(3)	14.9			赤いナズ・ハナ ナズ・コソナ 内いナズ	赤 白・褐色胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片
379	F-1	110F-7	8層	弥生上層	広口壺	13.4(3)	12.7(3)			赤い藤原文・ハ ナズ・コソナ 内いナズ	赤 灰白色胎、3mm 以下灰・褐色胎土 3mm以下灰白色胎 土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片
380	F-1	110F-8	6・7層	弥生上層	広口壺	12.4(3)	12.4(3)			赤い藤原文・藤 原文・コソナ 内いナズ	赤 灰白・灰・褐色 胎土、3mm以下、 褐色胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片
381	F-1	110F-7	8層	弥生上層	広口壺	12.7(3)	12.7(3)			赤い藤原文・藤 原文	赤 灰・褐色胎土、3mm 以下灰・褐色胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片
382	F-2	130F-1		弥生上層	広口壺	18.4(3)	15.9			調整不明	赤 灰白色胎、3mm 以下灰・白・赤褐色 胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片
385	F-2	104F-7	10601	弥生上層	広口壺	22.2(3)	14.1			ナズ	赤 3mm以下白・灰・ 褐色胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片
386	F-2	105F-10	10613	弥生上層	広口壺	13.4(3)	13.7			調整不明	赤 灰白・灰・褐色 胎土、3mm以下、 灰・褐色胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片
387	F-2	105F-9	10612	弥生上層	広口壺	12.4(3)	12.4(3)			赤いナズ・藤原 文・ハナ・コソナ 内いナズ	赤 灰・褐色胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片(底面 径30)
388	F-2	105F-8	10602	弥生上層	広口壺	22.4(3)	12.4			赤いナズ・藤原 文・ハナ・コソナ 内いナズ	赤 灰白・灰・褐色 胎土、3mm以下、 褐色胎土	中	赤 107F/2に灰胎 土	10	破片

第4表 出土土器観察表

標本 No.	坑	グリッド	遺構 位置	種類	器種名	口径	底径	高さ	図解・注目の特徴	胎土	焼成	色調	備考 (注)	備考
291	E-1	110F-7	9層	赤生土器	式II壺	116.0	113.1	11.1	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 縄文	中・赤 灰白・褐色 胎。3mm以下灰白・ 灰褐色 3mm以下 3mm以下褐色胎	中 白	5/5 黒色	5	壺
292	E-2	110F-9	8層	赤生土器	式II壺	119.0	121.1	12.1	外: ナガテ・調整 不明・赤表沙 文・内: 内: 縄文	胎 白・灰・褐色胎 胎 白・灰・褐色胎	中 白	10/100 灰白	10	口縁部 5
293	E-1	110F-8	9層	赤生土器	式II壺	117.0	113.1	11.1	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 縄文・調整不 明	胎 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎多	白	外: 17.100F/12.150・ 内: 10000/3 浅黄緑	15	壺
294	E-2	120F-10	8層	赤生土器	式II壺	116.0	114.7	11.7	外: ナガテ・調整 不明・赤表沙 文・内: 内: ナガテ・調整不 明	胎 灰・黄・白胎多 胎 灰・黄・白胎多 胎 灰・黄・白胎多	白	外: 14000/3 浅黄緑 内: 10000/3 浅黄緑	10	口縁部 20
295	E-1	110F-6	8層	赤生土器	式II壺	114.0	113.1	11.1	外: 縄文・調整不 明・赤表沙 文・内: 内: ナガテ	胎 赤胎多	白	100F/8 胎	10	口縁部 10
296	E-1	110F-8	9層	赤生土器	式II壺	113.0	121.0	12.0	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 縄文・ナガ テ	胎 灰白・灰・褐色 胎。3mm以下灰白・ 胎・灰褐色胎多	中 白	外: 12.100F/8 黄緑 内: 100/1 灰白	15	壺
297	E-1	110F-7	8層	赤生土器	式II壺	112.0	121.0	12.0	外: 調整不明・赤 表沙文・ナガ テ・内: 内: 調整不明	胎 灰白・灰・褐色 胎。3mm以下灰白・ 胎・褐色胎多	中 白	外: 17.100F/8 黄緑 内: 70/1 灰白 5.1000/4 12.150・ 胎	15	壺
298	E-1	110F-7	9層	赤生土器	式II壺	114.0	114.0	11.0	外: ナガテ・調整 不明・赤表 沙文・内: 内: 調整不明	胎 灰・褐色胎多 胎 灰・褐色胎多 胎 灰・褐色胎多	中 白	外: 10000/3 浅黄緑 内: 10000/2 灰白	15	口縁部 250あり
299	E-1	110F-7	8層	赤生土器	式II壺	117.0	113.1	11.1	外: ナガテ・調整 不明・赤表 沙文・内: 内: ナガテ	胎 灰・褐色胎多 胎 灰・褐色胎多 胎 灰・褐色胎多	中 白	外: 10000/3 浅黄緑 内: 17.100F/2 灰白	10	口縁部 250あり
300	E-1	110F-7	8層	赤生土器	式II壺	117.0	113.1	11.1	外: ナガテ・調整 不明・赤表 沙文・内: 内: ナガテ	胎 灰・褐色胎多 胎 灰・褐色胎多 胎 灰・褐色胎多	中 白	外: 10000/3 浅黄緑 内: 17.100F/2 灰白	15	口縁部 250あり
301	E-2	110F-3	8層	赤生土器	式II壺	116.1	121.0	12.0	外: ナガテ・調整 不明・赤表 沙文・内: 内: 調整不明	胎 灰白・灰・褐色 胎多 3mm以下 内: 灰・褐色胎少	中 白	外: 12.100F/1 灰白 内: 10.1000/3 黄緑	15	壺
302	E-1	110F-7	9層	赤生土器	式II壺	118.0	113.0	11.0	外: ナガテ・調整 不明・赤表 沙文・内: 内: ナガテ	胎 灰白・灰・褐色 胎。3mm以下灰白・ 胎・褐色胎多	中 白	外: 10000/3 浅黄緑 内: 10000/2 灰白	15	壺
303	E-1	120F-9	台倉層	赤生土器	式II壺	118.0	113.0	11.0	外: ナガテ・調整 不明・赤表 沙文・内: 内: ナガテ	胎 灰・褐色胎多 胎 灰・褐色胎多 胎 灰・褐色胎多	中 白	外: 10000/3 浅黄緑 内: 17.100F/2 灰白	10	口縁部 250あり
304	E-1	110F-7	8層	赤生土器	式II壺	117.0	113.0	11.0	外: ナガテ・調整 不明・赤表 沙文・内: 内: ナガテ	胎 灰・褐色胎多 胎 灰・褐色胎多 胎 灰・褐色胎多	中 白	外: 10000/3 浅黄緑 内: 17.100F/2 灰白	15	口縁部 250あり
305	E-1	110F-6	8層	赤生土器	式II壺	114.0	114.0	11.0	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 調整不明	胎 灰白・灰胎多。 3mm以下灰白・灰 胎。6mm以下褐色 胎	中 白	外: 12.100F/2 灰白 内: 10000/3 浅黄緑	15	壺
306	E-2	100F-7	3000F	赤生土器	式II壺	116.1	113.1	11.1	外: ナガテ・調整 不明・赤表 沙文・内: 内: ナガテ	胎 灰・褐色胎多。 3mm以下灰白・ 胎。6mm以下 灰褐色胎多	中 白	外: 100F/8	20	壺
307	E-1	130F-4	8層	赤生土器	式II壺	121.0	119.0	11.0	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 調整不明	胎 3mm以下灰胎 胎 3mm以下灰胎 胎 3mm以下灰胎	中 白	外: 12.100F/2 12.150・ 内: 10000/3 黄緑	10	口縁部 50
308	E-1	110F-7	8層	赤生土器	式II壺	114.0	114.0	11.0	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 調整不明	胎 灰・褐色胎多。 3mm以下灰胎多 3 mm以下灰胎多 胎。3mm以下褐色 胎	中 白	外: 12.1000/3 浅黄緑 内: 10000/3 浅黄緑	15	壺
309	E-1	110F-7	9層	赤生土器	式II壺	113.1	113.1	11.1	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 調整不明	胎 灰・褐色胎多。 3mm以下灰胎多 3 mm以下灰胎多 胎。3mm以下褐色 胎	中 白	外: 12.100F/2 浅黄 内: 10000/3 浅黄緑	5	口縁部・壺
310	E-1	110F-7	9層	赤生土器	式II壺	111.0	113.0	11.0	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 調整不明	中・赤 灰白・灰胎 胎多 3mm以下 胎。5mm以下 胎。調整不明	中 白	5.1000/3 12.150・ 胎	10	口縁部・壺
311	E-2	100F-8	3000F	赤生土器	式II壺	116.0	114.0	11.0	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 調整不明	胎 灰白・灰・褐色 胎。3mm以下灰白・ 胎・褐色胎多	中 白	外: 12.100F/2 浅黄 内: 10000/3 浅黄緑	20	口縁部・壺
312	E-1	120F-8	台倉層	赤生土器	式II壺	113.1	121.1	12.1	外: ナガテ・調整 不明・赤表 沙文・内: 内: 調整不明	胎 白・灰胎多 胎 灰胎多	白	外: 100F/8 胎 内: 10000/3 灰白	10	壺
313	E-1	110F-7	701 8層	赤生土器	式II壺	113.1	113.0	11.0	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 調整不明	胎 灰白・灰・褐色 胎。3mm以下灰白・ 胎。褐色胎多	中 白	外: 100F/8 胎 内: 10000/3 浅黄緑	10	壺
314	E-1	110F-6	9層	赤生土器	式II壺	113.0	114.1	11.1	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 調整不明	胎 3mm以下灰白・ 胎・褐色胎多	中 白	外: 10000/3 浅黄緑 内: 1000/1 灰白	5	壺
315	E-1	110F-8	8層	赤生土器	式II壺	114.1	113.1	11.1	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 調整不明	胎 灰白・灰・褐色 胎。3mm以下灰白・ 胎・褐色胎多	中 白	10000/3 浅黄緑	20	壺
316	E-1	110F-8	8層	赤生土器	式II壺	113.0	113.0	11.0	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 調整不明	胎 灰白・灰・褐色 胎。3mm以下灰白・ 胎・褐色胎多	中 白	外: 12.1000/3 浅黄 内: 10000/3 浅黄緑	10	壺
317	E-1	110F-7	8層	赤生土器	式II壺	114.0	113.0	11.0	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 調整不明	胎 灰・褐色胎多 胎 灰・褐色胎多 胎 灰・褐色胎多	中 白	10000/2 灰白	15	壺
318	E-1	110F-7	8層	赤生土器	式II壺	116.0	114.0	11.0	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 調整不明	胎 灰胎多。 3mm以下灰白・ 胎。3mm以下 胎。調整不明	中 白	外: 12.100F/2 浅黄 内: 10000/3 浅黄緑	5	壺
319	E-1	110F-7	9層	赤生土器	式II壺	113.0	114.0	11.0	外: 調整不明・赤 表沙文・内: 内: 調整不明	胎 灰白・灰・褐色 胎。3mm以下灰白・ 胎。褐色胎多	中 白	外: 10000/3 浅黄 内: 10000/4 12.150・ 胎	10	壺



第4表 出土土器観察表

種別 No.	図	グッド	遺物 部位	種類	器種名	口径	底径	高さ	図説・注記の付録	胎土	焼成	色調	検出層 (M)	備考
314	E-1	1100-2		弥生土器	式口蓋	12.85		(16.25)	外:ナデ+波瀾・ 内:ナデ+ナデ	粗 灰白・灰・黒・ 褐色胎土 3mm以下 灰・黒・褐色胎土 4 mm以下灰胎土	中 良	外:187/194 7,197/194 内:12,197/194	14層位	陶質堅い・1.4cm 厚 底みあり
315	E-2	1100-2		弥生土器	式口蓋	13.17		(17.9)	ナデ+ナデ	粗 灰白・灰胎土 3mm以下灰白・灰 胎土 3mm以下 胎土	中 良	外:187/194 7,196/194 内:12,197/194	14層位	陶質堅い・15.41cm 底みあり
316	E-3	1200-8	高岡系砂 層	弥生土器	式口蓋	13.43		(16.9)	調整不明	粗 白色胎土 2mm 胎土	中 良	外:17,197/194 内:10,197/194	14層位	陶質堅い・16.41cm 厚 陶質堅い
317	E-1	1100-7	8層	弥生土器	式口蓋	13.43		(14.4)	外:ナデ+ナデ+調 整不明 内:調整不明	粗 灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 褐色胎土 3mm以下 胎土	中 良	外:187/194 内:17,197/194	25	陶質堅い・16.41cm 厚 陶質堅い
318	E-1	1100-8	8層	弥生土器	式口蓋	13.43		(12.8)	外:調整不明+ハ ナデ 内:調整不明	粗 灰胎土 3mm以下 胎土胎土 3mm以下 胎土胎土	中 良	外:10,197/194 内:187/194	20	陶質・陶質 底みあり
319	E-1	1100-6	9層	弥生土器	式口蓋	13.63		(16.9)	外:調整不明+ハ ナデ 内:調整不明	粗 灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰胎土 3mm以下 胎土	中 良	外:10,196/194 内:187/194	20	陶質・陶質
320	E-3	1200-8	高岡系 砂層	弥生土器	式口蓋	13.63		(17.2)	外:ナデ 内:調整不明	粗 灰・褐色胎土	良	10,197/194	14層位	陶質堅い・12.0cm 厚
321	E-1	1100-6	9層	弥生土器	式口蓋	13.73		(16.9)	調整不明	粗 灰白色胎土 5mm 以下灰胎土 3mm 以下胎土胎土	中 良	外:10,198/194 内:12,197/194	5	陶質・陶質
322	E-1	1100-8	8層	弥生土器	式口蓋	13.73		(13.5)	ナデ	粗 灰・褐色胎土 2 mm以下灰胎土 3 mm以下胎土胎土	中 良	外:10,197/194 内:187/194	10	陶質
323	E-2	1100-2		弥生土器	式口蓋	13.73		(17.7)	外:ナデ+調整不 明 内:調整不明					
324	E-3	1200-9	高岡系 砂層	弥生土器	式口蓋	13.5		(16.9)	外:ナデ 内:調整不明	粗 灰・褐色胎土	良	外:7,197/194	14層位	陶質・陶質
325	E-1	1100-7	10+11層	弥生土器	式口蓋	13.53		(13.2)	外:調整不明+ハ ナデ 内:ナデ	粗 灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 褐色胎土 3mm以下 胎土	中 良	外:10,198/194 内:10,197/194	20	陶質
326	E-1	1100-7	9層	弥生土器	式口蓋	13.43		(16.9)	調整不明	粗 灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	中 良	外:12,197/194 内:12,197/194	20	陶質・陶質
327	E-1	1101-7	8層	弥生土器	式口蓋	13.53		(16.9)	調整不明	中年度 灰白・灰・ 褐色胎土 3mm以下 灰白・灰・褐色胎土	中 良	外:7,196/194 内:7,196/194	5	陶質・陶質堅い
328	E-2	1001-7	1000系	弥生土器	式口蓋	13.43		(13.3)	ナデ	粗 白・灰・褐色胎 土 3mm以下灰白・ 褐色胎土	中 良	外:10,198/194 内:17,198/194	20	陶質
329	E-3	1200-10		弥生土器	式口蓋	13.43		(14.5)	調整不明	粗 灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	良	外:17,197/194 内:17,198/194	5	陶質
330	E-1	1100-6	9層	弥生土器	式口蓋	13.63		(14.8)	調整不明	粗 灰・褐色胎土 3 mm以下灰白・灰・ 褐色胎土	中 良	2,197/194	10	陶質
331	E-2	1001-8		弥生土器	式口蓋	13.43		(14.5)	調整不明	粗 3mm以下灰白・赤 褐色胎土	中 良	外:10,198/194 内:10,198/194	14層位	5
332	E-1	1100-7	9層	弥生土器	式口蓋	13.63		(14.7)	外:ナデ 内:調整不明	粗 灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 褐色胎土	中 良	外:10,198/194 内:17,197/194	10	陶質底みあり
333	E-3	1200-10		弥生土器	式口蓋	13.52		(14.9)	ナデ	粗 灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土 3mm 以下胎土	中 良	外:12,197/194 内:187/194	10	陶質
334	E-2	1200-10		弥生土器	式口蓋	13.43		(13.4)	外:ナデ+ナデ 内:調整不明	粗 灰胎土 2mm以下 胎土胎土 3mm以下 胎土胎土 3mm以下 胎土胎土	中 良	外:10,198/194 内:12,197/194	25	陶質
335	E-1	1100-7	8層	弥生土器	式口蓋	13.43		(12.7)	調整不明	粗 灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 褐色胎土 3mm以下 胎土胎土	中 良	外:12,196/194 内:187/194	10	陶質 底みあり
336	E-1	1100-7	8層	弥生土器	式口蓋	13.73		(13.5)	外:ナデ 内:調整不明	粗 灰白・灰胎土 3mm以下胎土胎土 褐色胎土 3mm以下 胎土胎土	中 良	外:17,197/194 内:10,197/194	5	陶質・陶質堅い
337	E-2	1200-9		弥生土器	式口蓋	13.33		(13.4)	調整不明	粗 灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	中 良	外:10,198/194 内:10,198/194	25	陶質
338	E-1	1100-7	8層	弥生土器	式口蓋	13.43		(12.7)	外:ナデ+ナデ 内:調整不明	粗 灰・褐色胎土 3 mm以下灰白・褐色 胎土 3mm以下胎土 胎土	中 良	187/194	15	陶質
339	E-2	1200-10		弥生土器	式口蓋	13.13		(12.8)	外:ナデ+ナデ 内:ナデ	粗 灰・褐色胎土 3 mm以下胎土胎土 褐色胎土 3mm以下 胎土胎土	中 良	外:10,198/194 内:10,197/194	10	陶質・陶質
340	E-1	1100-7	8層	弥生土器	式口蓋	13.43		(14.4)	外:ナデ 内:ナデ	粗 灰胎土 3mm以下 胎土胎土 3mm以下 胎土胎土	中 良	外:12,197/194 内:12,197/194	10	陶質・陶質
341	E-1	1100-6	9層	弥生土器	式口蓋	13.43		(14.6)	調整不明	粗 灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	中 良	外:10,198/194 内:10,198/194	15	陶質・陶質

第4表 出土土器類表

種別 No.	坑	グリップ	遺種	種類	器種名	口径	底径	器高	図解・注法の特徴	胎土	焼成	色調	検出数 (No.)	備考
302	E-1	1100-7	8層	赤生土器	式豆鉢	114.43		12.11	外：調整不明・ 内：調整不明	紅・灰・黒・褐色 灰・3mm以下灰白・ 灰白色多・3mm以下 褐色多	中～ 良	赤・100R/21.55・黄 内・100R/21.55黄 内・100R/21.55黄	10	調整・調整なし
303	E-1	1100-7	8層	赤生土器	式豆鉢	116.43		12.33	外：調整不明・ 内：調整不明	紅・灰・黒・褐色 灰・3mm以下灰白・ 褐色多・3mm以下 褐色多	中～ 良	赤・100R/21.55	10	調整・調整
304	E-1	1100-8	8層	赤生土器	式豆鉢	112.43		12.63	調整不明	紅・灰・褐色 灰・3mm以下灰白・ 褐色多・3mm以下 褐色多	中～ 良	赤・100R/21.55・黄 内・100R/21.55 内・100R/21.55	1	調整・調整
305	E-1	1100-7	8層	赤生土器	式豆鉢	115.43		12.33	調整不明	中～赤 灰白・灰・ 褐色灰・4mm以下 灰白・3mm以下 褐色多	中～ 良	赤・77/灰	10	調整
306	E-1	1100-7	8層	赤生土器	式豆鉢	116.43		12.33	外：ナデ・ 内：ナデ	紅・灰白・灰・褐色 灰・3mm以下灰白・ 褐色多・3mm以下 褐色多	中～ 良	赤・100R/21.55	15	調整 透みあり
307	E-2	1200-10		赤生土器	式豆鉢	108.23		12.53	ナデ・ナデ	紅・灰・褐色 灰・3mm以下 褐色多	良	赤・100R/21.55 内・100R/21.55	20	調整なし・4.10
308	A-1	1500-7		赤生土器	式豆鉢	114.53		12.11	外：ナデ・ 内：ナデ	紅・白・赤褐色	良	調整なし赤褐色	1	調整なし
309	E-1	1200-8		赤生土器	式豆鉢	117.40	100	12.51	外：調整不明 内：調整不明	紅・3mm以下 褐色多	良	赤・100R/21.55	1	調整なし
310	E-1	1002-9		赤生土器	式豆鉢	122.5		12.51	外：調整不明・ 内：ナデ	紅・白・赤・褐色 灰・調整 なし	良	7.00R/4	11	調整なし・6.8.10 調整なし
311	E-2	1300-4		赤生土器	式豆鉢	115.23		12.43	調整不明	紅・灰白・褐色 灰多	良	赤・100R/21.55・ 内・100R/21.55	1	調整なし
312	E-2	1200-8		赤生土器	式豆鉢	116.23		12.11	ナデ・ナデ	赤・灰白・赤褐色 灰多	良	7.00R/4 調整 なし	1	調整なし
313	E-1	1100-8	8層	赤生土器	式豆鉢	111.603		12.11	ナデ・調整不明	紅・灰・黒・褐色 灰・3mm以下褐色 少・3mm以下灰白・ 灰白色多	良	赤・107/灰 内・107/21.55 内・107/21.55	20	調整 透みあり
314	E-1	1200-9	調整層	赤生土器	式豆鉢	112.43	7.8	25.45	外：ナデ・ 内：ナデ	紅・3mm以下灰白・ 褐色多	良	赤・12.00R/21.55 内・100R/21.55	90	調整なし 調整なし
315	E-2	1200-10	調整層	赤生土器	式豆鉢	108.43		12.23	調整不明	紅・灰・黒・褐色 灰・4mm以下灰白・ 褐色多・調整なし 褐色多	良	赤・77/灰	1	調整なし
316	E-2	1100-2		赤生土器	式豆鉢	113.43		12.90	ナデ・ナデ	中～赤 灰白・灰・ 褐色多・3mm以下 灰・3mm以下褐色 多	良	赤・12.07/11.55 内・12.07/11.55 内・12.07/11.55	1	調整なし
317	E-1	1100-8	調整層	赤生土器	式豆鉢	111.23		12.23	ナデ・ナデ	紅・灰白色・3mm 以下灰白・褐色多 調整なし	良	赤・100R/21.55	20	調整なし
318	E-1	1100-8	8層	赤生土器	式豆鉢	111.53		12.43	調整不明	紅・灰・黒・褐色 灰・3mm以下灰白・ 褐色多・調整なし 褐色多	中～ 良	赤・12.00R/21.55 内・100R/21.55	20	調整
319	E-1	1100-7	8層	赤生土器	式豆鉢	112.10		12.11	調整不明	紅・灰白・灰・褐色 灰・3mm以下灰白・ 灰・褐色多	中～ 良	赤・100R/21.55・ 内・100R/21.55 内・100R/21.55	100	調整 透みあり
320	E-1	1100-7	8層	赤生土器	式豆鉢	106.43		12.43	外：調整不明 内：ナデ・ ナデ	紅・灰白・灰・褐色 灰・4mm以下灰白・ 灰褐色多・3mm以下 褐色多	中～ 良	赤・100R/21.55・ 内・100R/21.55	10	調整なし
321	E-1	1100-7	8層	赤生土器	式豆鉢	118.23		12.43	ナデ・ナデ	紅・灰白・灰・褐色 灰・3mm以下灰白・ 褐色多・3mm以下 褐色多	中～ 良	赤・100R/21.55・ 内・100R/21.55	20	調整
322	E-2	1002-9		赤生土器	壺				外：ナデ・ナデ・ 行形文・ 内：ナデ	紅・赤・灰褐色・ 調整なし 褐色多	良	赤・100R/21.55 内・100R/21.55	調整なし	調整なし・6.6
323	E-1	1100-8	8層	赤生土器	壺				外：調整不明・ 内：調整不明 英文・行形文 内：調整不明	紅・灰白・褐色 灰・3mm以下灰白・ 褐色多・調整なし 褐色多	中～ 良	赤・100R/21.55・ 内・100R/21.55	20	調整
324	E-1	1100-7	8層	赤生土器	壺				外：行形文・ 調整なし 内：ナデ・ナデ	紅・灰白・褐色 灰・調整なし 褐色多	中～ 良	赤・12.07/11.55 内・100R/21.55	25	調整なし
325	E-2	調整層		赤生土器	壺				外：ナデ・ナデ・ 調整なし 内：ナデ・ナデ	紅・灰白・褐色 灰・4mm以下灰白・ 褐色多・調整なし 褐色多	中～ 良	赤・77/灰 内・100R/21.55	15	調整なし
326	E-2	1102-2		赤生土器	壺	105.13			外：調整不明 内：調整不明	紅・灰白・灰・褐色 灰・4mm以下灰白・ 褐色多・調整なし 褐色多	良	赤・100R/21.55・ 内・100R/21.55	調整なし	調整なし

第4表 出土土器観察表

標本 番号	坑 No.	グリップ	遺構 位置	種類	器種名	口径	底径	器高	図解・注目の特徴	胎土	焼成	色調	備考 (L)	備考	
419	E-1	110F-7	8層	赤生土器	甕				外：紅彩織文・面 底文字付新文文 内：ナツ	中・胎土：灰白粉多 灰・褐色胎土 3mm以下灰・褐色胎 土	良	外：100F2(12.5)・黄 内：12.0F2(灰)	10	破片	
420	E-1	110F-7	8層	赤生土器	甕				外：1/4・面付新文 ・調整不明 内：調整不明	胎：灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 3mm以下褐色胎土 3mm以下褐色胎土	中・良	外：100F2(12.5)・黄 内：12.0F2(灰)	5	破片	
421	E-2	100F-6	1000F	赤生土器	甕				外：紅彩織文・ナツ 内：ナツ	胎：灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 3mm以下灰・褐色胎 土	良	外：100F2(12.5)・黄 内：12.0F2(12.5)・黄 内：100F2(12.5)・黄胎 土	20	無蓋器(10.5) 体径(15.8) cm	
422	E-2	100F-7	1000F	赤生土器	甕				外：紅彩織文・ナツ ・1/4 内：ナツ	胎：灰・褐色胎土 3 mm以下灰・褐色胎 土	良	外：100F2(12.5)・黄 内：12.0F2(12.5)・黄	20	無蓋器(10.5) cm	
423	E-1	110F-7	10層	赤生土器	甕				外：調整不明・付 新文文 内：ナツ	胎：灰白粉多 灰 褐色胎土	良	外：100F2(12.5)・黄 内：12.0F2(黄胎 土)	10	破片	
424	E-1	110F-7	8層	赤生土器	甕				外：調整不明・付 新文文 内：調整不明	中・胎土：灰白・ 褐色胎土 3mm以下灰 褐色胎土	中・良	外：100F2(12.5)・黄 内：12.0F2(黄胎 土)	15	破片	
425	E-1	110F-7	8・9層	赤生土器	甕				外：調整不明・付 新文文 内：ナツ・ナツ	胎：灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土 3mm 以下褐色胎土	中・良	外：100F2(12.5)・黄 内：100F2(12.5)・黄 胎土	10	破片	
426	E-1	110F-7	8層	赤生土器	甕				外：1/4・面付新文 ・調整不明 内：ナツ	胎：灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	中・良	外：107(12.5)・黄 内：12.0F2(黄胎 土)	5	破片	
427	E-1	110F-7	8層	赤生土器	甕				外：調整不明・付 新文文 内：調整不明	中・胎土：灰白・ 褐色胎土 3mm以下灰 褐色胎土	中・良	外：100F2(12.5)・黄 内：12.0F2(黄胎 土)	5	破片	
428	E-1	110F-7	8層	赤生土器	甕				外：調整不明・付 新文文 内：ナツ	胎：灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	中・良	外：107(12.5)・黄 内：100F2(12.5)・黄 胎土	20	破片	
429	E-1	110F-7	8層	赤生土器	甕				外：調整不明・付 新文文 内：ナツ	胎：灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	中・良	外：107(12.5)・黄 内：100F2(12.5)・黄 胎土	5	破片	
430	E-1	110F-7	8層	赤生土器	甕				外：調整不明・付 新文文 内：ナツ	胎：灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	中・良	外：107(12.5)・黄 内：100F2(12.5)・黄 胎土	20	破片	
431	E-1	110F-7	8・9層	赤生土器	甕				外：調整不明・付 新文文 内：ナツ	胎：灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	中・良	外：107(12.5)・黄 内：100F2(12.5)・黄 胎土	20	破片	
432	E-2	100F-6		赤生土器	甕				外：調整不明・ナツ 内：ナツ	胎：灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	良	外：100F2(12.5)・黄 内：12.0F2(灰)	5	破片	
433	E-2	110F-2		赤生土器	甕				外：ナツ・面付新 文文・ナツ 内：ナツ	胎：赤・褐色胎土多 内：ナツ	中・良	2.0F2(灰)			
434	E-1	110F-7	8層	赤生土器	甕				外：紅彩織文・ナツ ・ナツ 内：調整不明	胎：黄・褐色胎土 灰 白・褐色胎土 3 mm以下灰白・灰・ 褐色胎土	良	外：100F2(12.5)・黄 内：12.0F2(灰)	5	破片	
435	E-2	100F-9		赤生土器	甕				外：紅彩織文 内：ナツ	胎：灰・褐色胎土 3 mm以下褐色胎土	良	外：12.0F2(12.5)・黄 内：12.0F2(12.5)・黄			
436	E-3	130C-2	10010F	赤生土器	甕				外：ナツ 内：調整不明	胎：3mm以下白・灰・ 褐色胎土	良	外：100F2(12.5)・黄 内：100F2(12.5)・黄	10	無蓋器(17.0) cm 体径(20.9) cm 厚(1.5) cm 外底面付	
437	E-1	110F-8	9層	赤生土器	甕				外：調整不明 内：ナツ	胎：灰白粉多 3 mm以下 3mm以下 褐色胎土	中・良	外：12.0F2(12.5)・黄 内：100F2(12.5)・黄	10	無蓋器(20.0) cm 外底面付	
438	E-3	120F-9	自立層 方式 土層	甕		16.3	16.3		調整不明	胎：灰・褐色胎土多 3mm胎土	良	外：100F2(12.5)・黄 内：10F2(灰)	40	無蓋器(15.2) cm 厚(1.5) cm	
439	GS	A-1	8層	赤生土器	甕			4.7	132.7	調整不明	胎：灰・褐色胎土	良	外：100F2(12.5)・黄 内：12.0F2(12.5)・黄	10	体径(16.4) cm 厚(1.5) cm 外底面付
440	GS	E-1	110F-2	自立層 赤生土器	甕			(7.7)	137.1	外：調整不明 内：ナツ・ナツ	胎：灰・褐色胎土 3 mm以下灰・褐色胎 土	良	外：12.0F2(12.5)・黄 内：12.0F2(12.5)・黄	10	無蓋器(17.0) cm 体径(18.9) cm 厚(1.5) cm 外底面付
441	GS	E-2	100F-7	1000F 赤生土器	小壺			5.55	132.3	外：1/4・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 3mm以下灰・褐色 胎土	良	外：100F2(12.5)・黄 内：12.0F2(12.5)・黄 胎土	10	無蓋器(15.2) cm 体径(11.3) cm 厚(1.5) cm 外底面付	
442	E-1	110F-8	8層	赤生土器	小壺				調整不明	胎：灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	中・良	外：100F2(12.5)・黄 内：100F2(12.5)・黄 胎土	20	無蓋器(10.8) cm	
443	E-1	110F-3		赤生土器	甕			8.5	(8.5)	外：調整不明・灰 白・褐色胎土 3 mm以下灰白・褐色 胎土	中・良	外：107(12.5)・黄 内：12.0F2(12.5)・黄	10	体径(16.4) cm 厚(1.5) cm 外底面付	
444	E-2	100F-7	1000F 赤生土器	甕				15.4	(15.4)	外：1/4・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 褐色胎土	良	外：100F2(12.5)・黄 内：100F2(12.5)・黄	10	無蓋器(16.4) cm	
445	E-1			赤生土器	甕			2.2	(5.4)	外：灰・褐色胎土 内：ナツ	良	外：100F2(12.5)・黄 内：100F2(12.5)・黄	10	体径(16.4) cm	
446	E-2	120F-10		赤生土器	甕			8.65	(8.65)	胎：灰・褐色胎土 4 mm以下灰・3mm 以下褐色胎土 4～10 mm胎土	良	外：100F2(12.5)・黄 内：10F2(灰)	10	体径(16.4) cm	
447	E-2	100F-10	10021F	赤生土器	甕			16.3	(16.3)	調整不明	胎：3mm以下(3・3 mm以下)褐色胎土	良	外：12.0F2(12.5)・黄 内：12.0F2(12.5)・黄	5	破片
448	E-1	110F-7	10層	赤生土器	甕			8.6	(8.4)	外：1/4・ナツ・ナツ 内：調整不明	胎：灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	中・良	外：100F2(12.5)・黄 内：12.0F2(12.5)・黄	30	体径(16.4) cm
449	E-1	110F-6	8層	赤生土器	甕			5.8	(5.7)	調整不明	胎：灰白・灰・褐色 胎土 3mm以下灰白・ 3mm以下褐色胎土	中・良	外：100F2(12.5)・黄 内：10F2(12.5)・黄 胎土	40	体径(16.4) cm

第4表 出土土器観察表

種別 No.	図	グリップ	遺種 位置	種類	器種名	口径	底径	器高	図製・技法の特徴	胎土	焼成	色調	検出層 (No.)	備考
410	E-1	1102-6	8層	赤生土器	甕	15.3	12.3		縦線不明	胎 3.0㎖以下白色胎多、灰白・褐色胎、3.0㎖以下白色胎	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	底面50	胎線・線画(黒い)もみあり
411	E-1	1102-7	8層	赤生土器	甕	8.2	11.11		赤・縦線不明・底面中・底面下 内・1-2	胎 灰白・褐色胎、1.0㎖以下灰白・褐色胎多	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下 2.500℃黄褐色	90	胎線・線画 もみあり
412	E-2	1300-4	7・8層	赤生土器	甕	19.0	12.7		縦線不明	胎 3.0㎖以下灰白・褐色胎多、2.0㎖以下白色胎、5.0㎖以下白色胎	良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	15	
413	E-2	1102-2	707	赤生土器	小壺(平)	16.0	11.7		赤・縦線不明・底面本底面 内・縦線不明	胎 灰・褐色胎、4.0㎖以下赤・3.0㎖以下白色胎	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	8・9	胎線・線画 もみあり
414	E-1	1102-7	8層	赤生土器	甕	18.0	11.9		縦線不明	胎 灰・褐色胎、1.0㎖以下灰白・灰・褐色胎多	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	20	胎線・線画 もみあり
415	E-1	1102-8	8・7層	赤生土器	甕	19.2	13.50		縦線不明	胎 灰白胎多、灰白・褐色胎、2.0㎖以下白色胎、管付紋様	良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	20	胎線・線画 もみあり
416	E-3	1200-10		赤生土器	甕?	8.7	12.1		赤・1-2層ナメナメナ 底面網状底面 内・1-2層	胎 心壳、葉形、赤色胎	良	1000℃以上・黄褐色	底面50	
417	E-1	1002-9	30023	赤生土器	甕?	7.6	16.3		ナメ	中・心形・褐色胎、3.0㎖以下白色胎多	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	8・9 ~底面 100	胎線・線画 もみあり
418	E-2	1102-3		赤生土器	甕	15.0	11.21		赤・1-2層・底面 内・1-2層	胎 灰白・灰・褐色胎、3.0㎖以下灰・褐色胎多	良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	10	胎線(24.80 cm) 線画
419	E-1	1102-6	8層	赤生土器	甕	15.5	13.5		赤・1-2層・底面 内・縦線不明	胎 灰白・褐色胎、1.0㎖以下白色胎多	良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	5	胎線(24.20 cm) 線画
421	E-1	1102-8		赤生土器	甕	15.25	17.40		赤・1-2層・底面 内・縦線不明	胎 灰白・灰・褐色胎、1.0㎖以下白色胎多、3.0㎖以下灰白・褐色胎	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	15	胎線(20.6 cm) 線画 もみあり
422	E-2	1200-6	1015層	赤生土器	甕	12.0	17.0		赤・1-2層・底面 内・1-2層・ナメ	胎 灰白・褐色胎、6.0㎖以下赤・3.0㎖以下白色胎多	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	10線画 25	胎線(19.30 cm) 線画 内面線画
423	E-1	1102-2	10層	赤生土器	甕	12.0	14.3		赤・1-2層・底面 内・1-2層・調整不明	胎 灰・褐色胎、3.0㎖以下灰白・灰・褐色胎多	中・小 良	赤・1000℃以下 内・1000℃以下	5	胎線(19.90 cm) 線画
424	E-1	1102-6	8層	赤生土器	甕	18.0	16.4		赤・1-2層・底面ナメ 内・縦線不明	胎 灰白・灰・褐色胎、3.0㎖以下灰白・褐色胎、3.0㎖以下灰白胎多	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以上・黄褐色 50℃灰白	10	胎線(18.90 cm) 線画 もみあり
425	E-1	1102-6	8層	赤生土器	甕	18.0	13.90		赤・1-2層・底面 内・1-2層	胎 灰白胎多、管付紋様、3.0㎖以下灰白胎、3.0㎖以下白色胎、3.0㎖以下白色胎	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	10	胎線(17.20 cm) 外底面管付
426	E-1	1102-5	101層	赤生土器	甕	18.1	14.0		赤・1-2層・底面 内・縦線不明	胎 灰・褐色胎、3.0㎖以下灰・褐色胎多	中・小 良	2.500℃灰白	15	胎線(17.20 cm) 線画 もみあり
427	E-2	1200-10		赤生土器	甕	16.3	15.20		赤・1-2層・底面 内・1-2層・ナメ	胎 灰・褐色胎、4.0㎖以下白色胎、4.0㎖以下白色胎多	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下 2.500℃黄褐色	10	胎線(18.90 cm) 線画
428	E-1	1102-6	8層	赤生土器	甕	18.0	14.0		赤・縦線不明・底面 内・縦線不明	胎 灰白・灰・褐色胎、1.0㎖以下灰白・褐色胎多	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	15	胎線(14.80 cm) 線画 もみあり
429	E-1	1102-6	8層	赤生土器	甕	18.0	15.2		赤・1-2層・底面 内・1-2層・ナメ	胎 灰白・灰・褐色胎、3.0㎖以下灰白・褐色胎、3.0㎖以下灰白・褐色胎多	中・小 良	赤・1000℃以下 内・1000℃以上・黄褐色	5	胎線(14.20 cm) 線画
430	E-1	7	8層	赤生土器	甕	18.2	17.3		赤・1-2層・底面 内・縦線不明	胎 灰白・灰・褐色胎、1.0㎖以下灰白・褐色胎、3.0㎖以下灰白胎多	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	25	胎線(14.00 cm) 線画 もみあり
431	E-1	1102-6	9層	赤生土器	甕	18.1	12.45		赤・1-2層・底面 内・1-2層	胎 灰白胎多、管付紋様、3.0㎖以下灰白胎少、管付紋様	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	5	胎線(16.20 cm) 外底面管付
432	E-1	1102-6	6・7層	赤生土器	甕	12.4	12.4		赤・縦線不明・底面 内・縦線不明	胎 3.0㎖以下灰白・褐色胎多、3.0㎖以下白色胎、2.0㎖以下白色胎	中・小 良	赤・1000℃以上・黄褐色 内・1000℃以下	10	胎線(13.20 cm) 線画 外底面管付
433	E-1	1102-7	8層	赤生土器	甕	13.5	13.30		赤・1-2層・底面 内・1-2層・ナメ	胎 灰白胎、3.0㎖以下灰・褐色胎多	中・小 良	2.500℃灰白	5	胎線(11.20 cm) 線画
434	E-1	1102-8	8層	赤生土器	甕	12.0	13.7		赤・縦線不明・底面 内・縦線不明	胎 灰白・灰・褐色胎、3.0㎖以下灰白・灰・褐色胎多	中・小 良	500℃灰白	15	胎線(12.0 cm) 線画 もみあり
435	E-1	1102-8	8層	赤生土器	甕	13.4	12.4		赤・1-2層・底面 内・調整不明	胎 灰白・灰・褐色胎、3.0㎖以下灰白・褐色胎多	中・小 良	赤・1000℃以下 内・1000℃以上・黄褐色	10	胎線・線画(黒い) 線画 もみあり

第4表 出土土器観察表

種別	器名	式	グリップ	用途	産地	口径	底径	高さ	図説・図注の特徴	胎土	焼成	色調	備考	備考
476	F-2	1002-9		煮食土器	甕	111.0		18.0	外・内フタ・頸部 内：敷ナメ・ハナ	粗 灰白・褐色胎土 1mm雑多	白	外 1.0707(4.25)・焼 内 1.0707(4.25)	①-8 ②-8 ③-10	頸部径 136.4) cm 体部径 132.2) cm 高さ 10
477	F-1	1100-6	10層	煮食土器	甕			12.90	外・内フタ・頸部 内：敷ナメ・ハナ	粗 灰白・灰・褐色胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	中・白	外 1.0707(4.25)・焼 内 1.0707(4.25)	5	頸部 外面縦行条
478	F-1	1100-8	8層	煮食土器	甕	124.0		12.70	外・内フタ・ナメ 内：ハナ	粗 灰白・灰・褐色胎土 3mm以下灰白・ 褐色胎土	白	外 1.0707(4.25)・焼	5	蓋ふた形
479	F-1	1100-8	8層	煮食土器	甕	124.0		12.30	外・内フタ・ナメ 内：敷ナメ 内：敷ナメ不明	粗 灰白・灰・褐色胎土 3mm以下灰白・ 褐色胎土	白	外 1.0707(4.25)・焼 内 1.0707(4.25)	5	頸部
480	F-1	1100-7	8層	煮食土器	甕			12.7	外・内フタ・ナメ 内：ハナ	粗 灰白・灰・褐色胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	白	外 1.0707(4.25)・焼	5	
481	F-2	1100-2		煮食土器	甕	124.0		15.3	外・内フタ・ナメ 内：敷ナメ・ナメ	粗 灰白・灰・褐色胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	白	外 1.0706(4.25)	15	頸部径 122.7) cm
482	F-2	1300-4		煮食土器	甕	119.0		14.8	ハナ	粗 灰・褐色胎土 白色胎土・石割胎土	白	外 1.0707(4.25)・焼 内 1.0707(4.25)・青 内 1.0707(4.25)・青	①線部 20	頸部径 (17.7) cm
483	F-2	1100-1		煮食土器	甕	115.0		14.1	ハナ	粗 褐色胎土	白	外 1.0707(4.25)・焼	①線部 5	頸部径 (15.2) cm 蓋ふた形
484	F-1	1100-7	8層	煮食土器	甕	116.4		13.50	外・内フタ・ナメ 内：敷ナメ・ナメ	粗 灰胎土、6mm以下 白色胎土、灰白・ 褐色胎土、3mm以下 灰白・褐色胎土	中・白	外 1.0706(4.25)・焼 内 1.0707(4.25)	5	頸部径 (15.2) cm 蓋ふた形
485	F-1	1100-8	8層	煮食土器	甕	116.90		15.60	外・蓋ふた 内：敷ナメ不明	粗 灰白・灰・褐色胎土 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	中・白	外 1.0707(4.25)・焼 内 1.0707(4.25)・青 内 1.0707(4.25)・青	10	頸部径 (14.8) cm 胴部・壁面縦行条
486	F-1	1100-6	8層	煮食土器	甕				ハナ・ナメ	粗 3mm以下灰白・ 灰・褐色胎土	中・白	外 1.0707(4.25)・焼 内 1.0707(4.25)	10	頸部径 (16.4) cm 胴部
487	F-3	1200-16		煮食土器	甕	116.0		14.4	ナメ・ハナ	粗 灰・灰胎胎土、 3mm以下胎土	白	外 1.0706(4.25)・焼 内 1.0707(4.25)・青	①線部 25	頸部径 (15.4) cm
488	F-2	1300-4		煮食土器	甕	115.0		15.0	外・内フタ・ナメ 内：敷ナメ・ナメ 内：敷ナメ不明	粗 灰白・褐色胎土 3mm以下胎土	白	外 1.0707(4.25)・焼 内 1.0707(4.25)	①線部 25	頸部径 (13.0) cm 外面縦行条
489	F-3	1200-10	20-A	煮食土器	甕	116.7		14.9	外・内フタ・ナメ	粗 3mm以下胎土、 褐色胎土	白	外 1.0706(4.25)・焼 内 1.0706(4.25)・焼	①線部 10	頸部径 (15.0) cm
490	F-1	1100-6	10層	煮食土器	甕			12.9	外・内フタ・ナメ・蓋 内：敷ナメ不明	粗 灰白・灰・褐色胎土 3mm以下灰白・ 褐色胎土、4mm以下 灰白・褐色胎土	中・白	外 1.0707(4.25)・焼 内 1.0707(4.25)	5	頸部
491	F-1	1100-8	10層	煮食土器	甕	119.0		13.50	外・内フタ・ナメ 内：敷ナメ不明	粗 3mm以下胎土、 褐色胎土	中・白	外 1.0706(4.25)・焼 内 1.0707(4.25)	①線部 5	頸部
492	F-3	1300-10	引合層	煮食土器	台付甕			11.4	不明	粗 3mm以下灰・ 褐色胎土	白	外 1.0707(4.25)・焼	台部 60	蓋部径 (16.0) cm
493	F-1	1100-8	8層	煮食土器	台付甕			12.90	外・内フタ・ナメ 内：敷ナメ・ナメ	粗 灰白・褐色胎土、 3mm以下灰・褐色胎土 3mm以下灰胎土	中・白	外 1.0707(4.25)・焼 内 1.0707(4.25)	30	蓋部径 (17.2) cm
494	F-1	1100-8	8層	煮食土器	台付甕	116.0		13.70	外・内フタ・ナメ 内：ハナ	粗 灰色胎土、3mm以下 白色胎土	中・白	外 1.0706(4.25)・焼 内 1.0706(4.25)	10	
495	A-2	100		煮食土器	台付甕			8.9	外・内フタ・ナメ 内：敷ナメ・ハナ	粗 灰・褐色胎土 2mm胎土	白	外 1.0707(4.25)・焼	台部 60	蓋部径 (4.7) cm
496	65	F-2	1100-2		煮食土器	台付甕		16.1	ナメ・ハナ	粗 4mm以下胎土、 灰・褐色胎土	中・白	外 1.0707(4.25)・焼 内 1.0706(4.25)	蓋部 80 ~台部 20	蓋部径 (15.4) cm
497	F-1	1100-7	10層	煮食土器	台付甕			12.7	外・内フタ・ナメ 内：敷ナメ	粗 灰白胎土、 3mm以下胎土	中・白	外 1.0707(4.25)・焼	蓋部 80 ~台部 20	蓋部径 (15.4) cm
498	F-2	1002-9		煮食土器	台付甕			16.0	外・内フタ・ナメ 内：敷ナメ	粗 白色胎土、灰色 胎土	中・白	外 1.0707(4.25)・焼	台部 80	蓋部径 (6.2) cm 内面縦行条
499	F-1	1100-7	8層	煮食土器	台付甕			15.4	外・内フタ・ナメ 内：敷ナメ・ナメ 内：敷ナメ不明	粗 褐色胎土・石割胎土 灰白・褐色胎土、 3mm以下胎土、灰白・ 褐色胎土	中・白	外 1.0707(4.25)・焼	蓋部 30	蓋部径 (15.3) cm 外面縦行条
500	F-1	1100-7	8層	煮食土器	台付甕			16.0	外・内フタ・ナメ 内：敷ナメ不明・ハ ナ	中・胎土 灰白・灰・ 褐色胎土、3mm以下 灰白・灰・褐色胎土	中・白	外 1.0706(4.25)・焼	台部 10 ~台部 20	蓋部径 (14.2) cm
501	F-2	1300-4		煮食土器	台付甕			16.7	外・内フタ・ナメ 内：敷ナメ	粗 灰白・褐色胎土 3mm以下胎土	中・白	外 1.0707(4.25)・焼 内 1.0706(4.25)	台部 60	蓋部径 (15.2) cm
502	65	F-1	1100-6	10層	煮食土器	台付甕		16.30	外・内フタ・ナメ 内：敷ナメ・蓋部不 明	粗 灰白・褐色胎土、 3mm以下胎土、灰白・ 褐色胎土、胎土 3mm以下胎土	中・白	外 1.0707(4.25)・焼 内 1.0706(4.25)	蓋部 80 ~台部 20	蓋部・内面縦行条
503	F-2	1100-1		煮食土器	蓋・甕			6.2	不明	粗 灰・褐色胎土 3mm以下胎土	白	外 1.0706(4.25)・焼 内 1.0706(4.25)	蓋部 30	蓋部・壁面縦行条
504	F-3	1300-2	引合層	土師器	高杯	121.0		13.4	不明	粗 灰・褐色胎土	白	外 1.0707(4.25)・焼 内 1.0707(4.25)・青	台部 50	頸部



第5表 出土ミニチュア土器観察表

標記 図号	坑	グランド	遺構 部位	器種名	口径	底径	高さ	調査・注法の特徴	胎土	焼成	色調	備考 (%)	備考
307	F-3	1200-9	土層部	壺	5.9	(5.9)		赤・灰白・ナゲ 内・調整不明	赤 2mm以下白・赤 赤色線多	良	T.3080/2(黄褐色)	体30 ~底部 25	体底径(15.0)cm 体高径(16.4)cm
308	F-3	1300-2	柱石部	壺	15.0	(5.3)	6.0	赤・ナゲ・調整不明 内・調整不明	赤 白・灰・褐色線 多 2mm線多	良	赤・T.3082/2(白・黄 内・T.3081/1(黄))	45	体底径(15.2)cm 体高径(16.4)cm
309	F-3	1200-9	柱石部	付付壺	(5.7)	(5.1)	6.1	赤 白・赤色線多 白・ナゲ	赤 白・赤色線多 2mm線多	良	赤・T.3082/2(白・黄 内・T.3081/1(黄))	45	体底径(15.4)cm 体高径(16.2)cm
310	F-3	1200-10	壺		6.1	(7.3)		赤・白・ナゲ 内・ナゲ	赤 灰・黄・白赤色 線多 2mm線多	良	赤・T.3082/2(白・黄 内・T.3081/1(白・黄))	50	体底径(15.0)cm 体高径(16.4)cm 底径(14.2)cm
311	F-1	1100-9	柱石部	壺	(5.7)	(5.3)		赤・白・ナゲ 内・ナゲ	赤 黄・灰白・赤色 線多	良	赤・T.3082/2(黄褐色 内・T.3081/1(白))	体30 ~底部 20	体底径(16.7)cm
312	F-3	1200-8	鉢	(10.7)	4.2	7.8		赤・調整不明・調整不 明・ナゲ	赤 4mm以下褐色線 多	良	T.3087/2(白・黄)	50	体底径(10.0)10cm 体高径(10.6)cm 底径(10.0)cm
313	F-3	1200-9	壺		6.2	(7.1)		赤・ナゲ・調整不明 内・ナゲ	赤 白・灰・赤黄 褐色	良	T.3087/2(白・黄)	体~ 底部 100	体底径(12.2)cm 体高径(8.15)cm 底径(10.0)cm
315	F-2	1001-2	100001	壺	13.0	7.0	10.25	赤・白・ナゲ・調整不 明・ナゲ	赤 白・灰・褐色線 多 4mm以下赤 褐色線	良	T.3087/2(白・黄)	11.5 ~底部 100	体底径(12.25)cm 体高径(12.7)cm 底径(10.5)cm 内底径(10.5)cm
316	F-1	1100-8	8層	頸子鉢?	(14.0)	(5.7)		赤・白・ナゲ 内・調整不明	黄 灰褐色 4mm以下 灰色線多 褐色 線 2mm以下褐色線 灰褐色 4mm以下 白色線少	中不良	赤・T.3087/1(白 内・T.3082/2(白・黄))	白5~ ~底部 15	体底径(13.0)cm 体高径(13.10)cm 底径(10.0)cm
317	F-2	1100-9	壺	(11.0)	(5.0)			赤・白・ナゲ 内・ナゲ	赤 白色線 灰色線 多 2mm以下赤色 線	良	赤・T.3082/4(白・黄 内・T.3081/1(黄))	15	体底径(12.2)cm 底径(10.0)cm
318	F-2	1001-8	100002	壺				赤・調整不明 内・ナゲ	赤 2mm以下灰白色 線 調整不明	良	T.3081/1(黄)	11~ ~底部 25	体底径(10.2)cm 体高径(13.4)cm
319	F-2	1001-9	100000	壺	(6.1)	(3.1)		赤・白・ナゲ 内・ナゲ・ナゲ	黄 灰白・褐色線 多 2mm以下灰白 褐色線 2mm以下 白色線	良	赤・T.3082/2(黄褐色 内・T.3081/1(白))	30	体底径(14.7)cm
320	F-2	1200-9	100000	壺	(6.3)	(3.0)		赤・白・ナゲ 内・ナゲ	黄 灰白・褐色線 多 2mm以下灰白・褐色 線多	良	赤・T.3082/2(白・黄 内・T.3081/1(白))	調整 20	体底径(15.2)cm 底径(10.0)cm
321	F-2	1001-9	100000	壺	(4.9)	(2.8)		赤・白・ナゲ 内・ナゲ	黄 灰・褐色線 3 mm以下赤・2mm以下 灰色線多	良	赤・T.3082/4(黄 内・T.3081/1(白))	30	体底径(14.2)cm 底径(10.1)cm
322	F-2	1001-8	100000	壺	(7.3)	(2.8)		赤・白・ナゲ 内・ナゲ	黄 灰白・褐色線 多 2mm以下灰白・褐色 線多	良	赤・T.3082/2(白 内・T.3081/2(黄褐色))	30	体底径(14.2)cm 底径(10.0)cm
323	F-1	1100-8	壺		(2.0)			赤・白・ナゲ 内・ナゲ ナゲ	赤 褐色線少	良	T.3087/2(白・黄)	体底 10	体底径(15.0)cm
324	F-2	1200-9	100000	壺		(3.0)		調整不明 内・ナゲ	赤 2mm以下線多	良	T.3082/1(灰白色)	15	体底径(14.0)cm
325	F-2	1100-3	壺子	3.00	3.40	3.6		ナゲ	赤 灰・褐色線多	良	T.3080/2(黄褐色)	95	体底径(14.2)cm
326	B.100	101V-425	鉢・漆塗	壺	(3.0)			赤・調整不明 内・ナゲ	赤 灰・褐色線 4 mm以下灰色線 3mm 以下褐色線	良	赤・T.3082/4(黄 内・T.3081/2(白・黄))	体底30	体底径(14.2)cm
327	F-3	1200-10	壺		(3.0)	(2.0)		調整不明	赤 灰・褐色線多 白色線	良	赤・T.3082/2(白・黄 内・T.3081/1(白・黄))	底部 100	体底径(14.0)cm
328	F-1	1200-9	鉢・漆塗	付付壺	(4.20)	(3.4)		赤・白・ 内・ナゲ・調整不明	赤 2mm以下褐色線 多 2mm以下灰・褐色 線	良	赤・T.3082/2(白・黄 内・T.3081/1(白))	調整 100	体底径(13.7)cm
329	F-1	1100-3	柱石部	付付壺	(3.20)			調整不明	赤 3mm以下線少	良	T.3081/1(黄)	底部50	体底径(13.2)cm
331	F-1	1200-10	付付壺		(2.70)			調整不明	赤 3mm以下	良	T.3082/2(黄褐色)	底部30	体底径(14.0)cm
332	F-3	1200-8	柱石部	付付壺	(2.10)			調整不明	赤 白色線多 2mm 線多	良	赤・T.3082/2(白・黄 内・T.3081/1(黄))	調整50	体底径(12.0)cm
333	F-1	1100-8	8層	付付壺	(2.25)			ナゲ	赤 3mm以下灰色線 多 褐色線少	中不良	赤・T.3081/1(白 内・T.3082/4(白・黄))	底部 100	体底径(12.4)cm
334	F-2	1001-10	柱石部	付付壺	(3.70)			調整不明	赤 2mm線	良	T.3082/4(黄褐色)	底部45	体底径(13.0)cm
335	F-1	1100-1	8層	付付壺	(3.70)			調整不明	中不良 灰褐色 3 mm以下灰・褐色線	中不良	T.3087/2(白・黄)	調整50	体底径(12.7)cm
336	F-2	1100-3	8~9層	付付壺	(2.9)	(2.0)		調整不明	赤 3mm以下線少	良	赤・T.3082/4(黄褐色 内・T.3081/1(白))	底部 100	体底径(14.0)cm
337	B.100	跡土	付付壺	(5.70)	(2.40)			調整不明	赤 白・灰・褐色線	良	赤・T.3082/4(黄褐色 内・T.3081/1(白))	調整25	体底径(14.0)cm
338	F-3	1200-9	柱石部	付付壺	(2.30)			調整不明	赤 2mm以下線	良	T.3081/1(黄)	底部20	体底径(13.0)cm
340	F-3	1300-1	赤土層	付付壺	(2.30)			調整不明	赤 白・灰色線多	良	赤・T.3082/2(白・黄 内・T.3081/1(白))	底部70	体底径(13.0)cm
341	F-3	1200-9	柱石部	付付壺	(2.30)			調整不明	赤 白色線 灰色線	良	T.3081/1(黄)	底部50	体底径(13.0)cm

第5表 出土ミニチュア土器観察表

発掘 地 No.	区	グリッド	遺構 層位	器種名	口径	底径	器高	調査・注法の特徴	胎土	構成	色調	検出率 (%)	備考
S02	E-3	120F-10	台盆層	台形罐		6.0	(3.0)	外ニハタ・ヨコナガ 内ニナガ・ヨコナガ 多	灰 6mm大程度の磁 3mm以下・灰色粘 土	貝	0900/2灰黄緑 2.0100/1灰黄緑	観察 10	高径比 1.9 (H /D)
S43	E-3		表土除去	器底のみ残存			底径不明 (3.0)	調査不明	灰 2～3mm程度の 磁、灰色粘土	貝	2.0107/4褐色		高径 10%
S44	E-3	120F-9	高径				(3.90)	調査不明	灰 白・赤色粘	貝	2.0100/6 灰黄褐色	観察 10	
S45	E-3	120F-10	台盆層	器底	(7.0)		(3.90)	外ニ調査不明 内ニ胎土	灰 4mm程度の少 3mm以下灰・褐色粘 土灰色粘土	貝	外ニ 0907/9 灰 2.0104/1 灰黄緑 内ニ 0908/4 灰黄緑	観察 10	
S46	E-1	130A-2	器底					外ニハタ・ヨコナ ガ	胎 灰・褐色粘土 3mm以下灰・褐色粘	不詳	外ニ 0907/2 灰白 内ニ 10100/2 灰白	観察 100	

第6表 竪穴住居跡計測表

遺構名	区	グリッド	主軸方向	規模 (m)		面積 (㎡)		柱間の距離 (m)		壁-柱間の距離 (m)		備考
				柱内	柱間内	柱内	柱間内	柱内	柱間内	柱内	柱間内	
SR202	E-2	109H・7・8	N-25°-E	3.7	4.0	6.2	14.8	2.0	2.8	0.6	1.0	
SR209-a	E-2	109H-10	N-30°-E	4.4	4.7	-	20.7	-	-	1.2	1.3	
SR209-b			-			-		-	-	0.8	1.5	
SR212	E-2	110J-1・2 110J-1・2	N-33°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	
SR215-a	E-2	129A-10	N-35°-E	-	-	10.2	-	3.0	3.4	-	-	柱間
SR215-b			N-50°-E			8.1	-	2.6	3.1	1.5	2.6	
SR216-a	E-2	130A・B-1	N-17°-E	9.1	9.2	7.3	83.7	2.7	2.7	3.3	3.3	
SR216-b			N-16°-E			7.5		2.5	3.0	2.9	3.4	
SR219	E-2	110J-1	N-21°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	
SR224	E-2	109J・J-10	N-33°-E	7.5	-	19.3	-	4.2	4.6	1.4	2	
SR225	E-3	109J・J-9	N-33°-E	-	-	8.6	-	2.5	3.3	0.5	1.0	
SR309-a	E-3	130C・C -1・2	N-14°-E	-	-	22.5	-	4.5	5.0	0.8	1.6	柱間・礎石
SR309-b			N-3°-W			17	-	5.2	5.2	1.6	2.5	
SR310	E-3	130C-1	N-14°-E	-	-	6.5	-	2.4	2.7	1.4	2.0	柱間
SR313	E-3	129A・B -9・10	N-20°-W	6.1	8.0	15.4	48.8	3.2	4.8	1.3	1.6	柱間・礎石
SR314	E-3	129B・C-10	N-44°-W	5.6	-	12.0	-	3.0	4.0	1.4	1.9	柱間
SR316	E-3	130C・B-2	N-25°-E	7.8	-	9.2	-	2.8	3.2	1.7	2.3	柱間
SR319	E-3	130C-1	N-11°-E	4.4	-	4.4	-	2.0	2.2	1.1	1.2	柱間
SR321	E-3	129C・D-10	N-16°-E	4.1	4.9	5.8	20.1	2.3	2.5	1.7	2.7	
SR331	E-3	130C-1	N-36°-S	4.4	-	5.0	-	2.0	2.5	1.0	1.2	
SR335	E-3	130C・B-3	N-9°-W	-	-	10.2	-	3.0	3.4	1.5	2.7	

第7表 掘立柱建物計測表

遺構名	区	グリッド	長軸方向	間数		規模 (m)		梁+桁	面積 (㎡)	備考
				梁	桁	梁	桁			
SH212	E-2	110E-1・2	N-13' -E	1	2	4.8	6.0	6.8	28.8	礎板
SH213	E-2	109F・F-10 110E・F-1	N-7' -W	1	2	3.1	5.4	1.7	16.7	礎板
SH218	E-2	110I-1	N-14' -E	1	2	3.5	5.2	0.7	18.2	
SH340	E-3	129B・C-10	N-8' -E	1	4	4.4	8.5	0.5	41.8	礎板
SH341	E-3	129B・C-10	N-2' -W	1	4	3.6	10.4	0.4	37.4	柱版
SH342	E-3	129B・C-10	N-7' -E	1	3	3.6	6.5	0.6	23.4	柱版・礎板
SH343	E-3	130D-2	N-4' -W	1	3	3.6	7.6	0.5	27.4	柱版・礎板



# 写真図版





弥生時代後期調査面全景

図版 2



1. E-1区弥生時代後期面遠景（南西から）



2. E-1区弥生時代後期面全景



1. E-2区弥生時代後期面遺景 (東から)



2. E-2区弥生時代後期面全景

図版 4



1. E-3区弥生時代後期面透景（北東から）



2. E-3区弥生時代後期面全景



1. E-4区弥生時代後期面透景 (南西から)



2. E-4区弥生時代後期面全景

図版 6



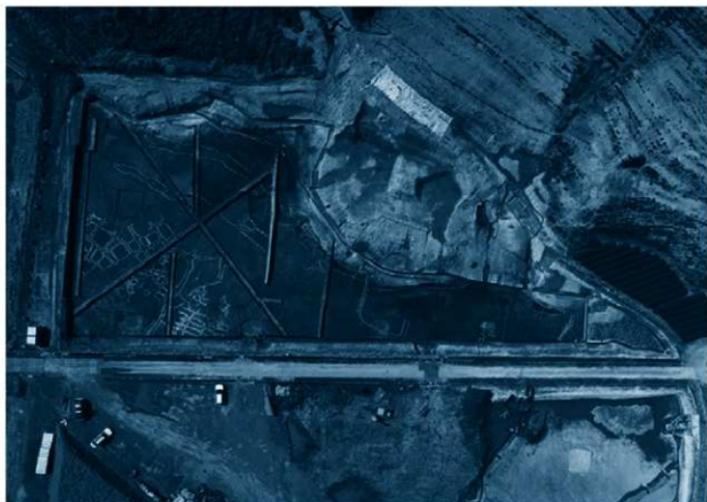
1. E-5区①弥生時代後期面群検出状況（南から）



2. E-5区②弥生時代後期面群全景（東から）



1. A-1区弥生時代後期面透景（北東から）



2. A-1区弥生時代後期面全景

図版 8



1. A-2区弥生時代後期面遺構 1 (北から)



2. A-2区弥生時代後期面全景 1



1. A-2区弥生時代後期面遺景 2 (南西から)

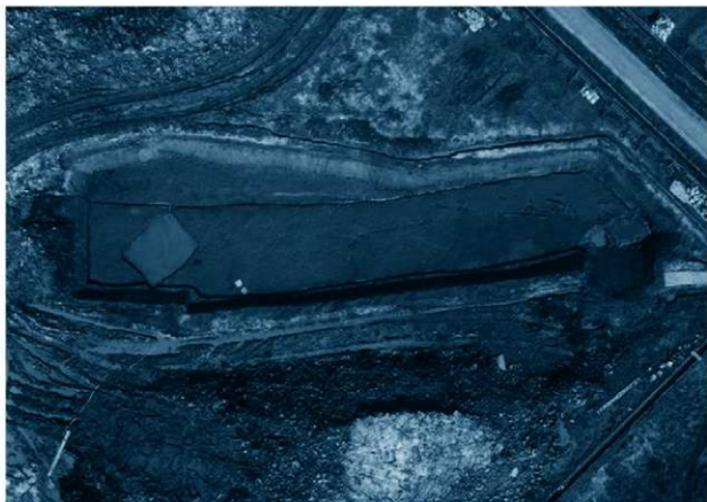


2. A-2区弥生時代後期面全景 2

図版10



1. A-2南区弥生時代後期面透景（南東から）



2. A-2南区弥生時代後期面全景



1. B区北弥生時代後期面遠景（北東から）



2. B区北弥生時代後期面全景

図版12



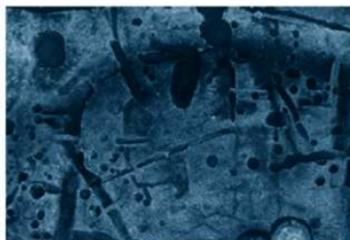
1. B区南弥生時代後期面遺景（南東から）



2. B区南弥生時代後期面全景



1. E-2区竪穴住居SB202全景 (西から)



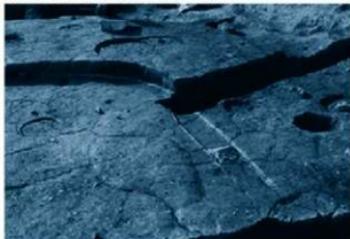
2. E-2区竪穴住居SB202完掘状況1



3. E-2区竪穴住居SB202完掘状況2 (東から)



4. E-2区竪穴住居SB202完掘状況3 (東から)



5. E-2区竪穴住居SB202土層堆積状況 (南東から)

図版14



1. E-2区竪穴住居SB209全景（南東から）



2. E-2区竪穴住居SB209完備状況（南東から）



1. E-2区整穴住居S8215全景



2. E-2区整穴住居S8215完掘状況（北西から）



3. E-2区整穴住居S8215壁溝検出状況（南から）



4. E-2区整穴住居S8215床面検出状況



5. E-2区整穴住居S8215遺物出土状況

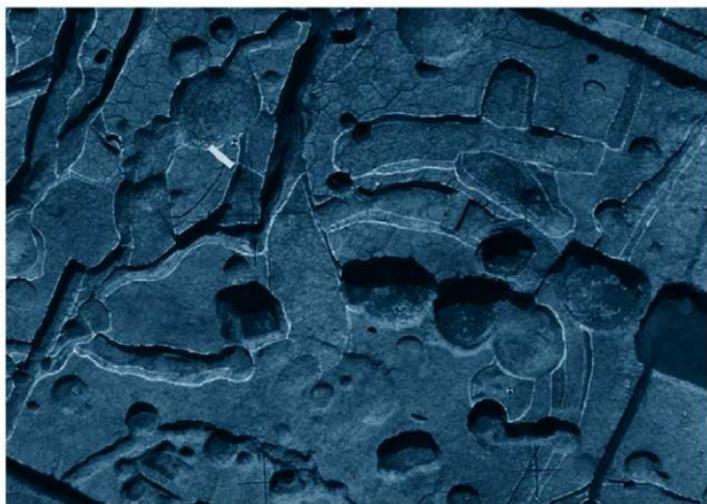
図版16



1. E-2区整穴住居S8218全景



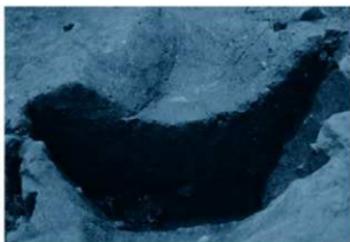
2. E-2区整穴住居S8218完掘状況（南東から）



1. E-2区整穴住居SB219全景



2. E-2区整穴住居SB219遺物出土状況（南から）



3. E-2区整穴住居SB219土層堆積状況（北東から）

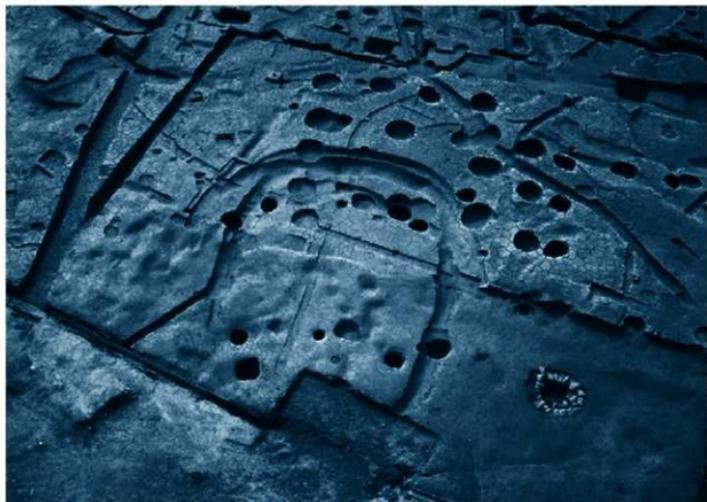


4. E-2区整穴住居SB219柱穴SP6541

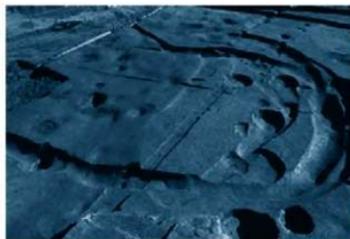


5. E-2区整穴住居SB219完掘状況（東南から）

図版18



1. E-3区竪穴住居SB309-a・b 全景 (北から)



2. E-3区竪穴住居SB309-a・b 完掘状況 (西から)



3. E-3区竪穴住居SB309-a 壁溝土層堆積状況 (西から)



4. E-3区竪穴住居SB309-a 壁溝完掘状況 (北から)



5. E-3区竪穴住居SB309-a 柱SP10158



1. E-3区整穴住居S8309-a 柱穴SP10148



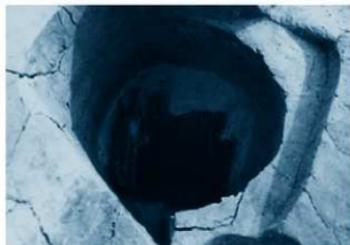
2. E-3区整穴住居S8309-a 柱穴SP10162



3. E-3区整穴住居S8309-a 柱穴SP10172



4. E-3区整穴住居S8309-b 柱穴SP10160



5. E-3区整穴住居S8309-b 柱穴SP10190



6. E-3区整穴住居S8309-b 柱穴SP10193

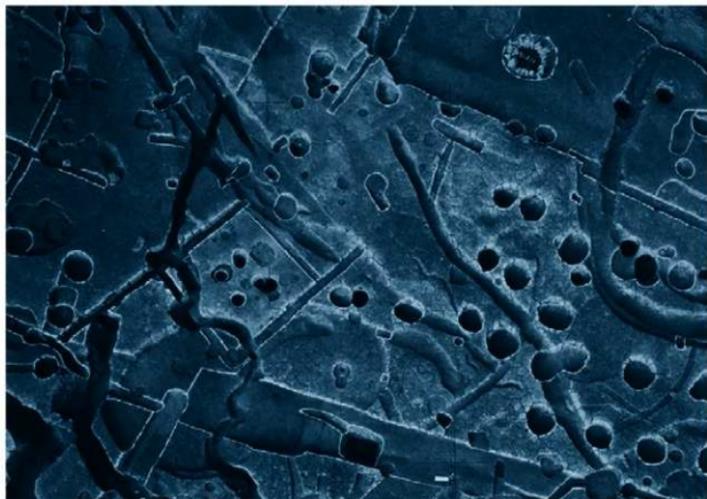


7. E-3区整穴住居S8309-b 柱穴SP10192半截状况



8. E-3区整穴住居S8309-b 柱穴SP10192完整状况

図版20



1. E-3区竪穴住居跡SB310・SB331・SB333全景



2. E-3区竪穴住居跡SB310床面検出状況(南から)



3. E-3区竪穴住居跡SB310完掘状況(東から)



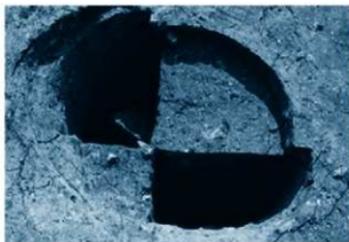
4. E-3区竪穴住居跡SB331完掘状況(北西から)



5. E-3区竪穴住居跡SB333完掘状況(東から)



1. E-3区整穴住居SB313全景（北西から）



2. E-3区整穴住居SB313柱穴SP10286



3. E-3区整穴住居SB313柱穴SP10288



4. E-3区整穴住居SB313柱穴SP10285



5. E-3区整穴住居SB313柱穴SP10290

図版22



1. E-3区竪穴住居SB314全景（北から）



2. E-3区竪穴住居SB314床面検出状況（南東から）



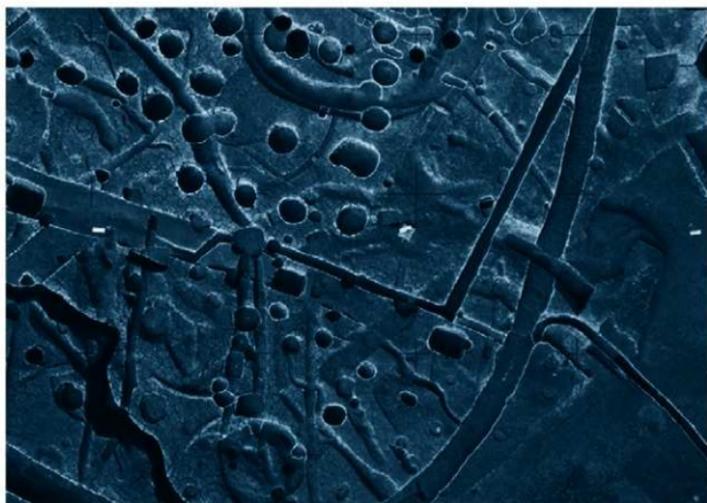
3. E-3区竪穴住居SB314完掘状況（南東から）



4. E-3区竪穴住居SB314土層堆積状況（西から）



5. E-3区竪穴住居SB314柱穴SP10350



1. E-3区竪穴住居跡SB316・SB335全景



2. E-3区竪穴住居跡SB316完掘状況 (南東から)



3. E-3区竪穴住居跡SB335完掘状況 (北から)

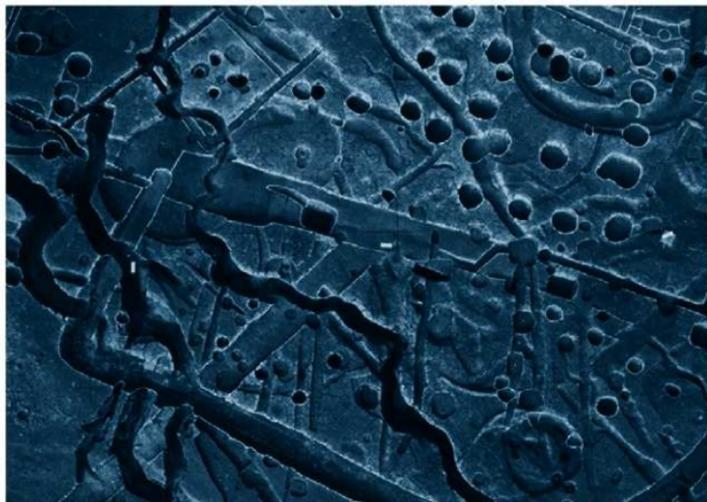


4. E-3区竪穴住居跡SB316土層堆積状況 (西から)



5. E-3区竪穴住居跡SB316柱穴SP10240

図版24



1. E-3区竪穴住居跡SB319全景



2. E-3区竪穴住居跡SB319検出状況 (南東から)



3. E-3区竪穴住居跡SB319土層堆積状況 (南から)



4. E-3区竪穴住居跡SB319柱穴SP10056



5. E-3区竪穴住居跡SB319柱穴SP10059



1. E-3区整穴住居跡SB321完備状況（東から）



2. A-1区整穴住居跡SB342・SB353・SB518全景

図版26



1. A-1区竪穴住居跡SB342全景（東から）



2. A-1区竪穴住居跡SB342遺物出土状況



3. A-1区竪穴住居跡SB342埴土検出状況



1. E-2区掘立柱建物SH212全景（南から）



2. E-2区掘立柱建物SH212柱穴SP6412



3. E-2区掘立柱建物SH212柱穴SP6566



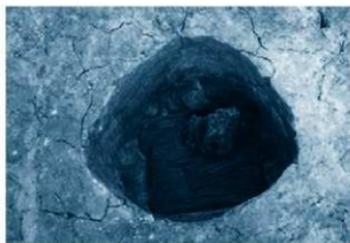
4. E-2区掘立柱建物SH212柱穴SP6569



5. E-2区掘立柱建物SH212柱穴SP6577



1. E-2区孤立柱建物SH213全景



2. E-2区孤立柱建物SH213柱穴SP6526



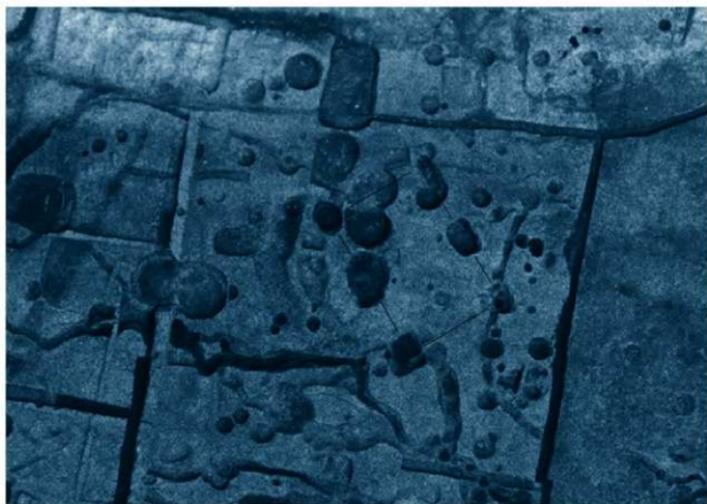
3. E-2区孤立柱建物SH213柱穴SP6527



4. E-2区孤立柱建物SH213柱穴SP6531



5. E-2区孤立柱建物SH213柱穴SP6529

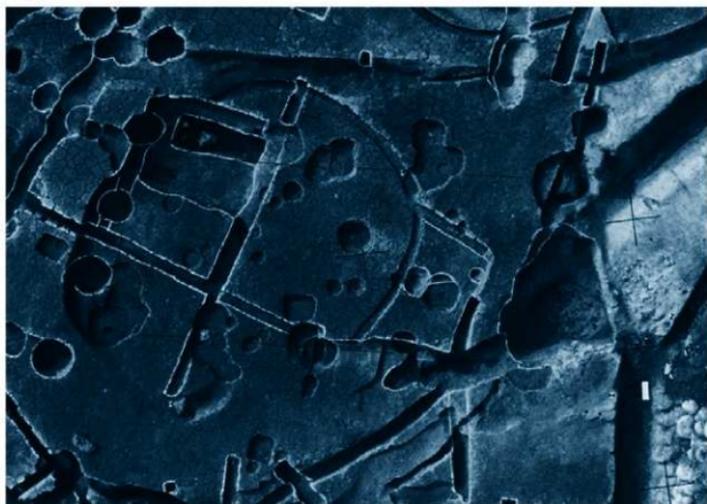


1. E-2区掘立柱建物SH218全景 1



2. E-2区掘立柱建物SH218全景 2 (南から)

図版30



1. E-3区掘立柱建物SH340全景1



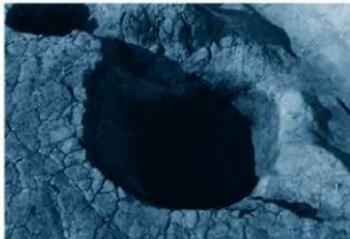
2. E-3区掘立柱建物SH340全景2 (北西から)



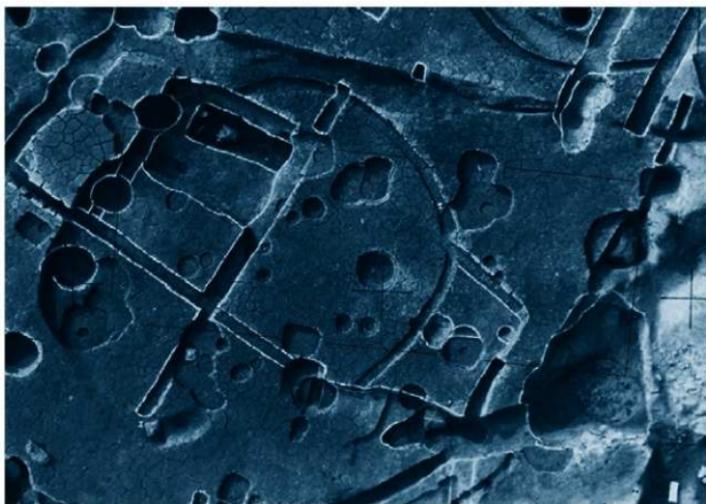
3. E-3区掘立柱建物SH340柱穴SP10383半截状況



4. E-3区掘立柱建物SH340柱穴SP10384



5. E-3区掘立柱建物SH340柱穴SP10383



1. E-3区孤立柱建物SH041全景



2. E-3区孤立柱建物SH041柱穴SP10222



3. E-3区孤立柱建物SH041柱穴SP10038

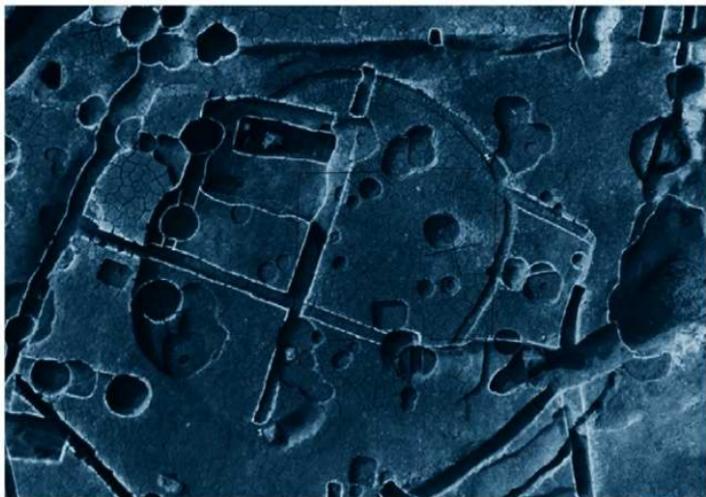


4. E-3区孤立柱建物SH041柱穴SP10349



5. E-3区孤立柱建物SH041柱穴SP10343

図版32



1. E-3区掘立柱建物SH342全景



2. E-3区掘立柱建物SH342検出状況（北から）



3. E-3区掘立柱建物SH342柱穴SP10364



4. E-3区掘立柱建物SH342柱穴SP10370



5. E-3区掘立柱建物SH342柱穴SP10386



1. E-3区掘立柱建物SH043全景



2. E-3区掘立柱建物SH043柱穴SP10244



3. E-3区掘立柱建物SH043柱穴SP10247



4. E-3区掘立柱建物SH043柱穴SP10458



5. E-3区掘立柱建物SH043柱穴SP10459

図版34



1. A-1区自然流路SR607・SR608、群SK592全景（北西から）



2. A-1区群SK592遺物出土状況



3. A-1区自然流路SR607遺物出土状況 1



4. A-1区自然流路SR607遺物出土状況 2



5. A-1区自然流路SR607完掘状況



1. E-2区自然流路SR6400全景1



2. E-2区自然流路SR6400全景2（北から）



3. E-2区自然流路SR6400遺物出土状況

図版36



1. E-2区自然流路SR6400土層堆積状況1 (北西から)



2. E-2区自然流路SR6400土層堆積状況2 (東から)



3. E-2区自然流路SR6400土層堆積状況3 (北から)



4. E-2区自然流路SR6400土層堆積状況4 (北から)



5. E-2区自然流路SR6400完掘状況1 (北西から)



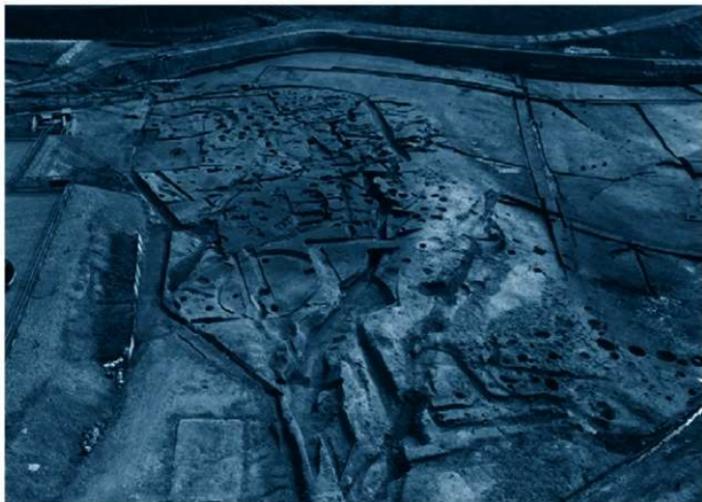
6. E-2区自然流路SR6400完掘状況2 (西から)



7. E-2区自然流路SR6400掘未製品出土状況



8. E-2区自然流路SR6400銅釦出土状況



1. E-3区自然流路SR6400 (SR10050・SR10204・SR10046) 全景 (西から)



2. E-3区自然流路SR6400土層堆積状況1 (東から)



3. E-3区自然流路SR6400土層堆積状況2 (北から)



4. E-3区自然流路SR6400土層堆積状況3 (北から)



5. E-3区自然流路SR6400遺物出土状況

図版38



1. E-3区自然流路SR10470・SR10471全景1



2. E-3区自然流路SR10470・SR10471遠景（北東から）



3. E-3区自然流路SR10471内堰状構造横検出状況（北東から）



4. E-3区自然流路SR10470・SR10471全景2（北東から）



1. E-1区群SK422全景（北から）



2. E-1区群SK422盛土検出状況1（南から）



3. E-1区群SK422盛土検出状況2（南から）



4. E-1区群SK422解体状況1（東から）



5. E-1区群SK422解体状況2（南から）

図版40



1. E-1区群SK422背負板出土状況（南東から）



2. E-1区群SK422払い撤出土状況



3. E-1区群SK422掘返し出土状況 1



4. E-1区群SK422田下駄出土状況



5. E-1区群SK422掘返し出土状況 2



6. E-1区群SK422全景（東から）



7. E-5区①群SK5011・SK5012全景（北東から）



1. E-4区木製品集中箇所SX423全景



2. E-4区木製品集中箇所SX423近景1 (南から)

図版42



1. E-4区木製品集中箇所SX423近景 2 (西から)



2. E-4区木製品集中箇所SX423近景 3 (西から)



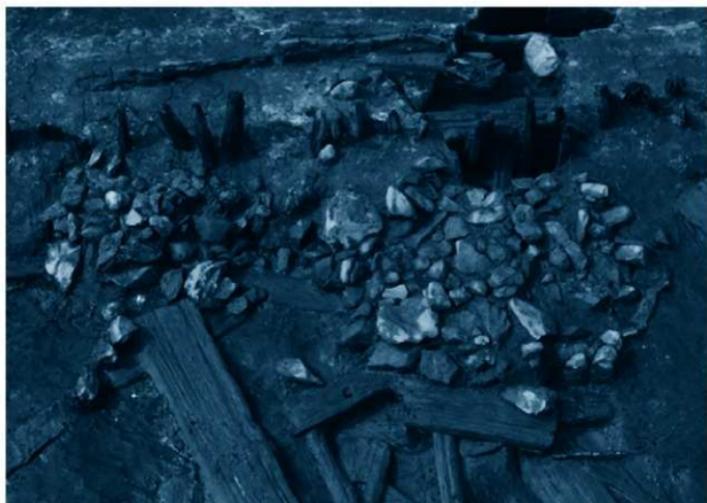
3. E-4区木製品集中箇所SX423背負板出土状況



4. E-4区木製品集中箇所SX423梯子出土状況



5. E-4区木製品集中箇所SX423槽出土状況



1. E-1区集石遺構SX424全景1 (南から)



2. E-1区集石遺構SX424全景2 (北東から)



3. E-1区集石遺構SX424全景3 (東から)



4. E-1区集石遺構SX424近景1 (北西から)



5. E-1区集石遺構SX424近景2 (南から)

図版44



1. A-1区群SK593・SK594全景（西から）



2. A-1区群SK593・SK594解体状況



3. A-1区群SK593断面状況（西から）



4. A-1区群SK594解体状況（西から）



5. A-1区群SK595全景（北東から）



6. A-1区群SK595解体状況1（西から）



7. A-1区群SK595解体状況2（西から）



1. A-2区群SK596全景 (東から)



2. A-2区群SK596近景1 (西から)



3. A-2区群SK596断面状況 (西から)



4. A-2区群SK596近景2 (南から)



5. A-3区群SK10463・SK10464全景 (西から)



7. A-3区群SK10464断面状況 (西から)



6. A-3区群SK10463断面状況 (南から)

図版46



1. A-2区群SK599・SK606全景（西から）



2. A-2区群SK599・SK606断面状況（南東から）



3. A-2区群SK606断面状況（南から）



4. A-2区群SK600断面状況（北から）



5. A-2区群SK599近景（南から）



6. A-2区群SK599断面状況



7. A-2区群SK598近景（北から）



8. A-2区群SK591鼠道し出土状況



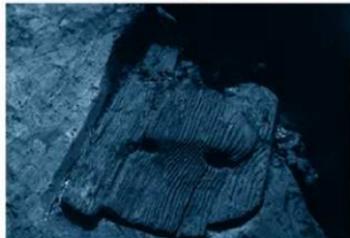
1. A-2区群SK602近景1 (東から)



2. A-2区群SK602断面状況1 (南から)



3. A-2区群SK602断面状況2 (南から)



4. A-2区群SK602田下駄出土状況



5. A-2区群SK602近景2

図版48



1. A-2区群SK600・SK602・SK603全景（南から）



2. A-2区群SK603断面状況1（南から）



3. A-2区群SK603断面状況2（南から）



4. A-2区群SK603断面状況3（南から）



5. A-2区群SK603近景



1. B区北群SK2・SK3全景（南から）



2. B区北群SK2・SK3近景（北から）



3. B区北群SK3断面状況（東から）



4. B区北群SK3・SK4遺物出土状況



5. B区北群SK4近景（西から）



6. B区北群SK5近景（東から）



7. B区北群SK5断面状況1（東から）



8. B区北群SK5断面状況2（北から）

図版50



1. B区南群SK6・SK7・SK612全景（北西から）



2. B区南群SK6全景（南東から）



3. B区南群SK6断面状況（南東から）



4. B区南群性格不明遺構SK610全景（西から）



5. B区南群性格不明遺構SK610遺物出土状況（北から）



1. A-2南区群SK8 - SK611全景 (西から)



2. A-2南区群SK8近景1 (南東から)



3. A-2南区群SK8断面状況 (南から)



4. A-2南区群SK8近景2 (南東から)



5. A-2南区群SK8近景3 (北東から)



6. A-2南区群SK614近景 (東から)

図版52



1. B区南群SK612・SK613全景（西から）



2. B区南群SK612・SK613近景1（南東から）



3. B区南群SK612・SK613近景2（南東から）



4. B区南群SK612・SK613断面状況（東から）



5. B区南群SK612遺物出土状況



1. E-3区群SK10466・SK10465全景（西から）



2. E-3区群SK10466断面状況1（東から）



3. E-3区群SK10466断面状況2（西から）



4. E-3区群SK10466近景（南西から）

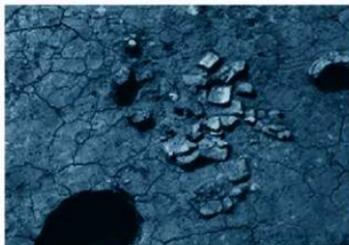


5. E-3区群SK10465断面状況1（北東から）



6. E-3区群SK10465断面状況2（東から）

図版54



1. E-2区不明遺構SX6663 (南東から)



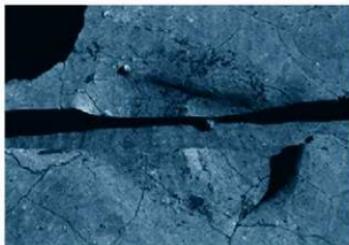
2. E-2区土坑SF6572 (北西から)



3. E-2区土坑SF6625 (南東から)



4. E-2区土坑SF6625土層堆積状況 (北西から)



5. E-3区土坑SF10124 (北西から)



6. E-3区土坑SF10126 (北西から)



7. E-3区井戸状遺構SE10456 (南から)



8. E-3区井戸状遺構SE10485 (東から)

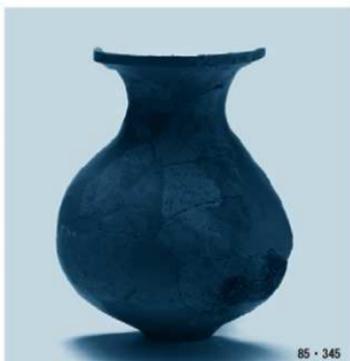


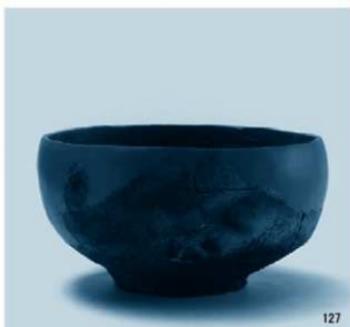
图版56





图版58





图版60



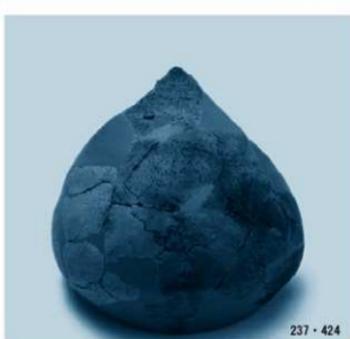


图版62





图版64





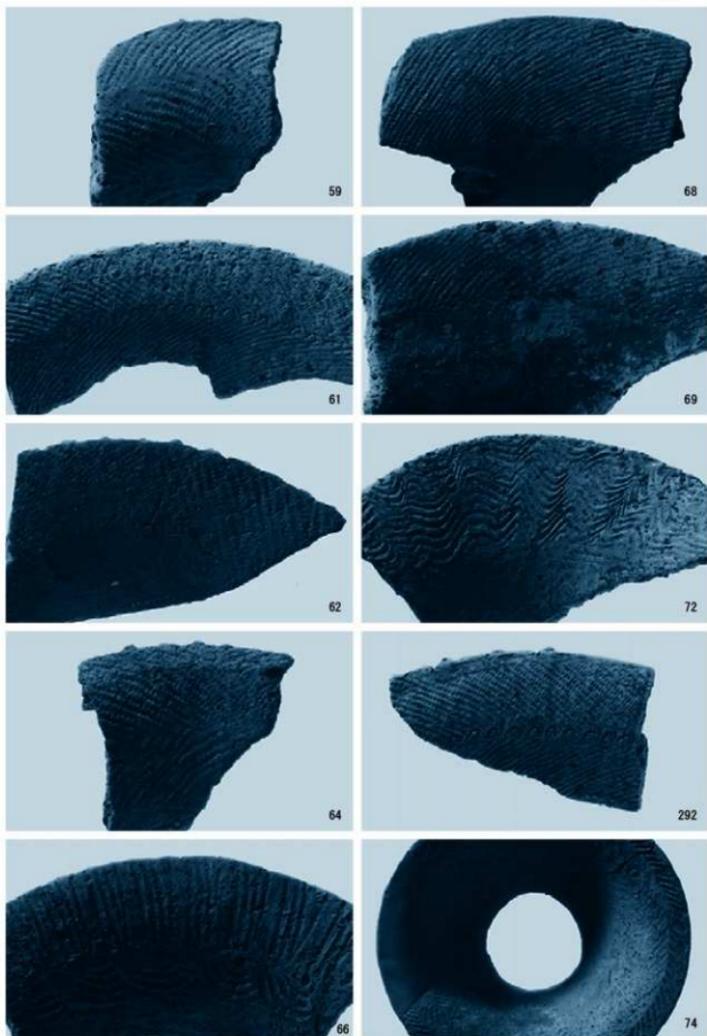
图版66





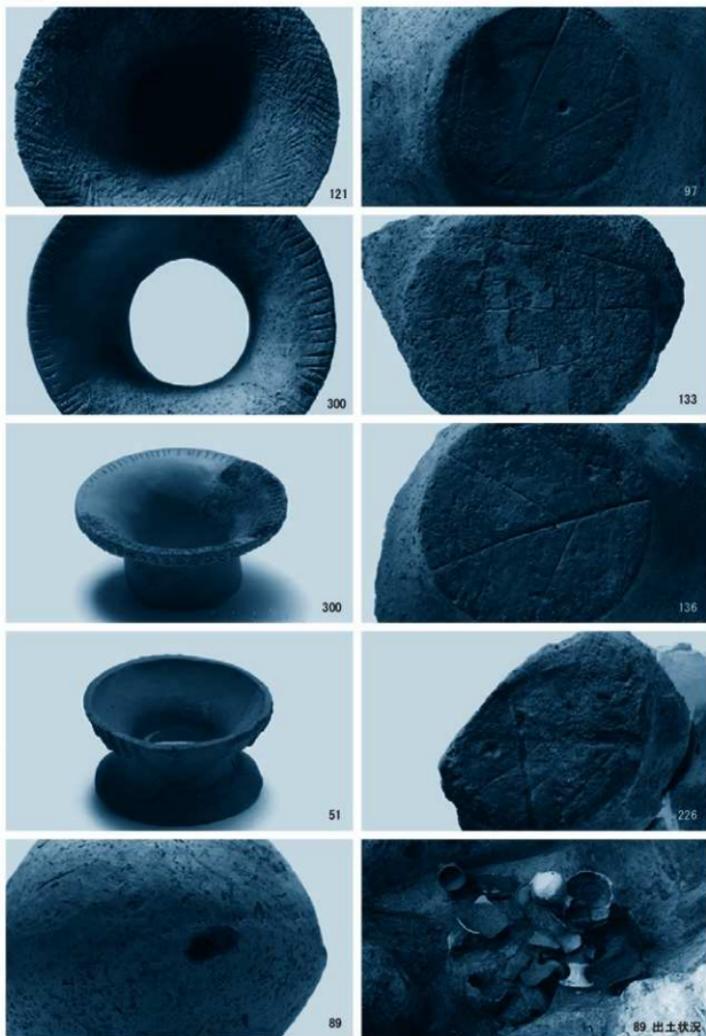
图版68





出土弥生土器（文様）

图版70



出土弥生土器（文様・木葉痕）

# 報告書抄録

ふりがな	じけまえいせきよん だいにとうめいなんばんーはちじゅういちちてん やよいじだいこうき〜こふんじだいぜんき・そうかつへん							
書名	寺家前遺跡Ⅳ 第二東名No.81 地点 弥生時代後期～古墳時代前期・総括編							
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第44集							
編著者名	富樫孝志 中川律子 平野吾郎							
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL. 054-262-4261 (代)							
発行年月日	2014年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地 市町	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘理由
		遺跡番号						
ふりがな 寺家前遺跡 総括調査その1	ふりがな 静岡県静岡市 42-1 赤	22214		34° 53' 55"	138° 14' 51"	20000812 ～ 20000929	1,696	確認調査
ふりがな 寺家前遺跡 総括調査その2	ふりがな 静岡県静岡市 42-1 赤	22214		34° 53' 55"	138° 14' 51"	20030929 ～ 20040325	1,665	確認調査
ふりがな 寺家前遺跡 本調査1期	ふりがな 静岡県静岡市 42-1 赤	22214		34° 53' 55"	138° 14' 51"	20001114 ～ 20010329	21,900	記録保存調査
ふりがな 寺家前遺跡 本調査Ⅱ・Ⅲ期	ふりがな 静岡県静岡市 42-1 赤	22214		34° 53' 55"	138° 14' 51"	20030926 ～ 20070331	33,255	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
寺家前遺跡	集落	弥生時代、古墳時代、 中世、近世	惣穴住居、扇立柱建物、溝、 井戸、雑所、土坑、武蔵		弥生土器、土師器、須恵器、灰輪陶器、山系陶、 陶磁器、陶器、土埴、土埴、和形硯、磨製石刀、砥石、 石鏃、土師管、硯、銅器、銅鏡、鉄片、 鉄貨、釘			
	水田	弥生時代、古墳時代、 奈良～平安時代、中世、 近世	経路大塚		銅、鐵、鎌、臼、西穴下駄、大足、埴輪材、瓦		集落制地帯を持つ 水田を抽出した。	
	墓	中世、近世	土坑墓		おむらけ、鉄貨、釘			
要約	<p>当地の西側には有史跡である古墳古墳群が確認し、鳥帽子形から派生する丘陵上には寺家前古墳群の存在が知られていた。また周辺には今川氏に関連する屋敷跡の存在が想定され、北西の丘陵には「花倉の乱」の舞台となった花倉城もある。調査以前から村邊に集落跡が存在することが想定されていた。しかしこれまで集落地域では大規模な発掘調査をする機会がなく、実態は不明であった。今回の調査では、弥生時代後期後半に初めてこの地に人の手が入り、集落と水田を開墾した痕跡が見られた。集落域では惣穴住居や扇立柱建物も抽出した。水田域では既述一面に続く畑が見つかった。当時の土器や石器、埴輪材などの木製品が大量に出土した。水田は集落の東側に流れる亀尾川や背後の丘陵からの水が豊富であったと考えられる。その後、集落は一帯遠絶た、古墳時代後期になると再び居住域となった。奈良～平安時代の遺跡はごく僅かであったが、水田域では集落制地帯を持つ水田と大塚が抽出された。奈良水田は集落中流域では初めての発見となった。今中時代をあげて、11世紀になると再び居住域となり、南や西側等で区画された屋敷地が3箇所見つかつた。屋敷地帯は12～13世紀代に最盛期であったようであり、山系陶を始めとする土器が数多く出土した。なかでも「花形」のある磨製土器は集落匠師を表す可能性のあるものとして注目される。出土する陶磁器の年代から、屋敷地帯は14世紀以後も規模は縮小するものの存続していたと想定される。建武4年(1337)、足利尊氏が今川國國に惣領として「亀尾の花」を与えて以降、14世紀半ばには当地地大々的な新興期となったであろう。近世以降は、小規模な集落と墓群が存在している。</p>							

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第44集  
寺家前遺跡Ⅳ  
第二東名№81 地点  
第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書  
藤枝市-8  
弥生時代後期～古墳時代前期・総括編

平成 26 年 3 月 31 日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター  
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田 23-20  
TEL 054-262-4261 (代)  
FAX 054-262-4266

印刷所 松本印刷株式会社  
〒421-0303 静岡県榛原郡吉田町片岡 2210  
TEL (0548)-32-0851 (代)